

神山飛鳳
カンピオーネ!
Campione VI
丈月城
Illustration
シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

VI　神山飛鳳

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
Campione VI
神山飛鳳



羅濠
リリアナ
陸鷹化
エリカ
アリス
祐理
護堂
ひかり


少女は身につけていた紅いトーガを脱ぎ捨てた。
一糸まとわぬ素肌が露わになる。
華奢な肢体は肉付きがうすく、起伏も控えめだ。
しかし、それゆえの美――
成熟した女性では決して持ちえない、
青い果実の美がそこにはあった。
「「「「「我らを庇護せし神々よ、
我らが女王に恵みを授け給え」」」」」


「神を斬り裂く
言霊の剣、見事なり！」
『草薙王――いえ、草薙護堂よ。
魔王としての我が生は実に二〇〇有余年！
その間、このような手で
わたくしを追い詰める者は皆無でした！
ふふふ、やはり同格の者との仕合は心躍ります。
今度は我が絶技を披露いたしましょう！』
そうだ。彼女は未だ仁王の権能を所有する。
鍛え抜いた武術の技も。
とんでもなく可憐で、誰よりも優美な仁王尊の殺戮者。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

万ま里り谷やひかり

祐理の妹。媛巫女見習い。

羅ら濠ごう

《五嶽聖教》教主。

陸りく鷹よう化か

羅濠の直弟子。

沙さ耶やの宮みや馨かおる

正史編纂委員会東京分室室長。

甘あま粕かす冬とう馬ま

正史編纂委員会のエージェント。

Contents

第１章　さらばジョン・プルートー・スミス
第２章　蠢く妖女たち
第３章　聖域に集う
第４章　神君の坐す宮
第５章　武林の至尊、天下に号令す
第６章　混戦の行方
第７章　ジャイアント・キリング
転　章

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
神山飛鳳
Campione VI

第１章　さらばジョン・プルートー・スミス

1

　ロサンゼルス、午前九時。

　ジャック・ミルバーンの頭上では、すがすがしく空が晴れ渡っている。

　目の前にはカリフォルニアの青い海。夏ともなれば海水浴を楽しむ人々で賑にぎわうヴェニス地区のビーチも静まりかえっている。

　しかし、ジャックの表情は陰いん鬱うつそのものだった。

　Sorcerous Sacrilege Investigation ――ＳＳＩロサンゼルス支部。魔術、超自然現象に関かかわる事件の調査、関連情報の隠いん蔽ぺいに従事する政府機関。それがジャックの職場である。

　ジョン・プルートー・スミスがこの地で死んだのは、一週間前の出来事だ。ジャックと数百名の市民が見守るなか、彼は斃たおれた。

『神を殺あやめし者、ジョン・プルートー・スミスよ！　たしかに貴様は強い。この世の魔術師が全て集まったところで勝機はないやもしれぬ。……だが、もう遅い。遅いのだ！』

　あのとき、アーシェラは凄すさまじい勢いで笑っていた。

　邪じや術じゆつ師したちの結社を束ねる魔女、神しん祖そアーシェラ。彼女は傲ごう然ぜんと勝ち誇っていたのだ。

『我ら《蠅はえの王》が幾度も貴様に敗やぶれながら蓄たくわえて

きた、水と大地の精気！　愚ぐ民みんどもの邪じや心しんと妄もう執しゆう！　それらを取り込み、ついに妾わらわはまつろわぬレヴィアタンとなった！　ははははは、我が身中で猛たけり狂う神力がわかるか？　妾は今こそ貴様に並ぶ。神を殺めし者と同等の——まつろわぬ蛇へびへと変わる！　刮かつ目もくせよ！』

　凶悪な本性とは裏腹に、ひどく可か憐れんなアーシェラの姿形。

　それが消えた。華きや奢しやな美少女の肉体は、膨ぼう張ちようしながら姿を変えていった。

　両腕が縮み、二本の足がひとつに合わさり、胴がのび、首がのび、なめらかな素肌を鱗うろこが覆おおい、美しい顔立ちはのっぺりとした爬は虫ちゆう類るいの面つら構がまえとなり——。

　ほんの数十秒で、魔女アーシェラは巨大な蛇へびの化け物に変わり果ててみせた。

　ヴェニスの浜辺でとぐろを巻く、五〇メートルを超す体長の妖ようう蛇じや。頭から尾までをまっすぐ伸ばせば、二〇階建ての高層ビルと背比べしても見み劣おとりすまい。鱗の色は白銀。神こう々ごうしいとさえ言える美しさだった。

　そんな怪物に、ジョン・プルートー・スミスは戦いを挑んだのだ。

　彼の一〇年にも及ぶ戦歴は驚異的だ。おぞましき邪術師、大自然すら意のままに操る精霊、巨大な体たい躯くで街を押しつぶす魔ま獣じゆう……それら全てと戦い、ことごとく勝利してきた。

　今さら大蛇ごときに後おくれを取るはずはないのに——。

『ダメだ！　行くなスミス！』

　なぜかジャックは呼び止めていた。ＳＳＩに抜ばつ擢てきされた理由だという魔術の才能が、敵の恐ろしさを警告したのかもしれない。だが、あの男は言ったものだ。

『しばらく待っていてもらえるかな？　レディからダンスの誘いを受けて断るのは、私の流儀ではないのでね。……それに、イヤだと言っても見逃してはくれまい』

いつも通りの気取った物言い。仮面とケープの色は黒。

革手袋に覆われた手は鋼はがね色いろの魔ま銃じゆうを握り、長いケープをなびかせて敵へと走る。彼とのつきあいがはじまって一年。この背中を幾度も見送ってきた。

いつも通りなら、勝者として戻ってきた彼は涼しい声で勝ち誇る。

『あとで君の家にワインを届けさせよう。われわれのささやかな勝利を祝うために。……今夜は星がよく見える。同じ夜空を見上げながら、杯さかずきを干ほそうじゃないか』

どんな窮きゆう地ちにあっても余裕を忘れない、貴族趣味の男。共に死線を越えた友人にさえ素顔を見せない男。いっしょに酒を酌くみ交かわすことさえ避けた秘密主義の男。

……予感通り、あの男は帰ってこなかった。

神々の戦いを思わせる死闘の果てに、優位に立ったのは仮面の英雄。

白銀の大蛇が選んだ対抗策は、自爆――。

体に溜ため込んだ『水と大地の霊気』とやらを爆発させ、ヴェニス地区ごと己おのれと英雄を吹き飛ばそうとしたのだ。とっさにジョン・プルートー・スミスは大蛇を抱えこんだ。海に飛び込み、力の限り陸地から離れて、宿敵もろとも散さん華げした。

かくして英雄は死んだ。

だが《蠅の王》は滅んでいない。ジャックは携帯電話を取り出した。

登録してある番号のひとつへ電話をかける。……つながらなかった。彼女と自分は最後まですれちがう運命だったようだ。留守番電話にメッセージだけ残すことにした。

「ひさしぶりだね、アリソン。ジャックだ。……本当は会って直じかに伝えたかったんだけど、もう時間がなくてね。こんな形ですまない――」

別れの言葉をひそやかに吹き込み、電話を切る。さらば愛する人よ。さらばジョン・プルートー・スミスよ。ジャックは大切な人々へ別れを告げた。

2

ロサンゼルス。人種のるつぼであり、経済と産業の一大拠点。

犯罪渦うず巻まく魔都。堕だ落らくと繁栄がしのぎを削るメトロポリス。この混こん沌とんの都には、世の理ことわりから外れた者たちも隠れ住んでいる。

倫理と良心を悪魔に売り渡し、超常の魔力を得た異能者たち――。

すなわち邪じや術じゆつ師しである。

彼らがロスを根ね城じろにするのは、数百年前この地で斃たおれた『天使の骸むくろ』を追い求めているからだともいう。それは継承者に絶大な魔力を授ける聖せい遺い物ぶつなのだと。

真しん偽ぎはわからない。だが、他の都市よりも邪術師の数が多いのは事実だ。

彼らの天敵が登場したのは九〇年代の後半である。

いかなる邪術師も及ばない魔力の持ち主。異い形ぎようの肉体に変身し、闇やみを駆け、呪じゆ術じゆつを操り、無敵の巨人と化す。魔弾の射しや手しゆ。常に勝利を掴つかむ男。

初期の彼は、名を問われると『ジョン・スミス』『ジョン・ドゥ』と名乗ったらしい。

身元不明死体に使われる『誰でもない男ななしのごんべい』程度の仮名だ。だが彼の伝説を知り、その影を目撃した市民は、偉大なる冥めい王おうの名を贈った。

ジョン・プルートー・スミスの誕生である。

全ての邪術師は彼を恐れた。民衆は彼を畏おそれ、同時に崇すう拝はいした。

午後三時、ロスフェリス地区。

雨がほとんど降らないカリフォルニアは、今日も快晴だった。

だが、ジャックには青空のドライブを楽しむ余裕はない。サマンサ大学の駐車場に愛車のＳＵＶを停とめるなり、人文学部の敷地へ向かう。目指すは外国語文学科。

研究棟のひとつに入る。――無人だった。

いつもなら学生や教職員を見かけるのに、今日は誰もいない。これから会う人物が『結界』を張ったのだろう。ジャックは彼の研究室に向かい、ドアをノックした。

「やあジャック。残念ながら、状況は芳かんばしくないままだ」

「それはつまり、アーシェラ復活の儀式が今夜行われるという意味ですね？」

確認のための問いに、ジョー・ベストはうなずいた。

幻想文学の世界では著名な研究者だという、老齢の黒人だ。そして、貴重な善の魔術師でジョン・プルートー・スミスの協力者。

英雄を一〇年も補佐してきた老人の右みぎ膝ひざから下は、ギプスで覆おおわれていた。

「ああ。今夜の月と星せい辰しんの位置、霊脈レイラインの流れ具合……全て最高の状況が整うだろう。《蠅はえの王》どもはこれを見逃すまい」

深い吐と息いきと共に、ベスト教授は言った。

彼のような善の魔術師は、北米ではごく少数派である。

その背景にはイギリス植民地時代に猖しよう獗けつを極きわめた魔女狩り、欧おう州しゆうから移住してきたプロテスタント系聖職

者による弾圧、土ど着ちゃくの精せい霊れい信しん仰こうとの抗争と講和……など、歴史の闇やみに埋もれた数々の事件があるらしい。

「あの決戦のあとも《蠅の王》の動きが鈍にぶらないので奇妙に思っていたら、まさかこんな拠より所どころがあったとはな。まったく、何ということだ！」

　この一週間、《蠅の王》は有機的に活動をつづけていた。

　歪ゆがんだ信仰に支配され、理性に欠けるカルト集団なのだ。強力なリーダーが不在となれば、組織が空中分解してもおかしくないはずなのに。

　現在、邪術師たちによってロス市警もＳＳＩも上層部は懐かい柔じゅうもしくは洗脳されている。天敵の死によって、今までは難しかった大だい胆たんな作戦も行えるようになったのだ。ジャックのような末端だけが、孤こ軍ぐん奮ふん闘とうで彼らに立ち向かっている状況だった。

「……でも教授。アーシェラはあの爆発から、どうやって生き延びたんですか？　道連れにしたスミスは死んだのに、自爆した方がどうして生きているんです!?」

　この一週間、《蠅の王》が健在の理由を必死に探りつづけた。

　市警の刑事だったジャックは、この手の調査に慣れている。そして、ついに突き止めた。

　自爆した神しん祖そアーシェラは生きていた。満まん身しん創そう痍いの姿で発見された彼女は、今も意識は戻らないが一命を取り留め、《蠅の王》幹部によって保護されたという。近く総そう帥すい復活のために魔術を執とり行うらしいとも。

「……まつろわぬレヴィアタンだからさ。彼女は不死の蛇へび、死して甦よみがえる者なのだよ。君は不思議に思わなかったか？　あらゆる敵に勝利してきたスミスが、どうして今回だけは相討ちにまで持ち込まれたのかを？」

　ベスト教授の悩ましげな口ぶりに、ジャックはあの夜感じた神こう々ごうしさを思い出した。

「あの蛇の名はレヴィアタン。世界各地の伝承で畏おそるべき海の怪物、蛇の姿をした災さい厄やくと語り継がれている――『神』だ。しかも、蛇の女神は不死の神性を持つ例が多い。スミスと相討ちになりながらも生き延びたのは、その恩恵だろう」

「不死の女神？　そんなバカな！」

　反射的に言い返すと、教授は疲れた笑顔で静かに問いかけてきた。

「君は、スミスが『神を殺あやめし者』と呼ばれる理由を知っているか？」

「ヤツの非常識さを修飾する、過か剰じような比ひ喩ゆ表現だと思っていました」

「ちがう。あれはまさしく言葉通りの意味なのだ。彼はかつて神を殺し、その大いなる権能を簒さん奪だつした戦士……そう、神殺しの戦士チヤンピオンなのだよ」

　Champion。選ばれし戦士。王者。その雄お々おしい響きをジャックは噛かみしめた。

　たしかに、仮面の英雄を表すには最適な言葉かもしれない。

「神殺しと互角に戦いうる者は同じ神殺しか、神のみ。これは絶対の法則だ。かの神祖アーシェラは、邪教の妖よう人じんから蛇神レヴィアタンに変へん貌ぼうした。そういうことなのだよ」

「しかし、人が神に変わるなどありえない！」

「只ただの人ならな。だが、そうではなかったわけだ。……《神祖》の呼び名が伊だ達てでなかったとは、まったく何ということだ！　何という悲劇だ！」

　ベスト教授の知的な面おも差ざしが、沈痛そうに翳かげる。魔術に詳しくないジャックには、理解しがたい嘆なげきだった。だが絶望的な状況であることは理解できた。

「いずれにしても、今夜アーシェラが甦ったら、こちらの敗北は決定的です。あの魔女が教授や俺たちを見逃してくれるとは思えない」

「だろうな。だが正直、君の提案には承しよう伏ふくしがたいものがある」

「でも、やらなければいけません。アーシェラの復活を阻止するなら、儀式の現場に今夜乗り込むしかないんです。幸い、スミスとの決戦で《蠅の王》もだいぶ戦力を減らしている！」

　ジャックやベストのような邪術師と戦いつづける人間にとって、アーシェラ復活はわずかな希望すら摘つみ取る最悪の要因だった。

「早まるな、ジャック。スミスが死んだとは確定していない。敵が不死なら、彼だって不死鳥フエニツクスのようなやつだ。生き延びている可能性はある！」

「あれからもう一週間です。生きているなら、なぜ連絡を寄こさないんですか？」

　老人の気休めを、悲しく否定する。

　いかな超人といえども、あの爆発から生還するはずがない。

「スミスがいなくなったことで、君は冷静さを失っている。すこし頭を冷やせ！」

「ヤツの死が、俺の行動に影響を与えているのは事実です。でも、俺は十分に冷静ですよ。冷静に考えた結果、全てを守るためにはこれがいちばん冴さえたやり方だと思います」

「守るだって？」

「ええ。この街を、あなたのような人を、俺にとって大切ないろいろを守るために、です」

「思い上がった発言だな。君ごときに一体、何を守れるというんだ！」

「自覚はあります。でも、俺たちを守ってくれていた男はもういない。だけど……いえ、だからこそ俺は、自分にできることをやりたいんです。俺のささやかな力と、今の危険な状況を知ってしまったことに対する責任から逃げたくない」

　ジャックの訴えに、ベスト教授は呆あきれたようにかぶりを振っ

た。

「まったく……。本当にどうしようもない頑がん固こ者ものだ。スミスとウマの合う男はみんな変わり者ばかりだ！　せめて、この足がまともなら私もついていくものを！」

「そいつは却きやつ下かですよ。足手まといは要いりません」

　ギプスに覆われた老人の右足。完治するまで、結構な時間がかかるはずだ。

「わかったよ、この大バカめ！　……本音を言えば、もちろんわかっていたさ。誰かがやらねばいけないことだとは」

　老教授が差し出した右の拳こぶしに、ジャックは自分の拳をぶつけた。

　ふたりで微苦笑を浮かべ合う。ジョン・プルートー・スミスだけではない。この老人もまた得がたい仲間、戦友のひとり。それを確認できた瞬間だった。

「だが忠告はつづけよう。儀式の邪じや魔まをするのはいい。そのための手段も提供しよう。しかし、決して無理はするな。私は、スミスと同格の戦士チヤンピオンを招しよう聘へいしようと考えている。無責任な話だが、その人物に全てを委ゆだねるという選せん択たく肢しもあるのだ」

「あの男に匹ひつ敵てきする存在？　そんな超人、この世にいるはず——」

「いるのだよ、それが。呼ぶには少々骨の折れる交こう渉しようが必要だがね」

　ジャックの決めつけは、すばやくさえぎられた。

「招聘に応こたえてくれたとしても、願い通りに動いてくれるとは限らない。それどころか新たな揉もめ事ごとを起こしかねない。敵を倒す代わりにロサンゼルスも崩壊させるかもしれない。——スミスが帰還してくれれば、こんな諸もろ刃はの剣つるぎを使わずともいいのだがね」

「……何ですか、その堕だ天てん使しか魔王みたいな連中は」

　この感想に、ベスト教授は弱々しく微笑ほほえんだ。

「君は今、上う手まいことを言ったよ。うん、たしかに彼らは魔王にほかならないな。……さあ、そろそろ切り札を授けるとしよう。ジャック、君に幸運の加護を分けあたえる」

　幸運の加護。たしか邪術師が最も嫌う力だったか。

　長い年月をかけて溜ため込んだ、幸いの運の力。妖よう精せいや精せい霊れいたちの祝福。それらは悪あしき魔術や呪じゅ詛そを打ち消し、清めるのだという。

　彼ほどの魔術師が蓄たくわえていた幸運なら、たしかに御ご利り益やくがありそうだ。

「そいつを儀式が佳か境きようになったところで使うんだ。何か適当な器うつわはあったかな？」

　教授は愛用のデスクを眺めた。筆記具や本、メモなどで乱雑に散らかっている。

「器って……加護とかいうのを入れる？」

「ああ。何でもいいわけじゃないぞ。長年大切に愛用されてきた品物、名工の手で手作りされた逸いつ品ぴん、魔力を秘めた呪じゅ具ぐ……そういうものでないと、幸運の力は入れられんのだよ」

　その言葉で、ジャックはふと思い出した。

「もしかしたら、こいつで何とかなるんじゃないですか？」

　持参していたビジネスバッグを開ける。取り出すのは、鋼はがね色いろの銃じゆう——。

　それを見るなり、ベスト教授は息を呑のんだ。

「その銃……スミスと共に失われたと思っていたよ」

「アーシェラとの戦いでヤツが落としたのを、俺が回収しておいたんです」

　六連発の大だい口こう径けいリボルバー。鈍にぶい鋼色の、重厚

かつ剛ごう毅きな外観。

　これはいかなるメーカーの製品でもない。ジョン・プルートー・スミスのために鍛たん造ぞうされた、世界でただ一丁の魔銃だった。

「俺にもこいつが扱えれば心強かったのですが」

「無理だよ。その銃はアストラル界プレーンに住む闇エルフの鍛冶術師ブラツクスミスが、希少なエオル鋼をかき集めてスミスのために造ったものだ。彼以外に扱える者はおらんよ。だが、加護の器としてはもちろん申し分ない」

　ベスト教授は敬けい虔けんとも言える手つきで魔銃を取り上げた。ゆっくりと銃身を撫なで回しながら、祈るように唱となえる。

「君の幸運を祈るよ、ジャック。今の君に必要なものは、何よりも幸いの運なのだからな！」

　研究室を辞じして駐車場へ戻る途中、ジャックは彼女と出くわした。

「ひさしぶりね、ジャック。何か悩み事でも？　怖い顔をしているわ」

　理知的な声で話しかけられたので、ジャックは渋々足を止めた。のんびり会話する気分ではなかったが、さすがに無視はできない。

「やあアニー。そういえば、最近あまり顔を合わせてなかったな」

「それはあたしが旅行に行っていたせいよ。ちょうど昨日帰ってきたところ」

　アニー・チャールトンはいつも通りの硬い表情で言った。

　ベスト教授の研究助手を務める、白人の大学院生だ。燃えるような赤毛が印象的な彼女は、さっぱりとしたショートヘア。黒のパンツスーツを着ている。

「旅行か……いいね。楽しんできた？」

「べつに。いいこともあれば、悪いこともあったわ。収支で言えば、プラスマイナスはゼロ。だから、特に楽しいとかはなかったわね」

　適当に話を合わせるジャックに対して、アニーは話しぶりも硬かった。

　氷の彫ちよう像ぞうにも似たクールビューティ。しかも理知的で冷れい静せい沈ちん着ちやく。観察力に富み、知性と教養まで併あわせ持つ。これでやわらかな女性的魅力まであれば、完かん璧ぺきと言えただろう。しかし、残念ながら神は彼女にその贈り物を用意しなかったようだ。

　美しい、頼りになるとは評されても、可愛かわいいとは言われないタイプの女性だった。

「ごめん、俺はそろそろ行くよ。仕事の予定が詰まっていてね」

「そう？　ごめんなさい、お邪じや魔まだったようね」

　これから忙しくなる。ジャックが話を切り上げようとしたら、アニーは軽く肩をすくめ、眉まゆひとつ動かさずに言った。そして、思い出したように付け加える。

「いずれ埋め合わせをしてもらうわ。暇になったら時間を空けて頂ちよう戴だい」

「わかった。そのときはゆっくりおしゃべりさせてもらうよ」

　ジャックは苦笑しながら答えた。人づきあいに不器用な彼女がちょっとおかしかった。

　しかし、アメリカ人らしいフレンドリーな雰ふん囲い気きは皆かい無むだが、アニー・チャールトンは決して情愛に欠ける人間ではない。すこし感情表現が下へ手たくそなだけなのだ。

　ぶっきらぼうな研究助手に別れを告げて、ジャックは愛車へと向かった。

　そういえば、アニーの職場には『結界』が張り巡らされている。警告しようかとも考えたが、やめておいた。説明すると長くなる。

車に乗り込んだジャックは、彼女のことを脳内から消し去った。

3

だが結局、切り札は役立たなかった。

失意のジャックは儀式の進行を呆ぼう然ぜんと見守っていた。

日は沈み、すでに夜。空に鎮ちん座ざする満月は、中天の位置よりもわずかに西。

ロングビーチ港に停泊する豪華客船の上じよう甲かん板ぱんに、ヴェネツィアのカーニバルを思わせる、奇体な老ろう若にやく男なん女によが五〇人近くも集まっている。——いや、集まっていた。

彼らがまとうのは色とりどりのドレスやマント、帽子やスカーフなど時代錯さく誤ごの衣装。

そして仮面。目の部分だけを開けた、さまざまな意い匠しようの仮面だ。

気まぐれに仮装パーティーを催し、能天気に集つどった紳しん士し淑しゆく女じよ、セレブの集団ではない。彼らは全て《蠅はえの王》の邪じや術じゆつ師し、神しん祖そアーシェラ復活のために集った妖よう人じんたちだった。

しかし、そのほとんどが血まみれになり、深く傷つき、息絶えている。

……一時間ほど遡さかのぼる。

ふざけた夜会にカモフラージュして邪術師たちは集い、眠れる神祖を納めたという棺ひつぎを中心に置き、満月が中天に昇ると同時に儀式を開始した。

今こ宵よい、この船に一般人はいない。船員もスタッフも、全て《蠅の王》の構成員。

　ただひとり、わざわざ扮ふん装そうして潜もぐり込んだジャック・ミルバーンを除けば。彼の衣装は黒いマントとタキシード、それに仮面だった。

「「「「「「「我らを庇ひ護ごせし神々よ、我らが女王に恵みを授さずけ給たまえ」」」」」」」

「「「「「「「我らを庇護せし神々よ、我らが女王に恵みを授け給え」」」」」」」

　人々は怪しげな呪じゆ文もんを唱となえ、円を描くように列を為なし、邪術の儀式に耽ふける。

　何食わぬ顔でそこにまぎれ込み、唱しよう和わに合わせるジャック。

　訓練こそ積んでいないが魔術の才能を持つ彼には、只ただならぬ呪じゆ力りよくの高まりが感じ取れた。そろそろ頃合か。魔ま銃じゆうの隠し場所には困らなかったのは、分厚いマントのおかげだ。

　身体検査もなかったので、逆に拍ひよう子し抜ぬけしてしまった。

　魔銃をマントのなかで触りながら『幸いの運を以もつて、我に祝福を授け給え』と念じる。効果はあっけなく発はつ揮きされた。たちどころに呪力は消え失せ、儀式は失敗に終わった。

　しかし、邪術師たちがこんなことを言いだした。

　――しくじってしまったか。

　――このままでは神しん祖そに面めん目ぼくが立たぬ。いかにしたものか。

　――待たれよ。次の満月を待ち、再生の儀を今一度行ったとしよう。甦よみがえられた神祖は、はたして我らの失態を捨て置くであろうか？

　――それはあるまい。ふむ。ならば、もう答えは出たではないか。

　――うむ、やるか。この程度の月のズレならば、我らの体で何と

かなろう。

「「「「「「「我らを庇護せし神々よ、我らが女王に恵みを授け給え」」」」」」」

　邪術師たちは儀式を再開した。

　どうするつもりなのだ？　ただひとり邪術師でないジャックの疑念は、すぐに晴れた。

　ある信しん徒との頭が爆はぜたのだ。唐とう突とつに破裂したのだ。

　血、肉、皮ひ膚ふ、脳のう漿しよう、骨、体液などが飛び散り、周囲の信徒たちや甲板を汚す。

「「「「「「我らを庇護せし神々よ、我らが女王に恵みを授け給え」」」」」」

　だが斉せい唱しようは途切れない。また爆ぜた。

　とある信徒の両腕が、べつの信徒の腹が、その隣にいた信徒の首筋が。体の一部が爆ばく裂れつした信徒たちは、そのまま倒れていく。

　まちがいなく死んだ。たしかめてもいないのに、ジャックはそう確信した。

「「「「「我らを庇護せし神々よ、我らが女王に恵みを授け給え」」」」」

　また死んだ。体でどうにかするとは、こういう意味だったのか！

　ジャックは呪力の高まりをふたたび感じ取った。ベスト教授がこの可能性に気づかなかったのも仕方ない。こんな発想、まともな人間には到底無理だ！

　このとき、ギィと音を立てて棺が開いた。内部から開けられたようだ。

「我は天なり。汝なんじ、我にふれることかなわず！　我は地なり。汝、我を呪のろうこと能あたわず！」

棺のなかで、亜麻色の髪の少女が立ち上がる。

歳としは一〇代前半だろう。天使にも似た可か憐れんな顔立ちである。

「我が頭こうべはエンリル、我が顔かんばせは真昼の光！」

少女は朗ろう々ろうと聖句を謡うたいあげる。

鈴を鳴らすような、魅惑的な声。だが、ぞわぞわとした不快感がなぜか励れい起きされる。

「比類なき女神ウラシュこそ我が守護者！　我がうなじは女神ニンリルの首飾り！」

幼き美の化け身しんは、凄すさまじく目つきが険しかった。

まさに凶きよう相そう。見るもの全てを斬きり裂さくような視線と表情であった。

「我が双もろ手ては西天に輝く月の鋭と鎌がま！　我が十とおの指は尊とうとき神々の骨なりしタマリスク！」

少女は身につけていた紅あかいトーガを脱ぎ捨てた。

一いつ糸しまとわぬ素肌が露あらわになる。華きや奢しやな肢し体たいは肉付きがうすく、起き伏ふくも控えめだ。しかし、それゆえの美――成熟した女性では決して持ちえない、青い果実の美がそこにはあった。

だがジャックの目を奪ったのは、少女の体に刻まれた傷きず痕あとの方だった。

白い柔やわ肌はだの背中に、胸に、腹部に、腰に、腿ももに、首筋に。

ひきつれのような、無理やりに皮膚を引きちぎられたような、赤黒い傷痕が走っていた。

じくじくと血がにじみ、化か膿のうし、見るだに痛々しい。

少女が脱ぎ捨てたトーガの紅べに色いろには、彼女の血も混ざっ

ているにちがいない。

「我を庇護せし神々よ、我が身中より魔性の呪じゅ詛そを駆く逐ちくし給え！　ルガル・エディンナよ、ラタラクよ、御おん身みらは我が胸と膝ひざ！　ムーラよ、我が壮そう健けんなる両足となり給え！」

　おぞましくも可憐な美少女の大音声が、夜空に響く。

　彼女こそ儀式の主。彼女こそ支配者。彼女こそが《蠅の王》を率ひきいる神祖アーシェラ！

「「「「「我らを庇護せし神々よ、我らが女王に恵みを授け給え」」」」」

　アーシェラの聖句に合わせて、彼女を取り囲む人々も低く唱える。

　祈りの斉せい唱しよう。ここに集う人々の信仰、敬けい虔けんさ、純粋さには一点の曇くもりもない。

　ただし、彼らの信じる対象は禍まが々まがしい魔女であり、奉ほうじる教義は凄せい惨さんな邪教のそれであり、信心の証あかしとして取る行動は反社会的としか言えないものであったが。

　ひとり、またひとりと倒れ、次々と死んでいく。

「「「我らを庇護せし神々よ、我らが女王に恵みを授け給え」」」

　斉唱は途切れない。また爆はぜた。また死んだ。

　信徒が破裂するたび、中央に立つアーシェラの傷がすこしずつ治る。

　赤黒い傷痕が小さくなり、化膿した肌がふさがり、出血が止まっていく。いつのまにか魔女の傷は、背中のものを除けば大半が消失していた。まばゆいばかりの白い肌が銀色の月光をはじく。無事な信徒は、あと三、四人というところか。

　ジャックは決心した。こうなれば自みずからの手でアーシェラを倒し、脱出を図るべきだ。

隠し持っていた自動拳銃オートマチツクを引き抜いた。

アーシェラとの距離は約一〇メートル。腹を狙ねらって一発。次いで右足。左足。弾丸は全て命中した。しかし、傷はひとつも増えていない！

この魔女は、銃弾程度ではかすり傷ひとつ負わないのか!?

「どこの不ふ埒らち者ものがまぎれ込んでいるのかと思えば、貴様であったか。たしかジョン・プルートー・スミスの飼い犬であったな」

凶相にじろりとにらみつけられて、ジャックの仮面は砕け散った。可憐な声に宿る禍まが々まがしさに、臓ぞう腑ふが冷やせしめられる。

「下僕しもべどもよ、妾わらわに汝なんじらの命を捧ささげよ。勅ちよく命めいである」

卑いやしいゴミに対する目つきでジャックを見下しながら、アーシェラは告げた。

直後、生き残っていた信徒たちが、一斉に弾はじけ飛んだ。頭も胴も四し肢しも、ことごとく綺き麗れいに爆散し、血臭と死臭がさらに濃厚になる。

——ああ。魔女のか細い肢体には染みひとつ残っていない。完全に無傷。

かくしてアーシェラは華か麗れいに甦よみがえった。

無惨な屍しかばねが折り重なり、赤黒い鮮血で彩いろどられた空間を傲ごう然ぜんと支配する魔女。まさに死と暴ぼう虐ぎやくの化身だった。彼女の前ではジャック・ミルバーンなど、卑しく無力な雑ざ魚こである。勝てる要因はひとつもない。

ジャックは拳銃を甲板に投げ捨てた。だが、それでも。

わずかな希望は捨てなかった。マントのなかに手を入れ、もう一丁のリボルバーをショルダーホルスターから引き抜いた。

鋼はがね色いろの魔銃。黒こく衣いの英雄が愛用した魔弾を放つ

弓。その銃口を魔女に向けた。

「ほう、まだ悪あがきをするつもりか？　だが貴様に何ができる？」

　アーシェラの凶相が嘲ちよう笑しようで歪ゆがむ。

　己おのれに向けられた魔銃を脅きよう威いと見なしていないのは明らかだった。

「知っているぞ。その無ぶ粋すいな鋼はジョン・プルートー・スミスの使っていた玩がん具ぐだ。貴様ごときに扱えるものか。分ぶんをわきまえよ！」

　死せる英雄の形見を前にして、魔女はカラカラと嗤わらう。

「その鋼が撃うち出すのは、鉛なまり玉だまにあらず。それはジョン・プルートーめが月神アルテミスより簒さん奪だつせし魔の矢を撃ち放つための依より代しろよ。せめて彼奴きやつと同じ『王』であればともかく……。下郎、貴様ごときでは引き金を引くことすらかなわぬであろう！」

　アーシェラの嘲あざけりは正しい。

　もう何度も試ためした。ジャックがどれだけ力を振り絞っても、魔銃の撃げき鉄てつを起こすことさえできなかった。だが、人外の魔女に対して戦果を期待できる武器は、もうこれしかない。

　祈りと共に撃鉄を起こし、引き金を引く。

　銃口からはマズルフラッシュではなく、蒼あお白じろい稲いな妻ずまにも似た閃せん光こうがほとばしる。

　閃光は蒼き光の竜となり、神祖アーシェラの小振りな乳房のやや下を抉えぐり、貫つらぬき、彼女の背後の中空へと駆け抜ける──。

　ジャックはその光景を呆ぼう然ぜんと見つめていた。

　上う手まくいく見込みなど皆かい無むだった。ただの悪あがき。やけくそで撃っただけなのだ。アーシェラの指摘通り、この魔銃はジャックごときに扱える道具ではないのだから。

「——ケハッ！　バカな、何な故ぜだ……!?」

　鮮血を吐きながらアーシェラがうめく。そう、なぜだ？

　かつん。かつん。聞き慣れた音が響く。かつん。かつん。長靴の金属鋲びようが床を叩たたく、特徴的な足音だ。こちらに近づいてくる。

　時間にルーズな男なのだ。いつも事件が佳か境きようを迎えた頃に、ようやく現れる。

　そのたびにジャックは、この足音を聞く。遅刻してきたくせに悪びれず、あわてもせず、悠ゆう々ゆうと歩み寄ってくる男の足音を。

「バカな……！　何故、貴様がここにいる!?」

「くだらない質問だな。私を冥王プルートーと呼ぶのは君たちだぞ？」

　アーシェラの問いを一いつ蹴しゆうする声は、美しいテノール。

　そして彼の顔を覆い隠すのは、黒き装甲で造られた仮面だ。レーサーの頭部を保護するフルフェイスヘルメットにも似た外観である。目に当たる部分は、昆虫の複眼のようなバイザーになっている。

「君はもしかして、前回の対決で私を葬ほうむり去さったと考えていたのかな？　だとすれば早はや合が点てんもいいところだ。冥めい府ふの王とて、たまには里帰りぐらいするだろう？」

　吸血鬼のマントじみた黒いケープを翻ひるがえしながら、彼が近づいてくる。

　ケープの下は近世ヨーロッパの宮きゆう廷ていもかくやという、青を基調とした格式高い衣装。

　しなやかで優美な身のこなしは、熟じゆく達たつした舞台役者を思わせる。それほど背は高くない。体つきも華きや奢しやな方だろう。

「死して冥府に旅立ったとしても、いずれ地上に戻るは自明の理。

その程度の未来も読めぬとは愚おろかだな、神祖アーシェラ。君を敗北に追いやるのは、その愚かさだ」

「くっ――！　おのれジョン・プルートー・スミス！　忌いまわしき神殺しめ！」

　強大無比な魔女がにらみつける仮面の貴公子。

　彼の名はもちろん、ジョン・プルートー・スミス以外にありえなかった。

「元気そうで何よりだよ、ジャック。君もようやく私好みの衣装をあつらえるようになってくれたか。よろこばしい話だ」

　笑いの振動で黒き仮面がくつくつと揺れる。

　ジョン・プルートーの視線は、ジャックが着る黒マントとタキシードを捉とらえていた。こんな格好で彼と並んでしまうと、まるで仮装パーティーだ。

「俺にコスチュームプレイの趣味はない。病的な仮装願望を持つあんたといっしょにするな。ここに潜入するため、仕方なくやったんだ！」

「ならば、今夜をその趣味の第一歩とすべきだな！」

　無惨な死が累るい々るいと横たわる豪華客船の甲板。その上で彼は愉快そうに笑う。

　満月の光を浴び、華麗なる英雄の姿を周囲に誇こ示じしながら。

　この場の主役は、今や彼以外にありえなかった。あれだけ存在感を放っていたアーシェラでさえ、ジョン・プルートー・スミスの前では色いろ褪あせてしまう。

「よろしいジャック。今夜の勝利はわれわれ、似合いのふたりが勝ち取ったものだ。肩を並べて、大いに勝ち誇ろうではないか」

　ジョン・プルートーの勝利宣言にジャックは戸と惑まどった。

「勝利だって？　油断するな、スミス。戦いはまだ終わっていないんだ！」

「終わったようなものだ。……そうだろう、アーシェラ？」

　仮面のバイザーが稀き代たいの魔女に向けられる。

　魔銃より放たれた閃せん光こうに心臓を射いぬかれて尚なお、アーシェラは生きていた。

　もう立っている力もないらしい。甲板に膝ひざを着き、胸の大穴から大量の血を流し、喀かつ血けつしながらも何とか生きていた。

　魔女の血走った双眼は、凄まじい呪詛を黒き仮面に送り込んでいた。

「その銃は我が力を撃ち出すための道具。私がいなければ、たしかにただの鉄てつ屑くずだ。しかし、私が近くにいて権けん能のうを使うのであれば、他の者が射手となることも可能なのだよ」

　そうか。それであのとき、自分にも撃つことができたのか。

　友の語りを聞いて、ジャックは納得した。

「私の不在に油断してアルテミスの矢を受けた以上、『まつろわぬ蛇』たる君にも挽ばん回かいはできまい。われわれの勝利だ」

　脅きよう威いの魔銃にも制限がある。

　月が満ち欠けを一度繰り返す間、つまり一カ月に六発しか撃てない。

　その代わりに威力は絶大である。この魔銃から放たれた弾丸は蒼き閃光の竜となって天あま翔かける。ビルを貫き、分厚い岩がん塊かいを蒸発させ、地形すら変えてしまう。

　射手の意思に応えて弾道を曲げ、狙った敵をどこまでも追いかけさえする。弾丸六発の威力を収しゆう斂れんさせて、さらに巨大な威力を発揮するという伝説まである。

　まさに魔銃としか呼びようのない、悪魔的な武器だった。

「……実を言えば、ロスには数時間前に戻っていてね。ジャック、君の計画も知っていた。止めることもできたんだが、こういう展開を期待して静観していたのだよ」

「何だと？　スミス、あんたって男はいつも人を道具のように――」

「心外なコメントだな。友である君を信じ、希望を託した……そう解釈してくれ」

　キザな物言い。結果オーライの勝負師ぶり。

　全ていつも通りだ。文句をつづける代わりに、ジャックはフンと鼻で笑った。こうでなくては仮面の友ではない！

「いきがるな、ジョン・プルートー・スミス！　まだだ、まだ妾は終わっていない！　不死なる蛇の裔すえたる我らを舐なめるでないぞ！」

　アーシェラが吠ほえる。可か憐れんな容よう貌ぼうを鮮血で染め、鬼女の形ぎよう相そうで咆ほう哮こうする。

　血まみれの肢し体たいが宙に躍おどり上がり、ふくれ上がっていく。形を変えていく。これは一週間前も見た大蛇への変身！

「もちろん忘れてはいないさ。だが種の明かされた手品など、どうとでもなる」

　対するジョン・プルートー・スミスも、あのときのようにケープを翻ひるがえす。

「一足先に船を降りるといい、ジャック。今夜はひさしぶりに飲み明かしたい気分だ。君もつきあえ。この魔女をロスから駆く逐ちくした祝いをしよう！」

　つきあいの悪い、秘密主義の男。

　並の友人らしい交流を一切拒こばんできた、素顔を明かさぬ男。

　彼らしくない提案にジャックが驚くなか、仮面の英雄と魔女にして蛇なる者の決闘は最終局面へと突入した。

豪華客船に、白銀の大蛇が絡からみつく。

総重量は一五トン超。全長三〇〇メートル、全高六〇メートルの巨船と比べれば、さすがの大蛇も長大な印象がやや薄れる。だが荘そう厳ごんなオーラは健在だ。

ただし、美しかった蛇体は満まん身しん創そう痍い。大量の出血で紅あかく染まっていた。

そこで夜空が雷らい雲うんで翳かげった。稲いな妻ずまがほとばしり、地上へと降る。雷らい帝ていの槌つちが打ちのめすのは白銀の大蛇ではなく、それが絡みつく巨船の方であった。

雷鳴と轟ごう音おん。閃せん光こうと焔ほのお。

稲妻に撃たれた豪華客船は、異様なスケールのキャンプファイアーと化した。

その焔のなかで立ち上がる巨人がいた。

全高一五メートルほどで、均整の取れた体格である。だが、彼は異相であった。全身が黒い。夜よ闇やみのごとき漆しつ黒こくの肌の色。顔だけが黒と黄色の横よこ縞じまで塗り分けられている。

また、右足だけ生身ではなかった。おそらく素材は黒こく曜よう石せき。

月明かりを妖あやしく反射する、キラキラとした石で造られているのだ。

この巨体を覆おおい隠すのは紅、黄色、黒といった賑にぎ々にぎしい色の布と鳥の羽。どこか七しち面めん鳥ちようを彷ほう彿ふつとさせる装いだった。背負った木筒には何本もの槍やりが収められている。

原始宗教の呪術師シヤーマンめいた異相である。

『大いなる魔術師』。ジョン・プルートー・スミスが有する最強の変身体であった。

　異相の巨人と白銀の大蛇による、豪華客船の残ざん骸がいと港を蹴け散ちらしながらの格闘戦。明らかに巨人が優勢。やはり魔弾の直撃を受けた時点で、勝敗は定まっていたのだ。

　黒き魔術師の全身から電光がほとばしる。強烈無比な雷撃。

　銀の鱗うろこを打ちのめし、その下の肉を灼やく電光の鞭むちを浴びて、アーシェラの変身体である大蛇は大きくのけぞった。

《さて、君の敗色は濃厚だ。また自爆するつもりなら、そろそろ仕掛けるべきだと思うが》

　魔術師の口から、ジョン・プルートー・スミスの声が響く。

《そんな余力はないはずだな、アーシェラ？　この前の自爆で、君は数年かけて溜ため込んだ竜りゅう脈みやくの精気をほぼ使い果たした。もうチェックメイトだ》

《おのれ、大いなる地じ母ぼの再さい臨りんを妨さまたげるか、魔王！　この神殺しめ！》

　白銀の大蛇からも怨えん嗟さに満ちたアーシェラの声が発せられる。だが、ジョン・プルートーのいらえは冷淡にして冷静だった。

《いかにも。私は魔王にして神殺し……だから容よう赦しやなく仕上げをさせてもらう》

　抹まつ殺さつの意志を込めて、英雄にして魔王は宣言する。

《滅びのために、我が大業を数えあげよう——。全能なる我は全ての民たみを活いかし、全ての民を奴ど隷れいとす。我は夜を渡る風。我は天と地をしろしめす、高貴なる魔術師！》

　これは言こと霊だまだった。

　我が身と共に敵をも滅ぼす殲せん滅めつの言霊。彼ひ我が相そう殺さつの変身を行う秘術。

　呪じゆ術じゆつ師しの姿がほぐれ、煙となっていく。煙の周囲ではパチパチと電光が弾けていく。

《我は終末を呼ぶ夜の斧おの！　世界を創つくり、打ち砕く神！》

電光をまとう煙は今や、蒼黒い焔のかたまりとなっていた。ジョン・プルートー・スミス最さい期ごの化け身しん『殲滅の焔』である。

蒼黒い焔は白銀の大蛇を包み込み、一気に灼き滅ぼしていく！

《う、ぬあァァァァァァァァッ！　があああああああッ！》

《我が肉体と共に燃え尽きろ、アーシェラ！》

蒼黒い劫ごう火かが妖あやかしの蛇を灼き、ロングビーチの夜を奇怪な色に照らし上げる。それが《蠅はえの王》の終しゆう焉えんであり、神しん祖そアーシェラが今度こそ敗北した情景だった。

指示された通り、ジャックは速すみやかに下船した。

ジョン・プルートー・スミスが戦闘をはじめたら、近くにいない方がいい。

彼は魔力を行使する際、さまざまな『贄にえ』を必要とする。下へ手たをすると、それらの供く物もつと共に悲惨な最期を迎える羽目になる。

たとえば『大いなる魔術師』は、人が築き上げた巨大な建造物を『贄』に要求する。

ジョン・プルートー・スミスがあの姿となるには、まず彼が守護するロスの一部を破壊しなければならないのだ。

市民生活に多大な支し障しようをきたす『贄』もある。生け贄同然の血なまぐさい『贄』もある。ロスの人々はそれらの犠ぎ牲せいに耐えることで、黒き英雄の戦いを支援する。

あたかも庇ひ護ご者しやたる『王』へ税を納めるように。彼の徳と異能にひれ伏し、部べの民たみとして賦ぶ役やくの義務をこなすように。

戦いの一部始終をジャックは港から見守った。ギャラリーは彼だけではない。

いつのまにか一〇〇名近い人々が集まっていた。

近隣の住民か、遠方から車を飛ばしてきたのか。野や次じ馬うまという印象ではない。彼らは敬けい虔けんなまなざしで決闘を見守っている。祈るように腕を組み、目を閉じる者までいた。

おそらく、ロスの守護者の帰還を見届けるために駆けつけたのだろう。

ついに勝者が定まり、人々の口から安あん堵どの吐と息いきが洩もれる。そこで声をかけられた。

「ジャック。あなた、無事だったのね？」

振り向くと二〇代の白人女性がいた。見覚えが——いや、よく知っている顔だ。

「アリソン？　どうして君がここに⁉」

「あなたがあんな電話をかけてきたからよ！　何なの、あの別れの言葉は！」

怒りながらアリソンが抱きついてきた。

ジャックはそれをためらわずに受うけ容いれ、最愛の女性を渾こん身しんの力で抱きしめた。

「また危ないことが起きるんじゃないかって、心配していたのよ！　ラジオやネットのニュースを何度もチェックしたわ。……そうしたら、あの人——わたしたちの王様が一週間ぶりに戻ってきたってラジオで言ってたから、急いで見に来たの」

この街には、ジョン・プルートー・スミスの出現情報をリアルタイムで公共の電波に乗せてしまうローカルラジオ局が存在する。ネットで同様の活動を行う有志もいる。

仮面の守護者を非公式のヒーローと認めながらも、平穏な都市生活を蹂じゆう躙りんする暴君として畏おそれる人々の自衛行為であった。

いつもは周辺地域の人間に避難を促すための情報源となる。

　だが今日は、守護者の帰き還かんを報しらせ、ここに人々を集める役目も果たしたらしい。

　そして、すれちがいのつづいていた恋人同士を再会させる手伝いも。ジャックはアリソンと抱ほう擁ようを交わし、たがいの存在を確認し合った。

　そのとき、例の足音が聞こえてきた。かつんかつん。長靴の金属鋲びようが床を叩たたく音。

　ジャックが顔を上げる。アリソンもそれに倣ならう。

　闇やみの奥から、ジョン・プルートー・スミスがこちらへやってきた。人々が信頼と畏い怖ふを瞳ひとみに宿して出迎える。だが、誰も気安く声をかけたりはしない。

　皆、彼のために自発的に道を開ける。異相の男を遠巻きに見つめる。

　民たみを守護する英雄。しかし、それだけではない。

　民に慕したわれ、畏怖される『王』。彼は天使なき都に君臨する闇の王者なのだ。

「どうやら無事に逃げられたらしいな。結構。そうでなくては、私の助手は務まらない」

「俺にワトソン役を押しつけるのはそろそろやめてくれ、スミス。俺は今の仕事をやめるつもりはないんだ。……まあ、今後どうなるか怪しいところではあるけどな」

　王者のお声がかりに、ジャックはうんざりした口調で言い返す。

　ついに宿敵から得た勝利に機き嫌げんがよいのか、ジョン・プルートーは愉快そうに笑った。

「お望みならディック・グレイソンの役に抜ばつ擢てきしてやってもかまわないがね！　君の職場の問題については手を打とう。近日中には解決できるはずだ。——そうそう、さっき船の上で提案した、ささやかな祝賀会をふたりで開催しようという……件、だが……」

　珍しいことに、饒じよう舌ぜつなジョン・プルートーが口ごもった。

　友のバイザーが自分のすぐそばにいる女性へ向けられているとジャックは気づいた。

「紹介するよ、スミス。彼女はアリソン。俺の——いちばん大切な人だ」

　腕のなかにいる元婚約者と目が合ったので、微笑ほほえみ合う。

「そ、その名はたしか、君の元パートナー……だと前に聞いた気はたしかにするのだが、半年近く前に別れたと、何かの折に教わった記憶もあるような……」

　今夜はつくづく、滅めつ多たにない演目を見られる運勢らしい。

　理由は不明だが、ジョン・プルートー・スミスが狼ろう狽ばいしている。初めて目撃する友のうろたえぶりに、ジャックは苦笑した。

「よく覚えているな。たしかにあんたの言う通りだったけど、結局元通りになった。……ああ、祝賀会だけどな、よかったらアリソンもいっしょに——」

「い、いや！　それに関しては考えを改めた！」

　あわてた口調のままジョン・プルートーは言った。

「やはりそのような行為は私の主義に合わない。私ともあろう者が、決闘を前にして気が昂たかぶっていたようだ。つまらないことを言ってしまった。忘れてくれ」

「まあ、べつにかまわないが……あんたから誘ってきたくせに、勝手な男だな」

「そうだとも。私は身勝手で、そして気まぐれな人間なのさ。だから前言を翻ひるがえす非礼、大目に見てもらおうか。すまなかったな」

　ようやく本領が戻ってきたか、仮面の友はえらそうに謝罪した。

　ジャックは苦笑した。こうでなくてはジョン・プルートー・スミスではない。彼は心を許した友にさえ秘密主義を貫つらぬく、水くさい男であるべきなのだ。

「そろそろ私は行く。さらばだ、ジャック」

　仮面の友が言った途端、光が消えた。

　ロングビーチ港の一帯で、全ての照明が機能しなくなったはずだ。

　街頭が消え、車のライトが消えていた。このまま夜が明けるまで、それらが光を取り戻すことはない。懐中電灯などを持ち出しても、まったく役立たない。

　そして、ジョン・プルートー・スミスは姿を変える。

　近隣一帯の光を『贄にえ』として、己を『豹ジヤガー』に変容メタモルフオシスさせたのだ。この変身のために、かつてハリウッド全域が暗黒に沈んだともいう。

　漆しつ黒こくの闇のなか、ジャックと人々は見た。

　爛らん々らんと輝くエメラルド色の双眼——『豹』と化した英雄の双眼を。

　オオオオオオオオオンンンンンッ！　獣けものの咆ほう哮こうが闇夜のとばりを引き裂いた直後、ジョン・プルートー・スミスの化け身しんである猛獣は疾しつ風ぷうのように走り去った。

「ああ。さらばだ、ジョン・プルートー・スミス」

　友の退場を見送りながら、ジャックはつぶやく。だが、これは永遠の別れではない。

　黒き仮面の『王』はきっとまた戻ってくる。この混こん沌とんとした都市に新たな危機が迫ったときに。そして、友人たちが真に彼の力を必要とするときに、必ず——。

　ジョン・プルートー・スミスが神しん祖そアーシェラを葬ほうむった翌日の午後。

　ロスフェリスの閑かん静せいな一角にある屋敷を、ジョー・ベストは訪ねた。主しゅ従じゅうふたりだけの住まいとしては破格に広い物件なのだが、文句を言う者はいない。すくなくとも、主の正体を知る関係者の間には。

「やあデニス、我らがクイーンのご機嫌はどうだい？」

「極めて遺い憾かんですが、最悪の状態だと言えますな。ベストさま」

　玄関で出迎えてくれた老執しつ事じに訊たずねたら、いやな答えが返ってきた。

　そして居間まで案内された。寝室でないことをベストは神に感謝した。夜通し飲みつづけて、昼になってもベッドで飲んで……という最悪のケースではないらしい。

「今日はいい天気だぞ、クイーン。いや、アニー。だというのに君は、そんなところで飲んだくれている。それは酒という文化の極きわみに対しても非礼だと思うのだが」

「うるっさいわねー。飲まなきゃやってらんないのよ、こっちはー！」

　軽い挨あい拶さつに、定型通りの酔っぱらい発言が返ってくる。

　アニー・チャールトンは、ソファに埋もれるようにしてすわっていた。

　傍かたわらの丸テーブルには安バーボンの壜びんと飲みかけのグラスが載のっている。空からっぽの酒壜が散乱していないのは、几き帳ちよう面めんな老執事がいちいち片づけているからだろう。

「……荒れている理由を聞こうか」

「うぐっ。ジャックに女がいたの～。あの野郎、自分はフリーだって言ってたくせにィ！」

　酔いで瞳ひとみを濁にごらせながら、アニーは答えた。いつもは表情も口調も硬い彼女だが、その面影はまったくない。泥でい酔すいすると人が変わるのだ。

「べつにいいじゃないか、彼にパートナーがいても」

「よくないッ。あたしはねー、一年前からあいつに目ェつけてたんだから！」

　教授と助手という関係だが、古くからの友人同士でもある。

　だからジョー・ベストは、アニー・チャールトンの真実を知っている。

　理知的で冷れい静せい沈ちん着ちやく。知性と行動力の両者を兼かね備えた『できる女』。生き真ま面じ目めな優等生気質。

　ただし、ある条件下においては別人のような振る舞いも見せる。

　たとえば、イヤなことがあって酒壜に手を伸ばしたとき。あるいは、ある種のコスチュームに身を包んだときなどに。素人しろうとの目で精神鑑定をするなら、普段から己を抑よく圧あつして生きているせいかもしれない。

　とりあえずベストは、彼女を慰なぐさめることにした。

「月並みな言い方だが、男は他にもたくさんいる。新しい恋を見つければいいさ」

「あのねーっ。あたしの目にかなう男なんて、なかなかいないんだからね！　ジャックはね、ハンサムでお洒落しやれにも気を遣つかうのにイケメン気取りじゃなくて、熱血漢だけど暑苦しくなくて、無鉄砲だけど基本的には頭も悪くないっていう、滅多にない優良物件なんだからー！」

　ついにアニーは、えぐえぐと泣きだしてしまった。

「これでもねー、ふたりの距離を縮めようと地道に努力してきたのよっ。彼の仕事をさりげなく手伝ってあげたり。真面目な彼を適度にからかって、自分を印象づけたり。理由をつけて、週に一度は会いに行ったり！　おかげで最近は、プライベートの悩みを相談されたりもしていたってのに、何でよ～！」

「なあアニー……それは全部、ジョン・プルートー・スミスとしてじゃないか」

　失恋（？）した酔っぱらいを持てあましながら、ベストは言った。

　アニー・チャールトン。今年で二七歳。

　一〇代の頃にアステカの魔神テスカトリポカを紆う余よ曲きよく折せつの末に倒してしまい、神殺しの戦士チヤンピオンとなった。またの名をジョン・プルートー・スミス。

「こう言っちゃなんだが、アニー自身とジャックはせいぜい顔見知り程度だろう？」

「仕方ないじゃない～。夜な夜なコスプレしてヒーロー活動するようになって、もう一〇年になるのよ～。ずっと忙しくて男の子とつきあったこともないんだから、どうやって口く説どいたらいいのか知るわけないじゃない～」

　ベストはため息をついた。せっかく怪け我がした足で生還を祝いに来たのに台なしだ。

　あの夜、海のなかでアーシェラが自爆する瞬間。

　アニーは『殲せん滅めつの焔ほのお』と化して、わざと実体を失ったのだという。

　これが効を奏して、致命的なダメージを回避。しかし、重体のまま波間を漂う。クルージング中のヨットに運よく拾われて、一週間後に恢かい復ふく。急いでロスに舞い戻った……。

　驚異的な生命力を持つ、戦士チヤンピオンならではのエピソードだった。

　老いた友人と執事に見守られながら、アニー・チャールトンは酒に逃避する。

　後のちに彼女は述じゆつ懐かいする。今度こそアーシェラを倒したという手応えがあった。新たな権けん能のうを簒さん奪だつしなかったのは、あの蛇神はあくまで神祖が変化したもの、真の『まつろわぬ神』ではないのだから当然……そう考えていたと。

これがあやまりだと判明するのは、もうすこし先の話である。

第２章　蠢く妖女たち

1

　バタン諸島はフィリピン最北の群島である。

　太平洋と南シナ海のちょうど境目に位置し、実はフィリピン本土よりも台たい湾わんに近い。農業と漁業と出で稼かせぎを主な収入源とする、小さな島々だった。

　なかでも最北端にあるヤミ島は、定住する人間もいない小さな島だ。

　だが今、その浜辺に子供がひとりたたずんでいた。

　明らかに東洋の生まれではない、白人の美少女である。年齢は一二、三歳か。ゆるやかなカーブを描く黄金色の巻き毛が、おそろしく整った美び貌ぼうを縁ふち取どっている。

　稀き代たいの人形師が生しよう涯がいの全てを賭として造ったクラシックドール。

　そう言われても納得できる、完成された幼年期の美であった。身につけた黒いドレスの妖あやしさも、いっそ彼女に似つかわしい。

「ようこそおいでくださいました、教きよう主しゆ。このグィネヴィア、心よりお礼申し上げます」

　美少女はいきなり砂浜にひざまずき、つぶやいた。

　彼女が頭こうべを垂たれる先には誰もいない。太平洋につながる広大な海が広がるだけ。

　しかし、応答はあった。

「礼など無用です、神しん祖そよ。つまらぬ挨あい拶さつなど省はぶき、本題に入りなさい」

　月げつ琴きんの音色を思わせる、美しい響き。この声は波間から湧わき出たものだった。

　その辺りの海水が盛り上がり、女によ人にんの姿を形作っていく。

「おまえが廬ろ山ざんの庵いおりに届けた報しらせは、わたくしの好奇心を刺激するに足る内容でした。ゆえに命じましょう。死にゆく『まつろわぬ蛇へび』をわたくしに預けるというのであれば、即刻引き渡しなさい。全ての話はそれからです」

　獅し子しの唸うなり、虎とらの嘯うそぶき。その美声には、禽きん獣じゆうの王に喩たとうべき威いが備わっていた。

　海水は今や、絶ぜつ世せいの佳か人じんに変へん貌ぼうしていた。

　端正な玉のかんばせ、寒かん蘭らんのごとくすらりとした佇たたずまい。絹きぬのような黒髪は三つ編みにしてまとめ、結い上げている。歳としは一〇代後半か。

　身にまとうのは、女物の白い漢かん服ぷく。それが平然と波間に立つ乙女おとめの姿であった。



「承知いたしました、教主。――おいで、アーシェラ」

　グィネヴィアと名乗る少女はやさしく、海に向けて呼びかけた。

　彼女が『教主』と呼ぶ佳人のうしろで広がる海に。ザァ……ザァ……。波が寄せては引き、引いては寄せる。待つこと数分。ついに第三の女人が現れた。

　波が彼女の体を運び、ヤミ島の浜辺に打ち上げたのだ。それは、ロサンゼルスで神祖アーシェラと呼ばれた魔女であった。

　まさに満まん身しん創そう痍い。幼い肢し体たいは無数の赤黒い傷で埋め尽くされている。

　アーシェラはゼェゼェと息を荒らげながら波打ち際ぎわで寝返りを打ち、仰あお向むけになった。

　悪行を尽くした魔女の凶きよう相そうも、今は見る影もない。海水で冷え切り、消耗しきった彼女の顔に浮かぶのは、まぎれもなく死相である。

「……なるほど、これはたしかに神祖の血筋であるらしい。しかも、そこはかとなく漂う神気……竜りゆう蛇だの封印を破りましたか」

「はい。教主のご同どう輩はい――ジョン・プルートー・スミスさまと戦うために、やむなく」

　瀕ひん死しの魔女を見下ろす黒髪の佳人に、グィネヴィアは恭うやうやしく言った。

「わたくしと同格の『王』にそのような名の者が？」

「新大陸に現れし『王』であらせられます、羅ら濠ごう教主」

　姓は羅ら、名は翠すい蓮れん、字あざなは濠ごう。人呼んで羅濠教主。それこそが佳人の名前である。

　グィネヴィアの説明に、羅濠はどうでもよさげにうなずいた。

　彼女が神の権けん能のうを簒さん奪だつしてから二百年。その間

に生まれた同輩の素す性じようなど調べたことはない。気にしたこともない。名乗られれば覚える。その程度である。

　羅翠蓮こそが天てん上じよう天てん下げに唯ただ一人、不敗にして求敗の境地に至った武の至し極ごくなり。

　余よ人じんの威いをはばかる必要など皆かい無むなのだ。そのような些さ事じには、自然と無む頓とん着ちやくになる。

「煉れん獄ごくの焔ほのおに灼やかれたと見える。ジョン某なにがしとやら、とどめを刺さぬ愚ぐは犯さなかったようですね。この娘、よく生きているものです。おまえの差さ配はいですか？」

　アーシェラの体を子し細さいに眺めてから、羅濠は訊たずねた。

　灼かれたのは妖よう蛇じやの体。今、魔女の体に刻まれているのは、赤黒く化か膿のうした詳細不明の傷きず痕あとである。そこから戦闘の模様を見抜く——。異様な眼力であった。

「はい。この者は本来であれば骸むくろとなって母なる海に回帰し、新たな輪りん廻ねへと旅立つ運命さだめでございましたが……。我が命を少々分けあたえました」

　平へい伏ふくしたままグィネヴィアが言上する。

　一度も羅濠と目を合わせない。至高の女王に接するがごとき振る舞いだった。

「アーシェラの身柄があれば、御おん身みの宿敵たる英雄を必ずや甦よみがえらせることができましょう」

「この同どう胞ほうをわたくしに捧ささげると？　ならば、おまえの望みを言うがいい」

　厳しくも美しいまなざしが美少女を射いぬく。

「この羅濠、廉れん恥ちの心を忘れた愚ぐ物ぶつに非あらず。功を立て、財を献けん上じようした者への報ほう償しようを惜おしむつもりはありません。褒ほう美びを取らせましょう」

　献上品の裏に隠された思おも惑わくを勘かんぐるのではない。野望を怪しむわけでもない。企たくらみを警戒するのでもない。それ

らは全て、王者の振る舞いに非ず。

　罠わなあらば拳こぶしを以もつて粉砕す。陰いん謀ぼうあらば一剣を以て断裁す。謀む反ほんあらば王おう威いを以て圧倒す。

　これこそが武の至極たる王者の振る舞い。その自負あっての詔しよう勅ちよくであった。

「——何も。何も頂ちよう戴だいするつもりはございません」

　グィネヴィアの答えに、羅濠が眉まゆをひそめる。

　だが、つづきを聴きくうちに、東洋の魔王は唇くちびるの端をほんのすこしだけ曲げた。

「かの《鋼はがね》の英雄が甦よみがえれば、あの御方と教主との決戦がはじまりましょう。英雄殿が勝てば、グィネヴィアは我が企き図とを実現すべく新たに事を起こします」

　少女の言葉に絶世の佳人が見せる唇の歪ゆがみ。それは微笑であった。

「教主が勝利されるのであれば、かの英雄殿はグィネヴィアの望む器うつわでなかったという証しよう左さが得られます。いずれとなっても、グィネヴィアに不都合はないと思おぼし召せ」

「わたくしとあの者の仕合こそが己の利である——そう申しますか」

　見る者は絶無に近い微笑を浮かべながら、羅濠教主は言った。

「よいでしょう。わたくしに恵みを請こうのではなく、わたくしを用いて己が利を得んとする……その意気や良し。それは羅翠蓮の好みに適かなう返答です」

「恐れ入ります、教主」

　恭しく平伏しながらも、卑ひ屈くつさを微み塵じんも表に出さない。そんなグィネヴィアを無造作に見下ろしながら、羅濠は語気鋭く言う。

「神祖グィネヴィアよ。ならば、このアーシェラとやらを日本に向

かわせよ。わたくしの配下も送り込みます。わたくし自みずからが赴おもむく前に露つゆ払はらいをさせるのです」

「御身の配下……では、聖教のどなたかをアーシェラにつけていただけると？」

　羅濠を教主と崇あがめる《五ご嶽がく聖せい教きよう》。欧州の魔術師は魔教と呼ぶ。中華の技芸を学んだ武ぶ侠きようや方術使いの三割近くがこれに帰き依えし、教主に絶対服従を誓う。

「ええ。あとはその娘が使い物になるか否いなか……そこが問題です」

「竜蛇の封印を破った以上、もう長くは保もちますまい。しかし、今しばらく——あと一月程度であればどうにか。……よろしくて、アーシェラ？」

　アーシェラは呼びかけに応えて、ゆっくりと身を起こした。

　緩かん慢まんな動きで上体だけ起こして、ぎこちなく笑う。その邪じや悪あくな笑顔は、ロサンゼルスの地で浮かべていた凶相と同質のものであった。

「ならば、その神祖を一足先に日本へ送り込むのです。この者を贄にえとして、我が宿敵を必ずや甦らせてみせましょう」

　ロサンゼルスからアーシェラを運んできたのはカリフォルニア海流である。南シナ海に入ったあとでこの海流を離れ、黒くろ潮しおに乗れば日本の房ぼう総そう半島沖に流れ着ける。

　グィネヴィアが王命を受じゆ諾だくすると、羅濠の姿はほぐれて海水に戻った。

　麗うるわしき魔教教主の住処すみかは、中国江こう西せい省しようの廬ろ山ざんにある。

　山中深くに編んだ、小さな庵いおり。よほどの用事がない限り、彼女は住まいを離れない。今まで魔女たちが対していたのは、かの地より羅濠が飛ばした分身だったのだ。

方術の遣つかい手てを道どう士しと言い、女によ人にんの道士を道どう姑ことも言う。

天下無双の武侠にして道姑である羅翠蓮。彼女は七人の神殺しのなかでも、東欧の魔ま狼ろうヴォバン侯こう爵しやくと並ぶ最凶の妖よう人じんである。

この一幕こそが、偉大なる魔教教主と草くさ薙なぎ護ご堂どうを邂かい逅こうさせる発ほつ端たんであった。

2

賢けん人じん議会の発はつ祥しようは、端的に言えば好こう事ず家かのサークルである。

魔術師、陰秘学者オカルテイスト、妖精博士フエアリードクターなど、魔術に深く関かかわる者たち。

また、そうした専門家とは一線を画かくす、通常の学者や市し井せいの研究家、神父、牧師、僧侶、神官、芸術家、資産家、貴族、王族、皇族など——。

志こころざしと探求心、そして財を持つ有志が集つどい、情報交換のためにサークルを作った。この会は徐々に叡えい智ちを蓄たくわえ、影響力を増し、ロンドンのグリニッジに本拠地を設ける。

これが今日の賢人議会である。

オカルトと魔術の研究を推進・援助する頭脳集団。

さらに神々と神殺しについての情報を日々蓄え、彼らが世に災わざわいを振りまくときはいち早く対応せんとする組織でもあった。

ロンドンでも屈くつ指しの高級住宅街、ハムステッド。

その一角に、古城じみた外観の邸てい宅たくがある。広い敷地と

庭、四階建ての建物、しかも四つの塔付き……という豪華さだった。

　この辺りには豪ごう壮そうなデザインの集合住宅フラットも多いので、こんな建物でも周囲から浮くことはない。しかし、邸宅の主は女性ひとりで、他の住人は全て彼女の使用人……というのは明らかに異様だろう。

　ゴドディン公こう爵しやく家け令嬢、アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァール。

　通称プリンセス・アリス。グリニッジ賢人議会の元議長にして現在は特別顧こ問もん。

　それが邸宅の主の肩書きである。彼女は現在、昼下がりの庭園に出て外の景色を楽しんでいるところだった。肩にストールをかけて、デッキチェアに腰かけている。



二四歳の公爵令嬢は、いくつもの長所を備えている。

外面に関するものを挙あげれば、なめらかなプラチナブロンドの髪、幼時より賞賛を受けつづけた美び貌ぼう、抜群のスタイル等。しかし、このときは内面の長所を使用していた。

精神を集中させ、感応の触しよく手しゆを広げていく。

はじめは己の周囲から。そのまま館やかたの敷地を全て制せい覇はし、外にまで広げ——。

やはりいた。昨夜見た予知夢の通り。アリスはそばにいたメイドへ申しつけた。

「お茶の用意をしてくださいますか？　わたしの分は必要ありませんが、もうすぐお客様がいらっしゃるので、その御方のために」

「……は、はい。姫様っ」

プリンセス・アリスは滅多に外で飲食しない。その性せい癖へきと理由を知らない新入りの使用人は、奇妙な指示に戸惑いながらティーセットに手を伸ばす。

だが、用意が終わらないうちに客が姿を見せた。

「おひさしぶりですね、アレクサンドル。今、あなたのためにお茶を淹いれさせていたところです。もうすこしだけお待ちくださいね？」

招かれざる客にして十年来の知ち己き。

庭園の小道を歩いてくる青年に、アリスはいたずらっぽく呼びかけた。

「いや結構。俺は今、喉のどは渇かわいていない。貴様にも不要のはず。要いらぬ気き遣づかいだ」

近くまで来た青年が無ぶ愛あい想そうに言う。

優美に整った顔立ちも仏ぶつ頂ちよう面づらで、親しみに欠ける。しかし機嫌が悪いわけではない。この表情が地顔なのだ。愛想

はないが、知性と意志力を宿す面差しだ。

　黒髪と白はく皙せきの肌。背は高く、体つきも引き締まっている。ダークグレーのジャケットを身につけて、貴公子と呼ぶにふさわしい男ぶりだった。

　彼と交わす話を余人に聞かせてはならない。アリスはメイドを下がらせた。

「もう誰もいないな？　例ののぞきの能力で調べてみろ」

「雅みやびさに欠ける表現ですね。わたしたちの流儀に従って、精神感応とお呼びくださいな。あなたに美しい言葉の重要性を説とくのは徒と労ろうかもしれませんが」

　精神を研とぎ澄すまし、他者の気配や感情、心までも漠ばく然ぜんと読み取る。さらには精神の淵えん源げんたる霊体、魂たましいにまで干かん渉しようし、巧たくみに操あやつってみせる。これが精神感応。

　知る人ぞ知るプリンセス・アリスの特技だった。

　ごく一部の巫み女こもしくは魔女にしか使いこなせない、極めて特異な霊力だ。もっとも、魔術や霊力に対して絶対的な耐性を持つ彼の心までは読めない。畏おそるべき妖よう人じんがいる気配を感じ取るだけで精一杯だった。

「ふん。貴様は隠れて悪事を繰り返すくせに、外面を気にしすぎる。雌め狐ぎつねめ」

「あなたの方こそ、さすがは不法侵入の常習犯です。レディに対して不作法なお言葉をおっしゃいますのね。王子の呼び名が泣きますよ」

　初めて出会ったのは一二年前。アリスは一二歳、彼は一六歳だった。

　あの頃から幾度となく繰り返した、憎まれ口の叩たたき合い。

　すっかり大人びたが、アレクサンドルの仏頂面はあの頃と変わらない。何の断りもなしに彼女の家へ上がり込む不作法もあいかわらずだ。

「だったら、貴様も替え玉などを使うのはやめることだな」

　じろりとにらまれたので、アリスは視線を逸そらしてとぼけた。

「姫と呼ばれる者が臣しん下かを偽いつわってどうする？　相手が友であれ配下であれ、忠ちゆう誠せいを尽くす者に真実を見せぬようでは王侯・貴族の器うつわとは言えまい」

　バチバチと、アレクサンドルのまわりで青白い火花が散る。

　このまま稲妻をまとい、何なん人ぴとも追つい随ずいできぬ神速の世界に突入するのが彼の権能。アリスたち賢人議会が『電光石火ブラツク・ライトニング』と名付けたスピードスターの魔力。

　アレクサンドルは彼の言う替え玉の眼前から消え去った。

　この権能を使われたら最後、超常の視力を備えるプリンセス・アリスにさえも、彼の居場所を特定することは難しい。

　アレクサンドル・ガスコインは、本名よりも通り名の方が有名である。

　幻げん視しと雷いかずちを司つかさどる堕だ天てん使しレミエルに勝利し、神速の権けん能のうを簒さん奪だつした黒き貴公子。

　グリニッジ賢人議会の本国であるイギリスに敢あえて拠点を設け、彼らにカンピオーネである己を警戒させ、その怯おびえと苦悩を眺めて愉たのしむ男。闇やみに葬ほうむられた大英図書館襲撃、九〇年代の欧州魔術界で最大の争乱となった魔ま導どう杯はい強ごう奪だつなど、数々の事件を巻き起こした男。

　その名は黒王子ブラツクプリンスアレク。

　賢人議会が『白き巫み女こ姫ひめ』と敬けい慕ぼするプリンセス・アリスの宿敵だった。

「貴様の体は、あいかわらずガタがきたままのようだな」

　邸宅の四階にある寝室。特別に許された使用人以外は入室禁止とされる。豪ごう奢しやな寝台にはネグリジェ姿のプリンセス・アリ

スが横たわっている。

　この聖せい域いきに、黒王子は悠ゆう々ゆうとドアから入ってきた。

「あなたこそ歯に衣きぬを着せない悪あく癖へきは改まりませんのね。一度、社交辞令のレッスンをして差し上げましょうか？」

　アリスは優雅な口調で答えた。ただし、枕まくら元もとに呼び寄せた霊体エクトプラズムの口を使って。ネグリジェをまとった本体は寝台で寝たままだ。

「レディの寝室に、いつもいつも気安く入り込んでくれますこと」

「イヤなら警備をもっと厳重にしろ。俺の知ったことか」

　批ひ難なんに対して、アレクは興味なさそうに言い返す。

　もっとも、アリスに彼の突入を本気で阻はばむつもりはない。その気があれば、とっくに相応の備えを導入している。黒王子ブラックプリンスアレクは、あくまで賢人議会の政敵なのだ。

　彼の力に力で対抗すれば、過程はどうあれ最終的には敗北する。

　カンピオーネたるアレクなら、独力で賢人議会を壊かい滅めつさせることも可能だ。

　だから、彼が徒党を組むなら好きにさせる。邪魔はしない。黒王子ブラックプリンスとの戦いは、政治と駆け引き、知略と交渉、武力と経済力を織おり交まぜた多面的な抗争とする。長い対立のなかでアリスが学んだ智ち慧えだった。

「仕方ありませんね。今日のところは歓待して差し上げましょう、アレクサンドル」

　アリスは本物そっくりの霊体を消し去った。

　今や、プリンセス・アリスは寝台に横たわる本体のみ。閉ざしていた目を開け、ゆっくりと身を起こす。だが弱り切った肉体は、霊体ほど軽々とは操れない。

　軽い羽毛布ぶ団とんをはねのけるのに苦労していると、アレクが

急に近づいてきた。

　肩を支え、背中にクッションをあてがってくれた。

「ありがとうございます。十年に一度、黒王子ブラックプリンスにも紳士の魂たましいが宿ることもあるのだと確認できて、すこし感動しました」

「ふん。珍しく生身で話そうとする貴様に、最低限の敬意を示しただけだ」

　仏ぶつ頂ちよう面づらで言ってから、すぐにベッドから離れるアレク。

　半端な男なのだ。善人ではないが、冷れい酷こく無む比ひにもなりきれない。策略を巡らせながら、非情に徹しきれない。誰よりも勝利を希求しながら、足手まといを突き放せない。

　そして、プリンセス・アリスはウソつきだ。

　人の身に生まれた者としては、至上の霊力を有する巫み女こ姫ひめ。

　精神感応と念力にすぐれ、霊視と予知の素養すら持ち、時には神々との交信までやってのける。ただし、その能力が体を蝕むしばむため非常に脆ぜい弱じやく。ほんのすこし外出するだけで疲れ果て、体調を崩してしまう。

　だから人前に出るとき、アリスは霊体エクトプラズムで分身を造り出す。

　それを操って、健康な人間であるかのように周囲をあざむく。通常、霊体で物にふれることはできない。しかしアリスは器用に念力まで併用して、生身の人間が動き回っているように見せる。さすがに飲食するふりはできないが。

　この秘密を知る部外者はすくない。最大の敵であるアレク自身。あるいは一二年前の争乱で盟めい友ゆうとなった《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》のパオロ・ブランデッリなどだ。

　――半端な悪あつ漢かん気取りと、常習的に人をあざむく見み栄えっぱり女。

　何だかんだ言って、似合いの組み合わせなのかもしれない。アリスは苦笑した。

「何がおかしい？　いや、貴様の頭と性格がおかしいのは先刻承知だが」

「あなたの方こそ、人物鑑定の眼力がおかしくなっていますよ。……それよりも本題に入りましょう。アレクサンドル、今日の用件は？」

　この体では長時間の話はできないため、単刀直入にアリスは訊きいた。

「例の神祖がブルターニュを離れて、消息を晦くらました」

　心得たもので、アレクもすぐに重要事項を口にする。この男とは幾度も戦い、策を競い、会談し、共闘もした。なまじな味方よりも、よほど気心が知れている。

「グィネヴィアが？　一体、何のためでしょうね？」

「さあな。だが最近、中国の怪力女と連絡を取りたがっていたらしい。あるいは、あの腕力至上主義者に取り入って、何か事を起こすつもりかもしれん」

「羅ら濠ごう教主にグィネヴィアが近づいた……」

　まず、非紳士的な人物描写をされた女性についてアリスは考える。

　仁じん義ぎ礼れい智ち信しんを備え、王者の威風をまとう大たい人じん。だが、この世で最も偉大なるは己の武勇、人類五〇億の命よりも地球の方が重いなど、中学生の妄もう念ねんすれすれの思想を有する。

　悪意がないくせにあれだけ傍はた迷めい惑わくな怪物は、他にいない。

　そして、グィネヴィアについて考える。蛇じや神しんの末まつ裔えいたる、人じん智ちを超える魔女。アレク率ひきいる結社《王おう立りつ工こう廠しよう》と賢人議会、共通の敵――。

「どんな災さい厄やくが起こっても不思議ではない、最悪のマリアージュですね」

「まったくだ。名めい聞ぶんさえ立てば世界を終末に導きかねない化け物へ、毒蛇がわざわざ格好の名聞を届けに行く……。そんな光景が見えるようだぞ」

「それでアレクサンドル、あなたはその情報をなぜわたしに？」

　教えたのか。思惑は読めていたが、アリスは意地悪く訊たずねる。

　黒王子は案あんの定じようフンと鼻で笑い、答える手間を省はぶく。わかっているだろうと。

　消息を絶った神しん祖そ。最凶のカンピオーネである魔教教主。ふたりの行方を追跡するなら、最適の人材は決まっている。賢人議会の情報網を自由に使え、ヨーロッパ最高の霊視力と精神感応力を持つプリンセス・アリスだ。

「今回、俺と貴様の利害はそれほど食いちがわないはずだ」

「ええ。情報を共有しておいても、まずい結果にはならないでしょうね」

　あまり善良とは言えない笑みを、ふたりは同時に浮かべた。

　神祖たる魔女と共謀してカンピオーネが暴走する。これは賢人議会にとっても見逃せない緊急事態である。当然、抑え込まなくてはならない。

　だが頭脳集団に過ぎない賢人議会には、そのための実行力はない。

　他のカンピオーネに援助を要請するか？　欧州在住の魔王なら、ヴォバン侯こう爵しやくと剣の王サルバトーレ・ドニがいる。何をしでかすか読めない、爆弾のような両名が。

　だからアリスは、条件さえ許せば第三の選択肢を選ぶ。

　利害が一致する案件に関しては、黒王子アレクは最も信頼のおける魔王なのだ。

「話は以上だ。邪魔をしたな」

「見送りをしない非礼をお詫わびいたします、黒王子ブラックプリンス」

たがいのスタンスが確認できた以上、もう話し込む必要もない。アレクはふたたび火花をまとい、神速の世界に入り込んだ。

黒王子ブラックプリンスの消失後、生身での会話に疲れたプリンセスはふうと息を吐き出した。

3

高校生らしい携帯電話の使い方に、メールによる友人とのコミュニケーションがある。

しかし、草くさ薙なぎ護ご堂どうと親しい人々はこの機能を有効利用しない。

たとえばエリカ・ブランデッリは、メールよりも電話で直じかに話すことを好む。リリアナ・クラニチャールは逆に筆まめらしい。来日直後、「これから日に三度……いえ、六度ほど定時報告のメールをお入れしましょうか……？」と提案されたので丁てい重ちようにお断りした。

万ま里り谷や祐ゆ理りは、おそらくメールの使用法をわかっていない。

彼女が携帯を導入した直後、使い方をかんたんに教えたりしたが、彼女名義のメールは一通も送られてはこなかった。だというのに、これはどうしたことか？

タイトルは『明日、お会いできませんか？』。送信者は『万里谷祐理』。

秋もすっかり深まった一〇月上旬、土曜日の夜。

自室でくつろいでいた護堂の携帯電話に送られてきたメールだっ

た。

『もしご都合がよろしければ、明日お会いしませんか？　可能であれば、一二時に私たちの学校の校門前にお越しください』

　と、本文の方にも綴つづってある。護堂は首をかしげた。

　なぜ祐理はこんなメールを作成したのか？　直接訊きいてみたくなった護堂は、彼女の番号に電話をかけた。……出ない。仕方なく了承の旨むねをメールで返信する。

　十数分後、『ありがとうございます。ではまた明日』と簡潔な応答が返ってきた。

「万里谷のヤツ、どういうつもりなんだ？」

　さっぱり見当がつかない。それにしても日曜日に女子と待ち合わせなんて、まるでデート――いやいや。その思いつきを、護堂は頭を振って忘れることにした。

　翌日の日曜日。午前一一時頃、護堂は家を出た。

　城じょう楠なん学がく院いんまでは一五分も歩けば到着する。かなり早めに出発したのは、単に手持ち無ぶ沙さ汰ただったからだ。近所を散歩しながら待ち合わせ場所へ行くつもりだった。

　しかし、この方針が予期せぬ遭そう遇ぐうを呼び込んだ。

「あら護堂、お出かけの途中？」

　本ほん郷ごう通りを歩いていると、名前を呼ばれたので驚いた。

　張りのある、のびやかな美声。これは明らかにエリカ・ブランデッリのもの。声の方を向くと、そこには紅あかいフレームのクロスバイクにまたがったエリカがいた。

「どうしたんだよ、おまえ……？　こんな朝早くに!?」

　護堂の感覚では決して早朝とは言えないが、エリカはちがう。

　休日ともなれば、正午を過ぎた頃にようやくベッドから抜け出す

のが彼女のライフスタイルだ。なのに今、護堂の目の前にはミラノから来た美少女の姿があった。

「マンションの隣の部屋で、防音工事がはじまったのよ。うるさくて寝てられないから、外に出ることにしたんだけど」

　エリカの説明に、なるほどとうなずく。常に我が道を行く『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』のペースを乱すのだから、そのくらいの荒技は必要だろう。

「ま、そのおかげで護堂に会えたんだから、結果的にはいい方に転んだわね。もし暇ひまなら……いいえ、暇でなくても今日はわたしにつきあいなさい。これは、エリカ・ブランデッリのパートナーたるあなたの義務よ」

　いきなりエリカが言い出した。

　今日の彼女は、紅いセーターに黒のジーンズを合わせたラフな格好。それでもスポーティーなお嬢さまという雰ふん囲い気きになるのだから反則だ。エリカがジーンズをはくと、腰の高さがよくわかる。これだけで寸ずん胴どうの日本人女性とは大差がつく。

「無茶を言うなよ。おまえが言った通り、俺は出かける途中なんだから」

　珍しく早起きしたと思ったら……。これが彼女の本領とはいえ、受じゆ諾だくできるはずもない。

　適当にやり過ごそうと決めたときだった。

「おはようございます、草薙護堂。ここであなたと出会えたのは望外の幸運です。……まあ、ひとり余計な人間もいて残念ですが。おはようエリカ」

　と、またも護堂は声をかけられた。

　前半分の挨あい拶さつをするときは凛り々りしい女騎士の表情、後ろ半分の挨拶をするときは、旧友に出し抜かれて口くち惜おしいという表情。声の主はリリアナ・クラニチャールだった。

　銀髪をポニーテールにまとめた、妖よう精せいめいた少女である。

「実は昨日作ったケーキをお裾すそ分わけしようと思って、お宅に寄るつもりだったのです」

　リリアナが手にしたバスケットを護堂に見せる。彼女は長袖の黒いＴシャツの上に青いジャケット、丈たけの短いフレアスカートにニーソックスという服装だった。

　ちなみにエリカが紅と黒ロツソネロ、リリアナが青と黒ネラツズーロの色いろ遣づかいにこだわるのは、それが両名の所属する魔術結社を象しよう徴ちようする配色だからである。

「ケーキって、あなたもマメねえ……。感心するわ、リリィ」

　青と黒ネラツズーロの女騎士が持つバスケットをエリカはのぞき込んだ。

　草薙家に押しかけて手料理を作ったりしたリリアナも、だいぶ落ち着いてきた。そのような不意打ちはさすがにもうしない。

　もっとも、こうして頻ひん繁ぱんに差し入れを持ってきてくれるのだが。

「休日の午後にパウンドケーキを作るくらい、造作もないこと。……まさかエリカ、こいつを今ここで貪むさぼり喰くらうつもりじゃないだろうな!?」

「今とは言わないけど、天気もいいし、どこかの公園でいただくのは悪くないわね」

　手荷物をかばうリリアナに、悪魔と呼ばれる少女がフフンと笑いかける。

「その食糧をあなたが供与するなら、わたしたちの逢おう瀬せに相席させてあげてもいいわよ？」

「そこでなぜ上から目線になる？　増長甚はなはだしいにもほどがあるぞ」

「あら、本当なら邪魔者は呼ばないところなのに、リリィのお料理の腕を認めて譲歩しているのよ？　それにあなたはいっしょに行きたくないの？　護堂といっしょに」

「う……それは……」

　青き騎士が紅き騎士に言いくるめられようとしている。

　護堂はいつもの光景だなァと思いながら、断りを入れるべく口を開いた。

「あー、悪いけど俺、出かける途中なんだ」

　紅と青の両名から注視が向けられた。

「その差し入れはあとでありがたく……な、何だよ、ふたりとも変な目つきして？」

　紅の騎士の面白いものを見つけたわという視線。青き騎士の詮せん索さくするような視線。そのふたつにさらされて、護堂はたじろいだ。

「ふうん……わたしやリリィを放置して、どこかに行くつもりなのね、護堂？」

　エリカが妖あやしく微笑ほほえむ。これは人の不幸を娯楽にする魔女の表情だ。

「その外出には女性が同伴されるものとお見受けしました。当たっていますね？」

　妖精に似たリリアナの面おも差ざしに、暗い翳かげが落ちた。疑惑と憂ゆう慮りよと不安が渾こん然ぜん一いつ体たいとなった、複雑な表情だ。そういえば最近、彼女のこういう顔をよく見る気がする。

「あなたに休日のデートをセッティングする甲か斐い性しようがあったなんて、とても意外だわ。それをわたしに対しても発はつ揮きしてくれればいいのに」

「こういう状況でばかり用意周到になるのですから……。まったく見事なものです」

　口々に少女たちが言う。これは何の根拠もない邪じや推すいに過ぎない。

　だというのに、今回に限っては結構当たっている！

　護堂は運の悪さを呪のろおうとして、思い直した。いやいや。たしかに祐理と約束はしているが、後ろめたいことは何もない。堂々としていればいい。

「おまえたちなあ、変なこと言うなよ。女の子と会うのはまちがっちゃいないけど、べつに変な用事じゃない。いいかげん、俺を女たらしみたいに言うのはやめろよな」

　胸を張って告げる。正直がいちばんと己に言い聞かせながら。

「俺はこれから、万里谷に会いに行くだけなんだ。ほら、何もおかしくはないだろ」

「ええ、おかしくはないわね。で、最初に会おうって言ったのはあなたと祐理のどちら？」

　説明した途端にエリカが質問してきた。

　目が笑っている。ただし、獲え物ものを追い詰めた愉ゆ悦えつを示す笑いだったが。

「ふうん、祐理の方からなのね。あの娘こ自身の発案とは思えないし……入れ知恵した人間がいるのかしら」

　一瞬口ごもると、こんなことまで言われてしまった。自分たちの名誉のためにも反論したいところだが、そうしたら要らぬ墓ぼ穴けつを掘りそうな気もする。護堂はすばやく言った。

「じ、じゃあ約束もあるんで、俺はもう行くから」

「面白そうだから、わたしもついていくわ。べつにいいわよね、護堂？　わたしやリリィも祐理と同じ、あなたの親しい友達なのですもの」

　からかうようにエリカが言うと、リリアナも何やら思案顔になった。

「……ではわたしも騎士として同行し、あなたと万里谷祐理の間に不適切な交わりがないか確認いたしましょう。かまいませんね？」

彼女まで便乗してきたか。護堂はため息をつきながら不思議に思った。

来日直後こそ暴走気味の行動が多々見られたリリアナだが、あれからもうひと月以上。さっきも感じたが、様子が今までと変わってきていた。

問題のある行動もずいぶんと減り、傍はた目めにも落ち着いてきたのがわかる。

だが代わりに、妙に静かだった。静かに、そして冷静に何かを考え込んでいる。

さまざまな情報を集め、分析している。そんな印象を受けるのだ。

その辺はともかく、エリカもリリアナも当座の行動は同じだ。護堂はふたりと共に城楠学院へ向かった。なぜか袋ふくろ小こう路じに追い詰められた気分なのが、我ながら不思議だ。

本郷通りから一五分ほど歩き、私立城楠学院の正門前に到着。

護堂はきょろきょろ周囲を見回した。祐理の姿はない。約束の一二時まで、あと五分。律りち儀ぎな彼女のことだから、とっくに待っていても不思議ではないのに。

「はじめまして、お兄さま。ずっとお会いしたいと思っていました」

声をかけられた。だが、聞き慣れた祐理の呼びかけではない。

そちらを向くと、整った顔立ちの少女が立っていた。黄色いニットとチェック柄のスカートを身につけ、黒髪を肩の高さで切りそろえている。

護堂は頭の隅にひっかかりを覚えた。この娘とどこかで会ったことがないか？

そして彼女は何と言った？　お兄さま？

思わず考え込んでしまった。——どっちの隠し子なのだ？　目の前の少女を一二歳前後と仮定しよう。一二～三年ほど前、おなかを

大きくしていた母の姿は記憶にない。天職・魔性の女といわれる彼女でも、妊娠と出産の神秘を覆くつがえすことは不可能だろう。

　だとしたら父の方なのか？　あの不良中年め！

　そんな疑惑と懊おう悩のうをよそに、銀髪の騎士が少女に話しかけた。

「草薙護堂の妹は静しず花かさんひとりだと聞いている。今の『お兄さま』という発言は、歳上の男性への呼びかけか？　それともまさか、草薙家の隠し子だとでも？」

「あ、そのどちらでもありません。すいません、不用意なことを言ってしまいました」

　リリアナの直ちよく截せつ簡かん明めいな質問に、少女はぺこりと頭を下げた。

　では、この娘は何者なのか？　ここであっさりとうなずいたのがエリカだった。

「ああ、何だ。そういうことなのね。道理で似ていると思ったわ」

「もうおわかりになったんですか？　あ、あなたがエリカさんですね？　恵え那な姉さまに勝ったっていう。強くて頭のいい綺麗な人だって聞いていましたけど、本当に評判通りです！」

　正体不明の少女が『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』を誉めそやす。

　その瞳には素直な賞賛が宿っている。表情と仕草も可愛かわいらしい。そのくせ媚こびを売るようなイヤらしさがない。純真そのものだった。



　この娘、誰に似ているのだろう？　それに清せい秋しゅう院いん恵え那なを知っている？

「ひかり！　こんなところで何をするつもりなの!?」

　今度こそ、馴な染じみの声を聞いた。万里谷祐理がこちらに駆け寄ってくる。

　スポーツが苦手な彼女だが、珍しく駆け足だった。

「あ、お姉ちゃんだ。やっぱり勘かんがいいなあ。私の悪だくみ、すぐにわかるんだから」

「お姉ちゃん……で、悪だくみだって？」

　不穏なつぶやきを護堂が聞きとがめると、少女は照れ笑いを浮かべた。

「はい。私は万里谷ひかり——祐理の妹です。で、今日お兄さまを呼び出したのは、実は私だったりするんです。騙だましちゃって申し訳ありません！」

　勢いよく、またもぺこりと少女は頭を下げた。

　これが草薙護堂と媛ひめ巫み女こ・万里谷ひかりの出会いであった。

4

　携帯電話を片時も手放さない人間がいる一方、そうでない者もいる。

　万ま里り谷や祐ゆ理りは後者であるらしい。自宅では寝室に置いてはいるが、着信音が鳴らない限り、手に取ることはない。外出時に忘れるときもあるとか。

　機械オンチの祐理は、用もないときは携帯電話をいじりたくないのだろう。

「昨日、お姉ちゃんが部屋を出た隙すきに携帯を持ち出した私が、あのメールを送りました」

　万里谷ひかりが朗ほがらかに白状する。

　学校近くの公園に移動して、彼女のすわるベンチを囲みながらの談話であった。護ご堂どう、エリカ、リリアナ、祐理とひかりの姉妹と、思わぬ大おお所じよ帯たいになった。

「お兄さまの話を恵え那な姉さまに聞いてから、ずっとお会いしたいと思っていたんです。昨日、ついに決行してしまいました。騙だますような真ま似ねをして申し訳ありませんっ」

「べつにそれはいいんだけど、ひとつ教えてくれ」

　明めい朗ろう快かい活かつにして天てん真しん爛らん漫まんらしい万里谷ひかりに、護堂は言った。

「君はどうして、俺をお兄さまって呼ぶんだ？」

「お姉ちゃんと恵那姉さまの『旦だん那なさま』なら、私にとってはやっぱり『お義に兄いさま』だと思いまして……。あ、王様とお呼びした方がいいですか？」

「いや、普通に『草くさ薙なぎさん』でいいから！」

　やはり、そういう意味だったか。

　とっさに護堂は代案を提示したが、ひかりは首を横に振った。

「それはいけません。姉に当たる方たちの旦那さまなんですよ？　そんなふうに他人行儀な呼び方をしては失礼です。是ぜ非ひ『お兄さま』と呼ばせていただきます」

　破は天てん荒こうな結論に至った理由を、無む垢くな笑顔で説明する。

　恵那の名前や王様なんて呼こ称しようを口にするのだから、草薙護堂を巡めぐる諸事情にもずいぶんと詳しそうだ。そんな妹の隣では、祐理がひたすら恐きよう縮しゆくしていた。

「すいません、護堂さん……。昨日の夜から不ふ穏おんな気配は感

じていたのですが、まさかこんな非常識なことだとは思いませんでした。私の監督不ふ行ゆき届とどきです」

　と、もう何度目かの謝罪をする。

　祐理は桜色のカーディガンにツイードスカートを合わせて、お嬢さま風の装いだった。傑けつ出しゆつした霊視力のお告げによって、妹のよからぬ動きに気づいてはいたらしい。

「お恥ずかしい話ですが、ひかりは私よりも口が達者で物もの怖おじしない性格なので、普通に問い詰めてもはぐらかされてしまうのです。だから家を出るこの子のあとをつけて、いたずらの現場を取り押さえようとしたのですが……」

「うーん。お姉ちゃんが本気で怒ったら、私なんかじゃ対抗できないんだけどなあ……」

　恥じ入る姉の横で、妹が異論を唱となえている。

　そんな万里谷姉妹を眺めながら、エリカが感心したようにつぶやく。

「目元の辺りがそっくりだから、祐理の妹だろうと察しはついていたけど。……性格はずいぶんとちがうみたいね。何だか清せい秋しゆう院いん恵那を思い出すわ」

「あ、恵那姉さまとは私も仲がいいんです！　すごく気も合いますし！」

「ということは、もしやあなたも媛ひめ巫み女このひとりなのか？」

　これはリリアナの発言だ。ひかりは例によって朗ほがらかにうなずいた。

「はい、そうなんですっ。……と言っても、まだ見習いですが」

　その後、公園の自動販売機でコーヒーやお茶を買い、ベンチでリリアナお手製のパウンドケーキを食べる運びとなった。

「申し訳ありません。型破りですけど根はいい子なので、深刻な事態にはならないと思っていたのですが……。こんなことになってし

まいました……」

　緑茶の缶を握りながら、祐理が縮こまる。

　その横でひかりはドライフルーツたっぷりのケーキを笑顔で食べていた。万里谷家の次女は、現在一二歳、小学六年生だという。とにかく物怖じしない少女のようだ。

「まあ、びっくりしたけど特に怒っちゃいないよ。万里谷も気にしないでくれ」

　護堂もケーキをかじりながら答えた。

「ところで媛巫女だというのなら、この娘も何か面白い力が使えるの？」

「たしかに、差し支つかえなければ教えてほしい話だな。清秋院恵那や万里谷祐理と同じ媛巫女ならば、相当な逸いつ材ざいじゃないのか？」

　エリカが質問すると、隣にいたリリアナも興味を示した。

　媛巫女に選ばれる少女は、特殊な霊力の遣つかい手てだという話を護堂は思い出した。

「あ、はい。私もちょっとした力は使えるんですけど、何なに分ぶん修行中なので——」

　ケーキを食べ終えたひかりが説明しかけたとき、軽快な音楽が聞こえてきた。

　おそらく携帯電話の着信メロディ。ひかりが所持していたポーチを開けて、携帯を取り出した。着信表示の名前を見て、困り顔になる。

「はい、万里谷です。……ど、どうも、ご無ぶ沙さ汰たしています。え、今日これからですか？　その、特に用事はないのですが……」

　しどろもどろになりながら、電話と話している。このとき護堂と目が合った。ひかりはいきなり「すいませんっ。あとで折り返しご連絡します！」と通話を終えてしまった。

「あの、お兄さまっ。ひとつお願いをしてもよろしいでしょうか!?」

「お願い？　どんなことだ？」

　切せつ羽ぱ詰つまった感じで切り出され、護堂は首をかしげた。

「お兄さまを、お姉ちゃんや恵那姉さまが愛する殿との方がたと見込んでのお願いなのですが！」

「いや待て、その前振りは明らかにまちがっている！」

「私、すごく困っていることがあるんです。以前、恵那姉さまに相談したら、お兄さまの御力を借りるのがいいだろうって言われて……！」

　訂正を要求したが、ひかりは魔王の発言をスルーした。よほど困っているのか大物なのか、どちらだろう？　祐理も察しがついたのか、ハッとした表情になった。

「ひかり！　もしかして、あのことを護堂さんに相談するつもりなの!?」

「う、うん。ちょうど今、九く法ほう塚づかの若様から電話がかかってきて『これから会えないか』って言われたから……」

　やや傍はた迷めい惑わくではあるが、明めい朗ろう快かい活かつな女の子を困らせている輩やからがいるらしい。

　義ぎ侠きよう心しんに駆られた護堂はあっさりと請け合った。

「俺なんかにできることがあれば、もちろん力を貸すけど——何をすればいいんだ？」

　この後、ひかりの事情説明を聞くこと数分。

『え、そんなのが俺の役どころ？』とたじろぐ護堂に、祐理が必死にあやまる。

「す、すいません。本当に申し訳ありませんっ。ご実家に帰る前の夜、うちに泊まった恵那さんがひかりの相談を聞いて思いついたことなのですが——ッ」

「天下のカンピオーネに何という嘆たん願がんを……いや、これも威い名みようを広める好機か……？」

「まあ、面白い思いつきではあるわね。わたしは気に入ったわ」

　リリアナが生き真ま面じ目めにつぶやき、エリカはくすくす笑い出した。

　三〇分後、公園の前に黒い高級車が停とまる。

　助手席から出てきたのは、二〇代半ばの青年だった。なかなかの男前で、背広が似合っている。さりげなくお洒落しやれにも気を遣つかう好青年という雰ふん囲い気きだった。

「さ、先方が到着したようよ。みんな、準備はいいわね？」

　いつのまにか場を仕切るようになったエリカが言う。

　祐理の妹が登場した直後は静かだったのだが、すっかり興きようが乗ったようだ。

　一方、護堂は暗い気分だった。こんな猿さる芝しば居いをしなくてもいいだろうにと。だが、ひかりを助けるためだ。諦あきらめてベンチのまんなかにすわる。

「ダメよ、護堂。もっと堂々として。足でも組んで、背筋をピンと伸ばして」

　背中を丸めていたら、エリカの演技指導が入った。

　やけになって言う通りにする。そんな護堂の右隣に、ちょこんと祐理がすわる。

「祐理も表情が硬いわ。そうね、できればマフィアのボスに囲われている愛人の悪女みたいな色いろ香かが欲しいのだけど、そういう表情を作れる？」

「でで、できません！　私には無理です！」

　またもエリカの指導。大おお焦あせりで首を横に振る祐理。それ

でも隣にいる護堂との距離を縮め、なるべく親密そうな雰囲気を出そうとする。

「リリィはいつもの感じでいいわ。あなたにはどうせ演技なんて無理でしょうし。でも、強こわ面もてでボディーガード兼任の愛人っぽい空気は出してくれるといいんだけど」

「わたしが草薙護堂の護衛なのは真実だ。演技をするまでもない！」

　指示するエリカに鋭く答えながら、リリアナはベンチの右横に立つ。

　両腕を組み、視線を険けわしくする姿はたしかに護衛っぽい。愛人云うんぬんはともかく。

「ひかりも護堂の横に行くのよ。そうだわ、護堂の胸にでもしなだれかかって、甘えるようにしていなさい。……あら、ちょっと退たい廃はい的てきでいい感じじゃない」

「そ、そうですかっ。ありがとうございます！」

　エリカに言われるまま、素直に従ったひかりが礼を言う。

　今や幼い美少女は護堂にぴったりと寄り添ってしまった。彼女の体のぬくもりを感じて、護堂は頭を抱えたくなった。嗚あ呼あ、どうして俺がこんな目に。

　最後にエリカはベンチの後ろに立ち、背後から護堂に抱きついてきた。

　彼女の細い両腕が護堂の肩に回され、頭にはボリュームと弾力たっぷりの熱い質感が押しつけられる。これの正体については深く考えまいと護堂は誓った。

「ねえ護堂、祐理の肩を抱き寄せて『俺の女』みたいな感じにしない？　あと、ひかりの頭とかあごを子猫でも可愛かわいがるように撫なで回すといいかも。やってみて」

「そんなこと、誰がするか！」

　エスカレートする演技指導を、怒鳴りつけて却きやつ下かする。

　一通り終わったところで、背広姿の青年が足早にこちらへ近づいてきた。『会ってやるから、この公園まで一時間以内に来い』とひかりに折り返させた相手である。

　姓は九法塚というらしい。下の名前は知らない。

　護堂も知る沙さ耶やの宮みや家けと清秋院家、そこに九法塚家と連れん城じよう家を加えて四家となる。

　日本の呪じゆ術じゆつ界かいをいにしえより牛ぎゆう耳じってきた四つの氏族である。彼は九法塚家を束たばねる若君で、いずれ当主の座に就つく予定だと聞いている。

「あなたが万里谷ひかりに無理を言っているという若様ね？」

　護堂にしなだれかかりながら、エリカが呼びかけた。決めていたわけではないが、交渉役は自然と彼女になっていた。まあ適材適所だろう。

「き、君たちは何だ？　ぼくはひかりさんに話があって来たんだが……」

　九法塚青年がうろたえている。

　こんな面子メンツに出迎えられたのだから、無理もない。さて、メインの交渉役はエリカにまかせるとして、自分は何を言おうか。護堂が考え込んでいると、

「特に君だ。まんなかにいる、そこの君ッ。ふしだらもいいところじゃないか。女の子たちをこんなふうに侍はべらせて喜んで……日本男児として、いや、ひとりの人間として恥ずかしいとは思わないのか！　ぼくは同じ男として悲しく思う！」

　ひどく立派なことを言われてしまった。

　……いや。文句をつけたいのは、むしろこっちの方なのだ。

　彼の管かん轄かつする社やしろは長きにわたって媛ひめ巫み女こ不在で、その任を万里谷ひかりに委ゆだねたいと考えているらしい。そんな話は、護堂には正直どうでもいい。

　だが、彼の社とやらの所在地を聞けば、いろいろ言いたいことも

出てくる。

　だから一芝居打とうということになったのに。しかし、相手の言い分はかなり正しい。この人、もしかして真面目ないい人なのでは？　護堂が悩みはじめたときだった。

「あら。こちらの若君は、意外と目がお悪いようね？」

　エリカがわざとらしく嘲あざ笑わらった。

　やはり、交渉は彼女に任せるのがいいか。あきらめた護堂はなるべく平静を装い、ふんぞり返ることにした。すると効果はてきめんだった。

「万里谷家の媛巫女をかしずかせ、金髪と銀髪の女性を侍らせる……あなたはまさか」

　九法塚青年の顔色が青くなり、真剣そのものになる。

　少女たちに囲まれた『王』の素す性じように気づいたらしい。……そんな反応を示すとは、俺を何だと思っているんだと怒りたくなったが、そこは我が慢まんした。

「この方がどなたか、ようやく気づいたようね？　あなた、少々鈍にぶくはなくって？」

「も、申し訳ございません。日につ光こうは西さい天てん宮ぐうにて神しん君くんをお守り申し上げる九法塚の総領、幹みき彦ひこにございます。草薙護堂のご尊そん顔がんを拝はい謁えつ賜たまわり、光栄の極み」

　エリカの皮肉に、九法塚青年は口こう上じようで答える。

　まるで舞台劇だ。ちょっとうんざりしながら、護堂はうなずいた。

「あなたの神社に、こいつをスカウトしているとお聞きしました」

　と、ひかりの頭にポンと手を置きながら切り出す。

　敢あえて気安い呼び方をした。媛巫女見習いと親しいように装うためだ。

　九法塚家が江え戸どの昔より守護してきた社が、栃とち木ぎの日光にあるという。この社に奉ほう職しよくすべき媛巫女は、長きにわたって空位である。特殊な適性が要求される地位なのだそうだ。

　だが、実は適性を持つ巫女がいないわけではないらしい。

　それが誰あろう万里谷ひかりであった。

「ご存じの通り、こいつはまだ小学生です。巫女さんの仕事をまかせて、家族と引き離してまで日光に連れていくというのは急すぎる話じゃありませんか？」

　一カ月ほど前から、九法塚青年はスカウトの電話を頻ひん繁ぱんにかけてくるらしい。

　そのうえメールを送り、直じきに会いに来ては口説きにかかる。困惑したひかりが丁てい重ちように断っても、しばらく経たつと勧誘活動が再開するとか。

　とはいえ、四家の一隅を成す九法塚家の若君と連絡を絶つわけにもいかず……。

　困り果てていたとき、たまたま万里谷家に泊まった媛巫女筆頭が提案したらしい。

『そんなの、王様に頼んでガツンと言ってもらえばいいんだよ！　俺の女の妹に妙なちょっかいを出したら許さないぞって。これなら絶対、幹彦さんも諦めるよ♪』

　以上が、護堂の聞いた事情説明である。

　誰が俺の女だ？　清秋院恵那に文句を言いたい気持ちはあったが、友人の妹のために一肌脱ぐのはやぶさかではない。そこで、この猿芝居に手を貸したのだが——。

「は。御身のおっしゃりよう、至極ごもっともでございます。しかし、それはあくまで一般の者の話。四家と縁深き媛巫女や武家、術師の子弟ともなれば、幼くして親元を離れ、修行に明け暮れるのも決して珍しくは——」

「だとしても、第一に尊重すべきは本人の意思だと俺は思います」

困惑の体ていで弁明する九法塚青年に、なるべく穏やかに反論する。

「じっくり考えたいとひかりも言っています。すこし時間をもらえませんか？」

「……承知いたしました。『王』の仰おおせとあらば、否いなやはございませぬ」

魔王カンピオーネの雷らい名めいが効いたか、九法塚青年はあっさりと請け合ってくれた。

——よかった。護堂は安あん堵どした。割と丁てい寧ねいに話してしまったので、舐なめられないかと心配だったのだ。また、ここでふと思った。

こんな感じで穏やかに関係者と接していけば、悪いうわさの数々を打ち消せないか？

最初の反応を見ても、九法塚青年が『草薙護堂＝恐怖の大魔王』くらいの認識でいたのはまちがいない。そういう風評を地道な努力で拭ぬぐい去っていくのだ。

うん、これは名案だ。護堂がひそかにうなずいていると、九法塚青年が言った。

「……それにしても、さすがでございます」

感じ入ったような口調だ。何がさすがなのか？

「これだけの美び姫きを引き連れ、実に堂々たるお振る舞い。まこと、獅し子しは少しよう壮そうの頃より禽きん獣じゆうの王、栴せん檀だんは双ふた葉ばより芳かんばしと、改めて感服いたしました。よもや万里谷家の妹いもうと御ごまで御身のお手つきとは知らず、この幹彦、汗かん顔がんの至りにございます。平ひらにご容よう赦しやを」

誰が誰のお手つきだって？

時代劇もかくやという九法塚青年の陳ちん謝しやに、護堂は絶句した。

　しかも、ひかりがこれで一安心という満面の笑顔でぴったり寄り添ってくる。兄を頼る妹、飼い主に甘える子猫という態度だ。

　こら、そんな誤解を受けるような行動はしちゃいけない……とは、言いたくても言えなかった。その隣では祐理がうつむいて、小声で「すいません、本当に申し訳ありません」とひたすら謝罪している。リリアナは「やはり、これでこそ我が主なのか……」と何かを吟ぎん味みするようにつぶやいた。『やはり』なんて言葉をこんな状況で使わないでほしいのだが。

　エリカはといえば、くすくす満足そうに笑っていた。

『これにて一件落着！』と大おお見み得えを切らないのが不思議なほど愉快そうだった。それはもちろん、草薙護堂の浅はかさを愉たのしむ悪魔の微笑であったが。

第３章　聖域に集う

１

　万ま里り谷やひかりと出会った翌日の放課後。

　護ご堂どうは芝しば公こう園えんの七なな雄お神じん社じやに向かっていた。昨日、九く法ほう塚づか青年が帰ったあとで、媛ひめ巫み女こ就任の件について改めて相談に乗ることになったのだ。

「西さい天てん宮ぐうは栃とち木ぎの日につ光こう山さんにあるお社やしろです。ここの媛巫女は、ある特別な資質を持っていなければなりません。ただ、とても珍しい力なので、もう百年も空位のお役目なのです」

　地下鉄の駅を出て神社に向かう道すがら、隣を歩く祐ゆ理りが教えてくれた。

　エリカとリリアナはいない。媛巫女、それに正せい史し編へん纂さん委員会がからむ問題なので同行させない方がいいだろうと護堂は配慮し、七雄神社に行くことを話さなかったのだ。

「百年も？　じゃあ、あの子は結構すごいんだな」

「はい。ひかりはその力を持つ、百年ぶりの媛巫女見習いでした。九法塚家の方々は前々から妹のことをご存じで、西天宮に是ぜ非ひ来てほしいと打診されてはいたんです。ですが、まだ子供で力も未熟だったため、最近まで具体的なお話はなかったのですが」

　事情を語る祐理は、すこし憂ゆう鬱うつそうな面おも持もちだった。

「そろそろ西天宮媛巫女の任に耐えうる霊力が身についたと認められて、一月ほど前から幹みき彦ひこさんがいらっしゃるように……」

「まあ、才能と実力が認められるってのは悪いことじゃないけどなー」

　小・中学の頃、護堂もかなり本格的に野球をやっていた。

　あのままつづけていれば、東京を出て寮のある強豪高校に進学したかもしれない。だが、それでも選択は一五歳のときだ。ひかりは一二歳で小学生。少々早すぎはしないか。

「幹彦さんもおっしゃっていましたが、妹の歳として親元を離れることは媛巫女の世界では珍しくはありません。私もあの子くらいの歳には二年ほど家を出ていましたし」

「へえ、万里谷も？」

「はい。恵え那なさんや馨かおるさんたちといっしょに、巫女の修行をしていました」

　護堂も知る媛巫女たちの名前を、祐理は口にした。

「ですが、ひかりが西天宮に行くのはそれとは意味がちがいます。九法塚家にとっては百年ぶりに見つけた媛巫女。滅めつ多たなことではお役目を離れ、家に戻ることを認めてはくれないでしょう。もしかすると何十年も日光に留とどめられるかもしれません」

「……そんな一生の選択を、子供にさせるなって話だなー」

　ふたりは七雄神社へとつづく石段の前までやってきた。

　この石段の高さは都内随ずいーいちだという。しかも、かなりの急きゅう勾こう配ばいだ。体力のない祐理のペースに合わせて、護堂はゆっくりと登った。

　玉の汗を額ひたいに浮かべて必死になる媛巫女は、どきりとするほど美しかった。

「大丈夫か、万里谷？　ほら、つかまれ」

「あ、ありがとうございます、護堂さん」

　だいぶ苦しそうだったので、思わず手を差しのべてしまった。祐理もごく自然にその手を取り、きゅっと握りしめ――ふたりは我われに返った。

「い、いやっ。これはべつに、深い意味があってのことじゃなくて！」

「そうですよねっ。も、もちろんわかっています！」

　すぐに離れるべきだろう。ドキドキしながら護堂は手の力を抜いた。

　だが、すくない体力をけなげに振り絞る祐理が妙に心配で、名なごり残惜おしかった。だからだろうか？　そのまま彼女の方から手を放すのを待ってしまった。

「こ、困ります。こんな場所で、このような真ま似ねは……誰かに見られてしまったら……」

　祐理がちょっとうつむき、恥ずかしそうにつぶやいた。

　だが、手は離れなかった。護堂の方はとっくに力を抜いている。彼女が手を引いてしまえば、すぐ離ればなれになるはずなのに。

「あ、あのさ、万里谷が疲れてたみたいだから、すこし手伝いたかっただけで……」

「そ、そうですか。……でしたら、こ、このままでもかまわないと思います。おっしゃる通り、私はすごく疲れてしまいましたので……」

　頭が真っ白になった護堂は、よくわからない発言をしてしまい――。

　もじもじと恥じらいながら、祐理はなぜか現状維い持じを望むようなことを口にして――。

　結局、手をつないだままで石段登りは再開された。

　護堂に引っぱられる形で祐理がつづく。

残りを順調に登り終えると、ふたりはようやく手を放した。

名残惜しく感じる気持ちを強引に無視しながら、護堂は祐理の顔をちらりと見る。彼女は小さく頭を下げてから、真っ赤になってうつむいてしまった。

だが、護堂に寄り添うようにして、すぐ隣をしずしずと歩いてくれる。何かの拍ひよう子しに手がふれても不思議ではない近さだった。

護堂がそんな祐理をひどく可か憐れんに感じていると、明るい声で呼びかけられた。

「お待ちしておりました、お兄さま、お姉ちゃん！」

小さな体に白びやく衣えと緋ひ袴ばかまの巫女装しよう束ぞくをまとった少女が近づいてくる。

もちろん万里谷ひかりだった。護堂は無理やり、動揺する気持ちを抑おさえつけた。

学校帰りの護堂と祐理は制服姿のままだった。

祐理が社しや務む所しよで巫女装束に着替えるのを待って、境けい内だいで話すことにした。

「ここに来るたび思うけど、都心にあるくせにすごく静かだよな」

自分たち以外は人ひと気けのない境内を見回しながら、護堂は言った。

平日の午後遅く。そして観光名所でもない神社。この条件を考えれば、もちろん参拝客でにぎわうはずもない。だが、もうすこし人が多くてもよさそうではないか。

「七雄のお社やしろは、一般の方々にはあまり知られていないんです。大切な霊地ということで、ここの情報が出回らないよう正史編纂委員会の方々が手配しているそうですよ」

祐理が教えてくれた。

着替えている間に落ち着いたのか、すっかりいつも通りの媛巫女ぶりだった。

「だから、ご近所の氏うじ子この方々ぐらいしか参拝にはいらっしゃらないんですよー」

この神社でときどき修行するというひかりも補足してくれる。

尚なお、たまに通りかかる神しん職しよくの人々は護堂を見るなり会え釈しやくして、早足で立ち去っていく。彼らが自分のことをどう聞いているのか、気になるところだ。

「……それはそうと、昨日の相談のつづきだけどな」

疑問は脇わきに置き、護堂はひとまず切り出した。

「日光にある神社の巫女さんを君がやる理由って何なんだ？」

「それは私が『禍まが祓はらい』を使えるからです。西天宮の媛巫女は、この力を使える者が務める慣ならわしだとかで……。そうだ、実際にお見せしましょうっ。お姉ちゃん、何か術を使ってみて」

ひかりが頼むと、祐理は懐ふところから白い正方形の和紙を取り出した。

それを細い指先で折っていく。すぐに見覚えのある姿になった。鶴つるだ。祐理は折り紙の要領で、和紙を白い鶴へと生まれ変わらせていた。

媛巫女の手のひらに乗せられた紙の鶴は、ひらひらと宙に舞い上がった。

「浮いた!?」

驚く護堂が見守るなか、祐理は紙の鶴をつかみ取り、ふたつに引き裂いた。

裂かれた紙片は放り捨てられる。そのまま地面に落ちるかと思いきや、ふたつの紙片はまた舞い上がった。しかも先ほどと同じ鶴の形で。

祐理はどんどん紙の鶴を増やしていく。結局、一二羽になったところで手を止めた。

「どういうことのない、手て妻づまのような術ですが……」

恥ずかしそうに微笑ほほえむ祐理のまわりで、紙の鶴がふわふわと浮いている。その一羽にひかりが手を伸ばし、つかみ取った。その瞬間、一二羽は全て消え失せてしまった。

そして、ひかりの指がつまんでいるのは一枚の白い和紙。

複雑に折られた痕あとは残っているが、鶴の形ではない。元通りの正方形だった。

「これが禍祓いですよ、お兄さま！　ちょっと地味ですけどっ」

「かんたんに言うと呪じゆ術じゆつや魔力の消去です。ひかりは必要ないと思った超自然の力を打ち消すことができるんです」

「まだ修行中なので、直接さわらないとダメなんですが」

姉妹の説明を聞いて、護堂はうなずいた。

地味と言われればたしかに地味だが、かなり便利な能力ではないだろうか。

「もしかして、俺たちカンピオーネとか神様の力も消すことができるのか？　もし可能なら、何かヤバイ事件が起きたときも被害を小さくできるじゃないか！」

護堂は思いつきを口にした。こういう有意義な能力は、世界の平穏を脅おびやかす連中にこそ使われるべきだろう（自分をふくめなくてはいけないのが口くち惜おしいが）。

「え、ええと……それはさすがに無理ですよ～」

「カンピオーネや『まつろわぬ神』の権けん能のうほど強大な呪力になりますと、ほんの一部分だけを消したり、ごくわずかな時間だけ弱めたりするので精一杯のはずです」

虫のよすぎる思いつきだったようだ。姉妹から口々に否定された。

「そうか……残念だな。でも、こんな力が必要な巫女さんって何なんだ？」

「西天宮媛巫女に禍祓いが必要な理由は、私たちにも教えられていないのです」

　困り顔で祐理が語る。護堂は眉まゆをひそめた。

「候補者とその家族に選考理由を教えないなんて、ずいぶん無茶な話だな」

「仕方ありません。西天宮は日光東とう照しよう宮ぐうの一部を成し、神しん君くんをお守りする重要な霊地。ここに関する情報は九法塚家の秘中の秘。媛巫女といえども、私たち万里谷家程度の家格では明かしてもらうことはかなわないでしょう」

　神君といえば、やはり徳とく川がわ家いえ康やすか？　日光東照宮のことを護堂は思い出してみた。

　徳川家康の死後、彼の亡なき骸がらを納める霊れい廟びようとして造られた神社。祭さい神じんはもちろん神となった神君・家康公。神様としての名前は東とう照しよう大だい権ごん現げんだったか。

「そんなうさんくさいヤツらのところに行くのは勧すすめづらいなァ。……正直言って、あまり信用できない気がする」

「あ、でもお兄さま、幹みき彦ひこさんはいい人なんですよっ」

　護堂の意見に、ひかりが困ったような顔で言った。

「恵那姉さまいわく、四家の跡継ぎのなかでいちばん真っ当な方だそうですから！」

　清秋院恵那も己が真っ当でないと自覚していたのか。護堂はしみじみと感心した。

「その真っ当な人が、何で問題だらけの勧誘行為をするんだ？」

「西天宮は三〇〇年ほど前に建てられ、九法塚はそれをずっと守護してきたお家です。そういう古い呪術のお家柄には、いろいろと理り不ふ尽じんなしきたりがあったりしますから。おそらく幹彦さん

も、そういうものに縛しばられて自由にできないのでしょう」

　と、祐理が付け足してくれた。

「つまり横よこ溝みぞ正せい史しとかが書きそうな、ややこしい事情を抱えた旧きゅう家かみたいな？」

「ど、どうでしょう、それは。あら――？」

　護堂の大おお雑ざつ把ぱな要約に言葉を詰まらせながら、祐理はきょろきょろと周囲を見回した。

「どうかしたのか、万里谷？」

「あ、いえ。なぜか誰かに見られているような気がしたもので」

　気のせいかもしれませんがという控えめな付け足しに、護堂はうなずかなかった。たぐいまれな霊視力を持つ媛巫女が『気がした』と言ったのだ。楽観視すべきではない。

「お姉ちゃん、さっきの鳥を飛ばして調べてみたら？」

「……そうね。念のため、そうしてみましょうか」

　妹に勧められて、祐理はさっきの方法で十数羽の折り鶴を手早く造り出した。鶴たちが神社の境内へ飛び立つ。同じ方向へ向かう鶴は一羽もいない。

　折り鶴のひとつが不意に『パンッ』と破裂した。いっしょに素すっ頓とん狂きような声も聞こえた。

「うわっ!?」

　折り鶴が破裂し、声がしたのは境内の隅すみに生える松の木の辺りだった。

　すこし考え込んでから、護堂はひかりに声をかけた。

「……なあ。さっきのヤツ、あの木のところでもう一度やってくれよ」

「あ、はい。承知いたしました、お兄さま」

　ひかりは指定された木に近づき、ぺたりと触った。

　すると、松の皮に人間のシルエットじみた形が浮かび上がった。すぐにシルエットは銀髪をポニーテールにまとめた東欧系美少女の姿に変わった。

「……こんなところで何をやってるんだよ、リリアナ」

　護堂の醒さめた声に、リリアナ・クラニチャールは顔を引きつらせた。

「ご、護衛です。あなたの身に万一のことがあってはいけないと思いまして」

　予想通りの返答だった。

　この女騎士はしばしば草薙護堂の護衛をすると言って、後ろにくっついてくるのだ。

「あまり仰ぎよう々ぎようしいことはしないでくれって、言ってるじゃないか」

「仰々しくはありません。主君を守るためには必要な配慮、騎士として当然の行為です」

　照れ隠しのためか、リリアナは真面目くさった顔で言った。

2

　リリアナ・クラニチャールは幻げん惑わくの術にも長たけているらしい。それを使って、自分の姿を木と同化させていたという。保護色のようなものか。

「禍まが祓はらいと言いましたか。わたしの《隠れ身》を破るとは、なかなかの手前。妖よう精せいたちの力を借りた幸運の加護でも似たようなことをできますが、あれを溜ため込むには長い年月が必要です。総合的に見て、最も優秀な魔術無効化の手段でしょう」

　種明かしをしたあとで、リリアナはこんなことを語った。

　気まずさをごまかすための解説らしいので、護ご堂どうは一応聞き終えてから言った。

「ふうん、たいしたものなんだな。それはそうとリリアナさ」

「は、はい」

「いくら何でも、尾び行こうはやり過ぎだと思うぞ。勘かん弁べんしてくれ」

　そろそろ銀髪の女騎士とのつきあい方を覚えてきた護堂であった。

　彼女は気が利きかないのではない。気が利きすぎて、いろいろ余計なことまで世話してくれるだけなのだ。きちんとコミュニケーションを取って、過か剰じような気き遣づかいは省はぶいてもらおう。

　ところが、リリアナは憂うれい顔でこう答えた。

「ですが、あなたは今日もわたしに隠れて女と会っていらっしゃるではありませんか！」

「女じゃなくて女の子だよ！　お姉さんの万ま里り谷やだっていっしょだし！」

「草くさ薙なぎ護堂、あなたのご主張にはたしかに一いち分ぶの理はあります。しかし、わたしは知っているのです。日本では平へい安あんの昔より幼女趣味も色好みの嗜たしなみ。かの光ひかる源げん氏じも年とし端はのいかない少女をたぶらかし、妻としていたはずです」

　ルクレチア・ゾラもそうだったが、彼女たちは紫むらさき式しき部ぶにケンカを売るつもりだろうか。

　心の隅で疑う護堂に、リリアナはさらに言った。

「この万里谷家の妹があなたの幼おさな妻づまとなる可能性、決して低くはないでしょう。男性は己おのれよりも著いちじるしく若い女性を好むという統計もありますし」

「そうだったの、お姉ちゃん!?　お兄さまは私もいっしょにお妾めかけさんにしてくださるの!?」

「そ、そんなことはありませんし、お妾さんなんて言葉をつかってはいけません！」

　素直に驚くひかりと、たしなめる祐理の声を聞きながら、護堂は決意した。

　この誤解を放置すべきではない。腰を据すえて話し合わなければ。

「幼妻なんて言葉をつかわないでくれ。いい機会だから、はっきりさせておこう」

「はい、承うけたまわりましょう」

「俺を誤解しないでくれよ、リリアナ。俺は君が思っているみたいに女たらしじゃないし、女好きでもない。どちらかというと真ま面じ目めだし、女の子の扱いにも慣れてる方じゃないと思うぞ。それをわかってほしいんだよ」

　真しん摯しな思いを込めて、訴える。リリアナは深くうなずいてくれた。

「わかっています、草薙護堂。わたしはあなたという人間を理解しているつもりです」

「……そのわりに、トンチンカンな行動が多いような」

「全てはあなたを理解するがゆえに、です。たとえば、あなたは派手な女性関係とは裏腹に、地味で堅実な生活を好まれますね？　享きよう楽らく的てきな一いつ夫ぷ多た妻さい主義者のごとき行動を取りながら、精神的にはあくまで一いつ夫ぷ一いつ妻さい主義を貫つらぬかれたいと考えている……」

「あ、ああ……。派手な女性関係とか享楽的とかは余計な描写だけど」

「そうでしょうか？　この間、実は調べてみたのです」

　リリアナは何を調べたのだろう？　護堂は首をかしげた。

「最近、わたしはずっと不思議に思っておりました。間近で接するあなたのご気性や嗜し好こうが、エリカや万里谷祐理を侍はべらせてハレムを運営する実態とあまりに噛かみ合わない。どうしてなのだろうと……。謎なぞを解くため、わたしはここ数年のあなたの女性関係を調査しました」

　そんなことをしていたのか。だが、年齢＝イコール彼女いない歴である草薙護堂の女性関係など洗っても、意味のある情報など出ないはず。

　ますます不思議に思う護堂へ、銀髪の騎士は問いかけてくる。

「あなたが中学三年生のとき親しかった同級生、今こん野のえみりを覚えておいでですか？」

「今野……いたな、そんなヤツ。すごく忘れっぽい女子だったよ。よく教科書忘れたから見せてくれって、隣の俺の席にわざわざ机くっつけたりして。何だか知らないけど俺に妙になついていたな。用もないのに話しかけてきたり、同じ班になろうとしたり」

「それでは今野えみりの親友、内うち田だ今きよう日子こは？」

「あのおとなしいヤツだろ。よく今野にくっついて歩いてた。すごく無口で、そういえば『友達になってくれませんか』とか手紙くれたな。それであいつとも友達づきあいしたけど」

「徳とく永なが明あ日す香かのことも確認しなければいけません。こちらは？」

「あいつは同じ商店街に住んでる古なじみだよ。リリアナも何度かすれちがったことがあるんじゃないか？　やたらと気が強くて文句ばかり言うくせに、変に親切なときがあって気持ち悪いんだ。急に手作り弁当寄こして『余ったからあげるわ！』とか言い出して」

　その後もリリアナは女子の名前を挙げつづけた。

　遠えん藤どうマヤ、楢なら崎さきさやか、中なか澤ざわ香か織おり、その他大勢。記憶から微妙にうすれつつある名前が羅ら列れつされ、護堂はそのたび苦労して昔の思い出を引っぱり出した。

「そういえば、あなたが幼い頃に婚約を約束したというはとこもいましたね。……つまり、そういうことなのですよ、草薙護堂」

「え？　みんな昔の友達じゃないか。『そういうこと』って何だよ？」

　言い返してから護堂は気づいた。万里谷姉妹の視線がおかしい。

「ま、まさか護堂さんが、そんなにたくさんの方々と関係をお持ちだったなんて……」

「さすがです、お兄さま。おうかがいしていた通りのモテっぷり。男前です！」

　祐理は『え、この人にそんな過去が!?』と驚く、苦悩にまみれた目つきだった。ひかりの方は素直な憧しよう憬けいのまなざしだった。



「これだけの少女たちを苦悩させながら、その事実にも気づかない……。あなたが生まれながらに身につけた女殺しドンファアンの素養に、このリリアナ・クラニチャール、心の底から脱帽いたします。草薙護堂、あなたは夢遊病のように人を殺あやめる連続殺人鬼シリアルキラーに比すべき、稀き代たいの自覚なき女殺しなのです！」

　ビシッと凛り々りしく決めつけられた。バカな。草薙護堂はそこまでモテる男ではない。

　だが、隣にいる祐理はコクコク何度もうなずいていた。ひかりは「うわー、あだるとなお話ですねェ」と目を輝かせていた。納得しているようだ。なぜだ!?

「失礼ながら今日尾行させていただいたのは、年とし端はもいかない少女があなたの毒どく牙が——失敬、魅力に搦からめ捕られてしまうのではと危き惧ぐしたからです」

「待てリリアナ。俺にひかりをどうこうするつもりは、ひとかけらもないぞ！」

「ええ、そうでしょう。あなたは正義感の強い、高こう潔けつな方だ。いとけない幼女に劣れつ情じようを抱くような卑ひ劣れつ漢かんではない。年端もいかない童どう女じよと恋を語らうほどの粋すい人じんでもないはず。しかし、この娘をご覧ください」

　痛ましげな手振りでリリアナが万里谷家の妹を指し示す。当のひかりは「？」とばかりに首をかしげ、きょとんとしていた。

「万里谷ひかりはすっかりあなたを慕したっている様子。危険な状態だと思いませんか？」

「え？　単に歳とし上うえの人間になついてるだけだろ？」

「一般的にはそうでしょう。しかし、あなたは自覚なき女殺しでいらっしゃる。……わたしはこの先の展開を考えてみました」

　護堂はリリアナの趣味を思い出した。銀の妖よう精せいじみた東とう欧おう系美少女は、えらく大胆な恋愛小説をしたためる素しろ人うと作家でもあるのだ。いやな予感がした。

「そうですね……。まず幼い憧憬がきっかけとなって、万里谷ひかりはあなたに淡い恋心を抱くでしょう。やがて無む垢くな純情をあなたへ捧ささげるようになります。幼いがゆえに恐れを知らない愛は次第にエスカレートし、身も心もあなたの所有物になりたいと願うはず。最初は年齢差を理由に拒こばんでいたあなたも、やがて汚れなき想おもいにほだされ、この小さく可か憐れんな花を手た折おり、我がものにしようと決意し——！」

「そっか……。私もいずれお兄さまのおそばに侍はべるようになるんだ……」

「ちち、ちがいますっ。そんなことは、姉として絶対に許しません！」

　問題発言で万里谷姉妹が混乱している。護堂は彼女たちから距離を取り、青き騎士と一対一で向き合うことにした。声をひそめて話しだす。

「あのなァリリアナ、考えすぎ……っていうか妄もう想そうしすぎだ。ひかりはうちの静しず花かよりも歳下なんだぞ。そんな子を相手に、俺が妙なこと考えるわけないだろう？」

「問題は女の方から寄ってくることなのです。過去の例でも多数確認されたように」

　昔のことをあれこれ言われても、何がまずかったのか理解できない。護堂が困惑していると、リリアナはフッとやさしげに微笑ほほえんでくれた。

「ですが、やはりあなたには少女たちをもてあそぶつもりはないのですね、一応は……。わかりました。ならば賭かけをしましょう。万里谷ひかりが草薙護堂の虜とりことなるか否いなかで」

　は？　騎士の提案がどういう意味か理解できず、護堂は口ごもった。

「万里谷家の次女が草薙護堂に恋をしなかったなら、あなたの勝ちです。わたしはあなたが己の魅力をコントロールできる男性だと認めましょう。この問題について、二度と口出ししないと誓います。ですが、彼女があなたのおそばに侍ることを望んだときは——」

　リリアナは決意を込めて、凛りん然ぜんと言い放った。

「そのときはわたしに、あなたの閨けい房ぼうを取り仕切る権利をお授さずけいただきたい」

　閨房？　たしか寝室という意味だったか。

「最近、ずっと悩んでいました。エリカや万里谷祐理が愛人として競い合うなか、リリアナ・クラニチャールは騎士として控えるだけでよいのかと。そこで見出みいだした答えがこれです。草薙護堂、わたしはあなたの剣となるだけでなく、私生活における補佐まで行うつもりです。賭けに勝った暁あかつきには無む二にの股こ肱こう、腹ふく心しんの友、執しつ事じであり副官であり侍じ女じよでもある者として、わたしのことをお考えください。あなたの全てをお助けいたします」

　護堂は考え込んだ。この賭け、もしかして楽勝なのでは？

　離れたところにいるひかりを見る。賭けのネタである少女に、草薙護堂に一ひと目め惚ぼれしたとか、実は前々から恋していたとかいう兆ちよう候こうはなさそうだ。となれば、この娘が自分に惚れてしまうなどありえない。問題ない。

　向こうで困惑している祐理だって、そんな事態にはならないと断言するだろう。リリアナは妙な妄想で墓穴を掘ったようだ。悪いが、これに乗らない手はない。

「……その賭け、乗った。期間は一カ月でどうだろう？」

「承知いたしました。では草薙護堂、この件が片づいたところで進言があります」

　提案に乗った護堂へ、リリアナは恭うやうやしい口調で訴えた。

「西天宮とやらの問題についてですが、いっそ万里谷姉妹よりも事情に通じた者とお話をされてはどうでしょう？　『王』であるあなたがご下か問もんすれば、向こうも断れないはずです」

　そういえば、彼らのことを忘れていた。このアドバイスに護堂はハッとした。

アポイントメントを取ったあと、護ご堂どうはリリアナと共に千ち代よ田だ区く三さん番ばん町ちようにある沙さ耶やの宮みや家別邸へやってきた。職務中および修行中の媛ひめ巫み女こふたりは七なな雄お神じん社じやで留守番である。

書しよ斎さいに通されると、目当ての人物はすでに待ちかまえていた。

正せい史し編へん纂さん委員会の東京分室室長、すなわち沙耶宮馨かおるである。グレーのシャツにネクタイ、男物のスラックス。男装の媛巫女は、あいかわらずの美しさだった。

ちなみに、部下の甘あま粕かす冬とう馬まもヨレヨレの背広姿で書しよ斎さいの隅に控えていた。

「ぼくたち四家の事情はご存じですね？　日本の呪じゆ術じゆつを取り仕切る沙耶宮、清せい秋しゆう院いん、連れん城じよう、九く法ほう塚づか。各家にはそれぞれ担当分野があり、九法塚のお役目は日につ光こう東とう照しよう宮ぐう内ないにある西さい天てん宮ぐうの守護。この宮はもともと、江え戸ど時代の初期に『神しん君くん』をお祀まつりするため造られたのです」

沙耶宮馨が明めい晰せきな語り口で語り出した。

護堂がすわるソファの後ろで、リリアナが神君の名に「ほう」と反応する。エリカよりも日本文化に詳しいようだ。

「西天宮には強力な結界と封ふう印いんの呪じゆ術じゆつで守られた神君の祠ほこらがありましてね。九法塚家の教きよう導どうのもと、禍まが祓はらいを使える媛巫女が封印を弱めます。そうすることで、あの家は神君の武ぶ威いをお預かり——といいますか、利用できるようになるんです」

ここで馨はくすりと笑った。ちょっと意地の悪い、しかし魅み惑わく的な笑顔だった。

「つまり、媛巫女がいないと九法塚はお役目を果たせない家なんですよ。ま、それだけがあそこの担当ではありませんが、肩身が狭いのはたしかです。幹みき彦ひこさんは来年、家か督とくを継ぐことが決まりましたからね。ここらで媛巫女を復活させて、点数を稼か

せぎたいんでしょう」

　説明を聞き終えて、護堂は気になった点を訊たずねた。

「ところで、やっぱり神君って神様なんですか？」

「神様です。……あれってたしか、結構めんどくさい神様だろう？」

　あっさりうなずいた馨は、隅で待機する腹心に話を振った。

「はい。まつろわぬ《鋼はがね》を護国の剣に変える畢ひつ生せいの大呪術で、われわれの先せん達だつが日光に押し込めた超大物ですよ。詳しくご説明しましょうか？」

「あー……結構です。神様がらみのうんちくは聞かないようにしてますから」

　甘粕の言葉に、護堂は首を横に振った。

　それにしても《鋼》ときたか。この呼こ称しようを聞くたび、変に落ち着かない気分になる。

「丁てい寧ねいなご説明、ありがとうございます。いきなり押しかけて、すいませんでした」

　馨も甘粕も自分より年長なので、護堂は自然と敬語をつかっていた。

「いえいえ。この程度のご要望でしたら、いくらでも対応させていただきます。何しろあなたは、世に隠れなき魔王であらせられる」

　苦笑しながら馨が言う。九法塚青年と似たような言葉遣づかいだが、堅苦しさがない。

　ちょっとした仕草がとにかく絵になる。ただの軽口も洒しゃ脱だつなジョークに変えてしまう。不思議な魅力を持つ、性別不詳の人物だった。

「まあ、百年近く空位だったお役目です。神君が真実どのような存在か、直じかに確認した者はもうおりません。だから、判断材料がすくないんですよ」

　いたずらっぽく笑いながら、馨が言う。

「ひかりはあれで姉に似て真ま面じ目めな性格です。『自分にしかできないお役目なら、がんばってみようか……でも怖い』なんて、迷ってるんでしょう。正直、ぼくならリスクが高すぎて御ご免めんこうむりますけどね。我が身大事です」

「封じられたとはいえ、『まつろわぬ神』に仕つかえる巫女ですからねー」

　主の軽口に、甘粕がのんきそうに付け足す。

　護堂はうなずいた。そう説明されると、この件の問題点がわかりやすくなる。九法塚家は『神君の媛巫女』とやらがどれだけ大変で危険か、そして、どれだけ必要な役職なのかを具体的に説明しないまま勧誘している。

　これではひかりも決断しづらいだろうし、自分もアドバイスしにくい。

「……見学とか、どうですかね？」

　護堂は思いつきを口に出してみた。甲こう子し園えんを目指す中三の野球少年だって、志望校の野球部を見学する。ひかりも同じことをすればいいと、単純に考えたのだ。

　これを聞くなり、沙耶宮馨は声をあげて笑いだした。

「時の媛巫女以外立ち入るべからずとされる西天宮の秘ひ奥おうを、見学ですか？　それは罰ばち当あたりでいいな。幹彦さん真面目だから、絶対怒るし嫌がります。すばらしいアイデアです！」

　常識はずれの提案だったかと、護堂はすこし恥ずかしくなった。

　たしかに見学が可能なら、万里谷姉妹もとっくにそうしているだろう。

「やっぱりダメですか？」

「普通なら絶対に認められません。しかし、これは他ならぬ『王』の勅ちよく命めい」

　心底楽しそうに、馨は携帯電話を取り出した。

　アドレス帳から番号を呼び出し、ダイヤルする。しばらくして話しだす。

「あ、幹彦さん？　馨です。実は折り入って相談があります。ええ、媛巫女の件です。あれから、ひかりの保護者さまから提案がありまして……はい。もちろん、あの方です」

　顔はニヤニヤ笑っているくせに、声は深刻そのものだ。

　凶きよう悪あく無む惨ざんな大魔王が、愛人の妹のために聖域を開放しろと要求している。これに応じろと言うのは自分も心苦しいが、国家安あん泰たいのために耐たえ難がたきを耐えてくれないか——。

「沙耶宮さんって、こういう人だったんですか」

「ええ、こういう人です。いたずら好きで嘘うそつき、おまけに女たらしって三冠王ですよ」

　あることないこと言い立て、時に脅おどし、時に泣き落としにかかる。

　そんな男装の美少女を眺めながら、護堂と甘粕はボソッとささやき合った。

「うん、さすがにすぐは折れなかったですね。でも今の感じだと、三日もあれば何とかなるでしょう。この件は沙耶宮馨におまかせください、草薙さん！」

「……お気き遣づかい、感謝します」

　すっかりノリノリな正せい史し編へん纂さん委員会の幹部に、護堂は短く礼を言った。

　どう見ても遊ぶ気満々だが、頼もしい味方にはちがいない。とりあえず吉きつ報ぽうを待とう。護堂はソファから立ち上がった。リリアナもそれに倣ならう。

　退出する間ま際ぎわ、不意に甘粕が口を開いた。

「ああ、そうだ。草薙さん、よかったらエリカさんに伝言をお願いできますか？」

　伝言？　意外な申し出に護堂は驚いた。

「二日前、香ホン港コン陸りく家けの御おん曹ぞう司しを成なり田たで目撃したという情報がありまして。私、この御ご仁じんとはまだ面識がないんですよ。可能であれば紹介してほしいとお伝えください」

「陸家の御曹司——陸りく鷹よう化かか！」

　護堂が答えるよりも先に、リリアナが興奮気味に言った。

「ええ。羅ら濠ごう教主が聖せい教きようの配下から唯ただひとり直じき弟で子しに選んだっていう、あの人です。エリカさんは以前、香港でお知り合いになったそうですね。もしかしてリリアナさんも？」

「……いいや。だが、うわさは何度も聞いている」

　今の話で、護堂も気になるところがあった。誰の弟子だって？

「その何とか教主って、中国にいる俺のお仲間でしたっけ？」

「ああ、覚えておいででしたか。《五ご嶽がく聖教》を統すべる羅濠教主は、中国本土に住むカンピオーネですよ。人前に滅多に出てこないせいで、どんな人物か判然としないのですが」

　甘粕がどこか楽しそうに知識を披ひ瀝れきする。

「方術と武術の奥おう義ぎを極めたうえに神殺しの権能まで持つ、超ちよう弩ど級きゆうの怪物です。あのヴォバン侯こう爵しやくとは犬けん猿えんの仲だそうで……。そして、この魔王様が手ずから武芸を授けたのが、さっき言った陸家の御曹司です」

「わたしやエリカの世代では随ずい一いちの実力者だと、よくうわさを耳にします」

　リリアナまでが言い添えてくる。

「実は日本じゃ、エリカさんやリリアナさんよりも有名人です。

ヨーロッパよりも中国の方が近いですからね。軽けい功こう卓たく越えつ・掌しよう力りき絶ぜつ大だいなんて言われる腕前だとか」

　身が軽くて掌を使う武芸の名人って意味ですと、甘粕が付け足す。

　護堂はため息をついた。トラブルは御免なのに、イヤな話を聞いてしまった。

「まあ、成田以降の足取りはまったくつかめていないんですけどね。長く日本にいるようなら、一度くらいはご挨あい拶さつしておこうかと思いまして」

「わかりました、エリカに伝えておきます。それと疑問なんですが」

「何でしょう？　遠慮なくお訊ききください」

　甘粕がにこにこと笑っている。喰くえない人だと護堂は改めて思った。

「わざわざ俺を通さなくても、直接エリカと話した方が手っ取り早いと思うんですが。おたがい知らない仲じゃないんだし」

「いえいえ。私とあのお嬢さんは、あなたや祐理さんを介してつきあう程度でちょうどいいと思いますよ。ま、必要が出てくれば連絡も取りますが、必要のないときまで親しくすべきでもないでしょう。……ではお手数だとは思いますが、よろしくお願いします」

　実は忍者の末まつ裔えいだという青年は、ぺこりと頭を下げた。

4

　東京都港みなと区く、六ろつ本ぽん木ぎ。

　テレビ局の本社や高層ビルが立ち並ぶ六本木ヒルズ。

　五四階建て、高さ二四〇メートルの森もりタワーを頂点とする界

かい隈わいである。だから二一階建ての高級ホテルでは、屋上といえども抜きん出て高いわけではない。

　そこに少年と少女のふたり組が待たい機きしていた。

　恐怖とは無縁の不機嫌そうな顔で、少年は屋上の縁ふちに立つ。

　すでに夜の一〇時過ぎ。退屈しきった目で夜景を見渡している。年齢は一四歳前後。整った顔立ちで、黒い上着と同色のスリムジーンズが細身の体を際きわ立だたせていた。

　やや離れた場所に、同い歳くらいの少女がうずくまっている。

　東洋人の少年と異なり、こちらは白人であった。亜あ麻ま色いろの髪に、天使にも似た美び貌ぼう。しかし、その双そう眼がんは異様に大きく、殺気と邪じや念ねんに満ちていた。凶きよう相そうである。

　ロサンゼルスのオカルト事情に通じた人間なら気づいたかもしれない。

　彼女の名はアーシェラ。二週間前まで《蠅はえの王》の総そう帥すいであった、稀き代たいの魔女だ。

「……もうすぐ出てくるぞ。準備をしろ、小僧」

　アーシェラがつぶやいた。彼女は探たん索さくの魔術で『標的』の気配を探っていたのだ。

「やっとか。待ちくたびれたよ、姐ねえさん」

　少年がくくっと微笑ほほえむ。可愛かわいげのない、ふてぶてしい表情だった。緊張感のなさにアーシェラは眉まゆをひそめ、重ねて指示を出した。

「仕損じることは許さん。心してかかれ」

「わかってるよ。で、こっちも言わせてもらうけど……僕がヤツを捕まえたあと、しくじるなよ。あんたのヘマのせいで師し父ふに折せつ檻かんされたら、三倍にして返す」

「何だと？」

　アーシェラの邪じや眼がんが禍まが々まがしく濁にごった。この一いち瞥べつで人を呪のろい殺しさえする魔女に、少年は冷たい目で応じる。必要があれば躊ちゆう躇ちよせず相手を破壊する。その意志がかいま見える。

「陸りく鷹よう化かといったか。小僧の分際でよく回る舌を持つようだな」

「舌よりもこっちの方が器用だよ。僕は女相手でも手加減しない……いや、女相手だと余計に気合いが入る性分なんだ。試してみるか？」

　少年——陸鷹化は、手のひらをゆっくりと開いた。細く長い、器用そうな五指。広い掌しよう。そこだけゴツゴツと硬くなった掌しよう底てい。

　ふたりはにらみ合う。だが、それもすぐに終わった。

「やつが出てきた。妾わらわはあとから追う。先に行き、仕込みを済ませろ」

「承知」

　標的の気配を読み取ったアーシェラが指示するや、陸鷹化は掌を閉じる。

　いさかいと任務はべつ。両者共に一瞬で切り替えた。

「本当だ。便利な目を持っているな、姐さん」

　陸鷹化は屋上の縁から地上を見下ろし、言った。

　ホテルのエントランスでは、標的の青年が出てくるところだった。

　仕立てのいい背広を着た、なかなかの美男子。臍せい下か丹たん田でんで練ねり上げた気を送り込んだ鷹化の目は、二一階の屋上からでも標的の顔を視認できる。

　そして、青年の動向を探っていたのはアーシェラの目。

　彼女は視力と聴覚を遠方に出張させる魔術で、ホテルの内部を監

視していたのだ。

　そのまま待つこと数分。

　ホテルの駐車場から、標的の高級車が出るのを確認。

「じゃあ、お先に。あとからゆっくり追いかけてきてよ」

　陸鷹化は相棒に声をかけてから、跳んだ。助走もなしにジャンプし、六本木の夜空へと飛び込んでいく。彼の体は放物線を描きながら地上へ落下していく。

　その跳ちよう躍やく、さながら流星のごとく。その飛ひ翔しよう、さながら魔鳥のごとく。

　ホテルの屋上から飛んだ彼は、グライダーでも使ったかのように滑空し、より低いビルの屋上に着地し、また飛んだ。今度は通り沿いに立つ街灯の上に。

　さらに飛ぶ。次は電柱の天辺に。

　また飛ぶ。今度はビルの四階あたりの壁に。それを蹴けって、またも飛翔。

　人間離れした身軽さと跳躍力で、高所から高所へと飛び移っていく。彼の視線の先では車道を往ゆく標的――九く法ほう塚づか幹みき彦ひこの高級車が走っていた。

　時速数十キロの自動車を、異常なスピードの飛翔で易やす々やすと追跡する。途中、標的が首都高に乗ったときは併へい走そうする車の上に飛び移り、体力を温存した。

　数十分後、世せ田たが谷やの一般道に降りた標的は、静かな道を走るようになった。周囲には車も人影もない。ここで陸鷹化は新たなアクションを起こした。

　九法塚幹彦の運転する高級車の屋根に、ついに飛び移ったのである。

　ただし、天から羽毛が舞い降りるように。ハンドルを握る九法塚家の若君は、何の異常も感じ取ってはいない。着地に伴ともなうはずの衝撃も物音もなく、陸鷹化は車の上に降り立った。

　しゃがみ込み、ポンと手のひらで屋根を叩く。

　それだけで車の窓は全て砕け散った。フロント、左右、後ろ側。屋根にはへこみすら残さない軽い一打で、窓だけ粉ふん砕さい。陸鷹化の掌打が起こした奇跡であった。

　予想外のアクシデントにブレーキが踏まれる。

　車を停とめた九法塚幹彦が、車外へ出てキョロキョロと周囲を見回す。

「はじめまして。あんたの名前は知っているよ、若旦那。僕の方も一応名乗っておこう」

　ジャンプした陸鷹化は標的の頭を飛び越え、アスファルトの路面に降り立った。

　その際にも一切の音を立てず、毛ほどの空気も乱さない。

「陸鷹化だ。ただし、覚える必要はない。あんたはすぐに忘れるはずだから」

「……その名前と、掌力絶大のうわさは聞いたことがある」

　九法塚青年はつぶやきながら車内に手を伸ばし、木刀を取り出した。

　へえ。陸鷹化は笑う。心得があるとは予想外——という顔。そこに九法塚幹彦はいきなり木刀で突きを放った。狙ねらいは喉のど笛ぶえ。手加減は一切ない。

　無駄な問答で先制の機を逃さない。

　意外にも荒事に慣れていた標的の抵抗に、陸鷹化は尚なおも笑う。

　笑いながら、喉笛に迫る木刀を手刀で斬きりつける。木刀の先端から四分の一ほどを、それで斬り飛ばす。木刀から木の棒に変わった得え物ものを見て、九法塚青年は絶句した。

「遅いね。遅すぎる。鈍にぶいし緩ゆるい。凡ぼん愚ぐに過ぎる。掌を振るう価値もない」

　陸鷹化はゆるゆると歩み寄っていった。その鈍のろさ、牛の歩みのごとし。

　だが、九法塚青年はあっさりと接近を許してしまう。

　しなやかな陸りく家御おん曹ぞう司しの指先が敵手の額ひたいに伸び、パチンと打った。

　中指による打ちよう擲ちやく、いわゆるデコピン。だが九法塚家の若君は倒れ、意識を失った。

　昏こん倒とうした標的を陸鷹化が見下ろしていると、空から少女が降ってきた。

　凶相の美少女、アーシェラであった。鷹化のように跳躍を繰り返すのではなく、魔女の《飛翔術》によって本当に空を飛んできたのである。

「用意は済んでいるな。では、この者の脳と心をしばらく妾わらわのものにしてくれよう」

　と、魔女は倒れている九法塚幹彦に近づいていく。

「そういう頭をかき回す術って、相当難しいんだろ？　本当に大丈夫か？」

「ふん。妾の魔力があれば造作もないこと。あまり舐なめた口を利きかぬことだな」

　アーシェラにじろりとにらまれて、陸鷹化は肩をすくめた。

「ま、その辺りは専門外だから、姐さんに任せるよ。ちゃちゃっと済ませて次に行こう」

「ああ。こやつの一族が守る《鋼はがね》こそ、貴様の師が宿敵と見なす『まつろわぬ神』」

　アーシェラの邪じや眼がんが、昏倒する青年を舐めるように検分していく。

「稀代の英雄を祀まつり、封じる『厩うまや』の鍵かぎ、こやつを使って我らの物としてくれよう。陸鷹化よ、教主に吉報を待てと伝

えておけ！」

5

　沙さ耶やの宮みや家別邸を訪ねた翌日。

　昼休みの城じよう楠なん学がく院いん高等部、その屋上にはいつもの面子メンツが集まっていた。

　護ご堂どう、エリカ、祐ゆ理り、リリアナの四名である。怪しげな秘密結社、謎なぞめいた神じん社じやにかかわったりと学外でもやることの多いメンバーなので、放課後は割とバラバラに行動している。一声かけて先に帰ったりも珍しくない。

　だが、昼食時は毎日ここに集まって共に過ごす（雨天時は食堂になるが）。

　申し合わせたわけでもないのに、いつのまにか日課となっていた。

　ちなみに中等部に通う護堂の妹、静しず花かも居合わせることが多かった。ただし、さすがに毎日ではない。同じ敷地内といっても校舎がちがうので、購買でパンの購入に手間取ったりしたときなどは、億おつ劫くうになるようなのだ。

　この日も静花は不在だった。こういうときは普段できない話ができる。

「——え？　あの女嫌い、日本に来ているの？」

　陸りく某なにがしについての伝言を護堂から聞かされて、エリカは目を丸くした。

「女嫌いだって？」

「ええ。見た目は女の子にモテそうなのに、妙に偏へん屈くつだし鬱うつ屈くつしてるのよ。綺き麗れいで腕の立つ女性には、やたらと敵意を剥むき出しにするの。わたしも目の仇かたきにされたわ」

　己おのれを強くて美しいと言い切る辺りが、エリカのエリカたる由ゆ縁えんかもしれない。

「昔、あの子と結構話し込む機会があったんだけど、身近にとんでもなく暴力的な女性がいるみたいね。その反動で変になったのかもしれないわ。あと幼少期のトラウマとか」

「……要するに、変なヤツなんだな」

　護堂の決めつけに、こくりとエリカがうなずく。

「極めつけの変人で、悪魔のような天才よ。あの子、武術の才能ではサルバトーレ卿きよう以上ですもの。いずれモーツァルトかダ・ヴィンチに匹ひつ敵てきする名声を遺のこすかもしれないわね」

「あのアホよりも上って……ウソだろ？」

　思わず確認してしまった。サルバトーレ・ドニの異常な剣技の冴さえは、前に実体験させられている。にわかには信じがたい話だった。

「総合的な資質でいえば、まちがいなくね。いつか言ったでしょう？　卿は剣術こそ神技だけど、カンピオーネとなる前は体に呪じゆ力りよくを溜ため込めない特異体質だったの。わたしたちの言う呪力を、中国の遣つかい手てたちは『気』と呼ぶわ。これがどういうことか、わかる？」

「……もしかして、気き功こうが全然ダメって意味か？」

　エリカに問われて、護堂は『武術＝カンフー＝気＝気功？』と連想した。

　尚、呪力とは魔術や権けん能のうの源みなもとである。カンピオーネは通常の魔術師と比べて、数百倍の呪力を体内に秘めると前に聞かされた。

「正解。一般的には気功だけど、中国武術では内ない功こうとも言うわね。内功にすぐれた者ほど、強い呪力を身につけられる。それは魔術や方術だけでなく、武芸の奥おう義ぎにも利用されるのよ」

　ＲＰＧの戦士がＭＰマジックポイントを消費して必殺技を使うようなものか？　静花がやっていたゲームを思い出して、護堂は適当

な想像をした。

「だから、拳法や剣術といっしょに内功を身につけなければ、深しん遠えんな武術の奥義は会え得とくできないわ。わたしたちの騎士剣術もそう。剣技と呪力は共に鍛きたえていくもの。その片方だけを磨き抜いたサルバトーレ卿は、いわば異い端たんの天才」

　異端の天才、正道を外れた邪じや剣けんの遣い手。

　納得した。あの男を形容するのにぴったりの言葉ではないか。

「わたしもできることなら、あの子との正面衝突は避けたいわ。突破力と機動力では太た刀ち打うちできないもの。……まあ、そんな状況にならないよう立ち回る自信もあるけど」

　やや憮ぶ然ぜんとした表情でエリカが言う。無理もない。『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』は策さくも弄ろうするし、戦術にも長たけている。その気になれば搦からめ手てを駆く使しし、知能犯的に立ち回って勝利することもできるだろう。だが、彼女の本質は正面突破を好む騎士だ。

　真っ向勝負こそ戦場の花。そんな美学の持ち主が正面衝突の危険を語る。つまり、必勝を期すならプライドを捨てねばならないと自みずから認めているのだ。

「さ、それよりも早くお昼をいただきましょう。——あら。祐理ったら今日はずいぶんといろいろ持ってきたのね？」

　不愉快な話題を切り捨てるように、エリカが今日の昼食を見渡した。

「あ、はい。よろしければ、みなさんで召し上がってください」

　祐理が持参した重箱の中身は、穴あな子ごの炊き込みご飯だった。

　べつの重箱にも厚焼き玉子、きんぴらゴボウ、筑ちく前ぜん煮に、サバの照り焼き、おしんこなどが詰めてある。おまけに魔ま法ほう瓶びんに入れて持ってきたのは、ワカメと豆とう腐ふの味み噌そ汁しるだ。

　尚、エリカの方は中華風点てん心しんの詰め合わせを持ってきて

いた。エビ餃ギョウ子ザ、カニ焼シユウ売マイ、栗くりと豚ぶた肉にくの中華ちまき。メイド兼助手のアリアンナが手作りしたそうだ。冷めているのは残念だが、十分に美お味いしく色取りも美しい。

　ついでに護堂は、長時間煮込んだ食材がないことを天に感謝した。

「どうした万里谷祐理？　エリカの言う通り、最近にしては珍しい充実ぶりだな？」

　紙コップで味噌汁を渡されて、リリアナは不思議そうに言った。

「最近ひかりのことでご迷惑をおかけしていますので、せめてものお礼にと……」

　麗うるわしい媛巫女は照れながら答えた。参加する人間が増えたので、最近は各おの々おのが持ち寄る品数も減っていた。ひとりで大量に用意せずとも、メニューは十分に多くなるのだ。

「気にするな。近づいてくる娘に目をかけるのは、いわば『王』の務めのようなもの。このような気き遣づかいはしなくても大丈夫だ。……わたしも悪くするつもりはないしな」

「は、はあ」

　厚焼き玉子をつまみながら言うリリアナに、祐理は恐きよう縮しゆくの体ていだった。

　銀髪の青き騎士は、ひどく落ち着き払っていた。凛り々りしくも悠ゆう揚よう迫せまらざる、風格さえ漂う物言い。強い覚悟を決めた者特有のたたずまいと言おうか。

　昨日賭かけをして以来、ずっとこんな調子なのだ。

　まるで来たるべき次のステップに向けて、静かに力を蓄たくわえているかのような――。

　ふと傍かたわらのエリカを眺めてみた。金髪の紅あかき騎士は、旧友兼ライバルを不思議そうに見つめていた。目の前の動物は、珍獣と猛獣のどちらか判断に迷う……という感じだ。

このとき、祐理の荷物がブルブルと震えだした。

重箱を収めていた巾きん着ちやく袋ぶくろ。そのそばに置いてあった携帯電話が、着信を受けたのだ。

「すこし失礼します。みなさんはかまわず召し上がっていてください」

液晶の着信表示を見て、祐理は上品な挙きよ措そで立ち上がった。一同から離れ、屋上の端の方で電話に出ていた。

「草薙護堂、今日は食後のデザートを用意してあります。この前のケーキが好評だったので、試ためしに作ってみました。いちじくのジャムとごいっしょにどうぞ」

いきなりリリアナが開けたタッパーには、レアチーズケーキが整然と並んでいた。横に取り出したビンにはオレンジ色のジャム。彼女のことだから、こちらもきっと手作りだろう。

「珍しいわね、リリィ。お昼はいつもメインディッシュとか主食みたいなのを作るのに」

気取った言い回しを好むエリカが、妙に平坦な口調で言った。胡う散さんくさげな顔つきだ。

リリアナは指摘されたような料理を好んで作る。おそらく食卓の主役たらんとするモチベーションが、無意識にそういうメニューを選ばせるのだろう。

「皆が腹に溜たまるものを作っても芸がない。たまにはこういうのもいいだろう。……目立ちたがりのあなたには、理解できない境地かもしれないが」

銀髪の騎士が静かに語る。最後の付け足しだけライバル心が露あらわになっていたが。

……実を言えば、エリカほどではないがリリアナも意外に目立ちたがり屋だ。そうでなくては紅と青の一対として、ライバルにはなるまい。それなのに、この言い様。昨日のやりとりのなかに、そこまで彼女の変化を促うながす何かがあったのだろうか？

「今日は一体どうしたの、リリィ？　ちょっと変よ？」

　ついにエリカが直接訊たずねた。

「変じゃない。……わたしはただ決めただけだ。草薙護堂の横に立つ第一の騎士として、彼本人にも周囲にも公認される日が近い。だから、その地位と責任にふさわしい振る舞いと精神を身につけようとな」

　リリアナの答えは穏やかだが、とても力強かった。

「だからエリカ、あなたの誘惑行為もある程度は大目に見ようと思うようになった。全てを取り仕切る者が、一愛人のやんちゃに目くじらを立てるべきではないからな。無論、あなたの行動が草薙護堂のスケジュールに悪影響をあたえる場合はその限りではないが」

　微妙に上から目線での通達に、エリカはやや剣けん呑のんな視線を投げかけた。

「あら？　じゃあ、いずれ護堂があなたを片腕として認めるというの？」

「おそらくひと月後にはな。——そうですね、草薙護堂？」

　ちらりとリリアナがこちらを見る。彼女は勝つ気満々のようだ。うーん。いや、いくらなんでもあの条件で護堂が負けるはずはないのだが。

「何か密約でもあったようね？　でも第一の騎士にして愛人たる者には、武勇や魔力だけでなく、何よりも王おう佐さの才が必要とされるわよ。知ち謀ぼうに計略、人あしらい、話術、交渉……あなたにそれができて、リリィ？」

　そう訊ねるエリカは、華やかな微笑を浮かべていた。闘志を剥むき出しにしたくないという美意識の産物だろう。『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』らしい迂う遠えんな振る舞いだった。

「あなたの悪知恵がまわることは認めるが、それを以もつて王佐の才とは大言が過ぎると思うぞ。王と騎士は何より信頼の絆きずなで結ばれるべきなのだから。とはいえ、その方面でも余よ人じんに後おくれを取らないよう心がけるつもりはもちろんある」

　リリアナも落ち着いて切り返す。本格的な舌ぜつ戦せんになればエリカが勝つだろうが、今までは見られなかった展開だ。

「そこまで言うのなら、第一の騎士としてのお手並みを拝見しようかしら。……さっき話に出た陸りく鷹よう化かの来日。あなたはこれをどう見るの？」

「ああ、羅ら濠ごう教主の直じき弟で子しのことか」

　からかうようなエリカの問いに、リリアナは軽くうなずいた。

「まあ、最もバカげていて、しかし最も警戒する必要があるのは、かの魔教教主が日本で騒動を起こすために弟子を送り込んだ可能性だろうな」

「ええ、ヴォバン侯こう爵しやくのように。そうね、覚悟しておいた方がいいかも」

　突とつ飛ぴすぎる発想を口にしたリリアナに、エリカが応じる。

「確率論的にはバカげた発想だけど、この半年で思い知ったわ。カンピオーネはみんな、身の回りにある火薬に火をつけないではいられない人たちなんだって。護堂がそうだし、侯爵もサルバトーレ卿もそう。羅濠教主だけ例外だとは思えないわね」

「たしかにな。しかも皆、火種を見つける名人でもいらっしゃる」

　被ひ害がい妄もう想そうじみた予測を語る騎士ふたり。無理のある憶おく測そくだと護堂は考えるのだが。

　ついでに、その面子のなかに俺を当然のように交まぜるのはやめろとも。

「とにかく、懸けん案あんはやはり羅濠教主だろう。あの方については容姿も性格も謎なぞ。どのような神と戦ってきたかも不ふ詳しよう。エリカ、あなたは香ホン港コンで暮らしていた時期があったな。向こうで得た情報があったら、是非教えてほしい」

「教主の情報は、むしろ中華圏の方が制限されているわ。御姿を見た信しん徒とが自分の目を潰つぶしたとか、御声を聞いただけで耳を削そぎ落としたなんて話があるくらいだし」

　そんなやりとりが進むなか、電話を終えた祐理が戻ってきた。

「護堂さん、このたびはありがとうございました」

　いきなり礼を言われて困惑した。一体、何がどうしたのだ？

「今、甘あま粕かすさんから連絡があったんです。昨日、護堂さんが頼んでくださった西さい天てん宮ぐう見学の件、九く法ほう塚づか家の了承が出たと」

「え、本当に？　もうしばらくかかるって言ってたのになあ」

「前例のないことですが、『王』の仰おおせとあらば致し方なし。都合のいい日に日につ光こうまで来てくれと、あちらはおっしゃっていたそうです」

　祐ゆ理りはしとやかに頭を下げた。幼時よりの躾しつけがかいま見える、大やまと和なでし撫子この振る舞いだ。

「妹のわがままのために御力をお貸しいただき、ありがとうございます。姉の私からもこの通り、お礼申し上げます」

「いや、礼なんていいよ。俺はほとんど何もしてないし」

「もちろん、直接お話ししてくださった馨かおるさんには改めてお礼をいたしますが、まずはこの場で護堂さんに感謝を伝えさせてください」

　穏やかに微笑しながら、祐理は告げた。優美な丁てい重ちようさのおかげか、こういう行為がいやみにならない。この礼を受けないのはかえって無ぶ粋すい。苦笑しながら護堂はうなずいた。

「では、万里谷ひかりの件はこれで解決ということだな。まずはよかったと言うべきか」

　まとめるようにリリアナが言う。

　ふと護堂は考え込んだ。この集団のリーダー格は（一応）草薙護堂。サブリーダーはエリカ・ブランデッリというのが今までの構図である。

　二番手に割りこもうとするリリアナの行動は、はたして善悪どちらに転ぶのだろうと。

「ねえ祐理、見学に行く日取りはもう決めているの？」

　いきなりエリカが訊ねた。

「はい。今度の週末がちょうど三連休ですし、そのときにしようかと」

「ふうん……やっぱり祐理もいっしょに行くの？」

「それはもちろん。あの子の姉ですし、同じ媛ひめ巫み女こでもありますし。……それが何か？」

　遠回しなエリカの問いかけに、祐理は不思議そうに小首をかしげた。

「じゃあ提案するわ。祐理の妹なら、護堂の——そして、わたしたちの妹も同然。というわけで、その見学とやらにはみんなで行きましょう」

「何だって？」

「護堂、委員会に口を利きいただけで自分の務めは終わったとか考えたらダメよ。最後まで責任を持って、ひかりを保護しなさい。あの子が手荒な扱いを受けたら、どうするつもり？」

　もっともらしい口ぶりで『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』は語る。だが口元は楽しそうに微笑み、いたずらを思いついた子供のように目が輝いている。

「実はちょっと調べたんだけど、その宮のまわりは結構有名な観光地で、見どころも多いらしいじゃない？　いい機会だから、みんなで楽しみにいきましょう」

　護堂はため息をついた。発言の途中から思惑は読めていたのだ。

　だが、責任を持てというエリカの言葉はきっと正しい。沙耶宮馨の言ったことを思い出すと、神君とやらは決して安全な存在だとは思えない。

　しかも封じられているとはいえ『まつろわぬ神』だというのなら——。

　護堂は日光への同行を決心した。

　日光国立公園の範囲は広く、栃とち木ぎ県だけでなく群ぐん馬まや福ふく島しまにも及ぶ。

　だが日光と一口に言えば、やはり東とう照しよう宮ぐう・二ふた荒ら山さん神じん社じや・輪りん王のう寺じの日につ光こう山さんと、奥日光の一帯だろう。男なん体たい山さん、中ちゆう禅ぜん寺じ湖こ、戦せん場じようヶが原はらなどについては、もはや語るまでもあるまい。

　西天宮は日光山の一角にひっそりと建つ社やしろである。

　きらびやかな東照宮よりも、その西側にある二荒山神社に近い。観光地として一般人も出入りする区画からは離れている。静かなる聖域であった。

　その境けい内だいで、神しん職しよくの装しよう束ぞくをまとった九法塚幹みき彦ひこが携帯電話と話していた。

「すると草薙さまも祠ほこらにいらっしゃると？　もちろん、慎つつしんでお待ち申し上げます。ええ。ええ、ひかりさんにもよろしくとお伝えください……」

　この話をすぐそばで聞く少年と少女がいた。陸りく鷹よう化かとアーシェラである。

「上う手まいもんだね。あの話しっぷりなら、姐ねえさんに操られているとは見抜けないよ」

「当たり前だ。妾わらわは全ての魔女の頂点に立つ者だぞ」

　肩をすくめる少年に、少女が興味なさげに応じる。

　彼女は遊び飽きたオモチャの人形を見るような目で、九法塚幹彦を眺めていた。

「ただ厄やつ介かいなのは、鍵かぎになる巫み女こだけじゃなくて、草薙護堂——この国の『王』まで来るって話だな。こいつはちょっと、まずい流れだ」

　陸鷹化の耳は九法塚幹彦の声だけでなく、電話相手の声まで聞き

取っている。きれいな声だ。男にしては高く、女にしては低いような――。

「ふん。来たければ来ればいい。ジョン・プルートー・スミスとも渡り合った妾だぞ。神殺しとなって一年にもならぬ若造など、蹴け散ちらしてくれるわ」

「なるほどね。姐さんがロスで負けた理由、よくわかるよ」

　邪じや眼がんを闘志で鋭くさせた魔女に、陸鷹化は冷笑を向けた。

「……貴様」

「姐さんは『王』のヤバさがわかってない。あの人たちにはキャリアなんて関係ないよ。神を殺し、その権けん能のうを簒さん奪だつした時点で彼らは埒らち外がいの存在なんだ。僕や姐さんはそこそこ上等な遣つかい手てだと思うけど、最弱の『王』ですら僕らの遥はるか上を往ゆく」

　陸鷹化が暗いまなざしで神殺しを語る。

「技とか術とか、策とか罠わなとか、そんなものを云うん々ぬんする相手じゃないんだ。僕は多分、七人いらっしゃる『王』たちの五人までは武芸で凌しのぐと思うけど、まともに喧けん嘩かを売る度胸はないよ。あの人たちは、相手が誰であろうと必ず『勝ち方』を見つける。どんな才能も百年の修行も、そいつでチャラにしちまうんだ。だから王様なんだよ」

　齢よわい一四歳。そのうちの十年を師と共に生きた少年は、重々しく言い切った。

「王には王をぶつけるのがいちばん。僕らは僕らの仕事をすればいい」

「……呼ぶのか、貴様の師を？」

　最さい凶きようにして武の至し極ごく、不敗にして求敗の境地に至ったカンピオーネを。

　アーシェラの問いに、陸鷹化はうなずいた。

「呼ぶ。でないと計画に支し障しようをきたすって必死で説得して、おだてて、なだめすかして御ご光こう臨りんを願い奉たてまつる。どのみち甦よみがえらせた神君と仕合うつもりなんだから、ちょっと早く来てもらうくらい何とかなる……と思う」

　師の理り不ふ尽じんさを思い出したのか、少しよう壮そう気き鋭えいの弟子はため息をついた。

「でないと、失敗した僕たちはどんな折せつ檻かんを受けるか——考えたくもない。まだ出で不ぶ精しようの師し父ふを引っぱり出して、拳げん骨こつを喰くらう方がいい……」

　東方の果ての聖域たる宮に、役者が集つどいはじめる。

　彼らが一堂に会するまで、あと数日。嵐の気配は徐々に高まりつつあった。

第４章　神君の坐す宮

1

　万ま里り谷や祐ゆ理りとひかりの姉妹。その後こう見けん人にんとなった草くさ薙なぎ護ご堂どう。

　なぜか随ずい伴はんすることになったエリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャール。

　一〇月上旬の三連休を利用して、この五人で日につ光こうへ小旅行。列車に乗るよりも車を使う方が経済的というものだ。

　ある参加者のメイドを務める女性は、運転手役を買って出てくれた。しかし、護堂は丁てい重ちように断った。危険の多い人生を送っているが、自みずから望んで会いに行くこともない……。

　では、旅の足をどうしたものか。思案していると携帯電話に連絡が入った。

『よろしければ、私が協力いたしますよ。車も当方で用意しましょう。いえいえ、お礼を言われるほどのことじゃありません。九く法ほう塚づかの内情をちょっと見に行くついでですから』

　この申し出をありがたく受け、三連休初日の午前早くに草薙家の近くで集合。皆で日光へ向かう手て筈はずとなった当日――。

「ねえ、甘あま粕かすさん」

　旅立ちから一時間近くが経たち、護堂は軽はずみな選択を後悔しはじめた。

　助手席から隣の運転手に問いかける。

「東京から栃とち木ぎの日光まで行くなら、東とう北ほく自動車道を使うべきだと思うんですよ。その方が早く着くし。どうして一般道を走ってるんですか？」

「旅というのは、目的地に到着するまでの過程も重要なものです」

　ハンドルを握る甘粕冬とう馬まは、重々しい口調で言った。

「いいですか。この日につ光こう街かい道どうは、日に本ほん橋ばしから徳とく川がわ家いえ康やす公を祀まつる日光東とう照しよう宮ぐうへと至る由ゆい緒しよ正しい古こ道どうです。沿道には二〇の宿場があり、すでに私たちも千せん住じゆ宿じゆく、草そう加か宿、越こしヶが谷や宿を通過しておりますが、昔の人々はこの道程を徒歩で踏破していったわけです」

　東とう海かい道どう、中なか山せん道どう、甲こう州しゆう街かい道どう、日光街道、そして奥おう州しゆう街かい道どう。

　かつての五街道のひとつ、のちに国道や県道となった旧日光街道を往く道中。定員七名のミニバンを厳げん粛しゆくな面おも持もちで走らせながら、甘粕はうんちくを語る。

「より便利な方、時間が短い方に流れるのは、現代人の忌いむべき性質でしょう。ねえ草薙さん、われわれもいにしえの旅程をなぞり、古人の労苦を偲しのぼうではありませんか」

「いや！　俺はこの、地獄の責め苦みたいな時間をとっとと終わらせたいんですよ！」

　男ふたりが実のない話をする一方、後ろの席では女性陣が盛り上がっていた。

　それはべつにいい。問題は彼女たちの話題だ。

「じ、じゃあエリカ姉さまが、お兄さまのご正室でいらっしゃるのですか？」

「ええ、そうよ。ひかりもこれから護堂の近くに侍はべるつもりなら、わたしの言うことをよく聞いて、姉の祐理を補佐するつもりでいなさいね」

「つまり、チームワークが大事ということでしょうか……!?」

「すこしちがうかしら。みんなで仲よくして馴なれ合うくらいなら、競争心を持って張り合う方がいい結果を生むはずよ。でも張り合うだけじゃ、いざというときに十分な働きはできないわ。大切なのは序列。緊急時には誰に従うのか明確にしておけば、どうとでもなるものよ」

「うわー……勉強になります。エリカ姉さまは、恵え那な姉さまが言ってた通りの方ですね！」

「恵那さん、わたしのことを何て？」

「すごく強くて、馨かおるさんと張り合えるくらい頭がよくて、えらそうだって」

「光栄だわ。ただ最後のは余計ね。わたしはえらそうじゃなくて、偉大と評すべきなの。ひかりも今度恵那さんに会ったら、そう訂正しておきなさい」

「わかりました、姉さま！」

「エリカ、相手が純真なのをいいことにデタラメを吹き込むなッ。あなたが草薙護堂の正室などとはただの妄もう言げん、僭せん越えつの極みだろう！」

「あら、いずれそうなるのは誰の目にも明らかじゃない？」

「すくなくとも、わたしの目には明らかじゃない。わたしにはあなたが、我が主の将来を暗くする奸かん婦ぷか佞ねい臣しんに見えるぞ。……万里谷ひかり、エリカの発言は全て忘れるといい。そして覚えておくことだ、真の騎士は己の立場や肩書きにこだわらないものだと」

「ど、どういう意味でしょう、リリアナ姉さま!?」

「たしかに序列は重要だが、それが全てではない。自分がどのような立場であれ、ただ黙もく然ねんと主あるじのために尽くし、忠ちゆう義ぎを全まつとうする。これこそ真の騎士道。正室だの第一夫人だの、事あるごとに吹ふい聴ちようする者は覚悟に問題があるということなのだ」

「序列にこだわらず、お兄さまのために尽くす……あ、そういうことか」

「おお、この気け高だかい精神の大切さがわかるのか。あなたは見どころがありそうだな」

「はいっ。つまり私たちは、お兄さまにとって『都合のいい女』になればいいんですね!?」

「つ、つご――子供がそんなことを言ってはいけない！」

「ひかり！　どこでそんな言葉を覚えたの!?」

「恵那姉さまが教えてくださったの。清せい秋しゅう院いんの先代ご当主はあちこちに『都合のいい女』を作って、愛人さんにしてたって。でも一応生活の面倒は見てたから、最低限の義理は果たしてたって……。お姉ちゃん、お兄さまは私たちのことをずっとお世話してくれるかな？」

「そ、それは……あの、私たちと護堂さんは決してそんな爛ただれた関係ではなくて……」

「でも、恵那姉さまはこう言ってたよ。草薙のお兄さまは男前で豪気な方だから、まわりの女の人をまとめて囲ってくれるだろうって。お姉ちゃんとふたりで独占できないのは悔しいけど、あの人は王様だから酒しゅ池ち肉にく林りんも仕方ないって……」

「そういうことを大きな声で言ってはいけませんッ。はしたないでしょう！」

「え、そうなの？　ところで酒池肉林って実際にはどんな感じなのかな？」

「まあ、ひかりは勉強熱心ね。いいわ、わたしが教えてあげましょう。これは香ホン港コンにいたとき聞いた実話なのだけど――」

「エ、エリカさん！　お願いですから、ご説明はご遠慮ください！」

　ひかりは実姉以外とも親密になったようだ。いつのまにか『姉さま』呼ばわり。

　人見知りとは無縁の性格なのだろう。それはいいのだが、このかしましさをどうにかしてほしい……。だが迂う闊かつに後部座席を注意すれば、藪やぶから蛇へびを出す結果になりそうだ。代わりに護堂は、運転手へ話しかけた。

「ねえ甘粕さん、あとで清秋院の連絡先を教えてくれませんか？」

「おや。電話でもかけて口く説どくおつもりですか？」

「いいえ、断じて。あとで苦情の電話かメールを入れます。それと、どこかの駅で降ろしてもらえませんかね？　俺、ひとりで電車に乗りますよ」

「まあまあ。旅は道連れと申します。この道中をいっしょに楽しみましょう。ちなみに、もうすぐ通過する粕かす壁かべ宿じゆくは松まつ尾お芭ば蕉しようが『奥おくの細ほそ道みち』で最初に泊まった宿場でして……」

　にこやかな甘粕を、護堂はくわっとにらみつけた。

「後ろであんな話をされて、楽しめるわけないでしょう！　針はりのむしろにすわるようなもんですッ。降ろしてくれないなら、せめて高速使って日光まで急いでくださいよ！」

「ははは、まあまあ。せっかくのドライブです。仲よくやりましょうよ」

　地味な容姿の正せい史し編へん纂さん委員は、朗ほがらかに笑っている。この時間を長引かせるため、敢あえて非効率的なルートを選んでいるのだろう。

　上司をいたずら好きと呼んでいたが、彼も似たようなものだ。

　苦り切る護堂をよそに、他の面々は日光までの旅路を楽しんで（？）いた。

　にぎやかな往路を経へて、護堂たちは午後一時頃に目的地へ到着した。

　途中、道が混こんでいるところもあったが、運よく渋滞には巻き

込まれなかった。

　東とう照しょう宮ぐう、二ふた荒ら山さん神じん社じや、輪りん王のう寺じを擁ようする日につ光こう山さん。

　紅葉の時期にはまだ早いが、やはり連休の観光地。それなりに参拝客でにぎわっている。人ごみに酔う……とまではいかないが、そこかしこに人がいる。老ろう若にやく男なん女によのどれにも事欠かず、個人旅行者もいれば家族連れ、カップル、ツアー、外国人まで一通り見ることができた。

　甘粕がミニバンを駐車場に停めるというので、他の面々は先に下りた。

　そのまま表参道までやってくる。

　左右を杉並木に挟はさまれた、東照宮の門前である。前方には一いちの鳥とり居いが見える。このまま進めば日光東照宮。右に向かえば日光山輪王寺、左奥なら二荒山神社だ。

「そういやリリアナ、今夜の宿はどうなった？」

「はい。近くにあるペンションの離れを予約済みです。大勢で騒がしくしても迷惑にならない、あまり費用のかからない場所というご指示通りに」

　護堂が訊ねると、リリアナはてきぱきと答えた。

　宿の予約をしてくれるというので、彼女に一任していたのだ。

　もともと細かいところに気の回る性格なので、こういう事務的な手配にも意外と向いているようだ。この辺り、実はエリカと好対照である。

「ねえリリィ。わたし、浴衣ゆかたっていうのを着て露天風呂とかいう野外温泉に入りたいわ。夜中に護堂を引っぱり出して、星明かりの下でいっしょにバスタイムを愉たのしむの」

　色いろ香かすら漂う微笑と共に、エリカが訴えた。

　この金髪の少女は政治・戦略・交渉に有能で、大きな視野に立った経済も理解できる。だが、庶しよ務む的な雑事をこなす繊せん細

さいさや台所のやりくり的な経済観念はない。やればできるかもしれないが、おそらく絶対にやらない。

「今夜の宿にも貸し切りの露天風呂はあるが、予約制だ。草薙護堂が望むのであれば、手配してやってもかまわないが……」

「そうなの？　ですって護堂、是非ふたりで愉しみましょう！」

「誰がそんなものを愉しむか！」

　護堂は怒鳴るように却きやつ下かした。

　ここで自ら手配しようとしないのが、エリカのエリカたる由ゆ縁えんだろう。こうして見ると、彼女たちのライバル関係はややエリカ優勢の微妙なバランスながら、それなりに保たれているのだなァと思える。

　ちなみに、もう一方の連れである万里谷姉妹はといえば、

「では護堂さん、そろそろ参りましょうか」

「いよいよ西さい天てん宮ぐうのお社やしろですよ、お兄さま。ちょっと緊張してきました！」

　騎士たちのやりとりを聞き流し、こんなことを言ってきた。

　生き真ま面じ目めな祐理もエリカたちの破は天てん荒こうさに慣れたようで、あまり堅苦しいことを言わなくなってきた。ひかりはむしろ馴な染じみすぎだ。こんなところで順応性を浪費しなくてもいいだろうにと、護堂はしみじみ思った。

「じゃあ、わたしたちは別行動にしましょうか。いいわね、リリィ？」

「仕方ない。ついていっても差さし障さわりがあるだろうからな」

　心得たもので、エリカとリリアナが離れていく。神しん君くんの祠ほこらとやらを見学するのに、部外者は同席すべきではないと配慮したのだろう。

「そういえば、万里谷は何とかってお宮に行ったことがあるのか？」

「はい、媛ひめ巫み女ことなる前に一度。本殿に入っただけで、祠には入りませんでしたが」

　と、祐理は迷いのない足取りで東照宮の鳥居を目指す。

　その背中を追う護堂とひかり。

　日光東照宮は、東照大だい権ごん現げんに神格化された徳とく川がわ家いえ康やすを祀まつる霊れい廟びようである。修学旅行ではおなじみの、豪ごう華か絢けん爛らんな神社だ。五重塔を見ながら石段を登り、鳥居をくぐる。このまま有名な陽よう明めい門もんを通って拝はい殿でん、本殿、そして眠り猫と奥社に進むのが定番コース。

　だが、祐理はその途中で地味な建物へ向かった。

　東照宮といえば、現代の金額にして数百億円かけて建造された豪華な空間。やたらと金や彫刻、細工物で飾り立てたイメージなのだが。

　そこは小さいうえに、派手な装飾もない小屋だった。今まで眺めてきた五重塔や表門とは大ちがいだ。だが観光客で人だかりができており、意外と人気スポットらしい。

「何だか、ここだけ渋い場所だな。他の場所は金ピカもいいところなのに」

「ここは神しん厩きゆう舎しや……東照宮で最も神君と縁の深い建物です」

　素直な感想に祐理が答えた。神厩舎？　護堂は柵さくで仕切られた建物内に、二頭の馬がいることに気づいた。そういえば、厩舎とは馬小屋の意だったか。

「ほらっ。あそこにおサルさんがいますよ、お兄さま！」

　ひかりが元気よく指さす。そこは建物正面側の壁だった。

　普通の家屋でいえば欄らん間まに当たる部分。そこの端から端まで猿の彫刻が施ほどこされていた。猿の親子。目をふさいだ猿、口をふさいだ猿、耳をふさいだ猿。すわりこむ猿。空を見上げる猿、うつむく猿などもおり、合計で十数匹もの猿が彫り込まれていた。

「ああ、見ざる言わざる聞かざるの場所か」

　三匹の猿が、それぞれ目・口・耳をふさいでいる。

　有名な彫刻を見て、この場所の見どころを護堂はようやく思い出した。

「はい。古来、猿が馬の病気を治すという言い伝えがあるんです。だから、この馬小屋はおサルさんばかりなんですよー」

「へー、知らなかったな。でも、何で徳川家康にサルが関係するんだ？」

　ひかりの解説につぶやくと、祐理が驚きの表情で言った。

「ご存じではなかったのですか？　神君とは東照大権現さまの方ではありませんよ」

　今度は護堂が驚いた。しかし、日光東照宮が祀る神は神君・徳川家康公のはずでは？

　こちらの先入観を察したのか、祐理は申し訳なさそうに付け加えた。

「申し訳ありません。馨さんに詳しい事情を訊ねられたという話なので、もう詳細はご存じなのだと勝手に思っておりました。西天宮は日光東照宮の一部を成す社ですが、異なる祭神を仰ぐ独立した聖域なのです」

「西天宮に祀られた神君は、猿えん猴こう神君さまとおっしゃいます！　おサルさんの化身で竜の庇ひ護ご者しやだそうですよっ。実は、私もそれくらいしか知らないんですが」

　えへへと照れ笑いを浮かべながら、ひかりも言う。

　なぜサルが竜を庇護するのだろう？　護堂は首をかしげた。どう考えてもサルより竜の方が強そうだ。また神話がらみの、ややこしい事情がありそうだった。

「では、ここより西天宮に参ります。私のあとについてきてください」

　祐理が長方形の紙切れ――お札ふだを取り出した。何かと訊ねたら、人払いの結界で守られた西天宮まで案内してくれるものなのだと説明された。

　祐理はそれを持って、神厩舎の後ろに広がる林へ分け入る。護堂とひかりもつづく。

　この辺りは二荒山神社につづく小道と東照宮境内の中間地帯。割と人目につくはずなのに、数十人いる観光客の誰もこちらに注意を払わなかった。

　祐理の背中を追って、林を進むこと十数分。途中で向かっている方向がわからなくなった。

　三人はようやく古びた神社の前にやってきた。

「お待ちしておりました、みなさま」

　出迎えてくれたのは九法塚青年だった。今は神職の装しよう束ぞくを着ている。

　背後には、さっき別れたはずの甘粕が控えていた。先回りしたのだろう。ただし黒くろ子こに徹するつもりなのか、こちらに目礼しただけで無言だった。

「我らが九法塚の社に『王』をお迎えできるとは、光栄の至りです。まもなく祠ほこらの戸を開き、神君と対面する準備が整います。もう少々お待ちくださいませ」

　九法塚青年に恭うやうやしく言上されて、護堂は首をかしげた。

「今、神君と会うって言いました？」

「はい。西天宮の秘奥を見学されるのであれば、これが最良であると存じます。何と言ってもお仕えするやもしれぬ神格と直に拝はい謁えつし、言葉を交わすのでございますから。ひかりさんの禍まが祓はらいがあれば、祠を開くことも可能。それゆえに選べる方法です」

　なるほど、たしかに。危険を顧かえりみなければの話だが。

「いや、でも『まつろわぬ神』と会うなんて危ないじゃないです

か」

「お言葉、ご尤もっとも。であれば、どうでしょう。御身もひかりさんとご一緒に祠へ入られ、神君との対面にご同席されては」

　九法塚青年の意見に、護堂は考え込んだ。

　自分と『まつろわぬ神』が会うのも、まずくないだろうか？　ＤＮＡレベルでライバル意識を刷すり込まれている同士なのだ。何かの拍ひょう子しでケンカ沙ざ汰たになったら、東照宮を舞台に大決戦がはじまりそうだ……。

　だが、神様とひかりを単独で対面させるのはもっとまずい。何より、もともと無理を承知で頼んだのはこちらの方なのだ。ここは保護者として折れるべきところだろう。

　護堂は仕方なくうなずいた。

　護堂も甘粕も、たぐいまれな霊眼を持つ祐理さえも気づいていなかった。

　今日の西天宮に居合わせる、人ならざる訪問者の存在に。小さな一匹の蜥蜴とかげが、境内の片隅から人間どもを見下ろしていた。

　地べたから、遥はるかに長身の人間たちを見下ろしていた。

　その瞳に宿るのは、傲ごう然ぜんたる王者の気き概がい。九法塚青年に先導されて巫女たちが歩きだすと、蜥蜴もゆっくりと動きだした。

　この地の支配者であるがごとき、悠然たる足取りで。

2

　神しん君くんとの対面に備えて、ひかりは巫み女こ装しよう束ぞくに着替えることになった。

九く法ほう塚づか青年の案内で社務所へ向かう。姉の祐ゆ理りも付き添いでいっしょだった。

控えの間まを用意すると言われて、護ご堂どうは断った。自分ひとりのために、そこまで迷惑はかけられない。甘あま粕かすとふたり、社務所の近くで待つことにした。

「……九法塚家って割に、人がいませんね」

護堂は気になっていた点を指摘した。九法塚青年の他には、誰も見かけないのだ。

境けい内だいにいるのも護堂と甘粕のふたりだけだ。

「猿えん猴こう神しん君くんの祠ほこらを開く日ということで、責任者である若君以外は退去させたそうです。ま、百年も閉ざされていた神様の結界を開くんですから、妥だ当とうな用心ですね」

「それはそうと、ここは何でサルの神様を祀まつってるんですか？」

もっと御ご利り益やくのありそうな神もいるだろうに。

護堂の心の声を聞いたかのように甘粕は微苦笑し、頭をかいた。

「サルってのは、あれで結構ありがたい神しん獣じゆうなんです。意外でしょうけど」

「馬の病気を治して竜を庇ひ護ごする……ってのは、さっき聞きました」

「お、そこまでご存じでしたか。あと重要な属ぞく性せいとしては、魔ま除よけですね。京きよう都とに猿が辻つじって場所があります。ここは京都御ご所しよの艮うしとら――北東の方角に位置します。北東とは陰おん陽みよう道どうでいう鬼き門もん。つまり、悪あつ鬼き邪じや霊れいが侵入してくる方向です」

ほら、北東――艮の逆は南西で申さるの方位。だからサルを魔除けに使う験げんかつぎなんですと、どこかうれしそうに甘粕がうんちくを語った。

「サルを鬼門守護として布陣するのは、天てん台だい系の呪じゆ法

ほう僧そうが得意とする術なんですよ」

「天台系……？　あの比ひ叡えい山ざん延えん暦りやく寺じの、天てん台だい宗しゆうとか？」

「はい。ちなみに日光東照宮建こん立りゆうをプロデュースした天てん海かい僧そう正じようは、天台宗出身の学僧です」

　比叡山は京都の北東——鬼門に位置しますとも、甘粕は付け加えた。

　天海僧正。護堂にも聞き覚えのある名前だ。たしか徳川家康のブレーンを務めた知識人にして僧侶。三代目将軍・家いえ光みつにまで仕えた人だったか。

「日光東照宮ってのは、徳川家康公を護ご国こくの神に化身させる宗教装置みたいなものです。そのなかにこっそりと建てられた西天宮は、魔除けの竜殺し・猿猴神君を祀る社やしろなんです」

「よりにもよって、どうしてこんな場所に……？」

「ここ、日本の霊的中心から見て鬼門に当たるんですよ。だから護国の守護神として家康公を祀り、さらに魔除けの猿神を布陣したのでしょう」

　奇妙な言葉だと護堂は思った。霊的中心とはどういう意味だろう？

「地図を見ればピンと来ると思いますよ。日本の象しよう徴ちよう、最高のパワースポットである聖地——霊れい峰ほう・富ふ士じ山さんから見て、日光は北東にあるのですよ。そうそう、記録によると猿猴神君は幾度か西天宮の外に出ているそうですねェ」

「『まつろわぬ神』を外に？　危険じゃないですか！」

「まったくです。現に一〇〇年前、最後に神君を解放したあと、西天宮は関係者もろとも吹き飛びました。このお社、そのあとで建て直したものなんですよねー」

　そんな物騒なエピソードがあったとは。

　護堂はだんだん不安になってきた。本当にひかりは大丈夫なの

か。

「せっかく封じている『まつろわぬ神』をどうして外に出すんですか？　それに、野放しにした神様がよくここに戻ってきますね？」

「そこを語ると、草薙さんのお嫌いな神様のうんちくになっちゃいますよ」

　そういえば宗教と呪術の解説ではあったが、神については語られていない。気を遣つかわれていたようだ。代わりに甘粕は質問の後ろ半分に答えた。

「戻ってくる理由は、前にちょっと言いました畢ひつ生せいの大呪術です。日本各地の聖域から日光に集められた呪力と東照大権現の神力で、猿猴神君を呪じゆ縛ばくしているんですよ。外に出て暴れ回ったあとは、ここまで戻ってきて封印を受けよとね」

「……そんなことが可能だったんですか!?」

　護堂は驚いた。人間の魔術師が束になっても強力な『まつろわぬ神』にはかなわない。それが世界の理ことわりではなかったのか。

「できるはずないんですけど、なぜかできたようです。私や馨さんは確信していますよ。この仕込み、古こ老ろうたちの入れ智ぢ慧えで成ったものだと」

　古老——すなわち、幽かく世りよに住まう人ならざる現うつ世しよの後見人たち。

　そこまで語ったところで、祐理がひとりだけ戻ってきた。ひかりも九法塚青年もいっしょではない。そして彼女は巫み女こ装しよう束ぞくに着替えていた。

「その格好、どうしたんだ万里谷？　妹さんはいっしょじゃないのか？」

「ひかりは今、幹彦さんと話をしています。護堂さん。猿猴神君さまのもとに、私も連れていってください」

　護堂が声をかけると、祐理は決然とした表情で言った。

「万里谷も？　イヤ、ダメだろ。神様に会いに行くんだ。危険すぎ

る」

「危険だからです。万一の事態が生じた場合、護堂さんはひかりを保護されるおつもりで行かれるのですよね？　でしたら、私もごいっしょします」

　護堂は志願の意図を察した。祐理は神の知識を霊視することができる。神と戦う事態になれば、彼女の存在次第で大きく状況が変わる。

「妹のために他人である護堂さんが危険を冒おかしてくださるのに、姉である私が安全なところで待っているわけには参りません。どうか、お願いします」

　と、祐理は真しん摯しに訴える。彼女の気遣いは正直とてもありがたい。だが、麗うるわしき媛巫女から神の知識を授けてもらうなら、当然あの行為を行う必要があり――。

　祐理の可か憐れんな唇くちびるを見て、護堂はそのことを意識した。

　すると同じことを考えたのか、祐理も恥ずかしげにうつむいてしまった。

「……も、もし……そうなったとしても、わ、私の方は全然かまいませんので……」

　おまけに、小声でつぶやいてくれた。脳のう髄ずいが痺しびれるような衝撃を感じて、護堂は返答に詰まった。参った。まさかこんなことを言われてしまうとは。

「――たしかに危険は伴ともなうでしょうけど、祐理さんをお連れした方がいろいろ都合がよろしいんじゃないですかね。目的を考えれば、おふたりが別行動を取る必然性は皆かい無むですよ」

　冷静な声で、ふたりだけの世界はいきなり乱された。護堂は仰ぎよう天てんした。おそらく祐理もだろう。そうだ、ここには彼も同席していたのだ！

　ふたり同時に振り向くと、地味な容姿の青年はニヤニヤと笑った。

「私の存在が忘れられたのは悲しいですが、仲なか睦むつまじいのは結構なことです。それより、どうでしょう草薙さん？　私の進言、容いれてはもらえませんかね？」

「そ、そうさせてもらいます！　よ、よろしくな、万里谷！」

「は、はい。こちらこそ是非ッ。ふつつか者ですが、お願いいたします！」

　焦あせりのせいで、護堂と祐理はおかしなやりとりをしてしまった。

「お待たせしました、みなさん！　……あれ？　何かあったんですか？」

　気まずい空気を救ってくれたのは、ようやく戻ってきたひかりと九法塚青年だった。

　ここで甘粕は目礼し、無言で立ち去った。正せい史し編へん纂さん委員とはいえ、彼もまた西天宮においては部外者。気を遣ったようだ。

　追加の同行者を九法塚青年は意外なほどあっさり認めてくれた。

　こうして護堂とひかり、そして祐理は西天宮境内の奥へと案内されることになった。

「——あれ？　その刀、どうしたんだ？」

　ひかりは小こ太だ刀ちを抱えていた。鞘さやも柄つかも白しら木き拵こしらえで、由ゆい緒しよがありそうだ。

「あ、これは斬ざん竜りゅう刀とうというそうです。神君さまと会うときは持参する決まりだとか」

「神君と同じく、西天宮にて守護して参りました宝刀です」

　これは九法塚青年の補足だった。

「そういえば、刀が御ご神しん体たいの神社もあるんだっけ

か……」

　なら変ではないのか。わかったような気分になりながら、護堂は境内を歩く。連れてこられたのは、古びた祠ほこらの前。大きくもないし立派でもない。

　そこらの田いなか舎道みちにありそうな、地味な祠だった。

　すぐそばに背の低い樹木が生えている。これはたしか桃の木だ。

　祠と桃木の周囲四方には、注し連め縄なわが張ってあった。強烈な呪力を放っている。この縄が結界とやらなのだろう。

「こちらが猿猴神君の祠となります。ではひかりさん、先ほど教えた通りに」

　九法塚青年はスッと引き下がった。今や一行をさえぎるのは注連縄だけである。

　護堂は祠のなかをのぞいてみた。何も見えない。すかすかの格こう子し戸どで閉ざされているだけなのだが、内部は完全なる暗黒だった。

「ほ、祠は媛巫女が『弼ひつ馬ば温おん』の封印を弱めることで開くそうです」

　ひかりがつまりながら言った。

　物もの怖おじしない媛巫女見習いも緊張しているようだ。これから『まつろわぬ神』に会うのだから、当然と言えば当然だが。それにしても『ひつばおん』とは何なのだろう？

　護堂と姉が見守るなか、ひかりは注連縄にふれた。

　藁わらを縒より合わせて造った太い縄が地面に落ちる。横おう溢いつしていた呪力も消え去った。

「すごいな。これでこの祠は開きっ放しになるのか？」

「それは無理でしょう。神の住まいを封じるほどの結界です。完全に消し去ることはできません。時間が経たてば元通りになるはずです」

　祐理が説明してくれた。強力すぎる術や呪力は一時的に弱めるだけ。カンピオーネや神々の権けん能のうに対して効果が薄いのと同じ理屈なのだろう。

「じ、じゃあ、開きます……！」

　ひかりが震える声で宣言し、祠の格子戸を開け放った。

　内部はあいかわらず暗くら闇やみだった。とはいえ、ここまで来たら進むしかない。

「俺が最初に入るから、万里谷とひかりはあとについてきてくれ。——九法塚さん、ご迷惑をおかけしました。いろいろわがまま言ってすいません」

「いえ、お役に立てて幸いです。いってらっしゃいませ」

　やけに抑よく揚ようのない声で九法塚青年は言った。

　以後は一言も発しない。身じろぎすらしない。電池の切れた時計のような雰ふん囲い気きだった。青年の様子を奇妙に思いながら、護堂は祠に足を踏み入れる。万里谷姉妹もつづく。

　暗闇のなかをしばらく進む。足下の感触はコンクリートのように固い。意外に歩きやすいが視界は最悪。前後左右、何も見えない。完全なる闇。

　たしかなのは、すぐ後方にいる姉妹の気配と息づかいだけだった。

「みんな、はぐれないように手をつなごう。俺の手をつかんでくれ」

「は、はい。わかりました！」

　護堂の呼びかけに祐理の声が応こたえてくれた。

　手を後ろに伸ばすと、華きゃ奢しゃな手のひらと指先がキュッと握りしめた。

「ひかりは私の手をつかんで頂ちょう戴だいね。ええ、それでいいわ。大丈夫」

妹に指示する姉の柔にゅう和わな声。

ということは、護堂の手をつかむのは祐理の手なのだろう。なぜか顔が熱くなり、しかも不思議と心が浮き立ってくる。もしかすると、祐理も同じ想いかもしれない。

か細い指先と小さな手のひらを意識するたび、護堂はそんなことを理由もなく考えた。

そうやって歩くこと数分。もしくは数十分。時間の感覚がなくなってきた。

「護堂さん……お気づきですか？」

不意に、祐理が深刻そうな声で訴えた。

護堂は背筋を伸ばした。何か重大な報告がありそうだ。

「私たちは今、幽世かくりよに来ています。この間入り込んだ、あの世界です。……西天宮の祠とこの道は、おそらく現世うつしよと幽世をつなぐ回かい廊ろうなのだと思われます！」

「お姉ちゃん。幽世って、もしかしてあの幽世？」

「ええ。生と不死の境界、人の世と神界の間をたゆたう虚うつろなる根の国。黄よもつ泉ひら平坂さかとも呼ばれる狭はざ間まの世界よ」

姉妹の問答を聞きながら、護堂は天を仰ぎたくなった。

「神様を封じ込んだ結界のなか……考えてみればありそうな話だったな。でも、その割に万里谷たちは平気そうだな。苦しくないのか？」

エリカの苦しみようを思い出して、護堂は言った。

カンピオーネである自分はともかく、只ただの人間は幽世に適応できないはずでは？

「この回廊には、只ただ人びとである私たちも幽世に馴な染じませる力があるのだと思われます。そのおかげでしょう。なんとなく、そんな気がします」

　霊視の力が働いたのか、祐理は確信を込めて言った。

　どうやら、暗闇のなかをてくてく歩かされたことにも意味があったようだ。

「……待てよ。せっかく幽世にいるんだから、例の転移ってヤツはできないのか？」

　前回、さんざん試こころみた移動法のことを思い出した。

　護堂はともかく、霊視に長たけた祐理なら可能なはずだ。……まあ、猿えん猴こう神しん君くんと会う途中で転移しても意味はないかもしれないが。ところが、祐理の返答は否であった。

「いえ。どうも無理なようです。この間見た幽世の風景を思い浮かべてみたのですが……上う手まくいきません。どうやら、転移で外へ出ることはできない模様です」

「どういうことだ？」

「幽世の他の場所と隔かく離りされているのでしょう。ここは神君さまを閉じ込める檻おりなのです」

　ふたたび確信に満ちた祐理の報告。これも霊視で受け取った啓けい示じなのだろう。

「了解。……まあ、長居したくない場所なのはたしかだな」

　ため息まじりにつぶやいた瞬間、ついに出口が見えてきた。十数メートル（と、護堂の目には見える）前方に四角い穴。そこから光が洩もれている。

　三人は手をつないだまま、早足でそちらへ向かった。

　何事もなく到着できた。四角い穴をくぐると、そこは粗末な小屋のなかだった。人の住まいではない。おそらく馬小屋、さっき東照宮でも見た厩きゆう舎しやというヤツだ。

　外ではさんさんと陽ひが照っている。気持ちのいい青空だった。

　遠くに立派な建物も見える。大きな家――いや、城か宮殿と呼ぶのがふさわしい造りだ。ついでに言うと、とても和の建築物には見

えなかった。紫し禁きん城じようもかくやという中華様式の宮殿。ここはその敷地内に建てられた厩舎なのだ。

　外の風景を見渡しながら、ふと護堂は手のなかの華きや奢しやな感触に気づいた。

　まだ媛巫女と手をつないだままだ。万里谷姉妹はとっくに手を空にしているのに。祐理と目が合う。同時に赤面。顔を背そむけ、すぐに手を放した。

「……あ。おサルさんがいます」

　姉と護堂の行動に気づかなかったひかりが、厩舎の隅を指さした。

　干し草の上に、一匹のサルが寝っ転がっていた。

　ニホンザルではなさそうだ。赤ら顔ではないし、毛の色が明るい。オレンジに近い金色の体毛だった。身の丈たけは八〇センチ程度か。サルの姿を見るなり、護堂は確信した。

　こいつは『まつろわぬ神』だ。戦闘態勢に入った心身がその証明だ。

「我が宮殿によく参った。ひさしぶりの客人だぞ。しかも神殺しまで交じっているか！」

　身を起こしながら、明るい声でサルがのたまった。仕草はむしろ人間に近い。軽けい捷しような子供が寝床から跳ね起きるような動きだった。

　もはやサルがしゃべる程度では護堂も驚かない。冷静に訊ねた。

「えーと、あんたが猿猴神君？」

「我をここに閉じ込めた連中は、そう呼んでおるよ。もっといかした本名があるのだが、そいつは封じられておるのでな」

　護堂が今まで出会った神々のなかでは、一、二を争う明るさだ。……いや。ここまでふざけた神と会った記憶は他にないのだが、なぜかもうひとりいた気がする。誰だろう？　頭痛がしてきたので、考えるのをやめた。

「実は小さい方の女の子が、あんたの巫女さんをやるかどうかで悩んでいるんだ。それで今日は下見に来たんだけど」

「ああ。そういえば最近、巫女さんが遊びに来ないと思ってたんじゃ」

「遊びに、だって？」

「そうだとも。我の遊び相手をする巫女よ。雑談したり、追いかけっこをしたり双すご六ろくをしたりな。我はにぎやかなのが好きでな、舞や歌が得意だと点数が高くなる」

　西天宮媛巫女はずいぶんと牧ぼつ歌か的てきな仕事らしい。羊ひつじ飼かいならぬサル飼い。

　いや、むしろ猿回しと呼ぶべきか。

「あのー、もしかして神君さまの遊び相手をするだけなのでしょうか？　私、とっても大事なお役目だから是非やってほしいと頼まれて、すごく迷っているんですが……」

　なんと、ひかりが直接話しかけた。

　物怖じしている様子はない。まあ、相手が神の威い厳げんに欠けているおかげもあるだろう。

「遊ぶだけとは失敬な。毛並みを整えたりもしてもらうぞ。……ま、我が要求する賦ふ役えきはそんなものじゃ。逆におぬしたちの方が、我に剣けん呑のんな頼み事をするではないか」

「私たち……媛巫女の方が、ですか？」

「うむ。我にあの蛇を追い払え、あの竜を退治しろと。たまに泣きついてくるであろう？　そのたびに我はこのねぐらを出て、昔取った杵きね柄づかで暴れるわけじゃ」

「竜を退治？　あんた、竜を庇護するんじゃないのか？」

　とっさに護堂は口を挟んだ。さっき三猿の前で教わったこととちがう。

「庇護はするのう。ただし、ぶん殴って子分にしたあとでな。我は

これでも《鋼はがね》の端くれ、竜りゆう蛇だの類たぐいにはそういう振る舞いをする慣わしなのじゃ。……今までひい、ふう、三度ほど暴れたか。最後にやったのは、おぬしと揉めたときかね？」

　猿猴神君に問いかけられて、護堂は首をかしげた。

　この神様と揉めたことは一度もない。何を言っているのだ？

「どこぞの都で暴れていた地ち竜りゆうを討ち取ったあと、おぬしとやり合ったんじゃ。しかし決着はつかず、我がねぐらに戻る刻限となった。おぬし、あのとき祠の扉を壊そうとしたじゃろ？」

「ええ。そうすれば、あなたの居場所に辿たどり着けるかもしれぬと考えたのです」

　今度こそ護堂は驚いた。

　突然響いた女によ人にんの声。音楽的な美しさを宿す、涼すずやかな美声だ。

「結局、祠とそばにあった社を吹き飛ばしただけで、回廊に押し入ることはできませんでしたが……。わたくしたちの暦こよみでは百年近くも昔の話。ですが、あなたの手並み――東とう京けいにて狼ろう藉ぜきを尽くした竜神に振るった技の冴さえ、はっきりと覚えております」

　猿神の見つめる先を、護堂は注視した。

　馬小屋のなかに、いつのまにか一匹の蜥蜴とかげが入り込んでいた。

　蜥蜴のくせに、実に堂々たる姿だった。威厳にあふれている。見ているだけで、賛さん嘆たんのため息が洩もれそうになる。何なんだ、この爬は虫ちゆう類るいは？

　猿猴神君が話しかけているのは、まちがいなくこいつだ！

「あ、あなたはまさか――!?　そんな、どうしてこのような場所に!?」

　突然、祐理が口元を押さえて喘あえいだ。

　これまでは育ちのよい大やまと和なでし撫子こらしく、上品な挙きよ措そで控えていた彼女が。

「どうした、万里谷!?」

　顔を蒼そう白はくにして、唇くちびるを震わせながら、祐理は蜥蜴に見入っていた。

　がちがちと震えている。おそらく恐怖ゆえに。護堂は媛巫女に近寄り、なだめようとした。

「ご、護堂さんっ。あちらにいらっしゃる御お方かたは……御方は——」

　何を霊視したのか。身を震わせ、言いよどみ、畏おそれている。落ち着けと言う代わりに、護堂は祐理の肩に手をかけた。

「ほう、媛巫女とやらですか。なるほど、さすが神しん祖そたちの遠い遠い裔すえ。わたくしの素す性じようを視るとは、よい目をしています」

　蜥蜴の体から白い煙が立ちのぼる。

　次の瞬間、ちっぽけなサイズの爬虫類はひとりの美少女に変化した。

　絶世の佳か人じんと呼ぶに足る、黒髪の乙女おとめである。身にまとうのは古い中国の衣装——漢かん服ふくだった。裾すそが長く、袖もたっぷりとした羽織り状の上衣と、ロングスカート状のひらひらとした下衣。前合わせの衣服なので和服に似ている。

「おぬし、何といったかな？　名を訊いてもいいかね、同郷の神殺しよ」

「あなたの記憶に我が名を刻み込めなかった未熟さ、口くち惜おしく思います。ならば、ふたたび名乗りましょう。そして、死を以もつてふたたび忘却させてあげましょう」

　猿猴神君に向けて、美麗な唇が冷たく宣誓する。

「我が姓は羅ら、名は翠すい蓮れん、字あざなは濠ごう。聖教の教主にして武の頂点に君臨する者です」

恐るべき魔教教主、羅ら濠ごうもしくは羅ら翠すい蓮れん。

サルバトーレ・ドニ、デヤンスタール・ヴォバンにつづく三人目。草薙護堂が出会った新たなカンピオーネは、苛か烈れつにして壮絶なる乙女であった。

3

気を利きかせて別行動を選んだ騎士たちは、二ふた荒ら山さん神じん社じやまで来ていた。杉林に囲まれた、静かな社やしろ。きらびやかな東とう照しよう宮ぐうとは一線を画かくす、落ち着いた聖せい域いき。神しん韻いん縹ひよう渺びようたる玄げん妙みようさだと言えるだろう。見事なたたずまいだった。

ただし、エリカ・ブランデッリの好みからはやや外れている。

「悪くはないけど、地味なところよね。次はあっちのきらびやかな方を回りましょう」

「派手好きなあなたらしい。わたしはむしろ、こちらの静けさの方が好みだ」

リリアナがフンと鼻で笑った。ちなみに『あっち』とは無論、金きん箔ぱくや金ぴかの仏像で飾り立てられた東照宮の方である。

「ま、そこら辺は好き好きだと思うけど、リリィってば変に趣味が渋いわよね。もしかして今夜の宿って、こういう感じの地味なところ？」

「禅ぜん寺でらに泊まるツアーじゃあるまいし、こんなホテルがあってたまるか！」

口論とも雑談ともつかない会話。

奔ほん放ぽうなエリカ・ブランデッリと生き真ま面じ目めなリリアナ・クラニチャール。そりが合わないように見えて、いっしょに行動する機会が多い。とはいえ、私生活において主導権を握ってきたのはエリカの方である。

だというのに、最近のリリアナはその序列に逆らおうとしている。

一体、彼女に何が起きたのか？　軽く探りを入れるべく、エリカは何気なく言った。

「ところでリリィ。護堂の第一の騎士になるってあれ、進んでいるの？」

「ああ。個人的には上う手まくいってほしくない部分もあるが、おそらくわたしが期待した通りに進行していくだろう。わたしはいずれ名実共に草くさ薙なぎ護ご堂どうの右腕となるはず」

リリアナがどこか悲しげに答えた。まったく隙すきが見受けられない。

もっともエリカは知っている。この青き騎士は精神的な揺さぶりに弱い。さまざまな手段を使い、動揺を誘う。それが銀髪の旧友を攻略する最短ルートである。

「そういうの、やっぱり向いてないと思うわよ。リリィは几き帳ちよう面めんだし細かいところに気がつくけど、良くも悪くも大局を見ない人だし」

「大局を見ないだと？　わたしを侮ぶ辱じよくする気か？」

「侮辱じゃなくて、冷静な批評。ほら、深く考えずに突っ込んでいって、潜在能力の高さにまかせて障害を片づけて、なんとなく辻つじ褄つまを合わせるのがリリィの持ち味じゃない？　だから、いろいろ並へい行こうして賢かしこくやろうとするのは向いてないわよ、きっと」

冗談めかしながら、真実の輪りん郭かくを告げる。

ガリガリに痩やせている人間へ『あなた太った？』と言ってもダメージはない。ちょっとポチャッとしてきた人間にそう告げてこそ、相手は衝撃を受けるのだ。

この指摘でリリアナを軽く怒らせ、揺さぶりをかける糸口にしよう——。

だが、エリカの思惑は次の返答で破られた。

「……たしかにそうだったかもしれないな、今までは」

　どうしたことだろう？　リリアナは超然とした表情でうなずいた！　普段の彼女なら『そんなことはない！』と強弁し、しかし心のなかでは己おのれを顧かえりみてドキッとするはずなのに。

「だがエリカ、わたしは草薙護堂——我が唯ゆいーいつ無む二にの主君を助けるために、変わらなければいけないのだ。ならば、昨日まで無理だったことも全力で克服してみせるつもりだ」

　あげく、涼やかに宣言してみせた。

「……らしくないわね、リリィ。何かあったの？　カレンに余計なことを吹き込まれたとか、《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》の本部から変な指令があったとか？」

「そんなことはまったくない。なに、単なる心境の変化というやつだ」

　フッと微笑ほほえみながらリリアナは語る。

　どうやら彼女と護堂の間になされた密約を知る必要がありそうだ。エリカは旧友兼ライバルの表情をさりげなく観察した。この落ち着きが気に入らない。要チェックの兆ちよう候こうに思える。

　——人間、そう容易には自分を変えられない。

　何かの拍ひよう子しに決意を新たにし、新しい生き方を志す。珍しくもない話だ。

　しかし、それを持続できる者はすくない。ヘビースモーカーが『明日から禁煙！』と誓っても、おおむね一週間と保たない。しかし、その誰かがリリアナなら？　彼女が心を入れ替える目的が草薙護堂のためだったとしたら？

　だとしたら危険だ。リリアナ・クラニチャールは妄もう想そう気質の乙女おとめ。思い込みの激しさは天下一品である。そんな少女が『愛する人のために』という何らかのストーリーに酔う。

　彼女の弱点である不安定なメンタル面。

　それを支える拠より所どころ、精神的支柱が生まれてしまうかも

しれない。

　もともと心技体、そして智力を兼ね備えた逸いつ材ざいなのだ。おまけにエリカと並ぶ武芸のオ、エリカの持たない魔女の素養まで持つ。妙に小器用で、細こま々ごまとしたことにまで気を配る。

　精神的な弱点があるからこそ、今までは容易に制圧できていた。だが、その手が通じなくなるなら……。まず経過を観察しよう。場合によっては謀ぼう略りやくを以もつてリリアナの変化を阻はばむ必要がある。そのために準備をしなくては。

　エリカが旧知の人物に気づいたのは、こんな算段の真っ最中だった。

　ちょうど二荒山神社の鳥居をくぐり、東照宮の方向へ小道を歩き出したところだった。このとき、少年と少女の二人組が向こうからやってきたのだ。

「陸りく鷹よう化か……本当に日本に来ていたのね」

　すぐに頭を切り換える。二人組の片割れは、二年ぶりに会う香ホン港コン陸家の御おん曹ぞう司しだった。

「……なんとまあ」

　彼もエリカに気づき、驚いたようだ。が、すぐに愛あい想そ笑いを浮かべる。

「おひさしぶりです、エリカ姐ねえさん。こんなところで会うなんて、奇遇ですね」

　にこやかな口ぶりだが、目はまったく笑っていない。

　内に秘めた偏へん屈くつさをかいま見せる、どこか剣けん呑のんな目つきだった。

「おひさしぶりね、陸少しよう侠きよう。でも、奇遇というのはどうかしら。香港陸家の御曹司と《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の大騎士が日本の観光地で鉢はち合あわせしたのよ？　偶然以外の理由がありそうだけど」

「そうですか？　僕にはちょっと思いつかないですね」

　エリカの挨あい拶さつに、陸鷹化はわざとらしく肩をすくめた。

「ま、香港では多少のいさかいもありましたが、二年も前のことです。おたがい水に流して、仲よくやりましょうよ」

「それも悪くないわね。……ところで、そちらのお連れはどなた？」

　しらじらしく言ってから、エリカは少女の方を見る。

「女嫌いのあなたがガールフレンドを連れ歩くなんて、とても意外だわ。そうそう、先にわたしの連れを紹介しておきましょう。リリアナ・クラニチャール——《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》の大騎士で、古くからのお友達なの」

　友人などと紹介したら、普段なら全力で否定される。

　だが、リリアナは無言で成り行きを見守っていた。立ち姿だけで陸鷹化の実力を察したのだろう。力りきまず緩ゆるまず飄ひよう々ひようとたたずむ。いかなる事態にも即応できる、構えなき構え。

　しかし、彼の隣にいる凶暴な顔つきの美少女も負けず劣おとらずだ。エリカはほっそりとした肢し体たいからにじみ出る呪じゆ力りよくに気づいた。とてつもないレベルの魔術師かもしれない。

　上位魔術師、それも女性の場合、見た目通りの年齢だとは限らない。

　呪力が至し純じゆんの域に達した魔術師は、肉体の衰おとろえをある程度回復させることができる。つまり、実年齢よりも若くなる。しかも、この回復力は男性よりも女性の方が強い。

「この人はアーシェラ。連れではありますが、ガールフレンドじゃありません。半月くらい前までロサンゼルスでいろいろやってたそうです」

　詳しくは知りませんがと付け足しながら、陸鷹化も連れを紹介する。

「リリアナ・クラニチャールのお名前は存じ上げていますよ。エリカ姐さんと同じ程度の騎士で、同じ『王』に仕えているんでしょう？」

　さりげなくエリカもリリアナも見下す物言い。あいかわらず口が悪い。

　聞かなかったふりをして、『紅き悪魔デイアヴォロ・ロツソ』はうなずいた。

「ええ、草薙護堂にね。この名前もご存じのようね？」

「もちろんです。七人目の羅ら刹せつ王おう、最も若き極東の魔王。いずれお目通り願いたい……なんて言いませんよ。できれば一生会いたくない類たぐいの方々ですからね」

　歯に衣きぬ着きせず陸鷹化が言ったとき、アーシェラと紹介された少女が嗤わらった。

「なあ、陸鷹化。ここで巡り会ったのも逆縁の導みちびき。この娘ら、邪魔になる前に始末してもいいのではないか？」

　ニターッと邪悪に嘲ちよう笑しようしながらの提案。だが、エリカは表情を変えなかった。

　隣のリリアナもそうだ。もとより荒事の匂においは濃厚に漂っていたのだ。

「……姐さん。あんたがロスでしくじったのは、喧けん嘩かっ早ぱやくて相手を見くびる性格のせいだと思うよ。もっと慎重に、社交辞令とかも使ってさァ」

「ふん。どのみち教主は、かの猿王のふところに入り込んでいるのだ」

　ため息をつく陸鷹化に、アーシェラが暗い声音で答える。

「この国の戦士チヤンピオンとやらも、恐るるに足るまい」

「――教主!?　やはり羅ら濠ごう教主か！」

　聞き捨てならない呼こ称しようを、リリアナが即座に問いただした。

　エリカも眦まなじりを決して吐き捨てる。

「バカげた可能性だと思っていたけど、本当にやってくるとはね。……たしか廬ろ山ざんの庵いおりに引きこもる、極めつけの出で不ぶ精しようじゃなかったのかしら？」

「我が師し父ふは出不精だけど、神じん足そく通つうの遣つかい手てでもあるんでね」

　やれやれとばかりに、陸鷹化は頭を振った。

「その気になりさえすれば、世界中どこでもパッと行ってパッと帰ってこれるんだ。方術もあそこまでデタラメだと、全然うらやましくないから不思議だよ」

　縮しゆく地ち神しん功こう・神足通。瞬間移動を可能にする方術だと、前に聞いたことがある。

　この手の術は準備に手間と金がかかる。今の時代、飛行機や電車を使う方がむしろ簡かん便べんである。だが陸鷹化の言った通り、そんな神通力まがいの術を『パッと』使いこなすほどに極めているなら——。

　カンピオーネにして無む双そうの方術使い、これほどの弟子を鍛きたえた武芸者。

　うわさにたがわぬ魔教教主の怪物ぶりをかいま見て、エリカは気を引き締めた。

「……ま、無理に呼び出しを願ったせいで三度も意識を失って、あの世の親父やおふくろに呼ばれたりしたけどね。ったく、サンドバッグじゃないんだぞ、僕は……」

　何やらボソッとつぶやいてから、陸鷹化は眼光を鋭くする。

　不敵な面つら構がまえ。上うわ辺べだけの笑顔よりも、遥はるかに活いき活いきとしている。

「ひとまず落ち着きなよ、姐さん方。僕ら、まだやり合うとは決まってないんだぜ？　西天宮だっけ、あの祠では王様たちの首脳会談がはじまっているはずさ。僕らがあれこれするのは、その結果が出てからでいいじゃないか！」

第５章　武林の至尊、天下に号令す

1

　幽かくり世よの厩うまやでは、予想外の来訪者が眦まなじりを決していた。

「それにしても嘆なげかわしい。稀き代たいの英雄であった神がそのように矮わい小しよう卑ひ賤せん、畜ちく生しよう同然の姿に成り果てるとは……。腑ふ抜ぬけもいいところです。恥をお知りなさい」

「いや、畜生と言われてものう。見ての通り、畜生じゃし」

　麗うるわしき羅ら濠ごう教主にぴしゃりと言われて、猿えん猴こう神しん君くんは恥ずかしげに頭をかく。

　まあサルだしなァ。つい護ご堂どうがうなずいた直後——

「……倭わ国こくの王よ、今よからぬことを考えましたね？」

　じろり。教主に鋭くにらまれた。

　護堂は仰ぎよう天てんした。感想は一言も口に出していないのに、なぜわかる!?

「愚ぐ昧まいな。この羅濠は武ぶ功こうを極きわめ、武ぶ林りんの至し尊そんと呼ばれる者。あなたの不ふ遜そんな考えなど、顔を見れば察しがつきます」

　そうだったのか。……いや待てよ。

　感心しかけた護堂だが、すぐに首をかしげた。つまり、ただの当てずっぽう？

　何しろ相手はカンピオーネである。最初『この女性はもしかして心が読めるのか!?』と戦せん慄りつしたのだが、そんなこともないようだ。

「まだ不ふ敬けいなことを考えますか。まったく、倭国の王は礼節を知らぬようですね」

　静かに不機嫌さを示す羅濠教主。

　やはり当てずっぽうか。いや、表情の微妙な変化を見ただけで、漠ばく然ぜんと内心を察する。それだけでも十分とんでもない眼力なのだが。

「同格の『王』でなければ、非礼と断じて相応の報むくいをあたえるところです。しかし、同じ覇は道どうを歩む先せん達だつとして、寛かん大だいさを示しましょう。感謝しなさい」

「……それはどうも」

　この人は多分、誰に対しても上から目線なんだろうなァ。

　今まで出会ったカンピオーネとは、またちがうベクトルの変人だ。失礼千せん万ばんな人物評を悟さとられぬよう、護堂は無表情を心がけた。

「その巫み女こたちも本来であれば、わたくしの姿を直じかに見た咎とがで断罪せねばなりません」

　物騒なことをのたまって、羅濠教主は媛ひめ巫み女こ姉妹を見つめた。

　怖いもの知らずのはずのひかりが「す、すいません！」とびくつき、祐ゆ理りが震える体を押して妹にしがみつき、「ひ、非礼に対する罰は全て姉である私が！」と庇かばう。

　ふたりとも明らかに平静さを失っている。

　教主の美び貌ぼうと威い厳げんが生み出す、底冷えのするプレッシャーゆえだろう。

　たしかに、ある意味ではヴォバン侯こう爵しやくよりも怖い。あの老人は知的な外見のせいか、それなりに会話が成立しそうな雰ふん囲い気きなのだ。だが教主にそれはない。代わりにあるのは、つまらない発言をすれば即座に首を切られそうな恐ろしさだ。

「巫み女こたちよ。分ぶんをわきまえ、羅濠への直言を控えなさい。今わたくしは、同じ『王』と神に向けて話をしています。おまえたちを視界に入れるつもりはありません」

「ご、ごめんなさいっ！」

「申し訳ございません、教主！」

　無機質な声で宣告されて、姉妹はそろってすくみあがった。

　羅濠教主の叱しつ責せきは、怒りではなく無関心が生み出す類たぐいのものであった。

「あのー、どうして直に見たり話しかけたらダメなんでしょう？」

　ろくでもない返事を聞きそうな気はしたが、護堂は一応訊いてみた。

「わたくしのような身分の者が、民たみと直接交わるなどあってはならないこと。我が身を直視した者は己の両目を抉えぐり、我が声を耳にした者は己の耳を削そぎ、償つぐないとせねばなりません。ですが今は非常時。特別に不問としましょう」

「昔の皇帝みたいなことを言わないでくださいよ。下しも々じもとつきあいたくないなら御み簾すのなかに引っ込んでいればいいでしょうが！」

　予想外の回答に、思わず護堂はつっこむ。

　ところが、さらに斜め上を行く言葉が教主から飛び出した。

「……たしか草薙何とやらでしたか。草くさ薙なぎの王おうよ、その申しようはあやまりです。わたくしは古今東西の皇帝、覇は者しや、将しよう帥すいを凌しのぐ武の頂点。ゆえに、あらゆる支配者も及ばぬ崇すう敬けいを捧ささげられねばなりません。それが序列というものです」

これを『地球には重力が存在する』と語るように、自然な口調でのたまうのである。

羅濠教主の美び貌ぼうは、完かん璧ぺきなまでに怜れい悧りで落ち着き払っていた。

「えーと、歴史上のどんな王様よりもすごいって、何を根拠に？」

「それはもちろん、我が武芸と権能ゆえに。羅ら翠すい蓮れんが振るう拳けん脚きゃくは千の兵を屠ほふり、刀とう槍そうは万の兵を薙なぎ払います。わたくしが武の真しん髄ずいを絶技として示さば、百万の軍とて悉ことごとく屍し山さん血けつ河が。全ての国は虚むなしく破れ、山河のみが残る結果となりましょう」

「いや！　もっと政治とか経済とか文化のことも考えましょうよ！」

念のため確認してみたら、やはり。もしかして彼女は、ドニやヴォバンよりも危険人物なのでは？　既き知ちの魔王たちでさえ、それなりに社会生活を送っているのだ。だが、羅濠教主はおそらくアウトではないか？　まともな生活ができるとは思えない人生観の持ち主だ。

護堂は目先を変えることにした。

まともに問答してはいけない。緊急の問題についてだけ話し合おう。

「さっきサルの神様と戦うって言いましたよね？　突然やってきて勝手だとか、いつ不法侵入したんだとかとかは敢あえて言いませんから教えてください。一体、何のために？」

「その者を誅ちゅう殺さつするためです」

羅濠教主は即答した。

他た人にん事ごとのようにのほほんとしているサルを、護堂は改めて眺めた。

「我が国の英雄でありながら、倭わ人じんに飼われて遊び暮らすなど……まこと、度どし難がたい罪と言えましょう。このような輩やからの存在を知りながら放置したとあっては、羅濠の名折れ。かね

てより断罪の時を待ちわびておりました」

「あー……そのためにわざわざ日本までやってきた、と」

　そういえば、沙さ耶やの宮みや馨かおるも『めんどくさい神』と呼んでいた。

　いろいろと複雑な事情がありそうだ。しかし護堂は、そちらには興味を持たなかった。知らない方がいいように思えたのだ。代わりにサルの神様へ告げる。

「だそうだから、ここでチャチャッと決着つけるのはどうだろう？　たしか幽世のなかだと、人間の世界には被害が出ないんだろ？」

「うーむ。『それならオレには関係ないしー』と思ってるのが丸わかりじゃのう」

　猿えん猴こう神しん君くんに評されて、護堂は悪びれず認めた。

「うん、まあ……。百年前からの因いん縁ねんとかあるみたいだし、俺が口を出すことじゃないかなーって。人間社会に影響しないなら、どうでもいいよ」

「正直さは美徳じゃが、この場合は身もフタもないと言うべきかのー」

「いいだろう!?　俺だって、毎回神様や魔王と戦うのには飽き飽きしてるんだよ！」

　護堂の反はん駁ばくに、猿猴神君はあごの毛を撫なでた。

「この宮を建てた連中の呪じゆ術じゆつで、我の荒ぶる神格は封じられておる。おかげで『まつろわぬ神』であった我も、今はちぃとばかりお茶目なだけの只ただザルよ。しかしな」

　自称お茶目なサルは、羅濠教主を面倒そうに眺めた。

「この御ご仁じんは、本性を取り戻した我に用があるらしい。それにはややこしい条件を満たす必要があるのじゃが、ここに乗り込んできたのだから準備済みじゃろう。……で、まつろわぬ身となった我は、おそらく稲いな妻ずまの速さで現うつ世しよへ舞い戻るぞ」

「な、何でだよ？」

「幽かく世りよには人間がおらぬから、まつろわぬ我には面白くないのじゃよ。いじめるにせよ困らせるにせよ、相手にして愉しいのは現世の民たみ草くさじゃからの」

　つまり、猿猴神君の魔手から人間社会を守りたいなら、羅濠教主を妨害すべし——。

　護堂はゾッとしながら、絶世の佳か人じんを見た。

　常識に欠ける世間知らずの奇人。だが、カンピオーネとしての直感が告げていた。彼女はヤバイ。戦う相手としては、最悪の部類に入るはず……！

「腑ふ抜ぬけていた割に、己の立場は理解しているのですね。ならば話も早い」

　天下に号令を発するがごとく、羅濠教主は言った。

「これよりあなたを復活させるため、『弼ひつ馬ば温おん』の呪じゅ縛ばくを打ち消します。よいですね」

「ふうむ。その巫女めが宝刀を持っていたのは、もしやおぬしの差し金かね？　妙だと思ったんじゃ。竜が出たわけでもなさそうなのに、そいつを持参しておるから」

　ひかりの抱える斬ざん竜りゅう刀とうを見て、猿猴神君はつぶやいた。

「我をこの地に封ずる『弼馬温』の呪法。これを一時的に解くには、三つの条件が必要じゃ。第一は、我の敵たる竜蛇の神格が顕あらわれること。第二は、術を弱める『式』を仕込んだ宝刀があること。第三は禍まが祓はらいの巫女に宝刀を持たせ、霊力を使わせることじゃからのう」

　つまり、斬竜刀は緊急時のみ使用可能な宝物？

　護堂は焦あせった。すると九法塚青年は彼らとグル？　あるいは脅きよう迫はくとかされて……。

「竜神なり蛇神なりの用意が最も厄やっ介かいでしたが——。都合

よく首を差し出す者がいたので、どうにかなりました。神を生け捕りにするのはわたくしの武功を以もつてしても、やはり難しい。あるいは、あなたとの再戦は終生かなわぬやもと覚悟していたのですが」

いきなり呪力が高まった。

魔教教主の体から、おびただしい量の呪力が放散される。

これは権能の発動ではないと、護堂は判断した。もしそうなら、もっと本能的な危険を肌で感じるはず。ヴォバン侯こう爵しやくの権能をかいま見たときのように。

だが、エリカやリリアナが使う魔術と比べて、何と大きな呪力が動くことか。羅濠教主は身近な魔術師たちを凌りよう駕がする術者なのだと確信させられた。

「雲うん母もの屛へい風ふう、燭しよく影えい深く——」

佳人の喉のどが謡うたを奏かなでる。琴きん瑟しつの調べを思わせる、のびやかな美声だった。

「長河漸ようやく落ち、暁ぎよう星せい沈む。常じよう娥がは応まさに霊薬を偸ぬすみしを悔くゆるなるべし。碧へき海かい、青せい天てん、夜や夜やの心——」

魔術を行使するための口こう訣けつ。

だが、羅濠教主のそれは何と音楽的であることか。

この人物にさんざんな評価を与えていた護堂だが、そのことを後悔した。彼女はたしかに問題人物だが、持って生まれた才能と磨き抜いた技芸ゆえに許されるべきではないか。一瞬、そう考えてしまったのだ。

「嫦娥、弧ひとり棲すみて、誰と隣せん！」

ついに術が完成したようだ。何が起こる？

気をつけろと目配せする護堂に、祐理がうなずく。そしてひかりは——

　姉に抱きかかえられていたひかりはその腕を無理やりほどき、虚うつろな目で白しら木き拵こしらえの宝刀を抜き放つ。たしか名前は斬竜刀だったか。

「護堂さん！　あの宝刀が神君さまの封印を解く鍵かぎのようです。羅濠教主は膨ぼう大だいな呪力を注ぎ込むことで刀を目覚めさせ、そこに刻まれた術式を解き放ったんです！　ひかりもそれに呑のみ込まれています！」

　霊視したらしい祐理が叫ぶ。これは一刻の猶ゆう予よもなさそうだ！

「ま、待った！　羅濠さん、ちょっと待ってくれ！　あんたはサルの神様が地上に降りて、好き放題に暴れてもいいのかよ!?」

　ついに敬語もかなぐり捨てて、護堂は訴えた。カンピオーネという連中は、どうして年長者への敬意を素直に払わせてくれないのだろう。つくづく悩ましい。

「あんたはえらい王様なんだろうッ？　なら、普通の人のことも考えろ！」

「ええ。わたくしは武ぶ林りんの至し尊そんにして、何なん人ぴとにも掣せい肘ちゆうせられることなき覇王。わたくしが意を向けるべきは天の意志と地の理ことわり。人はわたくしにとって、決して慈いつくしむべきものではないのです。天地にとって、はたして人の存在は有益なるかどうか……」

　こんな問題人物が何で神様の権能を手に入れたのか。

　もっともらしくつぶやく教主を眺めながら、護堂は嘆きたくなった。

　くそ。この調子じゃ説得はムダ、力ずくで止めるしかないか……！　覚悟を固めかけた瞬間、佳人は微笑んだ。美び貌ぼうに彩いろどりを加える、幽ゆう艶えんな表情だった。

「なるほど。鷹よう児じもたまには正しいことを言います」

　何のことだ？　護堂は首をかしげた。

「若き魔王が誕生した倭国に乗り込み、その膝元で事を起こす以

上、過程はどうあれ彼と衝突するのは必ひつ定じよう。王を制しうるのは王のみ、ゆえにわたくしの光こう臨りんを願うと――ふふふ、何とあれが予言になるとは」

　軽やかな足取りで羅濠教主が近づいてきた。

　危ない――と思った瞬間には、肩をつかまれていた。

「草くさ薙なぎの王おうよ、武の頂点と仕合う運命に感謝しなさい。あなたを我が障しよう碍がいと見なし、羅濠の武と術を以もって蹴け散ちらしてくれましょう！」

　教主が腕を振った瞬間、天高く投げられた。

　護堂の体は馬小屋の屋根を突き破り、蒼そう天てんへと舞い上がっていく。

　なんという腕力！　それとも武術の奥おう義ぎとやらか!?　眼下に広がる中華風宮殿の全景を眺めながら、草薙護堂は恐怖に身を震わせた。

2

　陸りく鷹よう化か、そしてアーシェラなる少女と遭そう遇ぐうした直後。

　エリカは近隣のどこかで巨大な呪じゅ力りよくが弾はじけるのを感じた。誰かが強力な上位魔術を使ったようだ。これだけの余波を離れていても察知できるのだから、並大抵の術ではない。

「リリィ！」

「わかってる。すこし待て！」

　短いエリカの指示に、銀髪の旧友は即座に応じた。魔女の資質を持つ者は、通常の魔術師よりも感覚が鋭い。呪力の流れ、魔術の気配を、普通よりも鋭えい敏びんかつ的確に感じ取れる。

　リリアナの目がせわしなく四方を見回し、異変の発生箇所を探ろうとする。

「教主が事をはじめたようだぞ。陸鷹化よ、妾わらわは所定の位置まで飛ぶ」

　微笑を唇くちびるに貼はり付けながら、アーシェラが言う。

　大騎士たちの未熟を嘲あざ笑わらうかのような、余裕に満ちた嗤わらい。彼女の同行者はそれに「ようやくか」とうなずき、何気なく告げた。

「先に行って、はじめちゃってよ。僕はあとから走っていく」

　エリカは耳を疑った。先に行け？

　軽けい功こう卓たく越えつと謳うたわれる陸鷹化が余よ人じんに先行を許す。まさか、この少女は——。アーシェラの体が青い光に包まれた。そのまま打ち上げ花火のように飛び立つ。ぐんぐん上昇し、彗すい星せいのように飛んでいく。

　やはり《飛ひ翔しよう術じゆつ》！　エリカは疑惑が正しかったことを知った。

　自在に天翔る術は、魔女の素養を持つ者（もしくは同類の巫み女こ）にしか使えない。他の術師は空を飛ぶ何かを呼び出して、その上に乗る。だが、それでも魔女の速さにはかなわない。

「あなたたち——いや、羅ら濠ごう教主は何を目もく論ろんでいる!?　答えろ、武ぶ侠きよう！」

　リリアナが残された陸鷹化に詰きつ問もんする。

　だが香ホン港コン生まれの若き武侠は、不敵に笑って問いを無視した。

「そいつはこれから、自分の目でたしかめるといいよ。じゃあな、姐ねえさんたち！　腕比べは師し父ふと落ち合ったあとにしよう！」

　そのまま陸鷹化は走る。

　只ただの疾しつ走そうではない。リリアナやエリカたちが《跳躍》と呼ぶ術だ。半ば宙を飛ぶように、異様な脚力と跳躍力で激走する。獣けものやバイクなどとも並走できる、高速移動の術だった。

「エリカ、わたしは奴を追う！　先に行くぞ！」

　リリアナは叫ぶなり《跳躍》を使った。

　エリカもこの術を使えるが、速度と跳躍力ではあちらが上だった。

　これは《飛翔術》とちがい、体術や武芸に分類される。しかし、リリアナは天性身軽なうえ魔女だ。飛翔だけでなく移動に関する魔術全般で、魔女の適性は他の術者を凌しのぐ。

　——だが、それでも陸鷹化には及ばない。

　どんどん遠ざかる背中を目まの当あたりにして、リリアナは愕がく然ぜんとしただろう。

　彼女が得意とする《跳躍》。中華の武侠たちもこの術を《軽功》と呼んで使う。そして、陸鷹化は軽功卓越。誰よりも速く駆け、高く飛ぶ遣つかい手て。

　魔女ならぬ彼は『体術や武芸』として、この道を極めているのだ。

「駄目よリリィ！　あの子の身軽さには、あなたでもかなわないわ！」

　エリカは後方から銀髪の少女に叫んだ。

　あの速さに勝てるのは《飛翔術》くらいだろう。だが、あの術は飛ぶ前に目的地を決めておく必要がある。追跡向けの魔術ではなかった。

「どこで術が使われているのかを調べましょう。異常が発生した場所を特定させて、そちらに向かうのよ。その方が結果的には近道になるはずよ」

　悔しそうに戻ってきたリリアナに告げた。ついでに軽い冗談も

言ってみる。

「それよりリリィ、わたしの言う通りだったじゃない？」

「何がだ？」

「ほら、深く考えずに突っ込んでいくって。やっぱり、そういうのがあなたの持ち味よね」

「――!?　い、今のは向こうの力量を知らなかったからだ！　次はもっと冷静に、賢く立ち回ってみせる。いつまでもあなたにだけ軍師を気取らせてはおけないからな！」

　赤面しながら銀髪の騎士は力説する。どうやら敗北の悪影響はなさそうだ。

「そう？　なら、あの子に仕返しするチャンスを作ることにしましょう。リリィ、この辺一帯でどんな魔術が使われているのか調べてみて」

　エリカの要請に、リリアナは目をつぶった。精神集中のためだ。

　近くで使われている魔術、霊的な状況を調べる《呪法調査》。魔女が得意とする調査系の術だった。実は、多くの分野でリリアナはエリカよりも優秀な魔術師なのだ。

「――北の方角に、魔術で隠された神社がある。怪しげな結界まで抱え込んでいるオマケ付きだ。おそらくここが西さい天てん宮ぐうだろう。さっき感じた大魔術もここで使われたようだ」

「やっぱり羅濠教主のかけた術かしらね？」

　リリアナの報告に、エリカは相づちを打った。

「おそらく異世界アナザープレーンに関する術法だ。上位魔術師が数十人がかりで儀式を行い、ようやく行使できるような……。わたしが先導する。ついてきてくれ」

　今度はふたりそろって《跳躍》で駆け出す。

　ほんの数分で二ふた荒ら山さん神社の北に位置する神社へたどり着いた。

　リリアナが向かったのは境けい内だいの奥。そこには小さな祠ほこらと地面に落ちた注し連め縄なわがあった。しかも、すぐそばに九く法ほう塚づか青年が横たわっている。

「只の気絶ではないな」

「長期間、精神を魔術で支配されていたようね。何日か眠らせておけば、ひどいことにはならないと思うけど」

　九法塚家の若君は目を開けたまま呆ぼう然ぜんとしていた。目の焦点が定まっていない。ぽかんと開いた口は一言も発しない。その様子を眺めながら、リリアナとエリカはうなずき合った。

「ここが西天宮なのはまちがいなさそうだが、草くさ薙なぎ護ご堂どうたちはどこに？」

「甘あま粕かすさんの姿も見えないわね」

　空に変化が生じたのは、この直後だった。

　すこしずつ陽ひが傾きつつある秋の空。まだ十分に明るいとはいえ、あと一時間ほどで橙だいだい色いろに染まりはじめるだろう。

　その空の一角——日につ光こう山さんの真上に大蛇が顕あらわれた。

　地上から見上げた限りでは、体長おそらく数十メートルほどと思われる。異様に長々とした蛇じや身しんは、白銀の鱗うろこで覆おおわれていた。蛇を目撃したとき特有の、生理的嫌悪感はない。代わりにその強壮さ、厳げん粛しゆくとした美しさに心打たれる。

「まつろわぬ神……まつろわぬ、レヴィアタン……！」

　唐突にリリアナが叫んだ。

　まさか霊視!?　無視できない名前に、エリカは息を呑のんだ。

「リリィ、今レヴィアタンと言ったわね？　あの蛇神の名前？」

「ああ、まちがいない。かの神の神名、たしかに視みえた。万ま里り谷や祐ゆ理りがいれば、来歴や由来まで霊視できたかもしれないが……」

地じ母ぼ神しんとの遭遇で魔女の力は一時的に高まる。その系けい譜ふに連なる竜や蛇の神格とでも、同様の変化は起きるらしい。リリアナの託たく宣せんを聞いて、エリカは考え込んだ。

「……半月ほど前、ロサンゼルスに『まつろわぬ神』が顕れたそうよ。巨大な蛇の姿で、おそらくレヴィアタンの神格だと賢人議会がレポートを公表していたわ」

「ジョン・プルートー・スミスによって撃破されたという、あれか」

「ええ。《蠅はえの王》の邪術師が招しよう聘へいの儀ぎで顕けん現げんさせたと推測されていたわね。……以前、彼らの総帥はアーシェラという名前の魔女だと聞いたことがあるわ」

「さっきの魔女もアーシェラと呼ばれていたな。おまけにロスから来たとも」

　こちらの言わんとするところに、銀髪の旧友も気づいたようだ。

「あげくにレヴィアタンまで顕現したんだから、同一人物だと考えてもいいわよね。で、わたしはもうひとつ気になったの。いくら最強の邪術師でも、単独で『まつろわぬ神』を招聘できるものかしら？　無理があると思わない？」

「もちろん無理だ。できるはずが……いや。まさか——神しん祖そ？」

　魔術師の間で、ひっそりと伝えられてきた神話がある。

　かのペルセウスのような竜殺しに征服された大地母神のなかには、弱まり、落ちぶれ、神の座から逐おわれた者も稀まれにいたという。彼女らは《神祖》と呼ばれる魔女となった。

　人の姿をしているが人ではない。

　神には及ばぬが人を超越する異能の主。不老不死の乙女。

　彼女らは永遠の命を捨て去ることで、荒ぶる地母神としての神格を取り戻すともいう。すなわち竜神、蛇神としての復活である……。

「まさか《蠅の王》の総帥アーシェラは正しよう真しん正しよう銘めいの神祖だったのか……？」

「アーシェラという名前、アシェラトが変化したものかもしれないわね。旧約聖書をはじめ各地の神話に登場する海獣レヴィアタンは、メソポタミアのアシェラト女神を悪あしき獣けものとして語り変えた神格ですもの」

　ふたりは改めて空を見上げた。

　いつのまにかレヴィアタンの全身は縦じゆう横おうに走る大小の傷で埋め尽くされていた。

　全ての傷口がじくじくと血を流している。蛇神は空中に浮かんでいるのだから、出血は当然地上に向かっていった。

　霧雨のように鮮血の紅くれないが降っている。日光山を紅あかく染めている！

「このなかで一体、何が起こっているの……⁉」

　闇やみしか見えない格こう子し戸どの奥をのぞき込みながら、エリカはつぶやいた。

3

　馬小屋の屋根を突き破り、草くさ薙なぎ護ご堂どうの体が飛んでいく。

　羅ら濠ごう教主も漢かん服ふくの裾すそをひらりとなびかせながら、宙に舞い上がった。自みずから投げた若きカンピオーネを追って、比ひ喩ゆではなく飛び出していく。

　鳥のごとく空を飛ぶ《空くう行こう術じゆつ》。これは、巫かんなぎの資質を持つ道どう姑こにしか使えない方術である。羅濠教主はリリアナ・クラニチャール同様、欧おう州しゆうでいう魔女でもあったのだ。

しかし、厩うまやの方でも異変は終わっていない。

祐ゆ理りは妹と猿えん猴こう神しん君くんに起きた変化を目まの当あたりにして、恐怖した。

「ほのぼのと明石あかしが浦うらの朝あさ霧ぎりに嶋しまがくれ行く舟をしぞ思ふ」

ひかりが謡うたいながら小こ太だ刀ちを振り回す。



東の方位を斬きり、南の方位を斬り、西の方位を斬り、北の方位を斬る。今、幼い妹を突き動かしているのは小太刀――斬ざん竜りゅう刀とうに刻まれた、得体の知れない呪法だった。

「男の一いち陽ようの女の一いち陰いんに合して懐かい妊にんす。其その最初をひとまるという。十と月つきに満して人体となる。所しょ詮せん我が身をはなれぬ人丸と知るべし」

ぎこちない足取りで猿猴神君の周囲をまわり、刀を振り回し、謡う。

――現うつ世しよと幽かく世りよを結ぶ回かい廊ろうの出入り口である、四角い穴。人が背をかがめて通れる程度の穴だったのが、いきなり広がった。厩うまやの壁いっぱいにまで、一気に広がってしまった。

これまで、この穴のなかは暗くら闇やみだった。だが、今はそこに空が映っている。

夕焼けの紅あかい空。これは地上の風景、現世の空なのか。

しかも、かなり遠くの方に何かが浮かんでいる。祐理は目を凝こらした。あれはとぐろを巻く蛇へび――空中に浮かび、鮮血を霧雨のように地上へ降らせている！

「ほほう。あの蛇神め、ちょうどよく傷を負っておるわ」

いつのまにか猿猴神君の全身が石化していた。これでは身動きできまい。

この石が卵の殻からのように破れるとき、猿猴神君は『まつろわぬ神』へと新生する！　霊視力の導みちびきで、祐理は理由もなく確信した。

「我は鋼はがねの郎党、竜蛇を征する星のもとに生まれた神。ゆえに竜蛇の血と神力は我らを昂たかぶらせ、荒ぶる本性を思い出させる劇薬にもなる。ふふふ、今にして思えば只のサルとして怠たい惰だに暮らす日々も悪くはなかったのう。嗚あ呼あ、口くち惜おしや口惜しや！」

石猿となりながらも、猿猴神君は今まで通りに話す。剽ひようげ

た口ぶりも変わらない。

　だが、そこにある種の凄すごみ、力感のような要素が加わっていた。

　しかも、石になった全身のなかで目だけが生身だった。両目がいつのまにか真っ赤に変色していたのだ。本来、白であるはずの眼球が紅く、瞳どう孔こうの部分だけが金色。

　――火か眼がん金きん睛せい。これは中華の聖せい獣じゆうが稀まれに持つ霊れい眼がんである。

「神君さま、どうぞ御お鎮しずまりください！　何なに卒とぞお願いいたします！」

「そうしてやりたいのはヤマヤマじゃが、上う手まくはいかんのう。まあ、これはいわば酒に酔うようなもの。……いや、血に酔うと言うべきか」

　祐理の訴えに、猿猴神君はどこか超然と答える。

　それは浮き世の垢あかが決して身につかない、神族としての物言いだった。

「さて、有う為い転てん変ぺんは世の慣い。一寸先は闇と申す。かの羅ら刹せつ女めも、あるいは土ど壇たん場ばで裏切るやもしれぬ。万一のために備えはしておくべきよな」

　石猿の瞳が金色の光を放つ。

　すると彼の周囲をまわっていたひかりが足を止め、ひざまずいた。

「巫み女こや、おぬしの力をこの宝刀めに注ぎ込め。器うつわから零こぼれ落ちそうになるまで目一杯にじゃぞ？　力の限りにやるがいい」

「血の道は父と母との血の道よ、血のみち留めよ、命も止まる血のみちの神――」

　ひかりは斬竜刀を恭うやうやしく目の高さに掲げた。

　妹の言こと霊だまが進むに連れて、禍まが祓はらいの霊力が斬竜刀に注ぎ込まれていくのを祐理は感じた。邪を祓い、呪を破る幸いの加護が宝刀に溜め込まれていく！

「——!?　そのようなご狼ろう藉ぜきはおやめくださいませ！」

「ははは、許せ許せ。この巫女めの力と体が、我にはどうしても必要なのじゃ！」

　軽やかに猿猴神君は笑う。

　この状態でも、どうやら多少の神通力は使えるらしい。

　何にひかりを使うつもりかはわからないが、もう迷っている暇はない。一刻も早く逃げ出さなくては！　祐理は黙って、精神を集中させた。

　そのまま数十秒。十分に心気を高めて妹の体に飛びつき、『転移』を試みる。

　ある地点から遠く離れた地点への瞬間移動。幽世でしかできない移動法。

　猿猴神君を閉じ込める結界から出られないことは、さっき確認した。だが、向こうに見える宮殿内になら。そして、今まさに窮きゅう地ちにいるはずの草薙護堂のもとになら——！

　本来、霊視の力は自由に使いこなせるものではない。

　しかし、幽世にいる間はそこそこ恣し意い的にコントロールできる。

　この世界にたゆたう『虚空の記憶』へ意識をつなげ、馬小屋の周辺がどうなっているのかを霊視する。そうして得たイメージを元に、転移……！

　結果は成功だった。祐理とひかりの体が、瞬間移動を開始した。

　虚うつろな瞳の妹は無言。腕のなかで、おとなしくしてくれている。よかった、これでいっしょに逃亡できると祐理は安あん堵どした。

「ほう。逃げるかね？　まあ、我の体はまだ自由にはならぬ。好きにすればいいさ。あとで鬼ごっこを愉たのしませてもらうとしよう」

　だが消え去る直前、猿神のつぶやきを聞いてしまった。

　人をもてあそび、世界の理ことわりを覆くつがえす『まつろわぬ神』としての宣告。そして脱力したひかりの手から落ちた斬竜刀は、石猿の厩に置き去りとなってしまった。

4

　空中高く舞い上がる。そのあとは当然、地上めがけて落下する。

　幽世かくりよとかいう謎なぞ世界にも、重力は存在するらしい。こんなところは地上に合わせなくてもいいのにと、護ご堂どうは呪のろいたくなった。

　尚なお、到達した高度は、城の全景が見渡せるくらいの高さである。

　想像していたよりも広い。いや、広すぎる。四方を城壁で囲まれており、ほぼ正方形に近い形だ。一辺の長さは一キロ近くありそうな気がする。城内には大小さまざま、おびただしい数の建物があった。

　宮殿と呼ぶべき比較的大きな建物は、おそらく三～四〇ほど。もしかしたら、何々殿でんとか何々宮きゆうなどと呼ばれているかもしれない。

　もっと小さな建物は数え切れない。ざっと見ただけでも一〇〇以上はありそうだ。

　城壁も高い。一〇メートルを超えているだろう。しかも、壁の上に楼ろう閣かくまで設もうけてある。

　――この広壮な城内を見下ろしながら、護堂は墜つい落らくしていった。

「うわああああああああああああッ!?」

　時間にすれば数秒の出来事だっただろう。

　墜落完了。広場とおぼしき場所の石いし畳だたみに、護堂は背中から落ちた。

　そして驚きよう嘆たんした。たいして痛くない！　あちこち打だ撲ぼくしているが、これは屋根を突き破ったときに負ったものだ。

　悪夢のような高さから固い地面に落ちて、ノーダメージ。普通ではない。そもそも、人間は重い頭部を下にして墜落するはず。護堂はゾッとした。

　柔道の達人は、投げた相手にあたえるダメージをコントロールできるともいう。だが、それは相手の体をつかんでいるから可能な芸当のはずだ。羅ら濠ごう教主は完全に手放しで、天高く投げ飛ばしていた。

　――『武功を極きわめた』と教主は言った。

　つまり、こんな奇跡を実現させるほど常識離れした達人なのか！

「やはり仕し合あいをするのであれば、広いところが望ましい。草くさ薙なぎの王おうよ、あなたには恨うらみも怒りもありません。適度に痛めつけて、蒙もうを啓ひらく程度で勘かん弁べんしてあげましょう」

　空中から舞い降りてきた羅濠教主が宣告する。

　この人、空まで飛べるのか!?　着地する美女へ、護堂は言い返した。

「蒙って何だよ！　あんたに教わることなんて何もないぞ！」

「羅濠の勅ちよくに逆らう。この所行を蒙と呼ばずに何と呼ぶのです？　――嗚あ呼あ、小知は大知に及ばず、小年は大年に及ばず。朝ちよう菌きんは晦かい朔さくを知らず、恵けい蛄こは春しゆん秋じゆうを知らず。亦また悲しからずや」

　たしかに、教養では勝ち目はなさそうだ。愚おろか者と言われたのだろうと察しはつくが、細かい意味は不明だった。

　そして、気づけば絶世の佳か人じんは護堂の眼前にいた。

　――え？　いつ接近されたのだろう？　まったくわからなかった。

　羅濠教主の繊せん手しゆで肩をつかまれる。また高々と投げられた。ふたたび天高く空中遊泳。そこから墜落。さっきよりも痛い。

　三度つかまる。投とう擲てき。浮遊、落下。前回よりも強烈な衝撃。息が詰まる。

　四度目。同じことの繰り返し。また背中の痛みが増した。今度は後頭部も打ちつけた。

　徐々にダメージが増えていくよう、完かん璧ぺきにコントロールされている！　護堂はそれを戦せん慄りつと共に確信した。このループから脱出しなくてはまずい。

　投げられながら、気づいたことがある――。

　護堂はウルスラグナの権けん能のうを行使した。『雄牛』の化身。怪力の持ち主と対決するときだけ使える、剛力の特殊能力だ。

　羅濠教主に胸ぐらをつかまれた、五度目。

　腰を落とし、足を踏ん張る。今度こそ投げられまいと、護堂は剛力を解放した。

「ほう……。ふふふ、すこしは歯ごたえがあるようですね」

　艶つやっぽく教主が微笑ほほえむ。今まではほとんど変化を見せなかった冷たい美び貌ぼう。だが荒事になった途端、表情の端はし々ばしに得えも言われぬ色いろ香かが漂いだした。

　どういう人なんだと舌打ちしながら、護堂は力を振り絞る。

『雄牛』が使用可能だと気づいたのは、投げられている最中。羅濠教主はとんでもない怪力で天高く護堂をぶん投げ、驚嘆すべき武術の技でダメージを制御している。

　そうと察しをつけての抵抗だった。

　今ならわかる。胸ぐらをつかんだ教主の繊手に、すさまじいパワーが宿っている。

　それに対して『雄牛』のパワーで抗あらがい、投げられることを拒む。

　怪力と怪力が競い合う。拮きつ抗こうする。ついに護堂は不可思議な投げ技を防いだ。

　だが次の瞬間、足払いで転倒させられた。

　また背中と後頭部を打った。しかし、バカげた飛距離は出ない。今のはおそらく、純粋に技だけで倒されたのだろう。

「考えてみれば、あなたも神殺しのひとり……。相応の牙きばを持つのは当然ですか」

「そっちこそメチャクチャだ！　そのバカ力があんたの権能だな！」

　護堂は決めつけた。

　ほっそりとした美女に似合わぬ大力。その正体を考えると、頭がちくちく痛む。

　スサノオについての知識を得たときのように、霊視が働こうとしている。あんな激痛を抱えて戦うわけにはいかないので、これ以上の詮せん索さくは避けた。

「ええ。わたくしが阿あ吽うん一いつ対ついの仁に王おうより簒さん奪だつした『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』です。……非力なる者を強者にしてこその武術。しかし、剛力なる壮者が至高の技を会え得とくしたときに得る武功はその比に非ず。今より武の極みを見せてあげましょう」

「そりゃ達人に化け物のパワーが加わるんだから、強いに決まってるよ！　反則だ！」

　護堂の叫びを無視して、羅濠教主の体から呪力がほとばしる。

　なんという強さ、濃密さ。

　もしかして、放出する呪力の量に比例して怪力も高まっていくのだろうか？　少年マンガでおなじみの場面と遭遇して、そんな憶測が脳のう裏りをよぎる。

「天てん道どう晴せい明めい、地ち道どう安あん寧ねい、人じん道どう虚きよ寧ねい！　――哈ハ！」

　教主は強烈な気合い声を放ち、一歩踏み出した。

　ふたりが立っているのは開けた広場の上。彼女が踏んづけた箇所から、ひび割れが放射線状に走る。広場の石畳はほとんどが砕け散った。

　たった一歩、踏み出しただけで！

　当然、護堂の足下でも石畳がバラバラに砕けている。悪夢か笑い話のような光景だ。

「ち、ちょっと質問！　サルバトーレ・ドニを知っているか!?　あいつとあんたは、どっちの方がすごいんだ？　剣士とか武術家としてって意味だけど！」

「サルバトーレ……？　そういえばおりましたね、そのような名の『王』が」

　護堂の問いかけに、教主は律儀に答えてくれる。

　ウルスラグナの権能を見ても、まだまだ本気ではないのだろう。当たり前だ。どう考えたって、草薙護堂より羅濠教主の方が一〇〇万倍は強い。

「あの者とは一年ほど前に会いました。剣術だけなら、わたくしに近い腕前でしょう。ただし他の武芸がまったくなっていません。未熟と言わざるを得ませんね」

　欧州の騎士たちが異端の天才と畏おそれる剣士を未熟呼ばわり。

　ああ、やっぱり。護堂は暗あん澹たんたる思いで納得した。

　戦闘中のカンピオーネは異常な集中力を発揮する。その恩恵に与あずかった護堂の動体視力は、メジャーリーガーの剛速球もどうにか見切るはず。

　サルバトーレ・ドニの剣は、動く気配くらいなら感じ取れた。

　なのに、羅濠教主の攻撃は気配すら読めない。多分、これが達人の技なのだ。護堂には理解の及ばない、おそろしく深しん遠えんな武芸の奥おう義ぎ……！

　どうする？　どんな化け身しんで立ち向かう？

　できれば『駱らく駝だ』を使いたい。だが、あのバカ力で殴られて生きていられるか？

　なら『鳳おおとり』は——絶対に避けたい。かつてサルバトーレ・ドニに破られた化身だ。羅濠教主に通用するとは到底思えなかった。

　……仕方ない。護堂は覚悟を決めた。

　正面切っての斬きり合い・殴り合いが得意な連中の流儀につきあってはいけない。それは危険だし、戦術的に意味がない。カンピオーネになって以来、身を以もつて学んだことだ。

　可能な限り戦局をかき乱す。まともに戦うまいと覚悟を決めた。

　ウルスラグナ第二の化身『雄牛』の力を使うときは、怪力を振るう対象が重要だ。上う手まく活用すれば、ナポリの壮そう麗れいな聖堂すら廃はい墟きよに変えるパワーなのだ。

　両足の底から、大地のエネルギーが体内に流れ込んでくる。

　今回、この力を使う対象は——草薙護堂の体！

「でやァァァァァァッ!!」

　意味のないかけ声と共に、護堂は思いきりジャンプした。

　陸上や体力測定でおなじみの、立ち幅跳びの要領だ。羅濠教主の頭上を飛び越え、踏み切った地点から十数メートルほど跳んでみせた。

『雄牛』の怪力は、振るう対象に応じて強さが変わる。四トンのトラックに使えば、これを両腕で持ち上げることもできる。逆を言えば、七〇キロそこそこの草薙護堂に使っても、小なりとはいえ効果

を得られる。

『雄牛』の臨界点から見れば、かなりささやかな恩恵だ。

　だが、羅濠教主の正面から脱出することが目的なら、こんなもので十分。

「——む!?」

　美麗な眉をひそめ、教主がこちらの方を振り向く。

　その間に護堂は次の行動に移っていた。走る。とにかく走る。目指す方向には豪華な宮殿の建物があった。だが、宮殿内の中庭を隔へだてる壁が立ちはだかる。

　高さは五メートルほど。目的地はこの先——。護堂は壁に両手をついた。

　この壁全体に対して『雄牛』の怪力を使う。みしみしと剣けん呑のんな音が響く。さらに力を振り絞る。剛ごう力りき強きよう精せいの源みなもとたる大地のパワーが護堂の全身を満たす。

「オオオオオオオオオオオッ！」

　絶叫が喉のどの奥からほとばしった。

　同時に護堂の両腕は、立ちはだかる長大な壁を突き崩してしまった。

「——おお!?　すばらしい膂りよ力りよくです！　みごとなり、草薙王よ！」

　背後から乙女おとめの賛嘆が聞こえてくる。

　こちらの腕力を見せるたび、彼女からの評価が上がっていくような……。羅濠教主はもしかして、筋肉に何か異常な執着があるのだろうか？

　愚ぐにもつかないことを考えながら、護堂はまた走り出した。

　ちらりと後方を振り返る。

　満足げに微笑しながら、教主はゆるやかな歩調で追いかけてく

る。

　草薙護堂を雄敵と認めた様子ではない。だが、それなりに歯応えのある相手とは見なしはじめたようだ。悠ゆう然ぜんと追ってくる。よし。これなら余裕で目的地にたどり着ける――。

　羅濠教主の横綱相撲に感謝しながら、護堂はついに宮殿の内部に入り込んだ。

　あとは適当な広間を見つけて、待つだけだった。

　数分後、羅濠教主が追いついてきた。彼女の小さな足を包む沓くつは、わずかな足音すら立てない。森の梢こずえを揺らす微風のように、佳人は近づいてくる。

　護堂はひそかに舌を巻いた。予想よりもだいぶ早く現れた。

　かなり広い宮殿のなかだというのに、こんな短時間で発見されるとは……。

　魔術でも使って護堂の位置をつきとめたのか、それとも武芸者の勘か何かで気配を察知したのか。いずれにしても、常識がまったく通用しない人物だ。

「草薙王よ、何かを仕掛けるつもりですね？」

　教主は高みから見下ろすように、護堂を眺めていた。

「あなたの目の輝きが、秘めた企たくらみの存在をわたくしに教えてくれます。この羅濠、逃げも隠れもいたしません。その秘策、存分に試してみなさい！」

「わかってて、こっちの好きにさせるのかよ？」

「当然です。わたくしのような武の大たい家かが少壮の若じやく輩はいをなりふり構わず打ち負かすなど、あってはならないこと。これは武ぶ林りんの慣い、遠慮は無用です」

　悠々たる通告を、護堂はありがたく受け容れた。

　胸を貸してくれると言うのだから、喜んで借りよう。圧倒的強者がくれたハンデを突っ返すほど、こちらはフェアプレーの精神には富んでいないのだ！

　護堂は新たな化身、『猪いのしし』を行使した。足下の床が黒く変色する。

　この黒色は、すぐに漆しつ黒こくの毛皮となった。

　容よう貌ぼう魁かい偉いにして巨大、雄壮にして傍ぼう若じやく無ぶ人じんな黒き『猪』の顕けん現げんだった。

「鋭く近寄り難き者よ！　契約を破りし罪ざい科かに鉄てつ槌ついを下せ！」

　言こと霊だまを叫んで神獣を焚たきつける。

　踏みしめていた床は、今や『猪』の背中になっていた。護堂はそのまましゃがみこみ、黒い毛を力の限りつかむ。これで準備は万端、思う存分やれ！

　オオオオオオオオォォォォォォォンンンンンッ！

『猪』の咆ほう哮こうが響く。広間の床を叩き割りながら、神獣の全身が浮上する。

　巨大な物体を破壊するときだけ使える化身。護堂が想定した目標はこの宮殿である。どうせ人間社会の建物ではないのだ。派手にぶっ壊しても問題ないはず。

「今度こそ俺の言うことをちゃんと聞くんだぞ！」

　オオオオオオォォォォンンンンン!!

　威勢のいい返事（？）がこだまする。本当にわかっているのだろうか？

「顕けん身しんを呼びましたか。あなたの権能、剛力だけではないのですね」

　魁偉な『猪』の巨きよ躯くを見上げながら、羅濠教主が優雅につぶやいた。

さほど脅きよう威いには感じていないようだ。

さすがカンピオーネ、並の神経ではないのだろう。まあいい。この状況になれば、彼女との真っ向勝負も避けられる。こいつを呼んだのは、そのためなのだ。

ルオオオオオオオォォォォォォンンンンンンッ!!

咆哮と共に『猪』が動きだす。床を踏み割り、柱を突き崩しながら突進を開始する。

数十秒後、黒き神獣は宮殿を粉砕しながら外へと躍おどり出た。

羅濠教主は崩れゆく建物のなかに置き去りだ。……死んでいなければいいのだがと、惨さん状じようを眺めながら思う。狙ねらってやったとはいえ、さすがに気が咎とがめた。

もっとも相手はカンピオーネ、どうにかして生き延びているのはまちがいない。自分の同類や神様たちの不死身っぷりに関しては、かなり楽天的な護堂であった。

（この数カ月、さまざまな朱と交わって赤くなった結果である。本人の自覚はうすいが）

外に出てからも『猪』は動きを止めない。

まだ壊し足りないのか、突き破ったばかりの宮殿に再突撃をかける。壁が砕け、柱が折れ飛ぶ。宮殿はまたたく間に廃はい墟きよに変わっていく。

「バ、バカ野郎ッ！　せめて俺を落とさないようにしろ！」

やりたい放題にする相棒（？）の背中で、護堂は叫ぶ。だが舌を噛かみそうになったので、以後は控えた。黒い毛皮を必死につかみ、うつ伏せになるように体を投げ出し、振り落とされないためにしがみつく。

命いのち懸がけのロデオ。しかし、こうしている間は羅濠教主と向き合わずに済む。

こちらの方がまだ安全。そう判断しての、苦肉の策だった。正面切っての戦いがまずいのだから、卓ちや袱ぶ台だいをひっくり返す

ように戦場をぶち壊せばいい。

　――それにしても『猪』のヤツ、意外ときれい好きなようだ。トリートメントに気を遣つかう性格とも思えないのに毛並みはサラサラだし、毛皮からはイヤな獣じゆう臭しゆうも匂におってこない。

　黒い『猪』の性せい癖へきを再確認しつつ、護堂は考える。

　ひとまず羅濠教主をやり過ごせたが、これで終わりになるはずがない。祐ゆ理りやひかりと合流して、とっとと逃げ出す方がいいだろう。

　……ここで『猪』が動きを止めた。どうやらタイムオーバーか。

　護堂は気を引き締め直した。神獣の背からは、廃墟の惨状が一望できる。

　羅濠教主が生き埋めになった宮殿の残ざん骸がい。だが、かろうじて原型を保っている。まだ壊そうと思えば壊せるはず。なのに、獰どう猛もう無む比ひな神獣は動かない。

　目の前の瓦が礫れきにウルゥゥゥゥと唸うなり、凶悪な牙きばと鼻はな面づらを向ける。突撃の準備運動をするように、後ろ足でガッ、ガッと落ち着きなく地面をひっかく。

　おそらく、こいつの破壊活動を邪魔する唯ゆい一いつの存在が動きだすのだろう。

　そう、このまま終わるはずはないのだ。

　サルバトーレ・ドニなら、あの程度の崩落は鋼鉄の肉体で切り抜ける。デタラメな魔剣で瓦が礫れきの山を斬り裂き、脱出を果たす。ヴォバン侯こう爵しやくは巨きよ狼ろうに変身して生還するはず。

　だから羅濠教主が窮きゆう地ちを脱するのは、もはや予定調和――！

　確信と共に見入っていた護堂だが、次の展開には呆あきれ果てた。まさかそんな手でくるとは。

「哈ハ――ッ！」

　羅濠教主の美しいかけ声が響き渡る。

　廃墟となった宮殿の建材が、次々と吹き飛ばされていく。

　それを行っているのは、急旋回する美少女の肉体。両腕をまっすぐ左右にのばした体勢で、教主はプロペラのように回転している！　しかも、この人間プロペラは折り重なる瓦礫を弾き飛ばしながら、空に浮上していったのだ！

　そんなバカな。あんぐりと口を開けて、護堂は絶句した。

　怪力の権能、さっき見た空を飛ぶ魔術、プロペラまがいの旋回を可能にする体術。

　それらと、どうやっているのかは不明だが堅い木材や石にも負けない肉体の頑丈さを組み合わせて、あんな芸当を可能にしたのだろう。

　いくつか予想した脱出劇のどれにも合がつ致ちしない、非常識な光景だった。

　羅濠教主を吊り上げるワイヤーが空にあるのでは？　埒らちのないことを思ってしまった。

「誉めてあげましょう、草くさ薙なぎの王おう！　羅濠の衣ころもに土つち埃ぼこりをつける者は滅多におりません。しかし、あなたはみごとやってのけました。——ふふふ、サルバトーレ某なにがしといい、英えげれす吉利国こくのひねくれ者といい、ここ一〇年で三人もの魔王がこの難行に成功するとは……。覇は道どうの先達として嬉しく思います！」

　旋回と浮上をやめ、ガレキの上に降り立った教主が言う。

　たしかに、彼女の白い漢服は土埃で薄汚れている。だが、細い体の方はまったくの無傷。髪の一筋すら乱していない。

　しかも何か魔術でも使ったのか、衣服が一瞬で改まった。仙せん女にょを思わせる淑しとやかな漢服から、チャイナドレスにも似た華やかな衣へ。開いた胸元と裳スカートのスリットからは玉の肌がかいま見える。だが、護堂は妙な気持ちになったりはしなかった。

　彼女は立ち回りに備えて、動きやすい衣服に着替えただけなのだ

から！

「……本当は、あなたに三手譲るつもりでおりました」

　翠すい蓮れんの名と濠ごうの字あざなを持つ大たい人じんは、にこりと微笑んだ。

　無む垢くで可か憐れんな、すばらしい乙女の笑顔。性根のねじくれた頑固者でさえ蕩とろかしかねない、花のかんばせ。しかし、それを直視した護堂は胃がひっくり返る思いだった。

　——本気だ。理由もなく確信できた。

　この無邪気な可か憐れんさは、教主が本気になった証あかし。そうにちがいない！

　危機を察知するカンピオーネの勘か。護堂はこの思いつきを疑わなかった。

「でも、もうやめておきましょう。あなたにあと二手を許せば、わたくしといえども不覚を取りかねません。ですから、先達として譲るのは先の一手まで。……ここよりは全力の羅濠で、あなたに武の険しさを示します」

　どこか可愛かわいらしく、慎つつましやかに言い渡された。

　高みから見下ろすような今までの物言いよりも、むしろ恐ろしい。

「我が権能、『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』はすでに見せました。今から披ひ露ろうするのは『竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』。この大絶技ふたつを以て、わたくしは武ぶ林りんの至し尊そんとなったのです」

　すぅぅぅと羅濠教主は大きく息を吸い込み、美声と共に吐き出した。

「去年は戦う桑そう乾けんの源みなもとに。今年は戦う葱そう河かの道に。兵を洗う條じよう支し海上の波。馬を放つ天てん山ざん雪せつ中ちゆうの草。万ばん里り長ひさしく征戦し、三さん軍ぐん盡ことごとく衰すい老ろうす」

美しい謡うた声ごえだった。しかし、教主の周囲にある全てが吹き飛びだす。

瓦礫が、建物の残ざん骸がいが、まだ無事だった宮殿の壁や石いし畳だたみが、強風で飛ばされるように。彼女の謡うたは、万物を薙なぎ倒す魔風さながらだった。

「匈きよう奴どは殺さつ戮りくを以て耕作と為なす。古来惟ただ見る、白はつ骨こつ黄こう沙さの田。秦しん家か城を筑きずいて胡こに備そなへし處ところ。漢かん家か還また烽ほう火かの燃ゆるあり。烽火燃えて息やまず、征戦已やむ時なし」

謡がさらに盛り上がる。魔風が強くなる。どんどん吹き飛ばしていく。

羅濠教主の周囲にはもう何も残っていなかった。例外は逞たくましい巨体を持つ『猪』のみ。

ダメだ！　この謡をつづけさせてはいけない！

護堂の直感がささやいた瞬間、『猪』は教主めがけて突進をはじめた。

「野に戦い格かく斗とうして死す。敗馬號ごう鳴めいし、天に向けて鳥とり鳶とび人の腸はらわたを啄ついばみ、銜ふくみ飛んで上り、枯こ樹じゆの枝に挂かく」

魔風が重圧に変わった。

のびやかな謡は『猪』に聞かせる子守歌さながら。しかし、その波動に押されて、黒き神獣は足を止めた。突進を抑え込まれたのだ。

ミトラの輝きを持つペルセウス以外、いかなる神にも屈しなかった『猪』が！

「士卒は草そう莽もうに塗まみれ、将軍空むなしく爾しか為なするのみ。乃すなわち知る、兵は是これ凶器。聖人は已やむを得ずして之これを用うるを！」

ついに重圧から衝撃波ソニツクウエーブに。

『猪』の魁かい偉いな巨体が一瞬、宙に浮いた。そこに追い打ちをかける衝撃波。バランスを崩されて、神獣の巨体は横倒しになった。

「うわあああぁッ！」

　背中に乗っていた護堂も平へい衡こうを失い、地上に墜つい落らくしかかった。

　さっき幾度も地面に叩きつけられたが、今度は教主の手心がない。このまま地面に激突すれば、命に関わる。とっさに黒い毛をつかんで、持ち堪こたえた。

　間一髪セーフ。だが、神獣の体勢は横倒しのまま。落ちるのは時間の問題だ。

　護堂は『猪』の体毛を伝いながら、急いで地面へ下りた。

　ひさしぶりの地上で息をついたところで、気づいた。教主の謡が終わっている!?

　その隙すきにとばかりに、『猪』が身を起こしにかかった。

　ルオオオオォォォォォンンンンンッ！

　戦闘態勢を整えた神獣の咆ほう哮こう。だが、羅濠教主の全力はここからが本番だった。

「嚇かく々かく陽よう々よう、電でん灼しやく光こう華か！　天てん霊れい霊れい、地ち霊れい霊れい、太たい上じよう老ろう君くん、急きゆう急きゆう如によ律りつ令りよう！」

　漆黒の巨躯に悠然と近づきながら、言こと霊だまを唱となえる。

　魔術ではなく、権能を使うためだろう。同じカンピオーネだからか、護堂にはそれが察知できた。どちらを使う？　怪力か、それとも衝撃波の謡か？

　……前者だった。ただし、想像もしなかった形で。

　羅濠教主の体から呪力が立ちのぼり、ゆらりと陽かげ炎ろうのように揺らめく。

待ちかまえる『猪』に、この陽炎が殴りつけた。

ルアアアアァァァァンン！

なんと『猪』が哭ないた。苦痛にのたうち回る犬のように。

もう一度、陽炎が殴る。いや、この洗練された動きは拳法の中段突きと言うべきか。

クオオォォンン！　またも『猪』の咆哮。効いているのだ。ダメージを受けているのだ！

護堂は陽炎を注視して、絶句した。

ゆらゆらと蜃しん気き楼ろうのように揺れる状態から、はっきりと形を取るようになり――

陽炎は逞たくましい半裸の巨人となった。

きれいに剃そり上げた頭。いかめしい表情。筋きん骨こつ隆りゅうゝりゅうとした巨体。下半身を覆う粗末な衣。しかも、全身が黄金色に輝いている！

この姿、護堂は写真で見たことがあった。

東とう大だい寺じ南なん大だい門もん、金こん剛ごう力りき士し像ぞう！　そういえば羅濠教主は言ったではないか。

彼女は怪力の権能を、阿あ吽うん一いつ対ついの仁に王おうから簒さん奪だつしたと。仁王とはつまり金剛力士だ！

「遊ゆう龍りゅう衝しょう天てん、貼てん身しん近きん攻こう、八はち路ろ迅じん猛もう、翻ほん転てん鴛えん鴦おう脚きゃく！」

拳法の教えを授けるように、教主が口早に叫ぶ。

それに合わせて、彼女の体から陽炎のように立ちのぼる金剛力士の影は機敏に動く。

上段の突き、踏み込みながらアッパーと膝ひざ蹴げりを同時に。つづいてショートパンチの連打、膝蹴り、中段突き。空中に舞い上がって回し蹴り、しかも着地なしに二連続！

カンフー映画の殺た陣てじみた流麗さ。喰らうのは当然『猪』だ。

クオォォンン！　クオオォォンン！　クオオォォンンッ！

もはや神獣の咆哮は泣き声も同然だった。

「あいつ、調子づいているときは威勢いいけど、意外と打たれ弱いんだなァ……」

呆あきれる護堂が見守るなか、金剛力士は『猪』の巨体を高々と持ち上げた。

しかも片手で。すさまじいパワーだ。

そのまま天高く放り投げる。護堂がさんざん喰らった羅濠教主の投げ技だった。

この金剛力士、やっぱり教主の武術をトレースできるのか……!?

護堂が疑惑に確証を得たところで、『猪』が落下してきた。響く轟ごう音おん、揺れる大地。そのまま黒き神獣の巨体は、霧のように消えていった。

「——さあ、あなたの顕けん身しんは消えました。草くさ薙なぎの王おう、次はあなた自身の番です」

羅濠教主の怜れい悧りな瞳が、護堂を捉とらえる。

いよいよ絶体絶命の窮きゆう地ち。ごくりと息を呑のんだ、そのときだった。

「ご、ご無事ですか、護堂さん!?」

可か憐れんな、しかし必死さの滲にじみ出る媛ひめ巫み女この声。

護堂のすぐそばに、いきなり万里谷祐理の姿が現れた。虚うつろな目で茫ぼう洋ようとしているひかりまで抱きかかえている。これは転移による移動のようだ。

「万里谷か！　ひかりはどうしたんだよ？　大丈夫なのか!?」

「ほ、宝刀を使った儀式のあと、猿えん猴こう神しん君くんさまの神通力をかけられて……。ぼんやりと意識はあるようなのですが、普通に話もできない状態です。わ、私、あのまま厩うまやにいては危ないと思い、護堂さんの居場所を霊視して転移で逃げてきたんです……！」

　この報告に愕がく然ぜんとした。猿猴神君の件もあったのだ。すっかり忘れていた。しかも、目下の問題である魔教教主が突然の闖ちん入にゆう者しやに柳りゆう眉びをひそめている！

「……魔王と魔王が鎬しのぎを削る戦場にまぎれ込むとは、恐れを知らぬ巫女ですね」

　つぶやきに合わせて、巨大な金剛力士が拳を振りかぶった。

　一難去ってまた一難。顔色を蒼そう白はくにする祐理を背に庇かばい、護堂は叫んだ。

「ちょっと待った！　俺といっしょに万里谷もそいつでぶん殴る気か!?」

「か弱き少女の身で我らの間に割って入ったのです。主に殉じゆん死しする覚悟はすでに抱いていることでしょう。ならば羅ら翠すい蓮れん、君くん臣しんの固き絆きずなに水を差すような無ぶ粋すいはいたしません。草薙王よ、娘を死なせたくなければ我が絶技を破ってみせなさい！」

　無茶苦茶だ、この女！　上空の拳を見上げながら、護堂は頭を抱えたくなった。

　あれは実質、羅濠教主が放つ拳。かわせないことは、さっきの攻防でわかっている。ならば死ぬのか？　このまま押しつぶされて？

「あと、巫女に申しておきましょう。主を転移で逃がそうとしても無駄です。前もって準備を済ませているのでなければ、心気を研とぎ澄すまし、転移を行う暇はないでしょう。おまえたちが消える前に必ず打ち砕いてみせます」

　祐理の現れ方のせいだろう。教主が釘くぎを刺した。

　背後で媛巫女が息を呑のむ気配。護堂はそれをしっかりと感じ取った。

　そうか。準備をしていれば転移で逃げられたのか。動き出した黄金色の拳を眺めながら、悔しい思いを噛かみしめた。もう遅かったのか。――いや！

　このままだと自分は死ぬ。後ろにいる万里谷姉妹も死ぬ。死んでしまう。

　稲いな妻ずまのごとく拳が降る間、走そう馬ま燈とうのように思念が渦巻く。

　だったら最後まで悪あがきをしなければ。こんなアホらしい理由で死ぬだけでも許し難いのに、祐理やひかりのような女の子まで道連れにしていいのか。いいわけがない。

　あの拳、何としても防ぐ。やはり『鳳おおとり』か？　だが、あれは以前、サルバトーレ・ドニによって破られた。はたして羅濠教主に通じるかどうか。右腕がやけに熱い。燃えているようだ。どこへ逃げる？　どう守る？　どう戦う？　熱かったのはいつからだ？　いや、そんなことよりも眼前の死を回避しなくては。『鳳』を使ってギリギリまで逃げ回って――

　そしてタイムアウト。万里谷祐理と、この期ごに及んでも呆然としているひかりまで金剛力士の拳は撃ち抜こうとし、護堂が最後の悪あがきを試みようとした寸前。

　右手で何かが疼うずいた。鋼はがねの輝き、劍けんの閃ひらめき。なぜかそんなことが思い浮かぶ。

　次の瞬間、護堂と万里谷姉妹の体は霞かすみのごとく消え去った。

「逃げましたか。今のはまちがいなく転移の法……しかし、城内に姿は見えず」

　意外な結末に、羅翠蓮は小首をかしげた。

　彼女の顕身たる阿あ形ぎよう仁に王おう尊そんの拳を受ける前に、草薙王と巫女ふたりは消えた。

　あれは幽ゆう冥めい界かい（倭わ国こくでは幽かく世りよと呼

ぶ）を旅する転移の法。しかし、この城内は閉ざされた結界。しかも、あの技には不可欠な精神集中を行う時間もなかったはず。

　探知の方術で、城内に彼らがいないかを調べてみた。だが見つからない。草薙王は何らかの手段で結界を斬り破り、外界へと転移したのだ。

　このような折に役立つ宝ほう物もつでも持っていたのだろうか？

「あの少年、なかなか奥深い素す性じようを隠していると見えます。……まあ、ここで一息に仕留めるのも短たん兵ぺい急きゆうというもの。しばし放っておきましょう」

『くくっ。おぬしも一暴れしたようじゃのう』

　旧敵である猴王の声が、忽こつ然ぜんと響いた。

　声だけということは、まだ完全に甦よみがえっていないのだろう。

『さっそく現うつ世しよに戻って勝負――と行きたいところじゃが、今しばらく待て。弼ひつ馬ば温おんの位くらいを突っ返すには、まだまだ時が必要じゃ』

　こちらはもう良いようだ。羅翠蓮は地上のことを思い出した。

　ならば、向こうの様子が気になる。弟子たちが怠なまけぬように目を光らせるとしよう。

「承知しました。わたくしは一足先に現世へ戻り、再戦の時を待ちましょう」

『ああ。ご期待に応えて進ぜよう。刮かつ目もくして待つがよい、神殺しよ！』

　カラカラと笑いながら、猴王の声は尊大に告げた。

　武ぶ林りんの至尊は大いに勇を示し、まつろわぬ心猿は聖せい蛇じやを贄にえとして本道に立ち戻る。この一幕がいかなる騒そう擾じようへと至るかは、未だ定かではなかった。

第６章　混戦の行方

１

　幽世かくりよの厩うまやでは、石いし猿ざるが復活の時を待っていた。

　今のところ、彼の名前は猿えん猴こう神しん君くん。位い階かいは『弼ひつ馬ば温おん』のままである。

　かつて天てん地ち四し海かいに轟とどろかせた真の名と号は、未いまだ取り戻してはいなかった。だが、神じん通つう力りきの方は何割か甦よみがえってきたようだ。胸から上が生身に戻っている。ふたたび受肉し、石猿から猿神へと生まれ変わったのだ。すでに両腕も生身。この調子なら――。

　左手を動かして、右肩にさわる。いけそうだ。

　金色の体毛を適当に引っこ抜いた。まとめて宙にバラまく。

　十数本の体毛はたちまち形を変え、十数匹の小ザルへと変化した。

　この程度の連中でも、鬼ごっこの鬼役は務まるだろう。さきほど逃げた巫み女こたちを追いかけさせることにした。小ザルどもを厩うまやの外に解き放つ。

　お目当ての巫女は、神殺しに連れられて結界の外に逃亡した。

　だが、彼とて無む為いに『弼ひつ馬ば温おん』の厩で過ごしていたわけではない。城内から出られる抜け道のひとつやふたつ、見当はつけてある。

彼自身が抜け道を利用しようとすれば、『弼馬温』の呪じゆ縛ばくに搦からめ捕とられるだろう。

しかし、神の使いに過ぎない小ザルたちであれば問題ない。大魚を捕るための網あみで小魚を捕れないように、神を封じる呪じゆ法ほうで神獣・神使を抑おさえることはできないのだから。

「……おやおや。誰ぞが我を眺めていると見える」

気配に気づき、石猿は言った。相手方に聞かせるため、わざと大きな声だ。

「久方ぶりに我の牢ろう獄ごくをのぞいているようだが、おぬしらにはもう邪じや魔ま立てできまい？　指をくわえて、おとなしくしておればよかろうよ。なに、わざわざ仕返しに行くほど我は執念深くはない。妙な真ま似ねさえしなければ、放っておいてやるともさ！」

快活に笑いながら告げる。

かつて人間どもを利用して、封印の呪法『弼馬温』を仕込んだ者たちへ。

清せい秋しゆう院いん恵え那なが唐とう突とつに訪ねてきたのは、その日の午後だった。

「ねえ恵那。君は自分の立場をわかっているのかい？」

「もちろん。だから来たんだよ。馨かおるさん、お願い。恵那の謹きん慎しんを解いてくれないかなー？」

東京都千ち代よ田だ区く三さん番ばん町ちよう、沙さ耶やの宮みや家別邸。

その書しよ斎さいでの会話だった。

「……自分が謹慎中だって知ってるわりに、堂々と顔を出しているね」

沙耶宮馨の指摘に、恵那は悪びれずに言った。

「堂々となんかしてないって。こっそり家を抜け出して、ここまで来るのにも抜き足差し足忍び足で見つからないようにしたんだから」

　天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの一件が原因で、実家に蟄ちつ居きよさせられた媛ひめ巫み女こ筆頭。漆しつ黒こくのロングヘアは今日もつややかで、学校にも行ってないはずなのに制服姿だ。服を選ぶのが面倒だったのだろう。

　尚なお、恵那の実家である清秋院本家は、埼さい玉たま県の秩ちち父ぶにある。

「お願い事をするのに、電話ってのも失礼でしょ？　だからさ、直じか談だん判ぱんしに来たんだ」

「君らしいっていえば君らしい言いぐさだけど、理由はそれだけ？」

「えーと、あとは気晴らし？　ほら、家に閉じこもりっぱなしだと退屈だし」

「それは閉じ込められるような真似をした、恵那の責任だよ」

　たいていのことは面白がる馨だが、柄がらにもなく真ま面じ目めな発言をした。

　破は天てん荒こうな媛巫女筆頭には、たまに意表を突かれる。こういう場合、一応は組織の長なので不真面目さを返上しなくてはならない。

　粋すい人じんを以もつて任じる馨としては、少々不愉快な仕事である。

「清秋院家にはきちんと警備するようにって、伝えておいたのになあ」

「恵那がその気になったら、甘あま粕かすさんとか帝てい都との師し範はん代だいでも連れてこないと捕まえるのは無理だよ。それより馨さん、さっきの話！」

「いやー。みごと脱だつ獄ごくを果たした手並みには拍手するけど、却きやつ下かだね」

にべもなく馨は言った。

ちなみに帝都とは、媛巫女や正せい史し編へん纂さん委員会の面々が学ぶ武術の略称である。正しくは帝都古流という。その師範代は撃げき剣けん世せ話わ掛がかりとも呼ばれる。

「そこを何とかしてよ。恵那もそろそろ草くさ薙なぎさんのところに顔出したいし。うちのばあちゃんも、こうなったら早く王様に手をつけられて、胤たねを貰もらえって言ってるよ」

「うん。孫まご娘むすめになんてこと言うんだって豪快さは、あいかわらず健在のようだね」

清秋院家当主を務める老ろう女じょ傑けつ。あの祖母にしてこの孫ありかと、馨は感じ入った。

「だから、その線でのアプローチも当座保留にするって言っただろう？　草薙さんの気性を考えたら、そうした方がいい」

「え、そうなの？　でも王様って女の子が結構好きだよね」

「同性愛者ではない大多数の青少年と同じ程度には好きだろうけどね。家庭環境のせいか変に真面目ぶってるし、まだ男友達と遊んでる方が楽しいってクチだよ、彼は」

草薙護ご堂どうの『愛人』エリカ・ブランデッリの存在を声こわ高だかにアピールしたのは、ミラノの魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》である。この情報が、彼に取り入るには女が有効だというイメージを業界中に広めた。

当初、正史編纂委員会もそういう目で草薙護堂を見ていたのだが、それを改めさせたのが馨と甘粕だった。言われてるほど見み境さかいがないわけではなさそうだと……。

「ぼくら以外の連中には、そう誤認識させといた方がやりやすい。だから敢あえて訂正はしないし、させないけどね。……まあ、本人の行動が先行イメージを助長しているのもあるし」

最後の付け足しに、恵那が我が意を得たりとうなずいた。

「草薙さんは男前だもんね。うんうん、それでこそ恵那たちの旦だん那なさまだよ」

「ま、ああいうタイプは焦あせらず、じっくり落とす方がいい。友達の顔をして仲よくツルんで徐々に油断させながら、ふとした拍ひよう子しに一線を越えればいいのさ」

「でも、それだとエリカさんに先を越されないかな？　あの人、すごく積極的だよ」

「バカだなあ、恵那。越されたっていいじゃないか」

　馨はさわやかに笑い飛ばした。

　同性相手に数々の浮き名を流す遊び人。その面めん目もく躍やく如じよたる笑顔だった。

「これは甘粕さんが好きな恋愛紙芝居ゲームじゃないんだよ？　たかだか一、二カ月のハートフルな恋愛ごっこで永遠の愛と絆きずなが生まれる世界じゃない。先を越されても、あとから略奪愛すればいいのさ。結婚しちゃったとしても、離婚させればいいだけだし」

「うわー。前半はよくわかんないけど、後半はすっごく馨さんらしいよ。真っ黒だね！」

「ははは、そんなに誉ほめないでくれよ。……じゃあ、そろそろ自宅謹慎を破ったペナルティについて話をしようか」

「馨さんのオニ！　アクマ！　腹黒！」

　恵那が悔しそうに叫ぶ。――が、唐突に彼女は表情を改めた。

　かすかな神しん韻いん縹ひよう渺びようたる響きを聞くかのような、真剣な顔。書斎の天てん井じようを見上げ、耳を澄ましている。媛巫女筆頭とつきあいの長い馨は、何が起きているのかをすぐに察した。無言で見守ることにする。

「……もしもし？　どうしたの、そっちからなんて珍しいじゃん」

　恵那は携帯電話を取り出し、耳と口元に当てた。

　電源が切れていることも多い所持品相手に、彼女はしばらく話し込む。会話――否いな、交信の内容を洩もれ聞きながら、馨は大体の事情を呑のみ込んだ。察しのよさと鋭えい敏びんな知性は男装の媛巫女の長所なのだ。

　交信を終えた恵那からの報告で、さらに詳しく事情を知る。

　馨は自分の携帯を手に取った。さきほど名前を口にした腹心に電話をかける。

「やあ甘粕さん、日光出張はどんな案あん配ばいだい？　実は、結構まずい状況になっていると予想して電話をかけているんだけど？」

『でしたら、その千せん里り眼がんの秘密を教えていただきたいものですねェ』

　言外にまずい状況だと認めながら、甘粕の声が答えた。

『ちょうど報告の電話をしようと思っていました。こちらはだいぶ混乱していますよ』

　部下の話を聞くこと一〇分弱。かくして、沙耶宮馨は日につ光こう山さんで起きている異変について情報を得たのである。聞き終えてから、ため息まじりに言う。

「じゃあ、やっぱり草薙さんは行方不明なんだ」

『やっぱりとは聞き捨てならないお言葉ですな。そいつが千里眼のタネですか？』

　今度は、甘粕が馨の説明を聞いて『ははあ、それはそれは』とつぶやく番だった。

「そういうわけだから、そっちの安あん否ぴはひとまず気にしなくてもいい。この騒動の首謀者が誰かを考えるとしようか。甘粕さん、何か当てはある？」

『ちょうど容疑者とおぼしき人物を特定して、監視中ですよ。ですがねえ……』

「何か問題でも？」

『その御ご仁じん、私が閲えつ覧らんした資料の写真が正しければ、香ホン港コン陸りく家けの御おん曹ぞう司し殿なんですよねー』

　のんきな口調で部下に詠えい嘆たんされて、馨は肩をすくめた。

「それだと、中国のやんごとない方が真犯人になりそうだ」

『ええ。証拠なしの憶測だろうって誰も思わないのが、あの方々の厄やつ介かいなところですな。ま、隠れて調査を続行しますよ。それと、蛇へび神がみさまの対策も考えますか』

「エリカさんとリリアナさんを見つけて、上う手まいようにやってよ。全権を委ゆだねるからさ」

『承知しました。微力を尽くしましょう』

「いやいや。一命に代えても任務を果たすって言う場面だよ、忍者らしく」

『いえいえ。労ろう災さいの申請とか面倒ですし、殉じゆん職しよくに対する補ほ償しようもいまいちな職場です。安全運転でいきますよ』

　馨が電話を終えるなり、恵那が口を開いた。

「ねえ馨さん、これから恵那も日光に行くよ。きっと役に立つからさ」

　耳のいい媛巫女筆頭は、しっかり甘粕の声も聞き取っていたのだろう。

　だが馨はきっぱりと首を横に振った。

「ダメ、却下。自宅警備は中止にしてあげるけど、君にはぼくのそばにいてもらう」

「どうして!?　恵那も援軍に行った方が、王様もきっと助かるよ！」

「恵那はまだ予備戦力だ。万一に備えて、君を投入するタイミングを見極めたい」

　天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを失ったとはいえ、恵那は神がかりの遣つかい手て。

たとえば守護神であるスサノオの力を呼び込めば、どんな呪術師にも扱いきれない暴風暴雨を従えて、凶きよう猛もう無む比ひな破壊力を発揮する。神そのものとの戦いは無理だが、その下僕しもべ程度が相手なら戦力として十分に計算できる。無駄な使い方はしたくなかった。

「君の神がかりが必要な戦況なら、ちゃんと送り込んであげるよ」

「だったら現地待機でいいじゃん！　恵那も向こうに行って、王様に加勢したいよ！」

「もちろん日光の近くにまでは行くけど、すぐ現地入りはしないよ。『まつろわぬ神』が顕あらわれた場合、どんな災害が起こるか不明だからね。まず状況が落ち着くのを待とう」

　馨は冷静に告げた。人材を派は遣けんしたあとで、大地震や洪水が発生するかもしれない。

　そこまで壊滅的な現象は起こらずとも、連絡がつかなくなるかもしれない。慎重になるに越したことはないのだ。

「その代わり、この一件が片づいたら蟄ちつ居きよを完全に解いてあげよう。だから恵那、ぼくといっしょに状況の検討からはじめるんだ」

　落ち着いて指示を出す。混こん沌とんとした状況でも焦ってはいけない。とはいえ太た刀ちの媛巫女という手札を遊ばせておくのも能がない。さて、この状況どう転がっていくか——。

2

　エリカとリリアナがいる西さい天てん宮ぐうの境けい内だい。

　そこに甘あま粕かす冬とう馬まがやってきたのは、レヴィアタンが流血をはじめた数分後だった。

「しばらくぶりですね、お二方。いや、あいかわらずお美しい」

「柄がらにもなく歯の浮くようなことを言うのね。もしかして、悪事の相談かしら？」

　いつも通り平静な青年に、エリカは優ゆう雅がに微笑ほほえみかけた。日本古来の隠おん密みつ術じゆつに長たけたエージェントが、このタイミングで姿を見せた。有益な会談を期待しても的まと外はずれにはなるまい。

「悪事とは人聞きの悪い。呉ご越えつ同どう舟しゆうと言いましょうよ」

「あら？　わたし、甘粕さんを敵だなんて思ったことはないわよ？」

「ははは、そうでしたか。――それはそうと、私からの報告です。陸りく鷹よう化かと思われる少年は東とう照しよう宮ぐうの奥おく社しやにて待機中。何やら人待ち顔でしたな。で、ご存じなかったと思いますが、その祠ほこらはあなた方の言うアストラル界につながる扉です。《鋼はがね》の軍神が封じられています」

　一気に言い切られたので、エリカは苦笑した。

　あいかわらず話が早い。油断ならない男だが、それだけに非常時には頼もしいと言える。

「甘粕冬馬、そんな重要機密をわたしたちに話してもいいのか？」

　軽々しいことをするなと忠告したげなリリアナに、エリカはウインクした。

「秘密は可能な限りなしにするから、一緒にやろうってことよ」

「ま、そういうことです。あと、うちの上司から草くさ薙なぎさんの居場所について伝言がありますよ。こいつも踏まえますと、私たちが共闘するメリットは相当に大きいと思いますね」

　さりげなく甘粕が最重要情報を告げた。その内容を聞き、エリカはつぶやいた。

「別れてから二時間も経たってないのに、よくそこまで飛び回れるものよね。我が愛人ながら呆あきれるというか頼もしいというか……」

「まったくだ。何がどうなって、そこまでたどり着いたのか全然わからないぞ」

　リリアナも微妙な表情だった。アストラル界というだけでなく、そんな場所にまでさまよい込むとは。草薙護ご堂どうが持つ予想以上のバイタリティを、エリカは改めて実感した。

「じゃあ、今度はわたしたちから。あの蛇神の名はレヴィアタン。ロサンゼルスを苦しめていた魔女——いえ、神しん祖そがいにしえの姿を取り戻した『まつろわぬ神』よ。彼らを陰から操っているのは、陸家御おん曹ぞう司しのお師し匠しよう様らしいわ」

「ははあ。思いがけない名前と、予想通りの名前が出てきましたな」

「さっき《鋼》の神格がここに眠ると言ったな？」

　リリアナは、蛇神が振りまく鮮血の霧雨をにらみつけていた。

「あのレヴィアタン、まるで《鋼》を呼び寄せるための餌えさに見えるぞ。死にかけの体をさらして、生いけ贄にえのような状態じゃないか」

「生け贄とは言い得て妙ですな。実際その通りでしょう」

　魔女の指摘に、甘粕はうなずいた。

「この祠に《鋼》を封印した呪じゆ術じゆつを『弼ひつ馬ば温おん』といいます。これを解くためには、竜蛇の神格が地上に顕けん現げんしていないといけません。本来は倒すべき敵として出てきたときを想定していますが、まさか蛇神を生いけ贄にえ同然にして条件を満たすとは——」

　彼のつぶやきは思いがけない要因に中断させられた。

　いきなり祠ほこらの格こう子し戸どが開き、内側から強烈な風が吹き出す。

　さらに、絶ぜつ世せいの佳か人じんが飛び出てきた。天てん女によさながらに空を舞っている。

　羽は衣ごろもにも似た薄布をまとう天女は、祠の上空からエリカ

たちを見下ろした。地虫でも眺めるような、興味なさそうな表情。その体には上位魔術師すら凌りよう駕がする呪じゅ力りよくが横おう溢いつし——。

　彼女が飛び去ろうとした直前、エリカは叫んだ。

「お待ちくださいませ、羅ら濠ごう教きよう主しゅ！　我が主、草薙護堂をいかがなさいました!?」

　これが効いた。天女は飛ひ翔しようを中断し、浮遊したまま訊たずねてきた。

「特別に直答を許しましょう。黄金の髪の娘よ、おまえとは今日このときが初対面のはず。この羅濠の竜顔、何ど処こで知りました？」

　美しい、しかし臓ぞう腑ふを抉えぐるような迫力の玉ぎよく音おん。

　それに対して片かた膝ひざを地に着け、騎士の礼を取りながら答える。

「我が名はエリカ・ブランデッリ、《赤しやく銅どう黒くろ十じゅう字じ》の大騎士。拝はい謁えつの栄に浴したのは、おっしゃる通り本日が初めて。わたしはただ全ての状況を鑑かんがみて、御おん身みの御み名なは羅濠教主以外にありえないと推察しただけでございます」

　贄とされた蛇神。陸家の御曹司。帰ってこない草薙護堂。

　そして、目の前に現れた超常の妖よう人じん。導みちびき出される答えは自おのずと明らかだ。ただ、そこに至るエリカの思考が並外れて早かっただけで。

　実際、リリアナと甘粕は呆れたように教主を見上げるばかりだった。

「草くさ薙なぎの王おうは目め端はしの利きく臣しんを持っているようですね。おまえの機知に免じて答えを授けましょう。——かの王は幽世かくりよにて我が武ぶ威いに屈し、何処いずこかへと逃げ去りました。しかし、退却もまた兵へい家かの道のひとつ。そして、この羅濠より退いてみせた手て際ぎわの見事さを誉ほめ称たた

えるべきでしょう」

　だから、あんな場所に逃れたのか。音楽的な声を聞きながら、エリカは感心した。すでに魔教教主との戦いを済ませていたとは、草薙護堂は揉もめ事ごとによほど愛されているようだ。

「ならば教主……！」

「これ以上は控えよ、大騎士！　わたくしは今、征せい路ろの途上にあります。おまえごときを顧かえりみている時ではないのです！」

　びりびりと体が震えるほどの凄すさまじい一いつ喝かつ。

　いや、震えるどころではない。エリカとリリアナ、そして甘粕。教主の叱しっ責せきを聞いた面子メンツは全員、暴風であおられたかのように吹っ飛んだ。

　エリカは杉の木に叩たたきつけられた。今のは衝撃波か？　痛みを堪こらえて立ち上がったときには、教主はもう飛び去っていた。レヴィアタンのいる東照宮上空に向かっている。

「いやはや。衝撃的としか言いようのない方でしたな、いろいろな意味で」

「羅濠教主が女性だったとは……。術で空を飛ぶのだから、魔女でもあるようだ……」

　他のふたりもどうにか持ち直したようだ。

「だが、どうする？　草薙護堂や万ま里り谷や姉妹を迎えに行くか、羅濠教主とレヴィアタンへの対応をするか。いっそ二手に分かれるか？」

「そうね。できれば、そうしたいところだけど」

　リリアナの提言に、エリカは思案した。

　たしかに両者をケアしたいが、戦力分断の愚は犯せない。羅濠教主と対たい峙じするにせよ、三人を追って探索行に挑むにせよ、最大限の戦力と人員を用意すべきだ。どちらかを選ばないと、結局どちらも失敗に終わる。

「教主を追いかけましょう。目の前にある問題を優先させるべきだわ。……それに、アストラル界に乗り込むのなら十分な準備が必要よ。今はそうする時間も余裕もないし」

「ま、妥だ当とうな判断でしょうね。了解しました」

　甘粕はあっさりと言ったが、リリアナは祠ほこらを凝ぎよう視しした。

「しかし、草薙護堂と万里谷姉妹を放置することになるぞ」

　咎とがめる響きはない。合理的な判断だと認めているのだろう。だが、理性と感情はべつのようだ。無理もない。エリカにとっても、これは断だん腸ちようの思いで下す決断なのだから。

「一応、無事は確認されているのですもの。優先順位を下げましょう。大丈夫、護堂はあっさり死んでくれるほど潔いさぎよい人ではないわ。祐ゆ理りたちのことも全力で守るでしょうし」

　ここで重視すべきは、感情の叫びではなく戦術的判断。

　エリカが敢あえて冷れい徹てつに振る舞おうとしていたとき、いきなり呼びかけられた。

「――そういうことでしたら、わたしがアストラル界へ参りましょうか？」

　若い女性の声。だが気配は一切感じていなかった。

　エリカは声の方を見た。リリアナも甘粕も同時だ。この三人に気け取どられずに接近できる者など、滅多にいないはず。全員が驚いていた。

「わたし、荒っぽいことは苦手なのです。だから、どうやってみなさんのお手伝いをしようかと悩んでいたのですけど……。でも幸い、そちらの方面は専門家と言ってもいいんですよ。お任せいただけませんか？」

　境内の杉林から歩み出てきたのは、プラチナブロンドの美女だった。

　歳としは二〇代前半。上品な白のコートに、黒いロングブーツを

合わせている。

　コートの下に着ているのは、丈たけの短いニットのワンピースにレギンス。そして『お忍びで街を歩く姫君』という優雅な雰ふん囲い気き。……当たり前だ。彼女は正しよう真しん正しよう銘めい、本物の貴婦人で『姫』なのだから。

　やわらかな美び貌ぼうを目まの当あたりにして、エリカは心底驚きよう愕がくした。

　叔お父じパオロとロンドンを訪ねたときに謁えつ見けんして以来の再会。不覚にも驚きが顔に出ていたのだろう。彼女はいたずらっぽく微笑んで、唇くちびるに人差し指を当てた。

　本当にお忍びらしい。

　エリカが知る限り、最も聡そう明めいで最も優美な女性の登場。対抗心が燃え上がってきた。『姫』に負けない貴婦人ぶりを見せなくては、エリカ・ブランデッリではない。

「——レディ、あなたにそうしていただけるのでしたら、望外の幸運です」

　敢えてプリンセスとは呼ばずに、エリカは一礼した。

　ここが宮廷の一室であるかのように恭うやうやしく、誇りを込めて尊大に。

「あちらには主と、我らの盟友である巫女たちが取り残されております。よろしければ、彼らにあなたの御手を差しのべていただきたく存じます」

　いつ、そして何な故ぜ日本に来たのか？　そんな野や暮ぼな質問はしない。語るべき時が来れば、向こうから教えてくれるだろう。さっきの言葉から、状況はおおむね把は握あくしているだろうとも推察できる。だからエリカは、言うべきことだけを手短に伝えた。

「わかりました。一〇〇％頼っても大丈夫……とは言わないけれど、六五％くらいなら請うけ合っちゃおうかしら。その程度は安心してくださっても結構ですよ」

　ふたりのやりとりを、リリアナは固い表情で見守っていた。

『姫』の写真を見たことはあるはずだ。しかし、突然の来らい駕がに動転しているようだ。

　一方、甘粕は参ったと言うように頭をかきながら、肩をすくめてみせた。

「なるほど。では、こちらはエリカさんのお知り合い……この設定でいいんですよね？」

「そう思っていただけると、わたしも助かります。まわりにうるさいおじいさんが多くて、あまり勝手に出歩いていると怒られてしまうのです」

　しれっとした顔で『姫』もうなずく。そして、軽やかな口調で付け加えた。

「そうそう、わたしからの提案。あのレヴィアタンは、この地に眠る《鋼》を解き放つための重要な要素です。逆に言うと、あれを排除してしまえば復活は避けられるはずです。難しいとは思いますが、是非ご検討くださいね」

　彼女は万里谷祐理に近いレベルの霊視術師。しかも、神々についても深い造ぞう詣けいを持つ。

　これは、その叡えい智ちにもとづく助言なのだ。正派の魔術師・騎士がことごとく崇すう敬けいを捧ささげる貴き人じんの言葉に、エリカは深々と頭こうべを垂たれた。

3

　激しい風雨に打たれる山小屋で、草くさ薙なぎ護ご堂どうは老人たちと向き合っていた。

　ここを訪れるのは二度目になる。幽かく世りよに『隠居』した老ろう神しんスサノオの住処すみかであった。あぐらをかく護堂の対面には、いかめしい顔つきの家主も片かた膝ひざついてすわっていた。

その後ろに旧きゆう知ちの人物がもう二名。

端たん然ぜんと座す亜あ麻ま色の髪の姫君と、結けつ跏か趺ふ坐ざの姿勢で足を組む即そく神しん仏ぶつの僧そう侶りよだった。

「よりにもよって、どうしてここに来たんだ、俺は？」

「そりゃあ、オレの劍つるぎがおめえらを連れてきたからよ。ほれ、天あまの叢むら雲くも」

護堂がぼやくと、スサノオは軽い調子で言った。

「あの劍、やっぱり俺の所有物ってことなのか」

転移の直前に感じた疼うずきを思い出して、護堂は右手を見つめた。

羅ら濠ごう教主に追い詰められた直後、気づいたらここにいた。あのとき自分たちを転移させてくれたのは、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの意志だったようだ。しかも閉ざされた結界の壁をも斬きり裂き、外へと逃してくれるとは――。

さすがは、かつて地上と幽世の間を斬り開いた神刀だった。

「おおよ。まだ掌しよう握あくはしてねえみたいだがな。いずれ時が来れば、好きに使えるようになるんじゃねえか？　オレと長いこといっしょにやってきた相棒だ。ま、大事にしてくれや」

「銃じゆう刀とう法ほうを違反するつもりはなかったんだけどなァ……」

護堂はため息をついた。とはいえ、こいつの助けがなければ、あそこで死んでいた。

剣を持つ気はないが、感謝しなくては罰ばちが当たる。そして疑問も解けた。神刀が幽世で最も馴な染じんだ場所は、元所有者の住居にちがいあるまい。だから逃亡先はここだったのだ。

「それはそうと、万ま里り谷やたちを元に戻してもらうわけにはいかないのか？」

「いかねえなァ。俺はざっくばらんな方だがよ、これでも神の端く

れなのさ。御ご坊ぼうや媛ひめだって、人間どもの前に軽々と姿を見せるわけにゃいかねえ立場だ。魔王でもない人間がオレらのところに来るのは認められねえ。ま、しばらく我が慢まんしてくれ」

　スサノオの返答を聞きながら、護堂は手のなかの櫛くしを見た。

　竹製の櫛が大小ふたつ。これは万里谷姉妹が姿を変えたものだった。この小屋に転移してきたとき、祐理とひかりは気を失っていた。それを見た老神が何かつぶやいた途端、姉妹はたちまち大小一組の竹櫛に変化したのだ。

　只ただひとり無事だった護堂はもちろん激怒。

　だが、スサノオは小屋を出れば元に戻ると言った。詫わびとして彼の巫み女こである清せい秋しゅう院いん恵え那なに三人の無事を伝えるとも言うので、護堂はひとまず怒りを収めたのだった。

「でも、女の子ふたりがこんなふうになるなんてなァ……」

「幽世ってのは、虚構と現うつつの区別がおそろしく曖あい昧まいな領域なのさ。だから念じるだけで旅もできるし、オレたちみたいな神々は思い通りに世界を造り替えることだってできる。こういう芸もかんたんにできるわけだ」

　粗暴な外見のわりに、スサノオがややこしいことを言う。姉妹が元に戻らなかったら、どうしてくれよう？　ひそかに護堂が考えていると、黒こく衣いの僧が声をかけてきた。

「ところで、何やら面白げな騒ぎを起こしているそうですな」

「起こしたんじゃなくて、巻き込まれただけだ！」

　包帯のないミイラ、干ひ涸からびた即そく神しん仏ぶつ。そんな外見の僧侶に力一杯反論する。

「これをご覧遊ばしませ、羅ら刹せつの君。かの猿えん王おうは今、このようになっておりまする」

　十じゅう二に単ひとえをまとった姫君が手前の水みず鉢ばちを押し出してくれた。

　水面に例の厩うまやが映し出された。石となったサルがいる。た

だし胸から上は生身で、眼球は紅あかく瞳ひとみは金色。ひどく奇妙な姿だった。

「実を申しますと、『弼ひつ馬ば温おん』の城内に猿王を閉じ込めたのはわたくしたちにございます。特に中心となって事を運びましたのは——」

　姫君にちらりと見られて、黒衣の僧は歯のない口を開いて笑った。

「左様。地上におった頃のそれがしでござる」

「あんたが？　何だって、そんな真ま似ねを……。あのサル、鋼はがねの神様なんだろ？」

　護堂は呆あきれて言った。揉もめ事ごとの種をわざわざ蒔まくようなものではないか。

「かの猿王殿は、サルでありながら鋼の神性を持ち、焔ほむらをまとい竜りゅう蛇だを従える大英雄。極めて強力な《鋼》なればこそ、格好の竜殺し・蛇殺しとなり申す」

「竜と蛇を殺す、だって？」

「実は、我が国には厄やっ介かいな『御子』が眠っておりましてな。外とつ国より流れ着いた蕃ばん神しん、最強の《鋼》なる御子にござる。この神を起こさぬため、猿王殿を竜蛇除よけに招いたのです」

　最強の《鋼》。どこかで聞いたような言葉。

　なぜか護堂は既視感を抱いた。しかし、今はそれよりもサルの話だった。

「何で竜や蛇がまずいんだよ？」

「御身もすでにご存じのはず。竜蛇の神格は《鋼》を猛たけらせ、呼び起こすものなれば」

　護堂は英雄ペルセウスの事件を思い出した。

　彼の顕けん現げんを促したのは竜の出現だとは、あとで教えられ

ていた。

「そういえば、御身もかつて南なん蛮ばんの蛇神と戦われましたな。その折に御身が敗れておられたならば、我らは『弼馬温』の猿王殿をふたたび解き放つ仕し儀ぎとなったでしょう」

「ひつばおんってよく聞くけど、サルの神様の名前なのか？」

「いえ、これは位くらいの名称ですな。天界における役職でござる。……平たく言えば、厩うまや番ばんでござろうか。天宮の厩で馬を管理する。これが弼ひつ馬ば温おんの仕事なれば」

「天界だって？」

「玉ぎよく皇こう大たい帝ていのしろしめす、神々と神仙の世界でござる」

　護堂の脳内にある名前が浮かび上がってきた。あの剽ひよう軽きんなサルの本名。神としての名。

　試ためしに口に出してみる。途端にスサノオは「へえ」とつぶやき、姫は大きく目を見開き、黒衣の僧はニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべてみせた。

「おまえさん、エテ公の正体に気づいていたのかよ？」

「ちょっと思いついただけだよ。くそ、もしかしたらアテナよりも有名じゃないか！」

　護堂は舌打ちした。徳とく川がわ家いえ康やすどころではない。

　こんなヤツが地上で暴れ回ったら、どんな災さい厄やくが巻き起こることか。

「あのサルをもう一度封印するには、どうすればいいんだ!?」

「『弼ひつ馬ば温おん』の呪じゆ縛ばくを解こうとしているのは、唐から国くにの君。あの御方をあなたさまの手で掣せい肘ちゆうなされば、猿王もふたたび眠りにつきましょうが……」

　心配そうに姫君が訴えた。つまり、羅ら濠ごう教主とまた戦えという意味だ。

護堂は唸うなった。まさに前ぜん門もんの虎とら、後こう門もんの狼おおかみ。どっちを選んでもロクな未来ではない。だが虎と狼の双方と戦うよりは、虎だけ相手にする方がマシだ。

何より地上に残してきた友人たちが心配だった。一刻も早く現うつ世しよに戻ろう。

「できる限りやるしかないか。……そこで相談だけど、俺を地上に戻してもらえないか？」

決意と共に申し出ると、スサノオと黒衣の僧は顔を見合わせた。

「どうしたもんかねえ？　オレたちはこいつの敵じゃねえが、味方でもねえわけだし」

前回のいきさつを考えれば、たしかに老神の言う通り。しかも黒衣の僧が、少々わざとらしくかぶりを振った。

「いやいや御ご老ろう公こう、窮きゆう鳥ちよう懐ふところに入らばと申します。知らぬ仲でもなし、お節せつ介かい程度の親切を焼くのは人の道にも神の道にも背そむきますまい。とはいえ、羅ら刹せつの君を現世に戻すのは我らの手に余る仕儀……なかなかに難しゅうございますなァ」

「でも、この間は俺を無理やりこっちに引きずり込んだだろ？」

芝居がかったやりとりに違和感を覚えつつ、護堂は言った。

「ありゃあ、恵那のアホが地上で仕掛けをしといたからよ。オレたちだけでおまえさんを送り迎えするこたァできねえのさ」

清秋院恵那が学校に施ほどこした仕込みを思い出す。じゃあ、俺はこのまま幽かく世りよのなかをさまよいつづけるのか!?　護堂は愕がく然ぜんとした。

そこで口を挟はさんだのが、玻は璃りの瞳ひとみの姫君だった。

「御坊、御老公。お戯たわむれも程々になさいませ。羅刹の君よ、これをお持ちください」

と言って、彼女は勾まが玉たまを差し出してくれた。

材質は翡ひ翠すいだろうか。姫君の意図がわからず、護堂は首をかしげた。

「只ただの玉にございます。ですが長年愛用していましたゆえ、わたくしの念が強く籠こもっております。我ら蛇の血に連なる女には、よい目印となりましょう」

「蛇の血？」

「ご興味がおありでしたら、いずれ神しん祖そと呼ばれる女たちについて調べられるのがよろしいかと。たとえば、そちらの巫女たちはわたくしどもの遠い遠い裔すえに当たるのです」

淑しとやかに微笑みながら、姫君は語ってくれた。

「あなたさまを捜しに幽世へ入って参りました巫女……この娘は偶然にも、蛇の血に連なる先祖返りの者。これさえあれば、あなたさまの居場所にたやすくたどり着くはず」

「俺を迎え……って、ああ！　エリカたちが何とかしてくれたのか！」

地上の恵那に連絡を取ってもらったのが、意外と役に立ったようだ。スサノオと黒衣の僧は、それを承知でとぼけていたのだろう。性格の悪い老人たちだった。

「迎えの者が見つけやすいところにまで、わたくしがご案内いたします。……あとは、あなたさまの御器量次第。御ご武ぶ運うんをお祈り申し上げます」

「ありがとうございます。いずれ機会があれば、このお礼は必ず」

護堂はきっちりと頭を下げた。

姫君に対する言葉遣づかいも自然と敬語に改まる。これが人徳というものだろう。

例の水鉢に、見たことのない風景が映し出された。もう言われずともわかる。この謎世界での旅の仕方は、彼女から教わったことだ。

護堂は水面に映る風景を見つめて精神集中、一気に転移していっ

た。

　そして気づけば、湖みずうみのほとりにいた。

　風ふう光こう明めい媚びな高原の湖こ畔はん。そんな雰ふん囲い気きの土地に、護堂は立っていた。

　水は清く透き通り、吹き抜ける風も心地よい。岸辺には整然と杉の木が並ぶ。

「——って、そうだ、万里谷たち！」

　竹の櫛とされた姉妹のことを思い出す。

　手に持っていたはずの櫛がふたつともなくなっていた。護堂はあわてて周囲を見回し、ほっとした。巫み女こ装しよう束ぞくの祐理とひかりが、湖のそばで折り重なるように倒れていたからだ。

　ふたりの肩を揺さぶる。程なく姉妹は目を覚ました。

「ここは……まだ幽世のなかなのですね……？」

「うーん……。頭が痛いです～。すごくだるいですよ、お兄さま……」

　羅濠教主との対決時には明らかにおかしかったひかりも、恢かい復ふくしたようだ。

　護堂は転移してからの経いき緯さつを、手短に説明した。

「そんなわけで、ふたりとも姿を変えられていたんだけど……体の方は大丈夫なのか？」

「は、はい。とりあえずは何も。変化していた間のことは何も覚えてはいませんが」

「私はものすごく疲れてますー。まるで、力を使いすぎたときみたいですー」

　確認の問いに姉が答え、妹はふらふらしていた。

「まあ、無事だっただけでも運がいいと思うべきだな。……ところで迎えが来るって言われたんだけど、いつ到着するんだろうな？」

「やはり、リリアナさんがいらっしゃるのですか？」

　祐理に訊ねられて、護堂は首をかしげた。どうだろう？

　この幽世だかアストラル界だかに旅する魔術、エリカには使えないらしい。となればリリアナが来るはずなのだが、姫君の言葉はそうでないと示し唆さしていたようにも思える。

「もう来ておりますよ。やっと見つけました、草薙護堂さま！」

「うわあッ!?」

　いきなり呼びかけられて、護堂はのけぞった。祐理もひかりも目を丸くしている。

　いつのまにか、目の前に美女が立っていた。

「びっくりさせてごめんなさい。わたし、これでもあなたがたの味方です。実はエリカ・ブランデッリとは以前からの知り合いでもあります」

　プラチナブロンドの髪を輝かせる、優美な白人女性だった。

　穏やかな話しぶりと上品な服装、香水のように振りまかれる気品のオーラ。なるほど、気取っているときのエリカに似た雰囲気だ。そんな彼女を祐理が不思議そうに見つめた。

「……幽体？　もしかして、幽体分離の術を使われているのですか？」

「あら、一目で見破られたのは何年ぶりかしら。お見事です」

　おっとり微笑みながらの誉め言葉に、媛巫女が恐縮する。幽体分離？

　怪け訝げんそうな護堂に、プラチナ髪の美女が教えてくれた。

「魔術の世界ではエクトプラズム、アストラル体とも言いますね。ものすごく大おお雑ざっ把ぱに説明しますと、精神感応力で魂たま

しいの分身を造り出して操る術です。本当のわたしは、ロンドンのベッドで眠っていたりするんです。……この件は内緒でお願いしますね」

「も、申し訳ありません。霊視の力で視みえたことを、不用意に口走ってしまいました」

　唇くちびるに人差し指を当てながらの要請に、あわてて祐理があやまった。

「かまいません。機密事項ではありますけど、知った人間の口を針と糸で縫い止めたりはしませんから。わたし、羅濠教主と同じくらい無茶に見えます？」

　茶目っ気たっぷりにウインクする美女は、この騒動の首謀者を知っているようだ。

　幽体云うん々ぬんよりも気になることを、護堂は訊ねることにした。

「秘密の件は了解しました。それより、お名前を教えてもらえますか？」

「今回の出張では、ずっと『匿とく名めい希望の謎なぞの美女』で通すつもりだったのですが……。王のご下か問もんにはとぼけられませんね。仕方ありません、お答えいたしましょう」

　ユーモアを交まじえながらの自己紹介。

　プラチナの髪の美女は優雅に微笑みながら、己の名を告げた。

「私の名はアリスと申します。ときどきプリンセスなんて呼んでくださる方もいらっしゃいますが、さすがに自分では恥ずかしくて口にできません」

「では賢けん人じん議会の——！」

「ち、超重要人物なんですね！　すごいです！」

　姓を告げない自己紹介。しかもプリンセスのあだなまで名乗る。

　まるで王族みたいだなと護堂が苦笑する横で、祐理とひかりが驚

きよう嘆たんしていた。もしかしたら結構な有名人なのかもしれない。わずかな仕草、表情、視線などにも上流階級出身者の余裕めいたニュアンスを感じる。

だが特につっこむ気もなかったので、護堂はその辺りをスルーした。

ここ数カ月で妙な友人知ち己きが増えまくったので、多少の変人ぶりには動じないのだ。

「アリスさんは、エリカに頼まれて俺たちを迎えに来てくれたんですよね？」

「はい。わたしは巫女であり、魔女術の遣つかい手てでもあるので——」

プリンセス・アリスは、自みずからの胸を押さえながら言った。

「世界移動プレーンウオーキングの魔術儀式を執とり行い、地上からアストラル界にやって参りました。こちらに来てからは霊視術で草薙さまを捜していたのですが、なかなか見つからなくて苦労しました」

しかし、ついさっき唐突に護堂の所在を霊視できたのだという。ポケットに収めた勾まが玉たまのことを護堂は思い出した。

「実はわたし、ある魔女の足跡を追ってフランスからアジアに渡ってきたのです。今回、羅濠教主が贄にえとした蛇神レヴィアタン。あれを融ゆう通ずうしたのは彼女の仕し業わざです。わたしは追跡の対象を蛇神と教主に変え、日本にやってきました。そして草薙さまのご不在で困っているエリカたちに会いまして、協力を申し出たのです」

「傍はた迷めい惑わくな連中が、好き勝手ワールドワイドに暗あん躍やくしてるんですねえ……」

かんたんな事情説明を聞き、護堂はげんなりした。だが海を越えて厄介者が押し寄せてくる代わりに、このプリンセスのような救援者も来てくれる。まだマシと考えるべきだろう。

——祐理が間近にすり寄ってきたのは、このときだった。

「護堂さん、いやな気配を感じます。もうすぐ追っ手が来るはずです！」

　緊張感に満ちた声でささやかれた。追っ手？

　護堂、祐理、ひかり、アリス姫の四人は湖みずうみのほとりにいる。その周囲に、茶色に近い金の毛皮の小ザルたちが唐突に現れた。この移動の仕方は転移!?

　小ザルの数は二〇匹近く。どいつの顔にも猿えん猴こう神しん君くんの面影があった。

「『弼ひつ馬ば温おん』の城は神君さまを封じるための結界。でも、あの方が召し使う神しん使しまでは閉じ込めておけないのでしょう……。護堂さん、どうしましょうか!?」

　そういえば、あの猿神はひかりにご執心なのだったか。

　包囲網を作り、じりじりと距離を狭めてくる小ザルたちを護堂はにらんだ。

　祐理に頼んで転移で逃げるか？　だが今の出現ぶりを見る限り、あちらも同じ芸当ができそうだ。根本的な解決にはなるまい。それに前回、恵那は幽かくり世よで神がかりを暴走させた。祐理が同じ目に遭あわないとは限らない——。

「戦って切り抜ける……のは難しそうだなァ」

　敵の力量を漠然と見抜くカンピオーネの勘かんが告げていた。

　このサルたち、意外と強い。エリカやリリアナを一〇としたら、四か五程度には。

　つまり神殺しの本領と比べれば、話にならない弱敵。しかし、草薙護堂が所有するウルスラグナ一〇の化身を行使する対象になるかというと——。

　ダメだ。何かの化身が使えるときの確信は、すこしも湧わいてこなかった。

「困りましたね。草薙さま、権能でおサルさんたちを蹴け散ちらされてはいかがでしょう？」

「それができるなら、とっくに。俺の力ってヤツはいろいろ制限があって自由に使えないんですよ。これくらいの中途半端なのが相手だと、正直どうしようもありません」

　おっとり嘆なげくアリスに答えながら、護堂は考える。

　サルといえども野獣の端くれ、人間よりも数段強いはず。まして向こうは神の下僕しもべ。

　分の悪い勝負だが、体を張って奮闘するか。それとも祐理の転移にすがり、逃げられるところまで逃げてみるか？　逡しゅん巡じゅんを終わらせたのは、アリス姫の言葉だった。

「なるほど、そうでしたか。では、ここはわたしが何とかしてみましょう。あとでいろいろ困ったことになりますが、背に腹は代えられません」

　言うや否いなや、美しいプラチナの髪が輝きを宿した。

　同時に小ザルたちも一斉に飛びかかってきた。軽けい捷しようかつ獰どう猛もうな身のこなしだ。護堂が目を瞠みはり、祐理が妹を庇かばい、ひかりが姉にしがみついた瞬間、アリス姫が叫んだ。

「Can I see another's woe, And not be in sorrow too!　Can I see another's grief, And not seek for kind relief!」

　言こと霊だまの詩だった。

　白プラ金チナの光がほとばしり、サル軍団と護堂たちを呑み込む。

「きゃあッ!?」「お、お姉ちゃん！」

　祐理とひかりが短く叫ぶ。だが苦しそうな様子ではない。対してサルたちは悲惨だった。キィキィと口々にわめきながら目を押さえ、耳をふさぎ、地面をのたうち回っている。

「……何をしたんですか？」

「精神感応を使って、おサルさんたちに苦く悶もんと破滅のイメージを送り込んでみました。強制的に精神的苦痛をあたえて、ノックダウンさせちゃった感じかしら」

あっけらかんとアリスが語る。この人、只のおっとりお嬢さんじゃないなと思う護堂のそばで、巫女たちはびっくりした表情でサルたちの惨状を眺めていた。

「すこし彼女たちの心も揺さぶってしまいましたが、大きな問題はないはずですよ。もちろんカンピオーネであられる草薙さまには何の影響もありません。ただ……」

神殺しの絶対的な魔術への耐性にも言及しながら、憂うれい顔になるアリス。

護堂はいやな予感を覚えた。

「彼らを無力化させるために、アストラル体の呪力を大きく消耗してしまいました。これでは地上に戻るための儀式を行えません。向こうに連絡を取る程度はできますが……あちらはレヴィアタンへの対応に追われているはずです。迎えに来る余裕はないでしょう」

《鋼》の軍神が解き放った神使の群れ。思いがけない強敵でした——。

そう結ぶアリスの言葉を、護堂は暗あん澹たんたる思いで聞いた。追っ手を倒すために帰還の手段を失ってしまった。もちろん全員の安全を確保するのが最優先事項なので、自称プリンセスの判断は大いに正しい。

とはいえ、新しい袋ふくろ小こう路じに追い詰められたのも事実で……。

この窮きゆう境きようから脱する手段はないか？　護堂は必死に頭をひねりはじめた。

4

日につ光こう山さんの上空には、魔女アーシェラが変へん化げした蛇神レヴィアタンが浮かんでいた。空中でとぐろを巻き、全身の傷から血の霧きり雨さめを降らす。この光景を見た東とう照しよう宮ぐうや二ふた荒ら山さん神じん社じや、輪りん王のう寺じの参拝

客はパニックを起こした。

　一〇月の連休初日、夕刻。

　日光山周辺は、陽ひが落ちだすと観光客の数もめっきり減ってしまう。

　それでも百人以上が居合わせたはずだ。夕焼けの空に描かれた非現実的な情景で、彼らの理性はかんたんに奪い去られてしまった。

　足早に逃げ去る。走って転ぶ。連れとはぐれる。

　他人を押し倒す。その背中を踏んづける。無視する。泣きわめく。

　どこにかは不明だが電話をかける。のんきにデジタルカメラで蛇神を撮影する。

　怒号、号ごう泣きゅう、哀願。

　呆ぼう然ぜん、困惑、興奮、焦しよう燥そう。

　平静さを失い、取り乱し、うろたえる。

　パニックの見本とも言える惨状。だが、彼らは次第に身動きを止めていった。遊び疲れた子供のように、走り疲れた逃亡者のように足を止め、膝ひざをつき、倒れ込み、体を横たえ、ぐったりと動かなくなる。

「あの凶暴女に精気を吸われているのか？」

　東照宮の奥おく社しやに登った陸りく鷹よう化かは、ぽつりとつぶやいた。

　ここは徳とく川がわ家いえ康やすの墓ぼ所しよ、日につ光こう東照宮の最上部である。日光山というだけあって、結局は山なのだ。ふもとにある表参道から石段を使って上へ登っていくと、拝はい殿でんと本ほん殿でんがある。そこからさらに二〇七段の石段を登れば奥社に到着する。

　上空では凶暴女——かつてアーシェラであった蛇神が滞空していた。

かの蛇神の血が作る命の経脈。そこに人々の気が流れ込んでいる。死にはすまいが、あの状態が長引けば危険かもしれない。

「死にかけだってのに人様に迷惑かける女だな。ま、これはこれで静かでいいけど」

と言いながらも、周囲に人影はない。

下にある陽よう明めい門もんや本殿、神しん厩きゆう舎しやの辺りと比べて、奥社へ登る観光客はもともとすくない。そこに蛇神が出現したため、居合わせた少数の人々もーいつ斉せいに逃げ出した。

陸鷹化にとっては、もっけの幸いである。

何しろ、これから来る人物は人ごみと喧けん噪そうが大嫌いなのだ。怒らせる要因は減らしておいた方がいい。ここで彼は飛来する女人に気がついた。

師し父ふだ！　すぐに『気を付け』の姿勢。

麗うるわしき師父が着地するや、左の掌てのひらで右の拳こぶしを包み込む。

これは抱ほう拳けん礼れい。『おまえは師に然しかるべき礼を尽くさないのですか!?』とーいつ喝かつされるのを防ぐ挙きよ措そだ。だが念のため、《五ご嶽がく聖せい教きよう》教主への追つい従しようも口にする。

「智ち勇ゆう双そう全ぜんなる聖教主の御名は天地ある限り永えい劫ごう不ふ滅めつ。御身の武ぶ威いに限りはなく、叡えい智ちと慈じ悲ひは天下を遍あまねく照しよう覧らんするでしょう。弟で子し陸鷹化、師父の千せん秋しゆう万ばん歳ぜいをお祝い申し上げます」

羅ら濠ごう聖教主。ごくー部の者だけが羅ら翠すい蓮れんの名で知る乙おと女め。

彼女は自覚のない暴君である。身近で仕える者は、さまざまに気を遣つかう。

しかも陸鷹化は、彼女の庵いおりに足あし繁しげく通う直じき弟

で子し。師の機嫌の良し悪しは、命の危機にまで発展しかねない懸案事項だった。

「——鷹よう児じ。いくさ場にて阿あ諛ゆ追つい従しようを口にするとは、佞ねい臣しん・宦かん官がんのごとき振る舞い！」

　しかし、美しき師父は弟子の愛称を呼びながら眉まゆをひそめた。

「英雄、快男児たるを志こころざすべきが武ぶ林りんの俠きよう客かく。おまえの先達である大だい俠きようや女じよ俠きようたちに恥ずかしいとは思わないのですか！」

　今回は失敗だった。この一いつ喝かつで、大きく吹っ飛ばされた。

　背後の宝塔にガツンとぶつかる。頭がクラクラしてくる。これは『竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』で生み出された衝撃波である。大破壊を振りまくだけでなく、威力を抑えれば拳骨代わりに気安く使える権けん能のうなのだ。

　くそ、やりすぎたかと口のなかで毒づきながら、陸鷹化は立ち上がった。

　いつもは最初に丁てい重ちような挨あい拶さつをしないと叱しつ責せきされる。

『師弟の絆きずなは親子のごとしとはいえ、わたくしは聖教の頂点に立つ身分。おまえは年少の一信徒。確たる区切りを設けておくべきでしょう。配慮を見せなさい！』

　と。しかし羅ら翠すい蓮れん、阿諛追従を好む気質ではない。つまり必要なのは、聖教主が鬱うつ陶とうしく思わない程度のおべっか。難しいうえに理り不ふ尽じんな要求であった。

「草くさ薙なぎ王のおうがわたくしに挑んできたときは、おまえもなかなかの見識を持つようになったと感心したのですが……。まだまだ精しよう進じんが足りぬようですね」

「師父の教え、弟子の骨身に刻み込まれました。ありがとうございます」

　とりあえず、師の仰おおせに平身低頭しておく。

　数時間前に顔を合わせるなり、三度も教育的指導をしたじゃないかとは敢あえて口にしなかった。虎の尾をわざわざ踏むことはないのだ。

　——師の来日に先駆けての露つゆ払はらい。それが陸鷹化の任務であった。

　このために香ホン港コンから日本へあわてて旅立ち、東京と日光を何度も往復。西さい天てん宮ぐうとやらを守護するのが九く法ほう塚づかという旧家だと突き止め、その総領息子を魔女の術で籠ろう絡らくし、『弼ひつ馬ば温おん』の封印について洗いざらい白状させた。何とかいう媛ひめ巫み女こが必要だと言われれば日光まで連れてこさせて、それと並行して封印を解く準備まで進めさせた。

　今回の件に関して、いちばん忙しく働いたのは実は陸鷹化なのだ。

「師父。こちらに邪魔者が来るようです。いかがなさいますか？」

「任せます。片づけなさい」

　何者かが接近する気配に気づいたので訊たずねると、予想通りの返答だった。

　美しき師父を本気にさせることができるのは、神もしくはカンピオーネくらいなのだ。

　陸鷹化は肩をすくめながら、下界を見渡す。二〇〇メートルほど離れた東照宮の本殿や拝殿、眠り猫のある坂さか下した門もんなどは、杉林にさえぎられるので奥社から見渡すことはできない。

　しかし、彼の超人的な聴力はしっかり足音を聞き取っていた。

　軽功で軽やかに地を駆け、宙を飛ぶ達人ふたりの足音。おそらくエリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャールだろう。

「……お許しも出たことだし、小手調べをしてみるか」

　目の前にあった鶴つるの石像に、陸鷹化は掌しょうを打ち込んだ。

古びた石鶴は砕け、無数の石片となった。その残ざん骸がいをポケットにねじ込んで、下界に羽のある猫のごとく跳躍する。飛び乗るのは適当な杉の枝だ。

だいぶ視界が良好になった。

軽功を使って東照宮を駆け上がってくる少女たち。イタリアの大騎士二名だ。

ふたりは五重塔の脇を走り抜け、表門をくぐる。三さん神しん庫こと神しん厩きゆう舎しやの間にさしかかった。

そこで陸鷹化は射撃を開始した。

使うのは右手の人差し指一本。弾はじくのは左掌に乗る石くれ。指での打ちよう擲ちやく——いわゆるデコピンで、次々と石を弾いていった。猛スピードで石は撃ち出され、即席の弾丸となった。

狙うのはもちろん、駆け上がってくる二名！

これこそ弾だん指し神しん通つう功こう。師より授かった武技のひとつである。

石弾の連射（一ひと息いきに一〇発ほど撃っただろうか）に対し、少女たちはパッと散開した。彼女らの代わりに陽明門が撃ち抜かれ、穴だらけになる。

当たってないか？　ならば、当たるまで打ち続けるまで。

陸鷹化は期待で唇くちびるを微笑の形に歪ゆがめながら、ふたたび指先で石弾を連射した。

ふたりの女騎士はすばやく右に左に飛びのきながら、弾幕を避けた。それでもしつこく弾雨を降らせる。そのさなか、変化が生じた。

撃ち込む石弾が、女騎士たちの体に届く寸前で弾き返されるようになったのだ。

見えない壁に阻はばまれているようだ。鷹化はつぶやいた。

「箭せん矢し不ふ透とうの術か。飛び道具はもうダメだな」

　刀とう槍そう不ふ入にゅうと並んで、清しん朝ちょう末期の義ぎ和わ団だんなども使った術だ。

　弓矢・銃火器などによる射撃を弾き返す方術（欧おう州しゅう風ふうにいえば魔術）だった。あれを使われると霊力を宿した武具か、余程の達人が放つ一矢ないし一弾でなくては打ち破れない。

　陸鷹化は武林の麒き麟りん児じだが、射においては神技の遣い手ではない。

　ならば接近戦で片づけるまで――。今度は東照宮拝殿の屋根へと跳躍する。

　師父に仕込まれた軽功の技は、これから戦う欧州の大騎士ふたりも及ばぬ冴さえであった。

　アストラル界からの連絡がもたらされたのは、突入を開始する直前。

　地上と異界との狭はざ間まさえ超えるプリンセス・アリスの思し念ねん波は。精神感応の霊力に熟達するという巫み女こ姫ひめは、このような神技さえやってのけるのだ。

　しかし、帰還が不可能になったという報しらせにエリカとリリアナはため息をついた。

「どうする？　計画を中止して、草薙護堂たちを迎えにいくか？」

　リリアナが言った。今や、それを行えるのは彼女しかいない。

　しかし、青き騎士抜きでレヴィアタンと羅濠教主のもとに向かうのは危険が大きすぎる。

　エリカはしばらく考え、計画の修正案を口にした。このやりとりはアストラル界のプリンセスも精神感応で読み取っているはず。案の定、思念波が届いた。

　――是ぜ。その計画に沿って、こちらでも準備を進める。幸運を祈ると。

「そういうことだからリリィ、はじめるわよ」

「無理のある計画だが仕方ない。どのみち、無理を押し通せなくては神とカンピオーネの企たくらみを邪魔するなど不可能なのだからな」

　こうして新たな計画を胸に、エリカとリリアナは東照宮へ飛び込んだのだ。

　ちなみに、甘粕は意識不明の九法塚青年と共に離脱している。隠密行動と陰おん陽みよう道どうなるホワイトマジックに精通するも、戦闘能力で劣る忍びの者。敢えて彼を同行させる必要はないと判断したためだ。

「先せん遣けん隊がおでましのようよ、リリィ」

「ふん。空から登場とは、ずいぶんと派手な少年だな」

　上空からの攻撃をやり過ごしながらの突入。

　ついに天より舞い降りてきた陸鷹化に、ふたりの大騎士は視線を向けた。

「待たせたね、姐ねえさん方。師父のところに用があるようだけど、今は取り込み中なんだ。どうしてもと言うなら、僕が相手をしてあげるよ」

　東照宮拝殿の屋根から悠ゆう々ゆうと見下ろしながら、陸鷹化は言った。

　その姿、羽を休める鳳ほう凰おうのごとく――。齢よわい一四歳。若いというよりも、むしろ幼い。だが威風堂々たるたたずまいは、魔王の弟子にふさわしいものだった。

「あら。いつもはそっけないくせに、今日は情熱的に誘ってくれるのね？」

「師父の御前だから、下へ手たを打つ余裕がないんだ。全力で潰つぶさせてもらうよ」

　エリカのからかいに、若き武ぶ侠きようは嗤わらいで応える。

どこか歪ゆがんだ心根が生み出す、ひねくれた笑顔。しかし、そこに宿る自信はまぎれもない本物だ。大騎士ふたりを相手にして勝つ気なのか？

エリカの疑念に気づいたのか、陸鷹化の笑みはやや自じ虐ぎやく的てきなものになった。

「ああ。さすがの僕も、姐さんたちといっぺんに戦うのはすこし危ない。多分、一〇回勝負したら三回は負けるんじゃないかな？」

「つまり七回は勝つつもりだと？　ずいぶんと大口を叩くな」

静かに言い返したのはリリアナだった。

大たい言げん壮そう語ご、傲ごう慢まんさ。それらは時に、大きな力の源泉となる。才能と技ぎ倆りようを輝かせるのは自信と覇は気き。勝負の世界では、謙けん虚きよな天才よりも傲ごう岸がん不ふ遜そんな天才の方がすぐれた結果を残すことは多いのだ。

「あなたとの腕比べ、たしかに惹ひかれるものはあるが」

「残念だけど、わたしたちの狙いはあなたじゃないの。せっかくのお誘いをお断りするのは心苦しいけど」

エリカは紅と黒ロツソネロの、リリアナ青と黒ネラツズーロのケープをまとっている。バンディエラと呼ばれる大騎士にのみ許される戦いくさ装しよう束ぞくだ。

「へえ。まさか、我が師父にふたりがかりで挑むつもりだとか？　そいつは勇気があると言うよりも無謀が過ぎるな。悪いことは言わないから中止した方がいい」

「いいえ、そちらでもないわ。……はじめましょうか、リリィ」

「ああ。あまり分のいい勝負ではないが、この事態を無視しては騎士の名折れ」

エリカの手には魔剣クオレ・ディ・レオーネ。

リリアナの手には魔剣イル・マエストロ。

この二振りは、もともと一いつ対ついの魔剣として鍛たん造ぞう

されたものだ。素材はダマスカスの地で錬成されたウーツ鋼。コンクリートの塊かたまりすら両断する斬れ味を持ち、所持者の魔力を高める。またそれぞれ『不滅』と『魔曲』の属性を秘める。

　ふたりはすでに、完全な戦闘態勢を整えていた。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！　主よ、何なに故ゆえ我を見捨て給たもう！」

「ダヴィデの哀あい悼とうを聞け、民よ！　ああ勇士らは倒れたる哉かな、戦いの器うつわは砕けたる哉！」

　そして、同時に言こと霊だまを唱となえる。

「我が力なる御方よ、我を助け給え、急ぎ給たまえ！　剣より我が魂こん魄ぱくを救い給え。獅し子しの牙きばより救い給え。野牛の角より救い給え！」

　憎悪と絶望の言霊を呼び出す、エリカの『主よ、何故我を見捨て給うエリ、エリ、レマ・サバクタニ』。

「殺あやめし者の血を呑のまずして、ヨナタンの弓は退かず！　勇士の油を喰くわずして、サウルの剣は虚むなしく還かえらず！　ああ勇士らは戦いのなかに倒れたる哉！」

　古き英霊の死を悼いたむ、リリアナの『弓の歌』。

「我は主の御名を告げ、世界の中心にて御身を讃たたえ、帰き依えし奉たてまつる！」

「ヨナタンの弓よ、鷲わしよりも速く獅し子しよりも強き勇士の器よ。今こそ我が手に来たれ！」

　どちらも神すら苦しめる最高位の戦闘魔術コンバットマジックである。

　欧州の魔術にはたいして詳しくないはずの陸鷹化が顔を引き締めた。エリカとリリアナの周囲に集つどう言霊の禍まが々まがしさで厄やっ介かい極まりない術だと気づいたのだ。

　この秘ひ儀ぎを繰り出すと決めたとき、ふたりは隠密行動を諦あきらめた。これだけの魔術の気配、陸鷹化や羅濠教主なら即座に察

知してしまう。隠れても時間の無駄だ。

「退きなさい、陸鷹化！　光を失い、息を止めよ！」

　エリカが叫んだ。

　憎悪と絶望の言霊を従えた今なら、この世ならぬ強制力を発揮できる。彼女に命じられた者は本当に盲めしい、心臓の鼓動を止めてしまうのだ。

「我が往く手を阻はばむ者に災いあれ！　灰は灰に、塵ちりは塵へと還れ！」

　つづいてリリアナが叫んだ。

　英霊への哀あい悼とうを従えた今なら、全ての形あるものに諸しょ行ぎよう無む常じようを示すことができる。彼女に指さされた物は、砂となって崩れ去ってしまう。

　だが、この呪じゆ詛そを凌しのぐあたり、武侠・陸鷹化はさすがであった。

「く――！　厄介な術を使ってくるな！」

　怒鳴りながら、心臓の真上辺りを左拳で強打した。

　檀だん中ちゆう穴けつを刺激して、体内の気を強めたのだ。ここは中ちゆう丹たん田でんともいい、臍せい下か丹田と並んで気――欧州魔術で言う呪力の流れを司つかさどる重要な経けい穴けつだった。

　体内を駆け巡る呪力が強いほど、外から加わる魔術の影響を受けないようになる。

　カンピオーネの魔術に対する耐性が絶対的なのは、単純にあらゆる上位魔術師を凌りよう駕がする呪力が体内に宿っているからだ。

　師によって凄せい絶ぜつなまでに鍛きたえられたであろう陸鷹化は、気功においても天才だった。

　呪力を瞬間的に高めて、エリカとリリアナの呪じゆ詛そを耐えきった。まさに神技。だが、魔王の直弟子を無力化するのが目的

だったわけではない。

　わずかな間でも、彼の先制攻撃を阻はばむこと。

　それこそが狙いであった。そして、どうやら上う手まくいった。陸鷹化が肉体を操ることではなく肉体の内面へ注意を向けた瞬間、大騎士ふたりは次の行動に移った。

　エリカは魔剣クオレ・ディ・レオーネに魔術をかけた。

　錬れん鉄てつ術・変形。今まで細身の剣だった愛剣は、ピルムへと姿を変えた。ローマ帝国の軍団兵も用いた投とう擲てき用の長ちよう槍そうである。そこに憎悪と絶望の言霊を宿らせた。



　リリアナは魔剣イル・マエストロを地面に突き刺した。

　代わりに手にしたのは青き光の弓と矢。古き英霊への哀悼が形となったヨナタンの弓である。かつて英雄ペルセウスをも射ぬいた武具だった。

　大騎士たちは、この飛び道具を同時に天へ向けて放った。

　狙いは日光山上空でとぐろを巻く白銀の大蛇、その喉のど笛ぶえとおぼしき辺り——。

　的は空中で、しかも体の下側を大地にさらしてくれている。遮しゃ蔽へい物ぶつはない。あとの問題は射程距離と射手の命中精度だけ。

　彼女たちは初めからレヴィアタンを攻撃するつもりだったのだ。

　天へ駆け上がる槍と矢。

　魔術で生み出された武器たちは、蛇神の喉のど笛ぶえに見事喰らいついてみせた。

第７章　ジャイアント・キリング

１

　レヴィアタンの巨体はゆっくりと地上へ墜おちていった。

　きらきら光る細かい粒りゆう子しをまき散らし、重みのない羽毛がひらひら舞い降りるように不自然な軌道での墜つい落らく。

　白銀の蛇じや身しんもしぼんでいった。地上まで数十メートルという頃には、白いアーシェラの肉体へ変へん貌ぼうしていた。か細い喉のどには鋭い刃物によるものらしき大傷が二カ所もあった。

　そうして、アーシェラの体はついに東とう照しよう宮ぐうの最上部・奥おく社しやに落ちた。

「蛇形を保てなくなりましたか。これでは『弼ひつ馬ば温おん』の呪じゆ縛ばくを解とくための鍵かぎには……」

　つぶやきながら羅ら濠ごう教主が歩み寄っていく。

　ぴくぴくと痙けい攣れんし、口から血の泡を吹きこぼす少女の手首を取る。脈を診みたらしい。教主はこくりとうなずき、すっくと立ち上がった。

「鷹よう児じ！　わたくしが魔女の治療に当たる間、あなたは騎士たちを足止めしなさい！」

　二〇〇メートル下方にいる弟子へ申し渡す。

　内功によって練り上げた気を込めた教主の美声は、この距離でも向こうに届くのだ。

「あの凶暴女、あれでまだ生きていたのか。いや、蛇になったときは『まつろわぬ神』と同等の存在っていうなら、不思議でもないのかね……？」

　指示を聞いて、東照宮拝殿の屋根にいた陸りく鷹よう化かは目を丸くした。一方、蛇神の喉笛を射ぬいた大騎士ふたりはこくりとうなずき合った。

「レヴィアタンを排除する最善の方法はさっきも言った通りよ」

　東照宮に突入する直前、プリンセスがアストラル界から思し念ねん波はを送ってきた直後。

　このときの打ち合わせでエリカは言い切った。

「わたしとリリィによる直接攻撃。ダヴィデの言こと霊だまなら神に対しても殺傷力を発揮できるし、標的は宙に浮かびながら地上に急所をさらしているのよ？　きっと上う手まくいくわ」

「まあな。蛇神の命はすでに尽きかけている。決して荒こう唐とう無む稽けいな考えではないだろう」

　リリアナも冷静にうなずく。

　私生活（特に恋愛面）はともかく、戦闘中は冷れい静せい沈ちん着ちやくな少女なのだ。

「もちろん、ゆっくりやっていたら教主や陸鷹化に邪魔されるでしょうけど、第一撃でレヴィアタンを狙ねらえば、成功の見込みは十分にあると思うわ」

　陸鷹化は気き功こうについての造ぞう詣けいは深いが、魔術・方術に関してはさほどでもない。

　戦闘魔術コンバツトマジツクの奥おう義ぎ・英雄ダヴィデが遺のこした言霊について、精通している可能性は低い。問題は彼の師の方だが、あの祠ほこらでの遭そう遇ぐうを思い出せば——。

「羅濠教主がわたしやリリィを敵として警戒するとは考えにくいしね。だから、最初の攻撃目標をレヴィアタンに絞るのなら、きっと

上う手まくいくでしょう。でも……」

「そのあとが問題だ。わたしたちは本気になった教主と対決することになるのだから」

　カンピオーネと互角に戦いうる地上の存在はカンピオーネのみ。だからプリンセス・アリスに草くさ薙なぎ護ご堂どうを迎えに行ってもらったのだ。

「結局、レヴィアタンを排除したあとにはカンピオーネの力が必要になる。だが、あの儀式を進行させてしまえば《鋼はがね》が甦よみがえってしまう。……詰みの状態だな。打つ手がない」

「ええ。だから賭かけに出ましょう」

　悩ましげに頭を振るリリアナに、エリカは改めて言い切った。

「草薙護堂が持つウルスラグナの権けん能のうに。知っているでしょう、かの軍神は古代ペルシアの大地を飛び回り、遍あまねく民衆に救いの手をさしのべた守護者。だから——」

　エリカの提案にリリアナはうなずいた。

　アストラル界からの思念波でプリンセスも賛同してくれた。

　ふたりの騎士はかくして突入を敢かん行こうし、レヴィアタンの撃げき墜ついに成功したのだ。

　そして現在。羅ら濠ごう教主が弟子に下した指示を聞き、エリカとリリアナは目配せし合った。

　詳細は不明だが、あの蛇神はまだ回復可能ではあるようだ。

「よそ見をしているなんて、ずいぶんと余裕じゃないか！」

　声と共に少年が飛び降りてきた。

　例によって、かすかな音さえ立てない。霊れい妙みようとさえ言える体術。己おのれの体重・筋力・運動エネルギーを完全に掌しよう握あくし切って初めて可能な芸。エリカやリリアナも非凡な遣つ

かい手てだが、まだこの域には達していない。

　銀髪の騎士はとっさに手を伸ばし、地面に突き刺していた愛剣を取った。

　それを見た陸鷹化は、にやりと嗤わらって神速で踏み込んできた。

　手を伸ばせば届く距離。右拳を撃ち出す。狙いは魔剣を握った右手！　リリアナはすべるような歩法で横に逃れた。

「そちらこそ余裕だな！　わざわざ武器を持った方を攻めるか！」

「ははっ！　剣を持たない剣術屋の相手なんか、金をもらったってお断りだよ！」

　エリカはレヴィアタンに愛剣を投じたため、丸腰のままだ。

　にもかかわらず笑って武器のある方を選んだ少年へ、リリアナは魔剣を繰り出した。狙うは無造作に突き出された右腕。動脈か腱けんでも切れば、それで勝負はつく。

　だが、若き武ぶ侠きようはだらんと腕を下げ、魔剣をやり過ごした。

　しかも、下げた腕を鞭むちのようにしならせて、敵手の顔面を打ちにいく。防御と攻撃の動きが渾こん然ぜん一いつ体たいだった。リリアナはとっさに左腕を上げてブロックした。

「へえ。遅くはないし鈍にぶくもないな。まあまあ、程々の腕前だねェ……」

　陸鷹化はのんきそうに批評した。

　武装した敵との対決に、露つゆほどの恐怖も見せない。彼は未だ本気ではないのだ。

　リリアナはイル・マエストロを中段に構えた。

　その形状は緩ゆるやかなカーブを描く、片手用のサーベル。かつてフィレンツェの地下墓地で発見された、クオレ・ディ・レオーネと対ついをなす魔剣である。

「エリカ、どうやら彼はわたしとの逢い引きを所しよ望もうらしい。あなたは早く教主のもとへ往ゆけ」

　珍しく冗談めかした旧友の言葉に、エリカは華やかに微笑ほほえんだ。

「いいの、リリィ？　その配役だと、わたしの方が主役みたいになるわよ？」

「本音を言えばダメだが、仕方ないだろう！　もう立ち合いをはじめているし、しかも向こうをまだ本気にさせてないんだぞ？　このままで済ませられるか！」

　リリアナは叫んだ。対たい峙じする少年は、フフンと笑って余裕を示している。

「行きがかり上、こうなっては仕方がない。彼はわたしが引き受けるから先へ進め。この間も言ったが、あなたのような目立ちたがりにはわからない境地というやつだ！」

「そう。だったら遠慮なく往かせてもらうわ！」

　エリカは《跳躍》を使い、東とう照しよう宮ぐう拝はい殿でんの屋根に飛ぶ。その背中を、陸鷹化は猛もう禽きんのような目で凝ぎよう視しした。

「ふたりまとめて相手するって言っただろ！」

　叫びざま飛び上がり、ふたたび拝殿の屋根に飛び乗る。

　いけない。このままだと彼は、名前通りに鷹たかの狩りをはじめるだろう。とっさにリリアナも屋根まで跳び、陸鷹化の前に立ちはだかった。

　そして、魔剣イル・マエストロの封印を解除する。

　愛剣の真価を隠しているのはエリカだけではないのだ。匠たくみの鋼が形を変えていく。緩いカーブを描く片刃の刀身はそのまま。柄つかの部分が一メートルほどに伸びた。日本でいう薙なぎ刀なた、矛ほことよく似た形状だ。

　軽く振ると、キィンと玄げん妙みような音が生じる。

　鉄てつ琴きんの調べにも似た、指揮者マエストロの名にふさわしい響きだった。

「幻想の精せい髄ずいよ、妙なる調べを奏かなでる鋼よ！　見えざる翼を今こそ我に示し給たまえ！」

　切り札――『魔曲』を解き放つ口く訣けつ。

　薙刀となったイル・マエストロを軽く振る。キィンと鳴る。

　もう一度振る。リィンと鳴る。キィンキィンリィンとリズミカルな調べを奏でる。

　陸鷹化の瞳から鋭さが減じた。目の前のリリアナを見つめ、跳び去るエリカを視界の端に抜け目なく捉とらえていた鷹の目が、一瞬茫ぼう洋ようとなった。

　――かかった！

　確信と共にイル・マエストロを、陸鷹化の胸元へと突き込む。

　これが届く寸前に正気を取り戻し、大きく飛びのいた武侠はさすがだった。

「……その武器、変な隠し芸があるようだね」

「魔曲という。魔剣イル・マエストロは妙なる調べを奏かなでる匠たくみの鋼。わたしのように武芸と音おん曲ぎよくの双方に通じた遣い手は、さまざまな魔曲を奏でて第二の武器とできるのだ」

　今度はリリアナが高みから見下ろす番だった。

　東照宮拝殿の屋根に立つ彼女に対して、陸鷹化は地上。さっき飛びのいたときに拝殿から下りることになったのだ。

　リリアナは武術の型を披ひ露ろうするようにイル・マエストロを振り回した。

　すると、金属質の玄妙な調べが流れる。さきほども使った、聞く者の心を乱す魔曲だ。真剣勝負の最中にこれを聞けば集中力が乱れ、隙すきが生まれる。

　他にも呪じゅ力りょくを減げん衰すいさせる魔曲、体力を奪う魔曲など、曲目は多た岐きにわたる。

「ちっ――。地味にヤな術を使うな！」

　陸鷹化は怒鳴り、体内の呪力を高めた。

　ダヴィデの呪じゅ詛そを退けたのと同じ魔術への防御法。しかし、それも織り込み済みだ。

「命をあたえ、命を奪う母よ！　暗き土地の道みち標しるべを我に！」

　新たな言霊を唱となえ、リリアナは魔術を使った。大地を操る魔女術だ。

　陸鷹化の立つ地面が軟化する。固さを失い、泥となり、底なし沼となる。このまま標的を地の底に沈めてしまう陰いん惨さんな術である。

　すぐれた魔術師なら対抗魔術や幸運の加護で術を打ち消し、凌しのぐだろう。

　草薙護堂のようなカンピオーネなら、体内の呪力を高めて術の効き目を消し去る。彼らの魔術への耐性は、広い範囲に影響をあたえる術さえも直じかにさわることができれば無効化してしまう。だが気功の天才といえども、只の人間に同じ真ま似ねはできない。

　騎士剣術、中国武術、魔術、方術のどれを極めようとも、カンピオーネや神々が所有するほどの呪力を手に入れることは不可能なのだ。

　案の定、陸鷹化は底なし沼に足を呑まれた。もう膝ひざまで沈んでしまった。

「……剣も魔術も両方って人たちは、戦い方がせわしなくていけないよねェ」

　しかし、彼は冷静だった。冷静に今まで通りのことをやってのけた。

　足を踏ん張る余地などないドロドロの底なし沼。

そこから魔術の影響を受けていない地面の上へ、軽やかにジャンプした。

ただ身軽なだけで今の動きはできない。水面に浮かぶ木こっ端ぱに飛び乗り、そのまま水上で立ちつづける。そのレベルまで体術を極きわめていなければ――。

「エリカ姐ねえさんも逃がしちまったことだし、ここからは出し惜しみもなしだな」

陸鷹化が両手の掌てのひらを開いたので、リリアナは瞠どう目もくした。

軽けい功こう卓たく越えつ、掌しよう力りき絶ぜつ大だい。前者はさんざん見せつけられたが、後者はまだだった。彼は今まで一度も掌を――最も強力だという武器を披露していなかったのだ！

「姐さん、僕もそろそろ得意技を使わせてもらうよ！」

2

己おのれの体に可能な限り防護魔術をかけてから、エリカは石段を駆け上がった。

東とう照しよう宮ぐうにおいて最も高い場所、奥おく社しやに到着する。

当然そこには羅ら濠ごう教主がいた。しゃがみ込み、こちらに背を向けている。魔教教主が向き合っているのはアーシェラだった。喉のどに刻まれた傷がふたつ。そこからドクドクと血があふれ、生命が流れ出ていく。

魔女が横たわる地面には、幾き何か学がく的な図形と漢字が描かれていた。

おそらくは方術用の魔方陣。乾けん・兌だ・離り・震しん・巽そん・坎かん・艮ごん・坤こんの八字がひときわ大きい。これがアーシェラの命を繋つなぎ止めているのだろう。

「またおまえですか、黄金の髪の騎士よ」

　振り向きもせずに教主は言った。

「儀式の要よう諦ていを蛇と見抜き、真っ先に排除した機転は見事。ですが、もう邪魔は許しません」

　驚いたことに、その口調に怒りのニュアンスは微み塵じんも混ざっていなかった。

　怜れい悧りにして平静な話しぶり。

　あるいはこれも貴き人じんの器量かもしれない。エリカは感心した。こちらを対等の存在と見なしていないがゆえに、粗そ相そうをしても犬猫が騒いでいる程度の感想しか抱かないのだ。

「畏おそれながら教主、そのお言葉には到底従えませんわ」

「そうですか。大騎士よ、おまえの才気を散らすのは少々惜しいと思ったゆえ、警告してあげたのですが……残念です。失うせなさい」

　最後の一言が響いた瞬間、エリカは全身が粉々になったかと思った。

　気づけば地面に横たわっていた。

　あの衝撃波を受けたのだと想像はつく。しかし、いつ放たれたのか感じ取ることすらできなかった。いきなり大型車両に轢ひかれたかのような衝撃であった。

「……おや、まだ生きていましたか。ああ、守護の術で護身していたのですね。本当に準備のいい娘だこと。鷹児もこれくらいの周到さを身につけ、減らず口を慎つつしむのなら一人前と認めてやってもよいのですが……」

　仰あお向むけに倒れたエリカの視界には、夕焼けで真っ赤に染まった日につ光こうの空が映るのみ。

　教主がどんな顔をしているのかはわからない。おそらく、あいかわらず背中を向けたままなのだろう。大騎士であれ大魔術師であれ、彼女にとっては路ろ傍ぼうの雑草のようなもの。一いつ箇この

人間として認めるに値あたいするとは思っていないのかもしれない。

　理由もなく確信しながら、エリカはあがいた。

　まず身を起こそう。立ち上がらずともよい。せめて上体だけでも起こし、健在を誇示しなければ。それがせめてもの矜きよう持じ。そして、彼の名を呼ぶのだ。

「……教主ッ。御身に申し伝えたき儀がございます！」

　喉のどを振り絞り、必死に叫ぶ。

　声といっしょに鮮血がこぼれた。内臓が傷ついているのだろうか？

「大騎士ごときが御前に立つのはたしかに僭せん越えつ。ゆえに、我が主を呼び寄せましょう」

「ほう。おまえの主――草くさ薙なぎの王おうを？」

「はい。彼は王のなかの王。いずれ先せん達だつのカンピオーネを乗り越え、最強の魔王として地上に君臨する者。御身のご狼ろう藉ぜきに反抗の刃やいばを突き立てるべく現れるはずです」

　エリカは冷たい秋風を頬ほおに感じながら、息を吸い込んだ。

　必ず来るという確証はない。できるかもしれないという見込みがあるだけだ。それなのに、こんな見み得えを切ってしまった。失敗したら末代までの恥だ。

　だが、それでも言ってしまった。

　人を人とも思わぬ勘かんちがい女に、目にもの見せてやろうと言わずにはいられなかったのだ。

　でも彼女が愛する少年なら、自みずからの見せ場を外したりはしないはず。もし外したら、一生背はい後ご霊れいとして取とり憑ついてやる。愚ぐにもつかないことを考えながら叫ぶ。

「来なさい、草薙護堂！　あなたの女がこんなところで死にかけて、あんなヤツにいいようにされているのよ!?　今すぐ駆けつけ

て、仕返ししてやって頂ちよう戴だい！」

　風が吹き抜けた。はじめは秋のそよ風。

　しかし、すぐに強まった。疾しつ風ぷうから渦巻く旋せん風ぷうへ。さらに骨まで凍えさせる強風に。ついには嵐の先駆けじみた烈風となった。

「おまえが俺の女……ってところには異論があるけど、全部後回しだ。仇かたきは絶対に取ってやるから休め。あと、この力のことを思い出してくれて助かったよ」

　何時間かぶりに聞く少年の声。

　渦巻く風の中心で実体化する彼の姿。背後には万里谷祐理とひかり、プリンセスもいる。エリカは賭かけに勝ったことを知った。

　ウルスラグナは古代ペルシアの軍神である。一〇の化身を持つ勝利の神は、時代が降くだるにつれて民衆の守護神にもなった。この属性を象徴する姿が『風』なのだという。吹きゆく風となってユーラシアの大地を駆け抜け、遍あまねく民たみを守る。

　草薙護堂の権能としては、非常に限定的な移動手段となる。

　親しい者に危機が迫ったとき、空間を超えて駆けつけることができるのだ。

「だけど、ウルスラグナの権能は幽かく世りよと地上の間を行き来するのに使えるのか？」

　小ザルたちを撃退し、現うつ世しよと連絡を取ってもらったとき。

　プリンセスからエリカの提案を聞かされて、護堂はつぶやいた。

「ペルシアでは旅の導みちびき手としても崇あがめられる神格です。ギリシアのヘルメスのように、旅の神は世界を股またにかけ、地上と冥めい府ふの間さえ行き来するもの。それを考慮すれば、無理ではないはずです。ただ、草薙さまの権能に当てはまるかどうかは……」

　アリスの言葉に護堂はうなずいた。結局、やってみなければわからないのだ。さて、どうしたものか――考え込んだとき、祐理の毅き然ぜんとした顔が目に入った。

「エリカさんの思いつきはおそらく上う手まくいくでしょう。護堂さん、ご決断ください」

　確信に満ちた言葉だった。その理由にすぐ思い至った。

　幽世ではあの天てん啓けいにも似た力が、ある程度コントロールできると前に聞かされていた。

「もしかして霊視したのか、万ま里り谷や？」

「はい。もちろん、私の霊視は完かん璧ぺきに的中すると決まってはいません。外れてしまうこともあるでしょう。……でも、私は信じたいと思います」

「信じる、だって？」

「護堂さんなら、地上で起きる災さい厄やくを見過ごしたりしない。おそらく命を懸けるはずのエリカさんを見捨てたりは絶対にしない。だから、必ず現世にたどり着いてくださると」

　信頼に満ちた、重い言葉だった。

　小さくため息をつき、頭をかく。これでしくじったら、二度と顔向けできない。

　だが、重い分ありがたみのある言葉でもあった。このように信じてもらえるのも、男おとこ冥みよう利りに尽きる話ではないか。それに、祐理の霊視にはさんざん助けられてきた。今さら疑う了りよう見けんは護堂にはなかった。

「……ということなので、エリカに伝えてください。地上のことはおまえとリリアナにまかせる。必ずそっちに往いってみせるから、必ず俺の名前を呼んでくれって」

　こうアリスに言って、計画のスタートを指示したのである。

　あとはもう、待機するしかない。

　護堂は湖のほとりに立ち、エリカからの呼び声が届くのを静かに待った。『風』の化身を使うには、風が吹く場所にいなくてはならない。ここなら大丈夫だろう。

　このとき、祐理のおかしな行動に気づいた。

　ちょっと離れたところで他の女性陣に話しかけ、頭を下げている。会話の内容は聞こえなかったが、ひかりとアリスはその場から離れていった。

「どうしたんだよ、万里谷？　みんなでいっしょに帰るんだから、近くにいた方がいいぞ」

　頬ほおを微妙に赤らめながら近づいてくる媛ひめ巫み女こに訊たずねる。『風』の化身はいっしょにいる者を連れて瞬間移動できるのだ。

「わ、わかっています。ですが、やはり席を外していただいた方がよいと思いまして……」

「何でさ？　このままエリカが俺のことを呼んだら、アリスさんもひかりも置き去りになるだろう？　早く呼び戻してこよう」

　護堂としては、当然の指摘をしたつもりだった。しかし祐理は驚きよう愕がくの表情で、

「で、ですが、私たちは今からあれをするのではないのですか……？」

「あ、あれ？　あれって何だよ？」

「あれと言ったら、あれです。先ほど申し上げたではありませんか。そうすることになっても全然かまいませんと……。に、二度も言わせないでくださいっ」

　恥じらいながら、だが明めい瞭りような決意を込めて、祐理は告げた。

　ここまで言われれば察しはつく。護堂の胸がドキリと高鳴った。

「あなたはまもなく羅濠教主と戦われます。あの方の権能を『剣』の言霊で無力化するために、ここで準備を済まされるべきでしょ

う。とっくにお気づきだと思っておりました」

　自ら大だい胆たんな行為を迫ったことに気づいたのか、祐理の顔もうなじも真っ赤になっていた。その姿がとにかく可か憐れんだった。

「で、でもさ。万里谷は教主が戦っているところをほとんど見てないだろ。だから、あの人がどんな権能を持っているか、わからないんじゃないのか？」

「い、いいえ。実は視みています」

　とっさに思いついた断りの理由。だが、それはすぐに無効となった。

「厩うまやで猿えん猴こう神しん君くんさまから逃げるとき、護堂さんと教主が争うところを霊視しました。そのときにあの方が使う破壊の謡うたを……。転移で逃げてきたときに、仁に王おう尊そんに由来する大だい力りきも拝見しました。どの神に由来する権能かも霊視しています。だから……」

　いつしか祐理は、目を潤うるませながら護堂を見つめていた。

「私にはこの程度のことしか戦う護堂さんのためにできません。だからせめて、できることをさせていただきたいと思っています。こ、これでもまだ駄目でしょうか……？」

　せがむように訴えられた。桜色の唇くちびるがかすかに震えていた。

　こんな娘にここまで言わせて、俺はひどいバカだ。全てを目まの当たりにして、護堂は覚悟を決めた。口を寄せる。

「——するぞ、万里谷。いいな？」

「は、はい。どうぞお好きなように。私はいつでも大丈夫——んっ」

　唇と唇が接触。最初は軽くついばむだけ。

　だが、次第に交わりは強く、深く、濃厚になっていく。彼女もよく応えてくれた。ひたむきに護堂の唇を吸い、舌に舌を絡からめ、

唾だ液えきをぴちゃぴちゃと混じり合わせる。

　経けい口こう摂せつ取しゆによる知識・イメージの伝達。

　呪術に対して鉄壁の耐性を持つカンピオーネには、こうしなくては術をかけられない。知識の伝達がはじまった。祐理の霊視した情報が脳内に流れ込んでくる！

『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』の源みなもとたる仁王尊——金剛力士について。

『竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』の源たるインドの女神ガーヤトリーについて。

「護堂さん……もっと、私を感じてください。私のなかにある知識をもっと強く、もっとたくさん、全部吸い上げてくださいっ。もっと乱暴になさっても大丈夫です、から……」

「万里谷……！」

　ささやき合い、睦むつみ合いながらの儀式。

　護堂が胡乱うろんなささやき声を聞いたのは、その渦か中ちゆうであった。

『うわー……姫様の言った通りです。お姉ちゃんとお兄さま、すごいことしてますよ！』

『ね、見に来てよかったでしょう？　あなたのお姉さま、絶対に何か隠してると思ったんです！　……ここまですごいことをするとは思いませんでしたが』

　誰の声か考えるまでもない、少女と美女のやりとりだった。

『う、うわ、うわー……しし、舌が入ってくのが今見えました！　いつもあんなに真ま面じ目めなお姉ちゃんがこんなことしてるなんて——ッ。あ、あれが大人のキスなんですねっ』

『ふ、ふたりとも、とんでもなく大だい胆たんですねっ。まだ陽ひは高いし、お外なのに……ッ』

　小さな、しかし興奮気味の声を聞いて、護堂は気まずくなった。

あのふたり、何で盗み見なんかしているんだ!?



護堂は何度も唇を押しつけ合っている少女の顔色をうかがった。祐理は行為に没頭しきっていた。ひたむきに、一心不乱に桜の花びらめいた唇をこちらに捧ささげ、すっかり熱くなった肢し体たいを押しつけてくる。よかった。気づいていないようだ。

彼女の集中を乱させてはいけない。雑音が入らないようにしなくては！

「万里谷……おまえの方も、もっと強く俺に集中してくれ。余計なことは気にしないで、俺に知識を伝えることだけ考えるんだ。いいな？」

耳元でささやく。ついでに祐理の耳たぶを軽く噛かみ、舌を這はわす。びくんと媛巫女の体が震え、こちらに腕を回してきた。

「は、はい、護堂さん……。私、あなたのことだけを考えますっ！」

背中に回された祐理の華きゃ奢しゃな腕には、おそろしく力が入っていた。

とろんとした目で護堂を見上げている。その表情は只ただならぬほど美しく、何よりなまめかしかった。清せい楚そな大やまと和なでし撫子こらしからぬ——いや、そうであるからこそ、一層の色いろ香かを宿しているのかもしれない。

この一瞬、護堂はどこかで見ているはずの不ぶ躾しつけな二人組のことを忘れてしまった。自分も彼女の肩を抱き寄せ、力の加減も忘れて抱きしめてしまった。

「あ——っ。ご、護堂さん、すこし痛いです……」

と言いながらも、祐理はうっとりと目を細め、護堂のなすがままに身を任せた。体の力を抜き、荒々しい抱ほう擁ようにその体を差し出してくれた。

護堂は密着する媛巫女の感触を、全身で味わった。

熱いほどの肌のぬくもり。巫女装束越しでもはっきりとわかる、たしかな肉の質感。意外なほど豊かな乳房も、護堂の足に絡からみついてくる細い太もものやわらかさも全て味わった。

「わ、私、もう迷いません……ずっとあなたのおそばにいて、こうやってあなたのために尽くします。だから護堂さん、絶対に私を放さないでください……！」

「わかってる。ずっと俺のそばにいろ、万里谷。これからもずっと——絶対だぞ」

「はい！　約束——いいえ、これは私たちの契ちぎりです。これからもあなたに全てを捧げますから、今度も必ず勝ってください……！　私、無事のお帰りをお待ちしていますから！」

「ああ、まかせろ。だから万里谷、俺にもっと力を——！」

　ぬばたまの黒髪というにはやや茶色味が強い髪。

　華奢でありながら十分以上の女性らしさ、豊満さをも隠し持つ肢し体たい。

　それらから匂におう少女の芳ほう香こうをかぎ取りながら、護堂は薔ば薇ら色の頬に唇をつけ、ふたたび祐理の唇へ戻った。合わさる唇、絡む舌。行き交う唾液に荒い息づかい。

　ここからはもう夢中だった。

　細かいことは何も考えず、互いのことだけを想い、知識とイメージをやりとりし、心を通わせる。接せつ吻ぷんを繰り返す。熱く抱きしめ合い、抱擁を交わす。

『……………………す、すごいですね、本当に』

『……………………え、ええ。あのふたり、見かけによらず奔ほん放ぽうなのですね……』

　ささやき声はいつしか小さくなっていた。

　こうして無ぶ粋すいな邪魔もなくなり、護堂は必要な知識を得ることができたのである。

　これ以上はもう必要ないと悟り、ふたりは唇を離した。激しい行為の名残なごりである唾液の糸が唇と唇の間にかかる。おたがいに離れがたく感じていることは、何となくわかった。

見つめ合う。どちらも羞しゅう恥ちで真っ赤になっていた。だが、目を逸そらしはしない。

そして結局、ふたりして微笑んだ。知識と体だけでなく、心までつながったと明確に実感した瞬間だった。だが、しかし——。

ガサリという物音。ひかりが近くの茂みからフラフラと出てきた。

熱に浮かされたような、ボーッとした表情だ。そのうしろからアリスまで現れた。こちらはひどく恥ずかしそうで、護堂と祐理を正視しないようにしている。

「ひ、ひかり——!?　離れていてって言ったのに、あなた、どうしてここに!?」

祐理が驚きよう愕がくした。まさか見られていたとは思わなかったのだろう。

一方、護堂は言葉に詰まった。淑しゅく女じよらしからぬ二人組の存在をすっかり忘れていた。とりあえず、自分が途中で気づいていたことはないしょにした方がよさそうだ。

「ごめん、お姉ちゃん。…………見ちゃった」

「——!?」

妹の気まずそうな告白に、姉が声にならない声で悲鳴をあげかける。どうにか堪こらえたのは日頃の躾しつけの賜たま物ものかもしれない。

「そ、それでね。お姉ちゃんに訊いてみたくなったから出てきたんだけど……やっぱりキスって、いい気持ちになるのかな？　それともドキドキする？　お姉ちゃんとお兄さまがあんまり夢中だから、どんな感じなんだろうって気になっちゃって……」

「そそそ、そんなことに興味を持つのはまだ早すぎます！　許しません！」

生き真ま面じ目めに祐理が叫ぶ。とはいえ、さっきまで品行方正とは言い難い行為に耽ふけっていたのは事実。説得力は皆かい無むだった。

　姉妹のやりとりを聞きながら、護堂とアリスは無言でもじもじしていた。一瞬だけ視線が合ったりもしたが、ふたりしてすぐにそむけた。やたらと気まずい。

『来なさい、草薙護堂！　あなたの女がこんなところで死にかけて、あんなヤツにいいようにされているのよ!?　今すぐ駆けつけて、仕返ししてやって頂ちょう戴だい！』

　護堂が声を聞いたのは、まさにこの瞬間だった。

　数時間しか離れてないのに、懐かしくさえある少女の声。彼女は『風』の条件をそろえるために、己おのれの命を的まとにして危険を冒おかしたのだ。

「誰が俺の女だ。勝手に設定を作るんじゃないぞ……！」

　文句をつぶやく。しかし、これは二重の意味で救いの手。

　今までの気まずさを振り払うように、護堂はまわりの女性陣を手招きした。

　皆が集まるのを待ってから、風に乗って飛ぶ。

　幽かく世りよから地上へ、仲間たちの待つ日本の古き聖域へ！
周囲で吹き荒れる暴風が消え去ったとき、護堂たちは東照宮最上部の奥社にたどり着いた。

　目の前には倒れ伏すエリカと横たわる裸の少女、そして魔教教主の背中がある。チャイナドレス風の衣をまとった乙女は、後ろ姿だけでも破格に美しい。

　だが、護堂は同じカンピオーネへの闘志で頭が沸ふつ騰とうしそうになった。

「エリカ、まだ動けるか？」

「ええ、どうにかね。でも、治ち癒ゆの魔術を使ったら、もう限界だと思うわ。わたしのバックアップなしで、あなたの方こそ大丈夫？」

　ダメージを堪えながら強がるエリカに、祐理とひかりの姉妹が駆け寄る。

「当たり前だ。重傷の人間に世話なんかされてたまるかよ」

　請け合いながら、護堂はアリスに目配せした。

　すっかり真剣な表情になったプリンセスがうなずき、祐理たちに手振りで退去を指示してくれた。媛巫女姉妹はエリカを抱え上げ、よろよろと石段の方へ歩いていく。この奥社はまもなく戦場になる。離れた方が安全なのだ。

　姉妹とエリカ、そして最後尾を守るアリスが奥社から下りた直後。

「——草薙王よ、幽ゆう冥めい界かいと人界の狭はざ間まを風に乗りて越えましたか」

　ついに羅濠教主が振り返った。

　あの麗うるわしい花のような可か憐れんさで、にこりと笑いかけてきた。

3

　羅ら濠ごう教主の愛らしさは、今まで出会った全ての美少女を凌しのぐほどだった。

　だが、護ご堂どうはもう心を呑のまれなかった。

「あなたは武と膂りょ力りょくだけでなく、術にも通じているのですね。ふふふ、倭わ国こくの王がここまで見どころの多き若者だったとはうれしき発見です。今の世に幾人の『王』がいるかは知りませんが、知ち勇ゆう双そう全ぜんなるはこの羅濠のみ。しかし、あなたは我が後継者となるやもしれません」

「あんたの後継者なんか、冗談じゃない。誰がそんなのになるかよ」

　教主の言葉に対して、護堂は力強く吐き捨てた。

「俺は他人を傷つけるような武道なんかに興味はないし、あやしい魔術なんかも勉強するつもりは金こん輪りん際ざいないんだ！」

「そうでありながら、地上の誰よりも強大な権けん能のうを握りますか」

　可愛かわいい弟でも眺めるような教主の目を、護堂は真っ向からにらみつけた。

「それもまた王者の特権です。たとえば我が仇きゆう敵てき、東とう欧おうの狼おおかみ王おうも武芸を知らず、魔術にも背を向けた魔王。それでいて彼はわたくしと同等の力を持つのですから」

　まさかヴォバン侯こう爵しやくのことか？　あの老人の異常さを護堂は思い出した。変身までする気はさらさらない。もっと人間らしい生き方をしたいものだ。

「とにかく！　俺はあんたのやろうとしていることを認めない。あのサルを神様に戻すなんて、ふざけすぎている。そのせいで万ま里り谷やと妹だって大変なことになったし、おまけに俺の連れをあそこまで痛めつけて——。俺はこれでも平和主義者なんだけどな。そいつを今だけ返上して、あんたとやり合ってやるよ」

「このわたくしと武を競うと？　ふふふ、勝てるつもりですか、草くさ薙なぎの王おうよ？」

「勝てるかどうかが問題じゃない。やるかやらないかが問題なんだ。そして俺は今、大いにやる気だ！　ここまで頭に来たのはひさしぶりだぞ！」

「その言や良し。ならば羅ら翠すい蓮れんの権能と絶技、存分に味わいなさい！」

　羅濠教主が形のよい朱しゆ唇しんを開き、軽く謡うたった。

「死し去らば、誰に憑よってか報ぜん。帰り来たりて、始めて自みずから憐あわれむ！」

　轟ごう！　衝撃波が護堂めがけて駆け抜ける。

　無色無形の攻撃。まるで突風だ。護堂は体内の呪力を高めて踏ん張った。薙なぎ倒されそうになったが、どうにか堪こらえる。たい

してダメージもない。

「やはり戦い慣れていますね。己の強みをきちんと学んでいると見える。ええ、我ら『王』に対しては、最強の魔術師・道士の操る術でさえ効かぬもの。同じ『王』同士であっても、渾こん身しんの威力を込めた権能でなくては遠間から効かせることは難しい。——ならば」

　こんな荒っぽい場面で、なぜそんな表情を？

　面と向かって問いたくなるほど、教主の笑顔はあどけなかった。しかし、彼女が口にするのは勝負の心得、いくさの作法。ほっそりとした肢し体たいは護堂に向けて軽やかに歩み寄り——。

「むしろ、果か敢かんに攻め込んでの短たん兵ぺい白はく打だこそが有効と心得なさい！」

　ここからはもう見えない。わからない。見切れない。

　白兵戦の能力では、羅濠教主との間に一万光年にも及ぶ開きがあるのだ。

　だから、護堂は下へ手たに避けようとしなかった。

　割り切る。最初の一撃で死ななければいい。接近する教主を見た瞬間にもう動いていた。背を丸め、両腕で体の正面——顔面と胸、腹部を隠し、腰を退かせる。

　とにかく急所に打撃を喰くらわない。それだけを考えて、みっともない格好を取った。

　——もしかしたら、中段蹴りだったのかもしれない。

　硬いくせによくしなるチェーンのような何かで、ガードに使った両腕を叩かれた。

　強烈な電流を喰らったような衝撃が走る。

　両腕の叩かれた辺りはやたらと熱く、他には何も感じない。とにかく全身が痛い。頭から爪先まで、両手両足、胸も腹も背中も、体の全ての部分を激痛が襲う。血が口のなかに込み上げてきた。五ご臓ぞう六ろっ腑ぷもたっぷりとダメージを受けたらしい。たった一

発で体の隅から隅まで破壊された気分だ。待てよ、羅濠教主は高校生ひとりを天高くぶん投げる力持ち。なのに、謎なぞの打撃を喰らった護堂は派手に吹っ飛ぶことなく、その場に崩れ落ちようとしている。彼女はその大だい力りきを全て打撃のダメージに変えてみせたのだろう。たいしたもんだ……。

　そんな思考が脳内を駆け巡る。

　しかし、それでも生きているのだからカンピオーネは恐ろしい。

　全身が砕け散りそうな痛み。ただ熱いだけで感覚のない両腕。体の芯しんまで根こそぎ破壊された実感。それらをもてあそびながら、護堂は『駱らく駝だ』の化身を使った。

　ウルスラグナ第四の化身。一定以上のダメージを受けたときだけ使用できる。その能力は、キック力と格闘能力の飛躍的な上昇。そして、異様な打たれ強さ。

　——ついに護堂の目は、羅濠教主の動きを捉とらえるようになった。

　やっぱりキックだったようだ。蹴りを放った美しい右足が地面に戻っていく。

　今度は護堂の顔面を狙ねらって上段突き。拳こぶしを縦たてに構えているのがカンフーっぽい。香ホン港コン製アクション映画の数々で観みた動きといっしょだ。

　だがもちろん、羅濠教主の動きの方が千倍は洗練されている。

　教主の放った突きを、護堂は地面に倒れながら避けた。直後、寝転がった体勢から下半身を跳ね起こす。教主のスレンダーなボディを蹴けりに行く。

「ほう……動きが変わりましたね。技ではない。闘志と精強さで勝利を引き寄せる、獣けものの身ごなし——。敵の力と状況に合わせて自らを変える。あなたは千せん変べん万ばん化かの闘神より戦いの権能を簒さん奪だつしたのですね。しかも、それを能よく使いこなしている！」

　蹴りをかわした教主は、目をすがめながら言った。

　寝転んだままの護堂をじっと見み据すえる。余裕を見せているのではない。これは、こちらの能力を見極めようとしているのだ。

　嵩かさになって攻め込まれるよりも、むしろ恐ろしい。

　伝説の名力士に横よこ綱づな相撲ずもうをされる幕下の心境で、護堂はゆっくり立ち上がった。

　そういえばカンピオーネになってまもない頃、この体の特徴をエリカが調べていた。一般人との最大の差異は骨の頑丈さなのだという。何でも、たいていの金属より硬いそうだ。これに加えて、異様に自然治ち癒ゆ力りよくが高い。

　それゆえの異常なタフネス。だから護堂は今も生きている。常人がさっきの蹴りを受けたら、全身の骨が砕け、全ての臓器が破裂したかもしれない。

『駱駝』になったおかげで、教主の凄すさまじさが前よりも明確に理解できた。

　彼女の武術は想像以上だった。

　突きや蹴りなど拳法の技を放つ際、攻撃の気配を全く悟らせない。どんな名手が相手でも、普通はその程度の気配なら素しろ人うとにもわかる。だが羅濠教主はそれすら許さない。

　そして、あらゆる動作が鋭い。手足を振り回す軌道が短く、小さいのだ。

　それでいて絶大な威力を宿している。名ボクサーは一〇センチの隙すき間まがあれば強烈なパンチを放つという。彼女は隙すき間まなくとも同じ芸当をやってのけるだろう。

　なるほど、だから攻撃をかわせなかったのか。

　護堂はつくづく感心した。『駱駝』の格闘センスが導いてくれるおかげで、今はぎりぎり凌しのげる。教主が手足を動かした瞬間に反射神経が勝手に働いてくれる。

　彼女が中段突きを出した瞬間、こちらは横にステップしてサイドキック。

彼女が踏み込んでショートパンチを狙ってくるなら、こちらは踏み込みに膝ひざ蹴げりを合わせてカウンター。

この迎撃に対して教主がさらにカウンターを合わせようとしたら、地面に身を投げ出して彼女の軸足を攻める。どうにか互角の格闘戦だった。

両腕はまだ熱く、感覚がない。回復にはもうすこし時間がかかりそうだ。

実は折れている気もするが、カンピオーネの回復力は異常。そのうえ『駱駝』は通常よりも治癒力が高まるようなのだ。……まあ、治った瞬間に折られるかもしれないが。

「このままでは埒らちがあきませんね。ならば、わたくしの絶技をひとつ見せましょう」

花の美び貌ぼうがほころんだ。

雲間からのぞく太陽。闇やみ夜よを照らす銀月の光こう明みょう。そんな風ふ情ぜいすら漂う美と可か憐れんさ。この人はなんでこれを平時に見せないのかと、護堂は思った。



「飛ひ鳳ほう十じゆう二に神しん掌しよう。この掌法はわたくしがもっとも得意とする武芸であり、武ぶ林りんの至宝というべき秘芸。心して受けなさい」

　そういえば、彼女の弟子は掌しようを使う武術が得意だと聞いた。師し匠しよう譲りだったようだ。

　そこからは悲惨だった。

　ジャブのようにスッと放たれた掌打であごを打ち抜かれた。両手の掌で腹を打たれた。肩の鎖さ骨こつの辺りを手刀で抉えぐられた。きれいにそろえた指先で腿ももを穿うがたれた。

　やられ放題である。向こうが三発打ち込む間に、ようやく蹴りをひとつ返す。

　しかも、それがかわされてしまう。

「飛鳳十二神掌は鳳ほう雛り登とう門もん、鳳ほう眼がん穿せん簾れん、鳳ほう爪そう掏とう心しん、飛ひ鳳ほう墜つい落らく、丹たん鳳ほう朝ちよう陽よう、金きん鳳ほう亮りよう翅し、群ぐん鳳ほう連れん環かん、雄ゆう鳳ほう千せん斤きん、鳳ほう翼よく天てん象しよう、鳳ほう龍りゆう陰いん陽よう、鳳ほう凰おう双そう飛ひ、大たい鳳ほう無む天てんの一二手から成る絶技。全ての技を繰り出し終えたとき、柔じゆう剛ごうを諸もろ共ともに極め、陰いん陽ようを相そう剋こくする理り合あいが秘められています」

　親切に解説までしてくれた。

　しかも、大げさな名前の掌法プラス、あの衝撃波まで使い出した。向こうの三発に対して一発の蹴りを返そうとしたら、例の謡うたが出てくる。

「猶なお瞻みる、太白の雪。遇あうを喜ぶ、武功の天」

「影は静かなり、千官の裏うち。心は蘇よみがえる、七校の前」

「今こん朝ちようより漢の社しや稷しよくは新たに中ちゆう興こうの年を数えん」

　そのたびに見えない壁のような衝撃波に叩かれ、後退を余儀なく

された。

　格闘戦を行いながらでは、さっきのように持ち堪こたえられない。逆に教主は、文字通り鼻歌交じりに護堂を追いつめていく。麗うるわしき乙女との実力差をまざまざと見せつけられる。

　幾度目かの衝撃波を喰らい、大きく弾き飛ばされた。

　東照宮の奥社へ登るための石段。

　そこまで飛ばされた護堂は、丸太のように落ちていった。普通の人間なら、これだけで大怪我をするところだ。転落は石段途中の踊り場でようやく止まった。

　立ち上がるべく、護堂は膝に力を送り込んだ。カクカク笑っている。上手く立てない。

　石段の上から教主に悠ゆう然ぜんと見下ろされた。

「立ちなさい、草くさ薙なぎの王おうよ。あなたも魔王の端くれであるからには、この程度で倒れる器ではないはず。立って、わたくしの相手をつづけるのです」

　教主は勝手なことを言い、月げつ琴きんの響きにも似た美声を張り上げた。

「少しよう陵りようの野や老ろう、声を呑のんで哭こくす。春しゅん日じつ潜行す、曲きよく江こうの曲。江こう頭とうの宮殿、千門を鎖とざす！」

『猪いのしし』を吹き飛ばした威力で衝撃波を放つ気だ！　護堂は息を呑んだ。

　黒き神獣はもういない。あれを生身で喰らったら、生きのびる自信はない。くそ。とんでもないものを人間相手に使おうとしやがって！

　心のなかで罵ののしってから、苦笑した。

　考えてみれば、自分も似たようなことを他の神様やカンピオーネにやってきた。

　そして大抵の場合、喰らわせた相手は結構ピンピンしていた。ならば、自分だって切り抜けられる。実際、そのための手段も持っている。

　――羅濠教主の権能はふたつ。

　どちらを無力化すべきか悩んでいたが、もう迷っている暇はない。

　接近戦での打ち合いと飛び道具の使用。どちらも両立させる厄やっ介かいな力を先に潰すべきだ。でないと、このまま向こうのペースで戦いが進行してしまう。

「細さい柳りゆう新しん蒲ぽ、誰たが為ためにか緑みどりなる。憶おもう昔、霓げい旌せいの南なん苑えんに下りしを。苑えん中ちゆうの万物、顔がん色しよくを生ず！」

　教主の謡が一気に盛り上がった。

　魔の風が唸うなり、衝撃波が四方八方に吹き荒れる。全てを薙ぎ倒そうとする。

　ここまで来たら、生半可な方法じゃ爆風は止まらない。護堂は『戦士』の化身となり、言霊の刃を抜き放った。

「羅濠教主！　あんたの謡は、インドの女神ガーヤトリーを倒して簒さん奪だつした権能だ！　五ご面めん十じつ臂ぴ――五つの顔と一〇本の腕を持ち、聖なる賛歌を女神に擬ぎして崇あがめた神格！」

　護堂の周囲で、光の玉が星のように瞬き出す。

　一方、魔教教主の周囲では衝撃波を伴う魔風が唸うなりを上げ、破壊を振りまきだした。

　東照宮の奥社にある全て――徳とく川がわ家いえ康やすの骸むくろを納めるという宝ほう塔とう、門、社やしろ、そのまわりに生える杉の木々、ことごとくが魔風に席せつ巻けんされ、バラバラに砕け散っていく。

　石段の踊り場に立つ護堂は、その光景を見ながら『剣』の言霊を造り出す。

夜空を彩る星々のように燦きらめく無数の光。

それらを自分のまわりに展開し、衝撃の魔風より身を守る。

「古代バラモン教の聖典であるヴェーダ。ガーヤトリーとはヴェーダの韻いん律りつのひとつ、定型の一パターンをも指す言葉だ。でも、神としてのガーヤトリーは創造神ブラフマーの妻にして河の女神、文字と言葉の女神、さらに遡さかのぼれば地母神にまで至るサラスヴァティーと同体を成す。極めて高位の女神なんだ！」

今や教主の放った衝撃波は最大限にまで威力を高めていた。

奥社を中心に台風のごとく吹き荒れ、荒れ狂い、狂ったように万物を薙ぎ倒す。

形あるものは全て崩れ去っていく。

台風の目である教主を除けば、唯ゆい一いつ無事なのは『剣』に守られた護堂のみ。だが、破壊の範囲はどんどん広がっていきそうだ。この奥社だけでなく、日につ光こう東とう照しよう宮ぐうの全て、そして二ふた荒ら山さん神じん社じやと輪りん王のう寺じ、その先にある日光の街まで吹き飛ばすかもしれない。

身を守るだけではダメだ。

破壊の根源を斬り裂くべく、護堂は『剣』の切っ先を教主に向けた。

なぜか右腕が熱い。言霊の刃を操る『戦士』の化身となれるとき、その確信が宿るのは必ずこの手だ。だからなのだろうか？

「サラスヴァティーはサンスクリット語とデーヴァナーガリー文字の創造者。音楽と技芸を司る女神でもあり、日本では弁べん財ざい天てんとなる。ガーヤトリーとしての彼女は音の霊を操り、神々へ捧ささげる賛歌を司る歌の女神！　これがあんたの権能の源だ！」

『剣』を加速させ、羅濠教主のなかに宿る女神ガーヤトリーの権能を斬り裂かせる。

手て応ごたえあり。存分に斬った。

魔風は唐突にやみ、衝撃波による破壊の拡散も停止した。

火のように熱くなっていた護堂の右腕も、すっかり冷たくなった。まるで氷の芯しんが腕のなかに入ったかのように——。いや、今はそんなことを気にする時ではない。

「神を斬り裂く言霊の剣、見事なり！」

歌の権能を失っても、あいかわらず音楽的な美声に言い渡された。

古こ色しよく蒼そう然ぜんたる木造建築の数々も、鬱うつ蒼そうと茂っていた杉林も、石段を形作っていた石材さえも吹き飛び、禿はげ山やまのような様相となった東照宮奥社の周辺。

すこし前までは奥社の入り口だった辺りに、羅濠教主は仁に王おう立だちしていた。

「草薙王——いえ、草薙護堂よ。魔王としての我が生は実に二〇〇有余年！　その間、このような手でわたくしを追い詰める者は皆無でした！　ふふふ、やはり同格の者との仕合は心躍ります。今度は我が絶技を披ひ露ろういたしましょう！」

そうだ。彼女は未いまだ仁王の権能を所有する。鍛きたえ抜いた武術の技も。

とんでもなく可か憐れんで、誰よりも優美な仁王尊の殺さつ戮りく者しや。

彼女は傲ごう然ぜんと草薙護堂を見下ろしている。そのたたずまいのなんと絵になることか。戦いくさ装しよう束ぞくの下でしなやかな肢し体たいは闘気に満ち、必殺致死の奥義を繰り出そうとしている。

——冗談じゃない。護堂は獰どう猛もうに唇を歪ゆがめた。

せっかく劣勢をひっくり返したのだ。向こうに流れを取り戻させてやるものか！

自覚もせぬまま微笑み、東へ意識を向ける。羅濠教主の横暴さは、民衆の敵に対する正義の焔ほのおを解き放ってくれた。今こそ最大火力を解き放ち、反撃の狼煙のろしとするとき！

「我がもとに来たれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿しゆ

ん馬めを遣つかわし給たまえ。駿足にして霊妙なる馬よ、汝なんじの主たる光輪を疾とく運べ！」

　ウルスラグナ第三の化身、太陽の似姿にして象徴たる『白馬』。

　真の太陽は西の方角に沈みつつあり、日光の空と風景を夕日色に染め上げている。だが、それとはべつに太陽がもうひとつ出現した。東の方角で暁あかつきの曙しよ光こうを放ちながら。

　この曙光から白き光の槍やりが放たれた。

　惑星としての太陽では、その大気中で爆発が発生するという。これがフレアである。

　東天より麗うるわしき魔教教主めがけて、白く燃える焔の穂先が伸びていく。それはまさしく白いフレアそのものだった。

　暁の曙光を撒まき散らしながら、焔の槍やりが羅濠教主を呑み込む——その寸前。

「一いち力りき降こう十じゆう会え、一いち力りき圧あつ十じゆう技ぎ！　一いつ腿たい千せん鈞きん力りき、一いつ足そく定てい乾けん坤こん！」

　教主もまた言霊を口からほとばしらせた。

　彼女の肩から陽かげ炎ろうが立ちのぼる。幽かく世りよでも見た、黄金に輝く仁王尊の形となる。

　金こん剛ごう力りき士し像ぞう！　——しかも、今回は二体も！

　そうだ。仁王とはもともと阿あ吽うん一いつ対つい、ふたりでひとりの神格だとも言える。東とう大だい寺じ南大門の金剛力士も那な羅ら延えん堅けん固ご王おうと密みつ迹しやく金剛力士の一対で、門の左右を守るではないか。

　超絶のパワーを発揮する権能、『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』。

　羅濠教主といえども、生身の筋力ではその全てを行使できないのだろう。だから、あんな分身を顕けん現げんさせるのでは？　最強絶対の剛力を引き出すために。……単なる彼女の趣味だったらイヤ

だなと思いつつ、護堂は推測した。

　こうして黄金の仁王尊×二が、白き焔ほのおの前に雄お々おしく立ちはだかったのだ。

　――吩フンッ!!　――哈ハァッ!!

　二重のかけ声で大地が震え、大気が鳴動した。

　羅濠教主の左右に顕あらわれた巨人ふたりは、ズンと前に進み出た。

　上半身は逞たくましい黄金の裸形である。彼らはその筋骨隆々とした肉体をさらして生きた壁となり、『白馬』の焔から教主を守ってみせた。

　黄金の筋肉が溶ける。ドロドロと融解していく。

　しかし、ふたりの仁王尊は必死の形ぎよう相そうでこの苦痛に耐えていた。宇宙的スケールの超々高温と破壊力から、創造主を守ろうとした。

　やがて暁の曙光が消え、白色フレアの槍も攻撃をやめた。

　阿吽の金剛力士像もドサッと膝をつく。神こう々ごうしいほど逞しかった肉体は半分以上溶け去っていた。さらに残りの半身もうすれ、消滅していく。しかし、彼らはやり遂げた漢おとこの顔だった。

　二体の巨人に守られた羅濠教主は、完全に無傷！　火傷やけどすら負っていない！

「そ、そんな手があったのか……」

　呆あきれるやら感心するやらで、護堂はうめいた。

　見事な機転と権能を駆使して、羅濠教主はこちらの最大火力を防ぎきった。これはつまり、草薙護堂にとっては絶体絶命の窮きゆう地ちを意味する。

「ふふふ、つくづくわたくしを驚かせてくれる少年ですね……」

　教主が微笑みながら言う。その唇の端から血の糸がこぼれる。

　彼女の呪力――東洋風にいえば気が大きく目減りしている。分身を失ったことで、かなり弱ってはいるようだ。しかし、決定的なダメージではない。これはまずい！

「あなたの見せた底力に、わたくしは賛嘆の念を惜しみません。次は当方が絶技を繰り出しましょう。羅ら翠すい蓮れんの拳脚と掌は、一〇〇万の軍さえ滅ぼすと知りなさい！」

　天より聖なる鳳凰が舞い降りる。

　しなやかな繊せん手しゆを美しき鳳ほう爪そうに変えて、空中より護堂に手刀を振り下ろしてくる。これが至近距離だったら、とっくに頭をかち割られていた。強弓より撃ち出された矢のような――いや、もしかしたら銃弾並みの速さかもしれない。

　飛鳳の武技を操る美女と戦うには、こちらも『鳳』とならなくては。

　だが、これで勝てないのはわかっている。どう戦えばいい？　超高速の世界に足を踏み入れながら、護堂は絶望に心が蝕むしばまれるのを感じた。

　かつてサルバトーレ・ドニと戦ったとき、あの天才は『鳳』の速さを見切った。

　ならば当然、羅濠教主も――。

　ここから先は、まさしく出口のない迷宮だった。

4

　東とう照しよう宮ぐうの杉林。

　そのなかで最も高い木よりも、陸りく鷹よう化かとリリアナ・クラニチャールは高く飛んでいた。鬱うつ蒼そうと生い茂る杉の木々を見下ろしながら、攻防を開始する。

より高く飛んだのは、やはり陸鷹化。リリアナよりも一メートルほど上空にいる。

そして、高度で勝まさった側が優位を得るのは空中戦の理。

陸鷹化はあざやかに体を一回転させた。床運動でいえば前転の動き。その勢いを利用して、空中で胴回し回転蹴り。踵かかとが真上から降ってくる！　リリアナはカウンターを取るべくイル・マエストロを操ろうとしたが、間に合わなかった。速すぎる！

かろうじて薙なぎ刀なた形状の愛剣を上にかざし、柄つかの部分で蹴りを受け止めた。

ふたりはそのまま地上へ墜おちていく。墜ちながら陸鷹化は猛攻を繰り出す。錐きりのごとく鋭い指先でリリアナの目を狙ねらい、手刀で喉のど笛ぶえを斬り裂こうとし、掌しよう底ていで肩を砕きにかかり、心臓の鼓動を止めようと強烈な掌しよう打だを放つ。

——飛ひ鳳ほう十じゆう二に神しん掌しよう。少年が師より授さずかったという最強の武技であった。

銀髪の青き騎士は、イル・マエストロの刃と柄で全て防ぎ通した。だが、全てぎりぎりの防御。あと半瞬遅れれば、妖よう精せいの肢し体たいは無惨に斬きり刻きざまれ、打ち砕かれたことだろう。

しかし、防御のために振るった魔剣が眩げん惑わくの魔曲を紡つむぎ上げ、武ぶ侠きようの集中をかき乱す。

舌打ちしながら陸鷹化は気を高め、身を守る。だが、この作業に追われて彼は攻撃を止めざるを得ない。その隙すきにリリアナが魔術で生み出した光の矢を放ち——。

これらの攻防は、全て空中から地上への落下中に行われた。空中戦への熟じゆく達たつぶりでは世の常の戦士を遥はるかに凌しのぐ両者。彼と彼女にとっては足場の有う無むはさほどの重大事ではない。

だが戦いの熾し烈れつさとは裏腹に、膠こう着ちやく状態に陥おちいっているのも事実だった。

武芸と身体能力では武侠が上回るも、魔術と魔曲で騎士がその差

を埋めてしまう。

　実力者同士の勝負は一瞬でカタがつくか膠着するか、どちらかになるケースが多い。今回は後者の方であった。そして、ふたりは東天より太陽の槍やりが飛来、それを黄金の巨人×二が受け止め——というデタラメな光景を目まの当たりにした。

「……ああいうスケールのちがう勝負を、近くでされたくないよなァ」

「……まったくだ。こちらもかなりの名勝負だと思うのだが、すっかり色いろ褪あせてしまう」

　何となく興きようざめした陸鷹化とリリアナは、同時に掌てのひらとイル・マエストロを下ろした。

「僕としては、師し父ふに言い訳できる程度には働いたから十分だと思っているんだけど。そっちはどうなのさ、姐ねえさん？」

「わたしも、我が主あるじ・草くさ薙なぎ護ご堂どうも血に飢うえた獣けものではない」

　向こうが提案しようとする内容に察しをつけて、リリアナは眉まゆをひそめた。

「あなたに戦う意志がないのなら、矛ほこを納めてもかまわないが……いいのか？　あなたたちの目的は《鋼はがね》の軍神を甦よみがえらせることだろう？」

「僕たちのじゃないよ。師父の目的だァね」

　陸鷹化は肩をすくめた。

「あの蛇へび女おんなも死んだか死にかけだし、そっちの方はもうダメだろ。命を張る価値はないよ。あとは適当に師父を言いくるめて、香ホン港コンに帰るさ。ま、それはそれで命懸けなんだけどね」

　カンピオーネの直じき弟で子しには、いろいろと苦労が多いらしい。ともあれ、相手のモチベーション低下がわかった以上、いたずらに戦闘をつづける理由はなかった。

「……あら。結局、こっちは停戦したの？」

　杉の木立の間から、金髪の少女がやってきた。エリカだった。魔術でこちらの居場所を探り当てたのだろう。だいぶ痛めつけられたようで足取りは重く、動きも鈍にぶい。

「ああ。なかなか白熱した戦いになったが、そうなってしまった」

　リリアナも気こそ抜かなかったが、肩の力を抜いて言った。

　憎ぞう悪おや復ふく讐しゆうのために戦うのでなければ、交渉や講和が戦闘中断の契けい機きになることは多い。もっとも、そういうイベントに移るのはもうすこし先になるだろうが。

「草薙護堂が戦っているということは、万ま里り谷や姉妹とプリンセスも戻ってきたのだろう？　彼女たちはどうしたんだ？」

「この神殿のまわりは危なそうだから、ふもとまで下りてもらったわ」

　エリカの口ぶりから、途中までいっしょだったことがうかがえた。たしかにその方が安心できる。リリアナはうなずき、今後の方針を考えた。

「やはり草薙護堂と教主の決着を見届るべきだろうな。上に行ってみるか」

　部下同士が戦いをやめても、『王』同士はそうではない。

　場を改めての話し合いは、この決戦にケリがついてからだ。そして、どちらが勝者になるかで内容は大きく変わってくる。

「一体、どっちの王様が優勢なんだろうねェ」

「へえ。お師し匠しようさまが勝っているとは言わないのね、あなた？」

　陸鷹化のつぶやきを聞きとがめて、エリカが不思議そうに訊たずねる。リリアナも気になった。こういう場合、普通は自みずからと縁が深い人間の勝利を期待するものでは？

「そりゃ年功序列とか身につけた技で勝敗が決まるなら、うちの師

父が勝つだろうけどさ」

　若き武ぶ侠きようは、しかつめらしい顔で言った。

「そんな殊しゆ勝しようで扱いやすい人なら、そもそも神様と戦った時点で死んでるじゃないか。魔王の方々にそんな人間らしさを期待するほど、僕はバカじゃないぜ？」

『鳳おおとり』の化身は、ウルスラグナの権けん能のうのなかでも最速である。

　高速の攻撃を受けたときのみ使用可能。異様なスピードに目覚め、身軽さも向上する。そして問題点がふたつ。使用後の副作用と、速すぎて繊せん細さいな動きができないことだった。

　たとえば敵の顔面を狙ねらって殴なぐるとする。まあ、実際に殴るのは五〇センチ離れた辺りの空気だったりする。自分でもスピードを持て余して、狙ねらいがブレてしまうのだ。だから相手が静止していたり、相当鈍にぶかったりしなければ、攻撃しても当たらない。

　しかし、防御に関しては超高速で動き回れるので重ちよう宝ほうする。

　敵が羅ら濠ごう教主やサルバトーレ・ドニのような化け物でなければ——。

『……たしかに速い。ですが草くさ薙なぎ王のおうよ、ただ速いだけではすぐに捕まってしまいますよ』

　打ち込まれる掌を超高速の動きでかわしていると、声をかけられた。加速状態になったせいか、すこし聞きにくい。遠くから呼びかけられる感じだ。

『その速さを見切る——ただ目で敵を追うだけの凡ぼん俗ぞくには無理でしょう。しかし、わたくしのように聴ちよう勁けいを極きわめ、心眼の法ほう訣けつを会え得とくするに至った名手ならば！』

　ふたたび遠くからの声。

聞いたときには、なまめかしい掌の細い指先が左肩をかすっていた。

激痛が走る。肩が外れかけたのかもしれない。かすっただけなのに何という威力。やはり、羅濠教主も『鳳』のスピードについてこられたか——。

そうなのだ。サルバトーレ・ドニも心眼とやらに目覚めているようなのだ。

あの能天気なアホ男は、降りしきる雨のなかから一滴だけを見切って斬り裂けると自慢していた。速いだけなら全部視みえちゃうよーとムカつく声で宣告された。

どこの剣豪小説だと罵ののしりたくなる実話だった。

しかも、対象を最短の剣さばきで捉とらえ、敵がいかなる速さでも斬り刻む神速の太た刀ち筋すじとやらを会得しているらしい。プラス心眼の導みちびきで『鳳』の超スピードさえ斬り伏せてしまう。

あの男、宮みや本もと武蔵むさしや柳やぎ生ゆう十じゆう兵べ衛えとも互角に斬り合えるかもしれない。

そして、まちがいなく羅濠教主も。

護堂の目には、彼女の動きがやたらとカクカクして見える。スペックの低いＰＣで遊ぶオンラインゲームのようだ。こんな動きで教主は掌打を打ち込んでくる。

『鳳』のスピードなら、余裕を持ってかわせるはず。なのに、次のコマで教主の掌は護堂の顔面に届く寸前なのだ。結果、ぎりぎりでかわすのが精一杯だった。

このままでは追い詰められてしまう。護堂は反撃を決意した。

『駱らく駝だ』を使ったおかげで恢かい復ふくしたのか、両腕の感覚が戻っている。見よう見まねの右ストレートを突き出してみた。ダメだ、羅濠教主の美び貌ぼうから五〇センチもずれた。

『そのような拳で我が影を捉とらえうるはずもなし！　未熟なり、草薙王よ！』

教主の一いつ喝かつに叱しつ咤たされた。しかも彼女は右手の人差し指から小指までをきれいにそろえ、護堂の喉のどへと貫ぬき手てを突き込んでくる。

カウンターの一撃――危ない！　絶対にかわせ！

護堂はぎりぎりでバックステップし、喉が斬り裂かれるのを逃れた。

だが、教主が陽かげ炎ろうのように音もなく飛び込んでくる。そこからは流れるような連続攻撃にさらされることとなった。

『宝ほう剣けん出しゆつ篋きよう、芝し草そう成せい林りん！　天てん地ち風ふう雲うん、獅し王おう争そう覇は！　果てなき英えい傑けつの道を倦うむことなく歩み、武の至し極ごくへと近づき至し尊そんたるべし』

謡うたうように唱となえながら、教主は数々の攻め手を繰り出してきた。

上段・中段を狙う掌打。彼女のやわらかな掌は、肉と骨を諸もろ共ともに砕くだく鉄てつ槌ついだった。

急所へ最短距離で突き込んでくる貫手。たおやかな指先は禍まが々まがしい槍やりの穂先であった。

すらりとした白い手刀は脳天や首、肩を青せい竜りゆう刀とうのごとく斬り裂き、押しつぶそうとする。

時折交まぜてくる肘ひじ打うちの鋭さは利り剣けんのそれ。護堂の手足をつかんで制圧しようとする掴つかみ技は、さながら竜の顎あぎと。しかも、これらの攻撃は途絶えることなく連れん綿めんとつづき、雄ゆう渾こんな大河――長ちよう江こう・黄こう河がの流れる情景すら彷ほう彿ふつとさせる。

護堂はこの大河から、敏びん捷しような ボクサーのようにフットワークで逃げつづけた。

だが、逃げ切れない。飛び回る草薙護堂の肉体を、教主の掌法は着々と破壊していく。あやうく脳天をかち割られ、背中の脊せき髄ずいを砕かれそうにもなった。かろうじて急所だけは庇かばったが、あっという間に全身をサンドバッグにされた。――やはり、逃

げるだけではダメだ。

　護堂は絶望のなかで思い知った。攻めなくては活路は開けない！

『鳳』を使いながらでも命中が期待できる攻撃法は、ひとつだけある。相手が羅濠教主でなかったら。だが、これにすがる以外に起き死し回かい生せいの手はない。ならば、やるしか――。

　いいや。教主の手刀に脇腹を抉えぐられながら、護堂は迷いを振り払った。

　こんなものを起死回生とは言わない。ただのやけっぱちだ。速いだけでは教主に通用しないことをさんざん思い知らされたではないか。そう、速いだけでは――。

　この瞬間、閃ひらめくものがあった。

　護堂は攻撃へ転じるために、大きく後方へ跳んだ。

『ほう……覚悟を決めましたね、草薙王。よい目をしています』

　こちらの変化に気づいたか、教主がやさしく微笑みかけてくる。

　護堂からの攻撃を待つように、棒立ちになった。これは無防備に見えて、まったくそうではない。いかなる攻撃にも即応できる、悠然たる自然体の構えだ。

　彼女の狙いはまちがいなくカウンター。

　それを承知で護堂は『鳳』のスピードを全開にし、突進を開始した。

　ひたすらまっすぐ、体ごとタックルする。これなら繊細に狙いをつける必要はない。暴走する機関車のように標的を捉え、薙ぎ倒すことができるはず。

　だが、教主もコマ送りで動き出した。

　合がっ掌しようでもするつもりなのか、両の掌を胸の前で向かい合わせに。

　こんな体勢の乙女から想像できる未来。タックルが届く寸前で、

護堂の頭は教主の両掌で左右から挟きよう撃げきされる。万まん力りきで挟み込まれるようにして突進は止められるだろう。頭ず蓋がい骨こつは粉々だ。脳内はきっとクラムチャウダーのように――。そんなところだろうか。

　並の遣つかい手てであれば、『鳳』の速さでのタックルなどかわせるはずもない。しかし敵が羅濠教主であれば、カウンターで打ち落とすことも可能だろう。敗北は決定的だ。

　もう、この手に賭かけるしかない。頼む、上う手まくいってくれ――！

　護堂は『鳳』のスピードを解除することに挑んだ。

　加速ではなく減速。

　速球が自慢の投手でも、最速のストレートで押すだけではすぐに攻略される。大切なのは緩かん急きゆう。遅いボールを配球に混ぜることで速球に目を慣れさせない。名捕手たる者、緩急をつけたリードで投球をコントロールしなくてはいけない――。

　試こころみはどうにか上手くいった。

　神速の世界から、普通のスピードの世界に帰還。

　当たり前の高校生としてしか動けない。超常の速さなど振り絞れない。そして、超加速を想定していた羅濠教主は挟み込む標的を見失っていた。

　護堂の突進がやってくる前に、教主は掌を合わせてしまった。

「――行けえッ！」

　千の手を持つ菩ぼ薩さつのごとく、乙女が合掌した瞬間。

　護堂は『鳳』の加速をオンにした。ふたたび突進のスピードは神速になった。

　とっさに右の拳を前に突き出す。古い任にん侠きよう映画で見た、ドスを構えての体当たり。あれを真ま似ねしたのだ。

　この拳は体当たりの勢いに乗って、羅濠教主のみぞおちにめりこ

んだ。



「……くはッ！」

　初めて聞く教主の呻うめき声。

　寒かん蘭らんのごとき美しい肢し体たいが『く』の字に折れ、膝ひざが地に着く。草薙護堂がついに最さい凶きようのカンピオーネに一撃加えた瞬間だった。

　そして、この瞬間に予期せぬ現象が発生した。

　轟ごう！

　風が唸うなった。護堂の拳と教主のみぞおちの間で、風が唸り、加速した。地上のあらゆる物体を薙ぎ倒す震動波が、翠すい蓮れんの名も有する乙女へと駆け抜けていった。

　まるで、教主自身が衝撃波の魔風を生み出したかのように。

　しかし、ゆっくりとくずおれていくのは羅濠教主その人。一体、何が起きた？

「あー……こいつは師父の負けですねェ」

　皮肉っぽい声が告げたのは、その直後だった。

　いつのまにか、氷の芯しんが入ったような右腕の感覚は消えていた。

転　章

　石ザルと化した猿えん猴こう神しん君くんは、厩うまやに囚とらわれたままだった。

　彼の体は頭から膝ひざの辺りまでが生身に戻っている。だが、膝から下は未いまだ石のまま。

　厩の壁に映し出された地上の空は、闇やみ夜よへと変わりつつある。

　そこにはもう蛇じゃ神しんレヴィアタンは浮かんでいない。彼を甦よみがえらせる儀式の要よう諦ていたる贄にえが消え失せ、猿猴神君の復活は中途で止まっていた。

　——だが、しかし。

「ここまで仕上がっておれば、あの手でいけるかもしれんのう？」

　石に覆おおわれた足下を眺めながら、彼はつぶやいた。

　足を動かすことはできないが、それ以外の部分は自由になる。いけるかもしれない。

「ダメでもともとじゃ。こうとなったら試ためさぬ手はない。神しん仙せんは朝あしたには北海に遊び、暮れには蒼そう梧ごに転ずるもの。——それ！」

　言うや否いなや、彼は神通力を振るって己の体を浮かび上がらせた。

　空中でとんぼを切って、すばやく印を結ぶ。

　次の瞬間、弼ひつ馬ば温おんの位階を持つ猿猴は雲にまたがり、

宙に浮かんでいた。

「竜を屠ほふる宝刀よ、我が道を切り開け！」

　床に転がる斬ざん竜りゆう刀とうへ指示する。

　さきほど巫み女こに命じて禍まが祓はらいの霊力を溜ため込ませた宝刀は、呪じゆを破る刃となる。ほんの一瞬だが『弼馬温』の結界を斬り裂いてみせた。

　その瞬間に猿猴神君は、自みずからの乗る雲を厩うまやの壁へ突っ込ませた。

　――目もく論ろ見みは成功。結界を破って回かい廊ろうに飛び込んだ雲は、瞬またたく間に地上へ躍り出た。

　飛ひ翔しようする雲を駆る猿猴神君は、空から地上を見下ろした。

　何となく見覚えのある日につ光こう山さんの風景。

　今や彼は自由の身。しかし、膝から下は石のまま。これでは完全復活とは言い難い。そこで匂においをかいだ。あの巫女を捜すためだ。――いた！

　雲を飛ばして日光山のふもと、東とう照しよう宮ぐうの参道にやってくる。

　巫女ふたりとキラキラ輝く白金髪の女がいた。だが、彼の目当ては小さい方の巫女だけだ。

「そうれ、見つけた！　ははは、もう逃がさぬぞ！」

「――猿猴神君さま!?　なぜ地上にいらしているのですか!?」

「え？　じゃあ、このおサルさんが《鋼》の軍神……!?」

　大きい方の巫女とキラキラ髪の女が驚いていた。

　お目当ての小さな巫女は「し、神君さま!?」と可愛かわいい口をあんぐり開いていた。

「おお、これはおあつらえ向きだのう。悪いがしばらくの間、おぬ

しの体を借り受けるぞ。それ、天てん雷らい无む妄もう、元げん亨きよう利り貞てい！」

　口こう訣けつと共に神通力を使い、猿猴神君は変化した。

　千変万化の変身術は彼の代名詞。完全とは言えない今でも、そこそこ使いこなせる。

　小さな金色の玉に変化して、小さな巫女の口のなかに潜もぐり込んだ。体内に侵入すれば、もうこちらのものだ。瞬時に肉体と精神を掌しよう握あくした。

　今や巫女の体は彼のもの。くわっと目を大きく見開いた。

「紅あかい目に金色の瞳……!?」

「か、火か眼がん金きん睛せい――！　まさかひかりの体が神君さまに――!?」

　女たちがこちらに見入っていた。どうやら霊れい眼がんが面相に顕あらわれたようだ。

　あとで鏡を見よう。彼はサルだが、結構な洒しやれ落者ものなのだ。

　そうだ。我はサル。しかし猿猴神君に非あらず。禍まが祓はらいの巫女を乗っ取った今は、この者の霊能を使いこなせる。わずかに残った呪じゆ縛ばくも、そいつを使って打ち消せば――！

「さあて、これから忙しくなるぞ。我はこれより地上に災いを振りまき、思う存分遊び回るとしよう！　はははは、さらば。さらばじゃ！」

　巫女の声で告げ、巫女の体でとんぼを切る。

　ふたたび雲にまたがり、天あまかける。行き先は決めていないが、とりあえず神殺しどもの顔を見に行こう。彼はようやく神としての己を取り戻したのだ。

「あー……こいつは師し父ふの負けですねェ」

皮肉っぽく告げたのは、細身の少年だった。

もしかして羅濠教主の直じき弟で子しだという、どこかの御おん曹ぞう司し……陸鷹化だったか。彼と共にエリカとリリアナも歩み寄ってくる。どうやら無事だったようで、護堂は安あん堵どした。

途端に心臓がぎりぎりと締め付けられるように痛み出した。これは『鳳おおとり』の副作用だ。もうすこし経たてば、体も動かなくなる。

時間切れ。草薙護堂にはもう戦う余力も時間も残されていないのに、なぜ勝利？

「ま、負けって言ってもさ、俺の方がどう見てもボロボロなんだけどっ」

痛みを堪こらえながら、護堂はどうにか訊たずねる。

あの少年は、なぜ師し匠しようではなく敵の肩を持つのだろう？　不思議だった。

「ああ、お気づきじゃなかったのですか。……気絶してるんですよ」

言われて、護堂は改めて美女の様子をうかがった。

地面に膝を着いた姿勢のまま動かない。ずっとうつむいている。

「草薙さまが最後に使われた一手、あれが上手いこと決まりましたからね」

陸鷹化は肩をすくめながら語った。最後の一手？　何のことだ？

「緩かん急きゆうの緩で虚きよを突かれ、あの勢いで鳩きゆう尾び穴けつを強打された。おまけに何かの権けん能のうですか？　あいつで強烈にやられましたからね。まあ、軽く悶もん絶ぜつされたようです。……重傷ではなさそうですけど、ダウンにはちがいありません」

護堂は目を白黒させた。何かをした自覚はまったくないのだが。

「でも気絶なんかしなくたって、師父は負けを認めたと思います

よ。異様にプライドの高い方なんです。同等の魔王様とはいえ、格下の若造に丹たん田でん、檀だん中ちゆうと並ぶ鳩きゆう尾びの急所を突かれるなんざ、大失態ですから」

「そ、そう言われてもな。実は俺だってもう一歩も動けないんだぞ。痛たたた！」

　ますます痛みが増し、体も硬直してきた。もう痩やせ我が慢まんも限界だ。無事だった少女たちに護堂は目配せした。あとはまかせた。どうにかしてくれ！

「そうね……。たしかに護堂は急所へ一手打ち込んだけど、彼の方が重傷なのも事実だわ。以上を鑑かんがみたら、やっぱり……」

　エリカが考え込みながら言うと、リリアナもやや不満そうな表情でつぶやいた。

「引き分けということか？　まあ、それが妥だ当とうかもしれないが……」

「うん、その辺りが落としどころかな。じゃあ、そろそろ起こしますか。——師し父ふ！　お目覚めください、師父！　大丈夫でございますか!?」

「たしかに深刻な昏こん倒とうではなさそうだが、治療をした方がいいんじゃないか？」

　リリアナが言うと、声をかけるだけの陸鷹化は肩をすくめた。

「それはそうなんだけどね。眠っていたり意識のないときにさわろうとしたら、師父の体は勝手に動き出して相手を攻撃しちまうんだ。……眠りながら誰かの首をねじ切る程度は、余裕でやってのける方だよ。用心するに越したことはないね」

　とんでもない話に護堂は戦せん慄りつした。

　すると、調子に乗って気絶した羅濠教主を闇に葬ほうむろうなどとしたら、逆に死ぬ羽目になったのか。そんな真ま似ねをする気はないが、やはり実力では到底かなわないようだ。

　恐ろしくも可か憐れんな乙女は弟子の呼びかけに、ようやく「う……ん……」と応えた。

　そしてパチリと目を開き、上体を起こした。けほけほと可愛かわいらしく咳せき込む。

「……こ、ここは？　わたくしは一体――？」

「師父。お二方の猛たけ々だけしき立ち合いを弟子陸鷹化、目より鱗うろこが落ちる思いで見届けました。草薙さまも力を使い尽くして一歩も動けず、師父も気絶。となれば、ここは勝者なしの引き分けとすべしと検分いたしましたが、如い何かに――」

　見事なほど恭うやうやしい口調で、陸鷹化は師に言上した。

　羅濠教主はしばらく無言。だが、だんだんと事の顛てん末まつを思い出してきたらしい。

　キッと弟子をにらみ、護堂をにらみ、ついで後方に控える騎士たちをにらんだ。そして白い美び貌ぼうが羞しゆう恥ちで真っ赤になる。そのままうつむいてしまい、

「鷹よう児じ、おまえの検分は至し極ごく妥だ当とうと言えましょう！　皆の者、下がりなさい！」

　ついに顔を上げないまま吐き捨てた。

　その直後であった。この場に集つどう一同は、涼やかな少女の声を聞いた。

「おや。神殺しの両名、どうしたのかね？　そのようにボロボロのなりをして？　ははは、そうか。おぬしらはまだ勝負をやっていたのか。血の気が多い連中よのう！」

　万ま里り谷やひかりの声でありながら、まったく異なる存在が発する声。

　空を見上げて、護堂は驚きよう嘆たんした。

　金色の小さな雲に乗って、ひかりは夜空に浮いていた。

　空中から下界を見下ろしている。その目がおかしかった。眼球が紅あかい。まるで煙にあぶられたかのように血走っていた。そして瞳は黄金色だった。



　これが火か眼がん金きん睛せいと呼ばれることを、護堂はもうすこしあとで知る。

『鳳おおとり』の副作用で心臓が痛み、体は動かない。しかし、心が昂たかぶってくる。長年の宿敵と再会したときのごとく、闘志がみなぎってくる。

　そばにいる羅濠教主の体には活力が甦よみがえり、戦いの疲ひ弊へいを忘れさせているだろう。

　――万里谷ひかりは神となった。『まつろわぬ神』に。

　幼い巫女の顔に仮面が顕あらわれる。サルの顔を象かたどった白い面だ。ただし、目のまわりを紅く塗っている。京きよう劇げきの写真で見たことがあった。

　これは『美び猴こう王おう』の演目で使用される意匠だったはずだ。

　護堂は彼の名を知っている。だが、苦痛のため上手く口にできなかった。

「ついに甦ったのですね、美猴王？」

　代わりに羅濠教主が顔を上げ、毅き然ぜんと問う。

「いかにも。いかにもじゃ、同郷の神殺しよ！」

　ひかりの声で『まつろわぬ神』が答え、天を指さす。

「我は猿えん猴こう神しん君くんに非あらず。我は天なり。天に斉ひとしき存在なり――」

　その威い厳げんは明朗快活な巫女のものではなく、滑こつ稽けいなサルのものでもなかった。

「我、石より産まれし猴王にして神通無限、変へん化げは千せん変ぺんにして万ばん化かなり。天宮にて丹たんを偸ぬすみ、酒を貪むさぼり、蟠ばん桃とうを喰らう。武を弄もてあそび、凶を為なし、悪を顕あらわす！」

ひかりの手中に鋼の棒が顕れた。

「我が姓は孫そん、名は悟ご空くう。斉せい天てん大たい聖せいの号を得たり！」

斉天大聖・孫悟空。

それが如によ意い金きん箍こ棒ぼうを握りしめながら、力強く名乗る神の名前であった。

同じ頃、日光山の周辺では——。

蛇神レヴィアタンによって精気を吸い取られ、横たわっていた人々。

彼らに変化が発生していた。老若男女、多た岐きにわたる顔ぶれ。さまざまな土地からやってきた大勢の人間たち。彼らは姿を変え、ふたたび動き出していた。

人ではなく、サルの姿形となって。

今や日光東照宮の周辺は、おびただしい数のサルであふれかえっていた。

また、さらに同時刻の成なり田た空港では——。

ひとりのアメリカ人女性がターミナルを出て、特急列車に乗り込むべく駅を探している最中だった。思えば、ひさしぶりの海外旅行である。

ここ数年、ずっと忙しかったのだ。悪の魔法使いとか怪物とか悪魔との戦いで。

この旅は彼女にとって、失態を忘れるための貴重な時間であった。

そうだ。あんなヤツのことは忘れてしまえばいい。あの程度の男、もともと彼女にふさわしい相棒ではなかったのだ。とんだ見込

みちがいだった。

　これからはパートナー選びにも注意しなくては。次はもっとタフで、クールで、ウイットに富んでいて礼儀正しくて、洒落しやれのわかる人間を相棒としなくては。あんな男を人生の伴はん侶りよとして選ぶ女性がいるとは、まったく世の中は広いものだ……。

『アニー。自分をごまかす人間のところに、幸せの青い鳥は飛んでこないものだぞ？』

『つまり、手に届かない葡萄ぶどうは酸っぱいわけですな』

　親しい老人たちなら、そう批評しそうな想おもいを胸に秘めるアメリカ人女性。

　彼女の名はアニー・チャールトン。またの名をジョン・プルートー・スミス。ロサンゼルスにおいて生ける伝説とまで言われる魔王その人であった。

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

VI　神山飛鳳

著者　丈月　城

２０１２年３月15日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！
VI　神山飛鳳」

２０１１年３月15日発行の第４刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０９５（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　有限会社ワイズネット